九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—6—

甘木市所在柿原古墳群の調査　II
（Ⅰ地区）

中　巻

1 9 8 6

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—6—

甘木市所在柿原古墳群の調査　II
（Ⅰ地区）

中　巻

例　言

1．本書は，福岡県教育委員会が，日本道路公団から委託を受けて実施した，埋蔵文化財発掘調査の報告書で，第6集目の中巻にあたる。

2．本書に収録した遺跡は，甘木市大字柿原所在の柿原（かきばる）古墳群（Ｉ（アイ）地区）についてのもので，その第2冊にあたる。なお，Ｉ地区中央で調査を行った縄文早・晩期の遺構・遺物については今後に譲ることにして，今回は割愛した。

3．柿原古墳群の発掘調査は，福岡県教育委員会文化課が担当し，遺構の実測及び写真の撮影は，調査補助員の協力を得て，各調査担当者が行った。

4．報告書の作成に際し，遺構と遺物の実測，及び製図は各調査担当者の他，調査補助員並びに塩足里美・本田ひろみ・豊福弥生・鶴田佳子・松嶋邦子・原田和枝・佐藤淳子各氏の協力を得た。

5．遺物写真撮影は，九州歴史資料館石丸洋・藤美代子及び調査担当者・補助員が行った。

6．出土遺物の整理は，岩瀬正信の指導のもとに，福岡県教育委員会管理部文化課甘木発掘事務所にて行い，鉄器処理は，九州歴史資料館にて横田義章が行った。

7．本文中の遺構標記に際しては，Ｃは石棺墓及び石棺系竪穴式石室・土壙墓（岩盤掘り抜きも含む），Ｄは土壙を示す。

8．本文中に使用した古墳石室各部の名称は，第1図に準拠し，本文中の遺物番号と図版写真番号は共通する。

9．本書の執筆は，中間研志・新原正典・平嶋文博が分担し，各文末に氏名を記した。編集は平嶋の協力のもとに中間が担当した。

10．九州大学医学部解剖学教授永井昌文氏には，人骨の鑑定に手をわずらわし，玉稿をいただいた。記して感謝したい。

11．本報告書掲載の遺構における方位は，すべて磁北である。

本　文　目　次

〈中　巻〉　頁

C　竪穴式石室・石棺系竪穴式石室群の調査 ……131
D　竪穴住居跡の調査 ……245
E　土壙群の調査 ……248
F　甕棺墓の調査 ……255
G　表土出土の遺物 ……257
H　甘木市柿原古墳群人骨鑑定結果 ……264

Ⅳ　各　論 ……267
A　横穴式石室の類別と変遷 ……267
B　竪穴式石室・石棺系竪穴式石室 ……272
C　石室の企画について ……288

挿　図　目　次

〈中　　巻〉

頁

第125図　C－1地山整形面実測図(1/100) ……131
第126図　C－1出土土師器実測図(1/3) ……132
第127図　C－1実測図(1/30)……右折り込み132-133
第128図　C－2実測図(1/30)……133
第129図　C－3地山整形面実測図(1/100) ……134
第130図　C－3実測図(1/30)……135
第131図　C－3出土土器実測図(1/3) ……136
第132図　C－4地山整形面実測図(1/100) ……137
第133図　C－4実測図(1/60)……138
第134図　C－4主体部実測図(1/30)……右折り込み138-139
第135図　C－4出土鉄器実測図(1/2) ……139
第136図　C－4出土土器実測図(1/3) ……140
第137図　C－5実測図(1/30)(右端図は復原図)……141
第138図　C－5出土鉄剣実測図(1/4) ……142
第139図　C－5出土鉄器実測図(1/2) ……143
第140図　C－6実測図(1/30)……144
第141図　C－7実測図(1/30)……146
第142図　C－8実測図(1/30)……147
第143図　C－8出土須恵器実測図(1/3) ……148
第144図　C－9実測図(1/30)……149
第145図　C－9出土土器実測図(1/3) ……150
第146図　C－10実測図(1/30)……151
第147図　C－10出土鉄器実測図(1/2) ……152
第148図　C－11実測図(1/30)……153
第149図　C－11出土須恵器実測図(1/3) ……153
第150図　C－12実測図(1/30)……154
第151図　C－13実測図(1/30)……155
第152図　C－13出土土器実測図(1/3) ……156
第153図　C－14地山整形面実測図(1/100) ……158

頁

第154図　C－14実測図(1/30)……159
第155図　C－14遺物出土状態実測図(1/10)……160
第156図　C－14出土鉄器実測図①(1/2)……161
第157図　C－14出土鉄鋤先実測図②(1/2)……162
第158図　C－14出土鉄刀実測図③(1/6)……163
第159図　C－15実測図(1/30)……164
第160図　C－16実測図(1/30)……165
第161図　C－16出土鉄器実測図(1/2)……166
第162図　C－16付近出土土師器実測図(1/3)……167
第163図　C－17実測図(1/30)……168
第164図　C－18実測図(1/30)……169
第165図　C－18出土刀子実測図(1/2)……170
第166図　C－19地山整形面実測図(1/100)……171
第167図　C－19実測図(1/30)……172
第168図　C－19出土鉄刀実測図(1/4)……173
第169図　C－19出土土器実測図(1/3)……173
第170図　C－20実測図(1/30)……174
第171図　C－21実測図(1/30)……175
第172図　C－22実測図(1/30)……177
第173図　C－23地山整形面実測図(1/100)……178
第174図　C－23主体部実測図(1/30)……178
第175図　C－23祭祀土坑遺物出土状態実測図(1/30)……179
第176図　C－23祭祀土坑出土鉄鋤先実測図(1/2)……180
第177図　C－23祭祀土坑出土土器実測図(1/3)……180
第178図　C－24地山整形面実測図(1/100)……181
第179図　C－24実測図(1/30)……182
第180図　C－25地山整形面実測図(1/100)……183
第181図　C－25実測図(1/30)……184
第182図　C－25出土土器実測図(1/3)……184
第183図　C－26地山整形面実測図(1/100)……185
第184図　C－26実測図(1/30)……185
第185図　C－27実測図(1/30)……186
第186図　C－28実測図(1/60)……187

頁

第187図　C－28主体部実測図(1/30)……188
第188図　C－28副葬土器実測図(1/3)……190
第189図　C－29実測図(1/30)……191
第190図　C－30実測図(1/30)……192
第191図　C－31実測図(1/30)……193
第192図　C－32実測図(1/30)……右折り込み194-195
第193図　C－33実測図(1/30)……右折り込み194-195
第194図　C－34地山整形面実測図(1/100)……196
第195図　C－34実測図(1/30)……196
第196図　C－34出土鉄器実測図(1/2)……197
第197図　C－34出土土師器実測図(1/3)……197
第198図　C－35地山整形面実測図(1/100)……197
第199図　C－35実測図(1/30)……198
第200図　C－35出土鉄刀実測図(1/6)……199
第201図　C－35出土鉄器実測図①(1/2)……200
第202図　C－35出土鉄器実測図②(1/2)……201
第203図　C－36実測図(1/30)……201
第204図　C－37地山整形面実測図(1/100)……202
第205図　C－37実測図(1/30)……右折り込み202-203
第206図　C－37出土鉄器実測図(1/2)……203
第207図　C－38地山整形面実測図(1/100)……203
第208図　C－38実測図(1/30)……204
第209図　C－38出土土器実測図(1/3)……205
第210図　C－39地山整形面実測図(1/100)……206
第211図　C－39実測図(1/30)……207
第212図　C－39出土土器実測図(1/3)……208
第213図　C－40地山整形面実測図(1/100)……210
第214図　C－40実測図(1/30)……211
第215図　C－41地山整形面実測図(1/100)……212
第216図　C－41実測図(1/30)……213
第217図　C－41出土鉄器実測図(1/2)……214
第218図　C－42実測図(1/30)……214
第219図　C－42出土土師器実測図(1/4)……215

頁

第220図　C－43地山整形面実測図(1/100) ……215
第221図　C－43実測図(1/30)……216
第222図　C－43出土土師器実測図(1/3) ……217
第223図　C－44地山整形面実測図(1/100) ……218
第224図　C－44実測図(1/30)……219
第225図　C－44出土鉄器実測図(1/2) ……220
第226図　C－44出土土器実測図(1/3) ……220
第227図　C－45地山整形面実測図(1/100) ……220
第228図　C－45実測図(1/30)……221
第229図　C－45出土須恵器実測図(1/3) ……222
第230図　C－46実測図(1/30)……222
第231図　C－47地山整形面実測図(1/100) ……223
第232図　C－47実測図(1/30)……224
第233図　C－48実測図(1/30)……225
第234図　C－49地山整形面実測図(1/100) ……226
第235図　C－49実測図(1/30)……227
第236図　C－50実測図(1/30)……228
第237図　C－51実測図(1/30)……229
第238図　C－51人骨・玉出土状態実測図(1/10)……230
第239図　C－51出土玉・鉄鋤先実測図(実大・1/2) ……231
第240図　C－52地山整形面実測図(1/100) ……234
第241図　C－52実測図(1/30)……235
第242図　C－52出土鉄器実測図(1/2) ……236
第243図　C－53実測図(1/30)……236
第244図　C－54実測図(1/30)……237
第245図　C－54出土鉄器実測図(1/2) ……238
第246図　C－55実測図(1/30)……239
第247図　C－56実測図(1/30)……240
第248図　C－57地山整形面実測図(1/100) ……241
第249図　C－57実測図(1/30)……241
第250図　C－57出土土師器実測図(1/3) ……242
第251図　C－58実測図(1/30)……243
第252図　C－59実測図(1/30)……244

頁

第253図　1号竪穴住居跡実測図(1/60・1/30)……246
第254図　1号住居跡出土土師器実測図(1/4)……247
第255図　D－1～5実測図(1/30)……249
第256図　D－6出土土器実測図(1/3)……250
第257図　D－6～10実測図(1/60・1/30)……251
第258図　D－7出土土師器実測図(1/3)……252
第259図　D－11～13実測図(1/30)……253
第260図　K－1出土状態実測図(1/30)……255
第261図　K－1実測図(1/4)……256
第262図　K－1出土土師器実測図(1/3)……256
第263図　表土出土土器実測図①(1/3・1/6)……258
第264図　表土出土土器実測図②(1/4)……260
第265図　表土出土土器実測図③(1/3)……261
第266図　表土出土砥石実測図(1/4)……263
第267図　表採玉・鉄器実測図(実大・1/2)……263
第268図　横穴式石室分類表(石室：1/80，遺物：1/6)……右折り込み268-269
第269図　横穴式石室墓道復原図(1/1,200)……270
第270図　竪穴式石室・石棺系竪穴式石室分類表……右折り込み276-277
第271図　竪穴式石室・石棺系竪穴式石室頭位方向……277
第272図　A類期竪穴式石室(左)・B1類期石棺系竪穴式石室(右)分布図(1/1,200)……280
第273図　C・B2類期石棺系竪穴式石室分布図(1/1,200)……281
第274図　C－14・40，9・19号墳平面プラン比較図とそれらの方眼による操作結果(1/40)…289
第275図　2号墳方眼による操作結果(1/80)……291

付図　柿原古墳群地形図(1/2,000)

表 目 次

〈中　　巻〉

頁

第３表　Ｃ－51出土小玉一覧表……232・233

第４表　竪穴式石室・石棺系竪穴式石室等計測表 ……折り込み244-245

第５表　横穴式石室Ⅰ～Ⅲ類の石室各部計測値と各所の比率・企画推定尺度 ……290

第６表　柿原周辺のⅠ～Ⅲ類古墳の石室各部計測値と各所の比率 ……290

第７表　横穴式石室Ⅳ・Ⅴ類の石室各部計測値と各所の比率・企画推定尺度 ……292

第８表　柿原周辺のⅣ・Ⅴ類古墳の石室各部計測値と各所の比率 ……292

第９表　横穴式石室Ⅵ・Ⅶ類の石室各部計測値と各所の比率・企画推定尺度 ……294

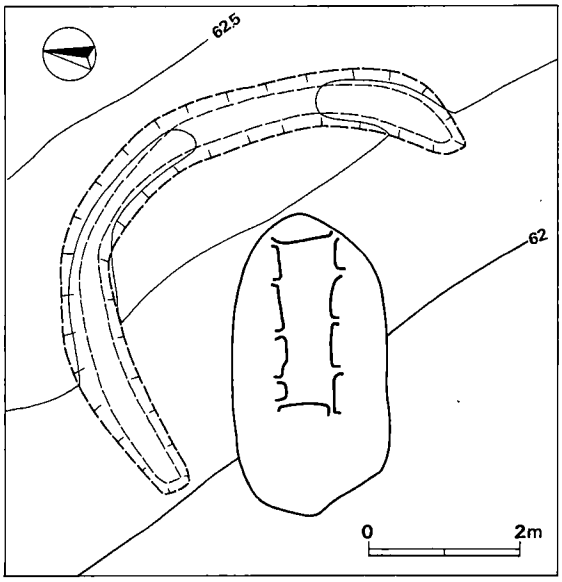
第10表　柿原周辺のⅥ・Ⅶ類古墳の石室各部計測値と各所の比率 ……294

C　竪穴式石室・石棺系竪穴式石室群の調査

1．C－1

本古墳は，H区丘陵裾の緩斜面で，19号墳直南側で，2号墳の北5m程に位置する。調査当初墳丘の形跡は見られず，古墳とは認識できなかった。

しかし，東から西に巡る周溝を有し，墳の規模が推定できる（第125図）。周溝は半径3.5mを測り，ほぼ円形を呈し，円墳である事を窺わせる。



第 125 図　C－1地山整形面実測図（1/100）

主体部（図版72，第127図）

長さ3.76m，幅2.14mを測る掘方であるが，しかし，掘り方西方に，浅く掘り込まれた80×180cmの平坦面を有する。実際の石室の掘方の長さは，3m程である。

石室はN81°Eに主軸をおき，等高線に直交して構築される。蓋石は東側に2枚残り，他は欠損する。蓋石は本来6～8枚の石を用いると推察する。

石室の構造は，側壁で両壁に各4枚の基底部石を立てて据え，その上段に4段程平積みする。小口部では，基底部石に側壁部と比して，やや大きめのものが立ち，その上段に平積みする。また，平積み部では，石積みに間隙が見られ，それに小礫を詰め込む。床面に石敷きは存在せず，厚さ5cm程の粘土を全面に敷く。蓋石内面に赤色顔料塗布の形跡がある。石材は全て，緑色片岩である。

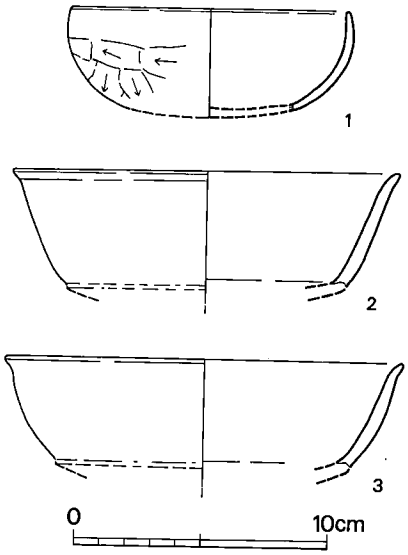
石室内法は，長さ213cm，東側幅70cm，西側幅56cmで，高さ60cmを測る。このように東側が幅広であり，また，斜面が東から西へ低くなる点などから，頭位は東であろう。

遺骨・副葬品は無い。

出土遺物（第126図）

土師器椀（1）石室内埋土出土で，口縁から体部にかけての破片である。体部から口縁端へかけ，内反する。外面底部から体部にヘラ削り，口縁部内外面横ナデ，内面体部は磨滅により不明である。胎土精良にして，焼成若干甘い。淡褐色を呈す。

土師器高杯（2・3）共に椀同様に，石室内埋土出土である。また，共に口縁から体部にかけての小片である。2は体部中位が肥厚し，口縁にかけて細り，外反する口縁端部となる。内外面共に丁寧な水びき横ナデである。3は若干外傾して直に立ち，体部上位で口縁端へ外反する。調整内外面共に横ナデである。胎土精良，焼成良である。淡黄褐色を呈する。



第 126 図　C－1出土土師器実測図（1/3）

以上のように，本墳は小形の竪穴式石室である。しかし，石室基底部板石を立てる事や，石室の規模が極めて小形であり，石棺とさほど変わらない法を示す点などから，石棺系竪穴式石室としている。また，本石室には円形に巡るであろう周溝も確認され，盛土の存在を想起させている。小形の円墳であろう。

本古墳の時期を出土遺物から比定すると，5C前半の時期があてられる。初築の時期も5C前半頃と考える。

また，掘方が西へ拡がりをもち，横口式石室を想起させているが，しかし，西側小口部は，基底部石の上にしっかりした平積みが行なわれ，横口となる可能性は薄い。一体，何を目的として掘られたのであろうか。また，この場所からの出土遺物は皆無である。（平嶋）

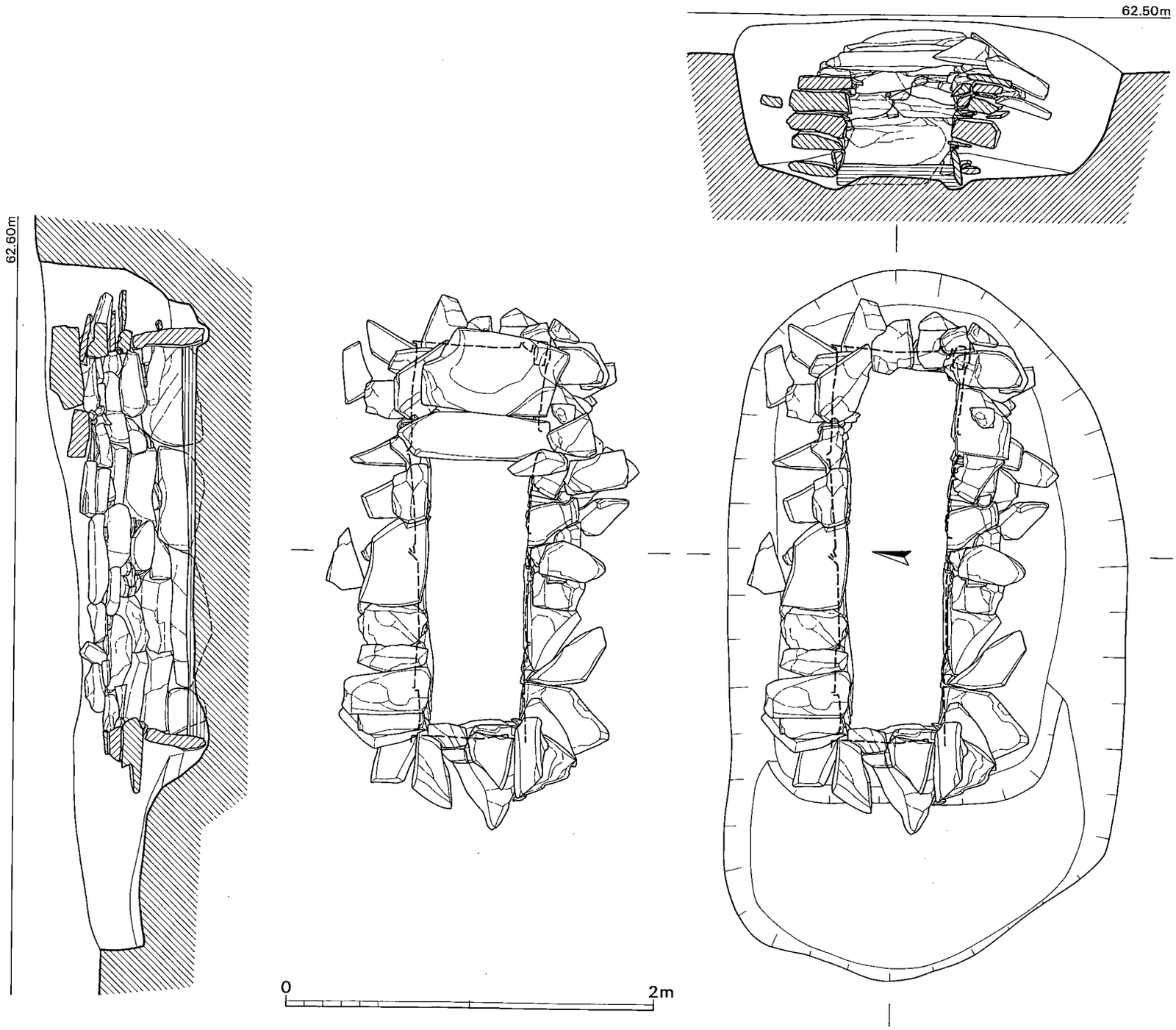
2．C－2

6号墳の北東側の，C－3・C－4・C－25・C－30等に囲まれるような平坦地に営まれる。周溝は残存しない。標高64.25mの辺りに位置し，等高線に平行に築造されている。

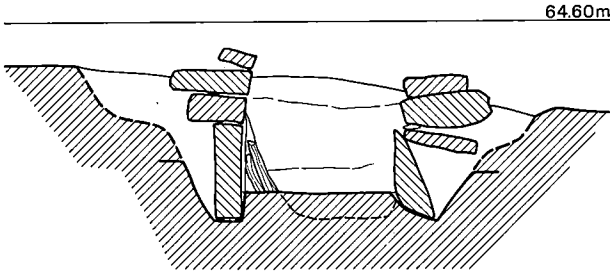
主体部（図版73，第128図）

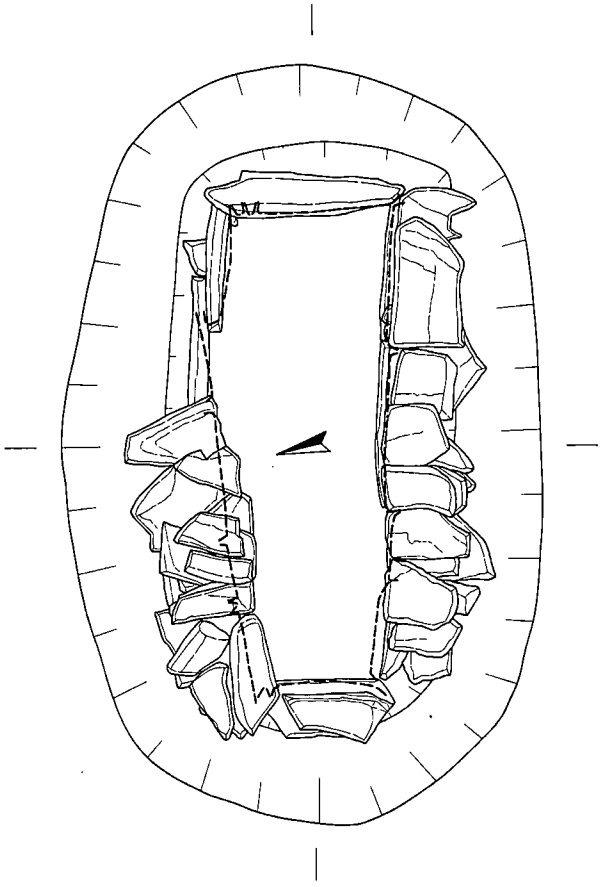
主軸をS76°30′Eにとり，東に頭位をとる石棺系竪穴式石室である。

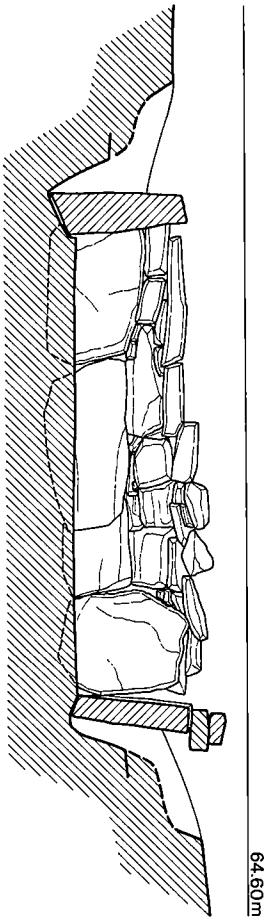
掘方は東西に3.0m，南北に1.9m，棺内床面までの深さ0.5mの長円形プランで，中途で段をつくる二段掘りの形態をなす。石室内法は，長さ1.86m，東端で0.64m，西端で0.48mとなる。

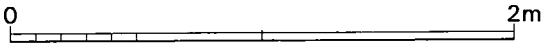


第 127 図　C－1実測図（1/30）









第 128 図　C－2実測図（1/30）

やや胴張り気味の床面プランをなす。

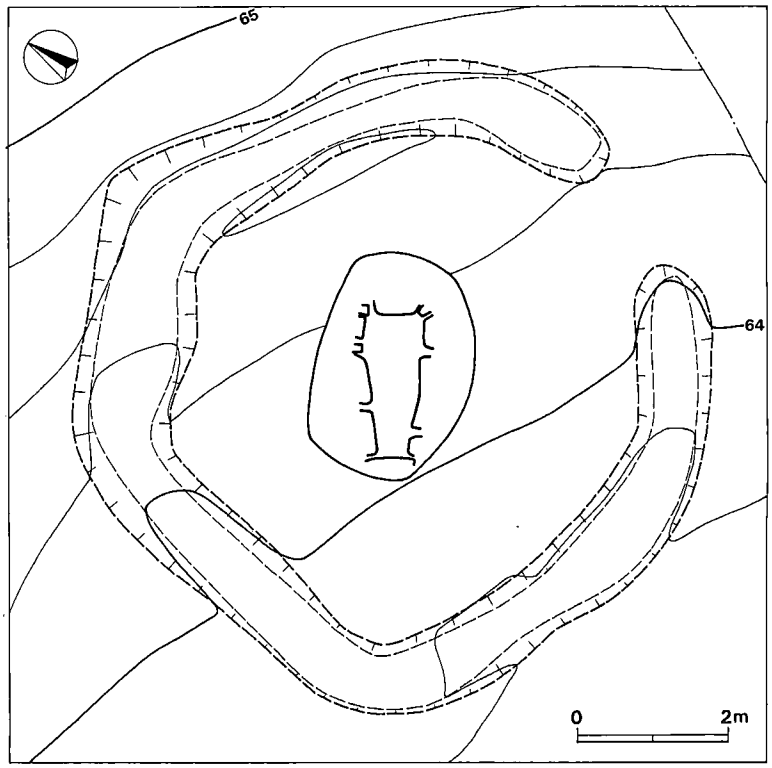
石室内，左右側壁は各々４・５枚の板石を基底部に立て，東西両小口部にも各１枚の板石を立てる。頭位と推定する東側小口の板石は，他のどれよりも大きい石材を使用する。基底立石の上端レベルはあまり揃わず，両端小口の立石が最も高い。基底立石から上は，板石の小口積み乃至平積みが，２～４段分残る。積石最上端から棺底までの深さは0.58mである。側壁の内側へのせり出しは，２段目位から僅かに認められる程度で，顕著なものではない。

石材は全て，緑色・黒色片岩を使用しており，石室底は素掘りのままである。蓋石は全く残存しない。遺骨・副葬品等皆無である。（中間）

３．Ｃ－３

４号墳と20号墳の中間，Ｃ－25・Ｃ－５・Ｃ－２に隣接する位置に営まれる。標高64.25mの辺りの平坦地に，周溝をめぐらしている。

周溝は外径で東西8.7m，南北8.3mの不整円形を呈し，東側で1.4mの間が跡切れて，陸橋部分をなしている。周溝幅は1.5～0.9mで，深さ0.4～0.15m程となる。（第129図）

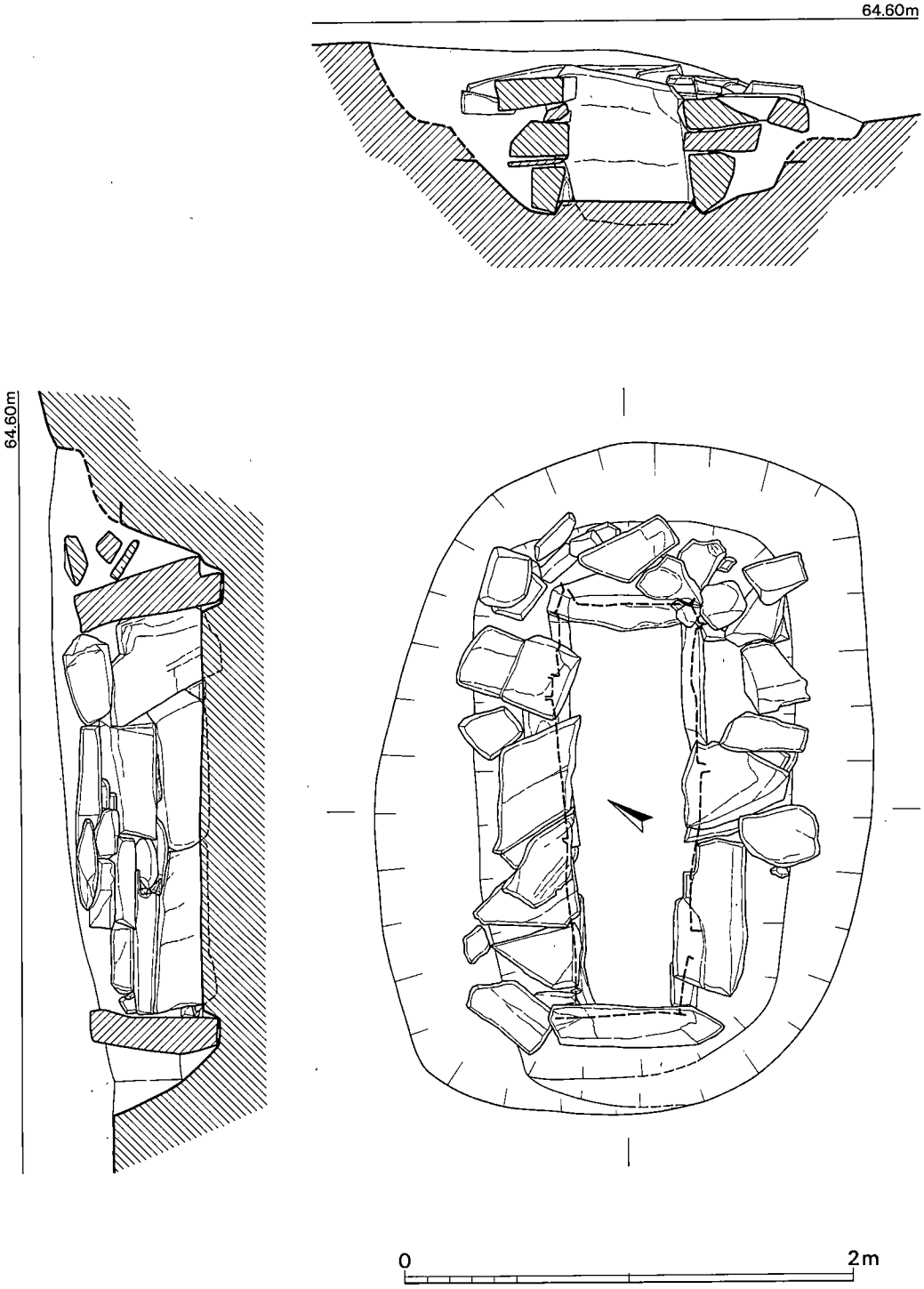


第 129 図　Ｃ－３地山整形面実測図（1/100）

主体部（図版73・74，第130図）

主軸をN56°30′Eにとり，北東に頭位を置く石棺系竪穴式石室である。

掘方は，2.99×2.21mの不整楕円形状プランをなし，石室内床面までの深さ0.67mを測る。掘方中途で段をつくる２段掘りの様相を呈する。



第 130 図　C－3実測図（1/30）

石室内法は，長さ1.83m，幅は北東端で0.58m，南西端で0.46mとなる。左右側壁は，各3枚のやや厚手の板石を基底部に立てる。横長を基本とするが，左壁北東端，右壁南西端は縦長に立てている。基底立石の上には板石の平積み，小口積みが施され，最高4段分まで残る。棺内底部から現存積み石上端までの深さは0.6mとなる。側壁上位には後方の控え積みが若干残る。両小口部分は，他の石材よりも特に大きなものを選択使用している。石室内側の側壁のせり出しは，左壁で既に2段目から認められ，頭位小口立石もかなり内傾させている。

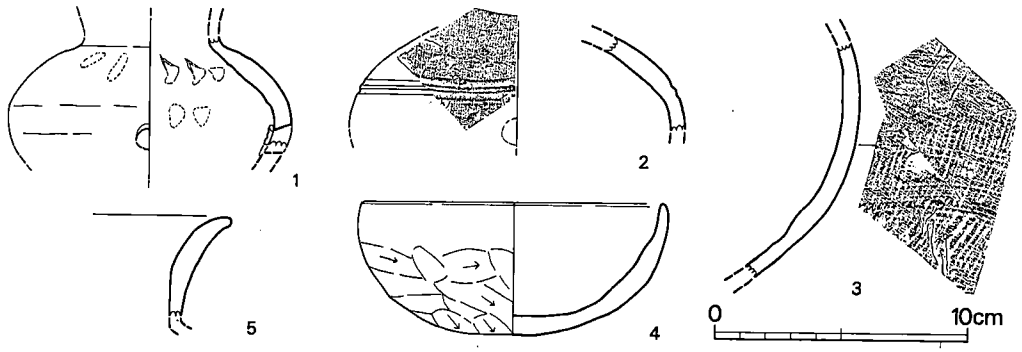
石室底は素掘りのままで，枕石・敷石等は設けられない。使用石材は全て緑色片岩である。蓋石は全く残存しない。遺骨・石室内副葬品等皆無である。ただ，周溝内より陶質土器片・土師器等が，明らかな供献土器1点を含め出土した。

出土遺物（図版74，第131図）

陶質土器瓿（1・2）孰れも周溝内出土品である。1は½弱存の小形瓿となる。胴部最大径11.2cmで，孔は最大径位よりやや下に穿たれる。外面中位から下は手持ち横位ヘラ削りの上を回転ナデ，他内外面は回転ナデを施すが，外面肩部や内面等に指オサエ痕多く，凹凸がやや目立つ。胎土に細砂粒を幾らか含み，焼成堅緻で内面小豆色，外面は灰小豆色～暗い小豆色を呈する。2は胴中位に細かい櫛描波状文を施し，その上に浅い2本沈線を巡らす。他内外面は回転ナデで，胎土精良，焼成堅緻で灰白色を呈する。これはC－4の2，19号墳の2，4号墳の15，6号墳の11等と接合はしないが，同一個体であり，どの埋葬主体に伴うものか明確でない。

陶質土器壺（3）中位以下の胴部片で，周溝内出土品である。外面上位は回転ナデ，下半は平行条線状叩目の上をカキ目風の横位ナデ，内面は上端付近が回転ナデ，以下がやや雑な手持ち横ナデを施す。胎土に細砂粒幾らか含み，焼成堅緻で内面は灰黒色，外面は灰黒～淡青灰色をなし，断面内部は灰小豆色を呈する。

土師器椀（4）南西側周溝内出土品で，唯一完形品であり，本石室に供献されたものと考える。口径12.1cm，器高5.2cmの部厚く小ぶりのタイプである。未だ完全な内湾する椀形になっておら



第 131 図　C－3出土土器実測図（1/3）

ず，手法もやや稚拙である。底外面は雑な手持ちヘラ削りのままで，内面は平滑で丁寧なナデが施される。胎土精良，焼き良く，内面淡茶色，外面は淡茶～灰褐色を呈する。

土師器甕（5）周溝内出土の小片で，内外面磨滅する。外傾気味に開き，口唇外端は丸く下端に段をつくる。二次火熱を受けて，暗茶～暗黄褐色を呈する。

以上のC－3の出土遺物は，既述の如く，周溝内混入品を含めて，土師器椀1点のみの供献と考えられる。陶質土器瑟1は，形態的には小ぶりでなで肩を呈し，新しい要素も考えられるが，焼成・調整技法から陶質土器の系統の中に位置付けられよう。また，2は前述の如く，他地点出土片と同一個体であり，小片でもある事から，本石室に伴うものとは考え難い。初期須恵器と考えて陶邑Ⅰ型式第2～3段階の年代が与えられよう。3の壺片も，外面下半の叩目の上をナデる手法等から，やや新しい様相を呈する。土師器甕口縁片も，5C前半でも中頃に近いものとなろう。

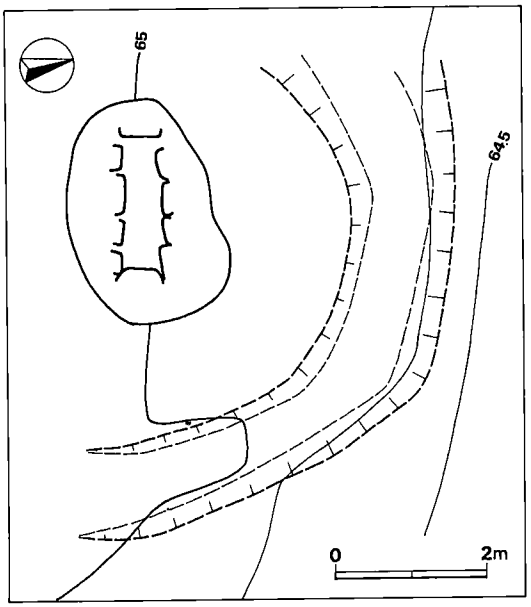
さて，本石室に伴うと考える土師器椀は如何であろう。後に述べる，陶質土器池の上II式を伴うC－23の4点の土師器椀と比べると，明らかに新しいタイプである。陶邑Ⅰ型式第3～4段階相当の蓋杯類と伴うC－9例の土師器椀は，大形・内湾化して精品である事から，本C－3例は，C－9例よりも明らかに古式である。

以上の事から，この土師器は5C前半代の範囲に収まるものと考えられる。そしてC－3の営まれた時期は，他の新しい様相をみせる土器破片の周溝への混入状況から，陶邑Ⅰ型式2～3段階の時期に近く考えて，5C前半代の後半にあたる年代が与えられる。（中間）

4．C－4

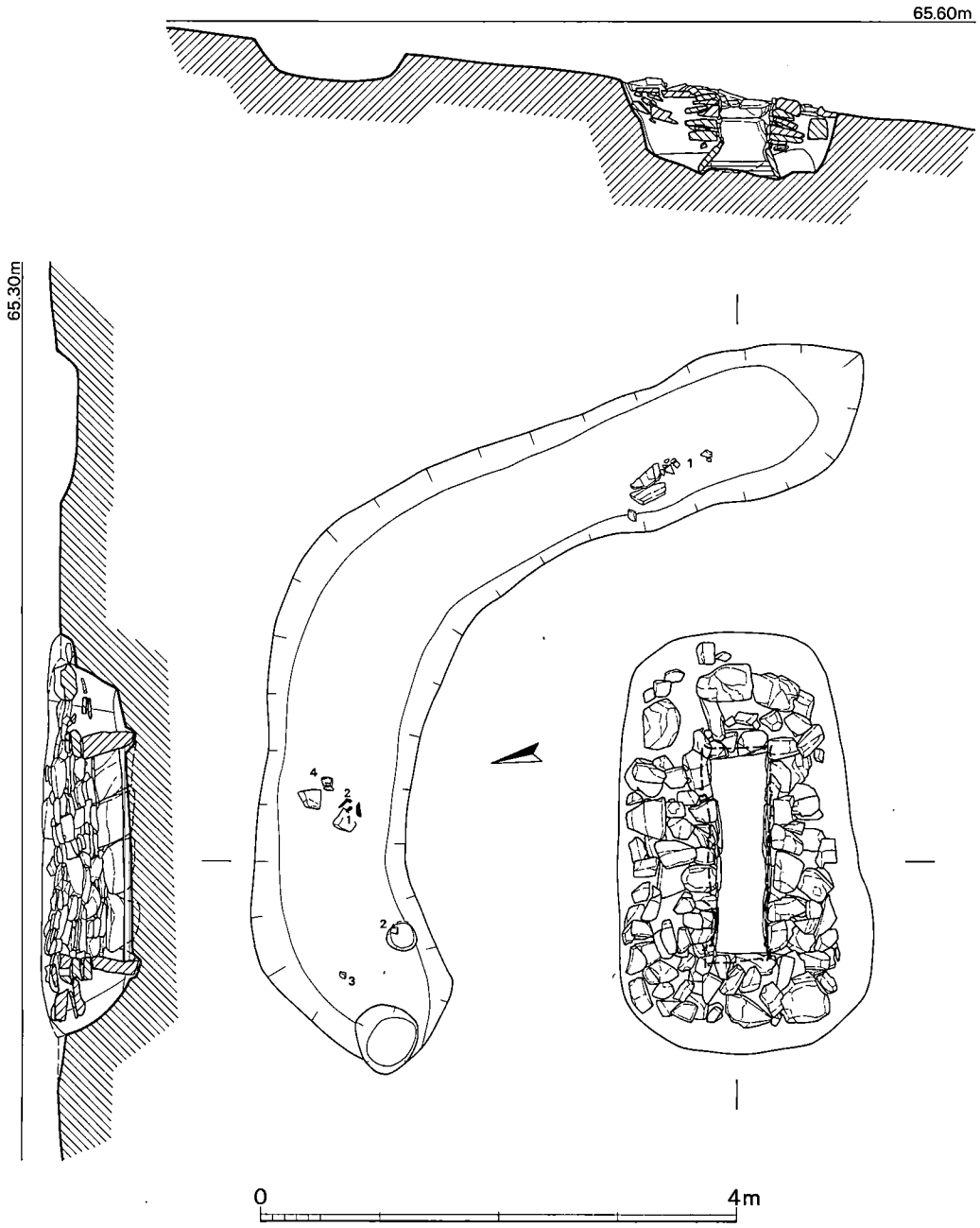
本古墳は，6号墳と20号墳間の緩斜面に位置する。現山径下に存した事にもよろうが，盛土の存在は認められず，遺構検出作業で石室が確認された。

また，石室の北西側に周溝が検出された。（第132・133図）本来石室を取り囲むものであろう。周溝の径は，石室中点からの半径は約4.5mであり，それにより墳丘規模を推定すると8～9mの円墳と考えられる。

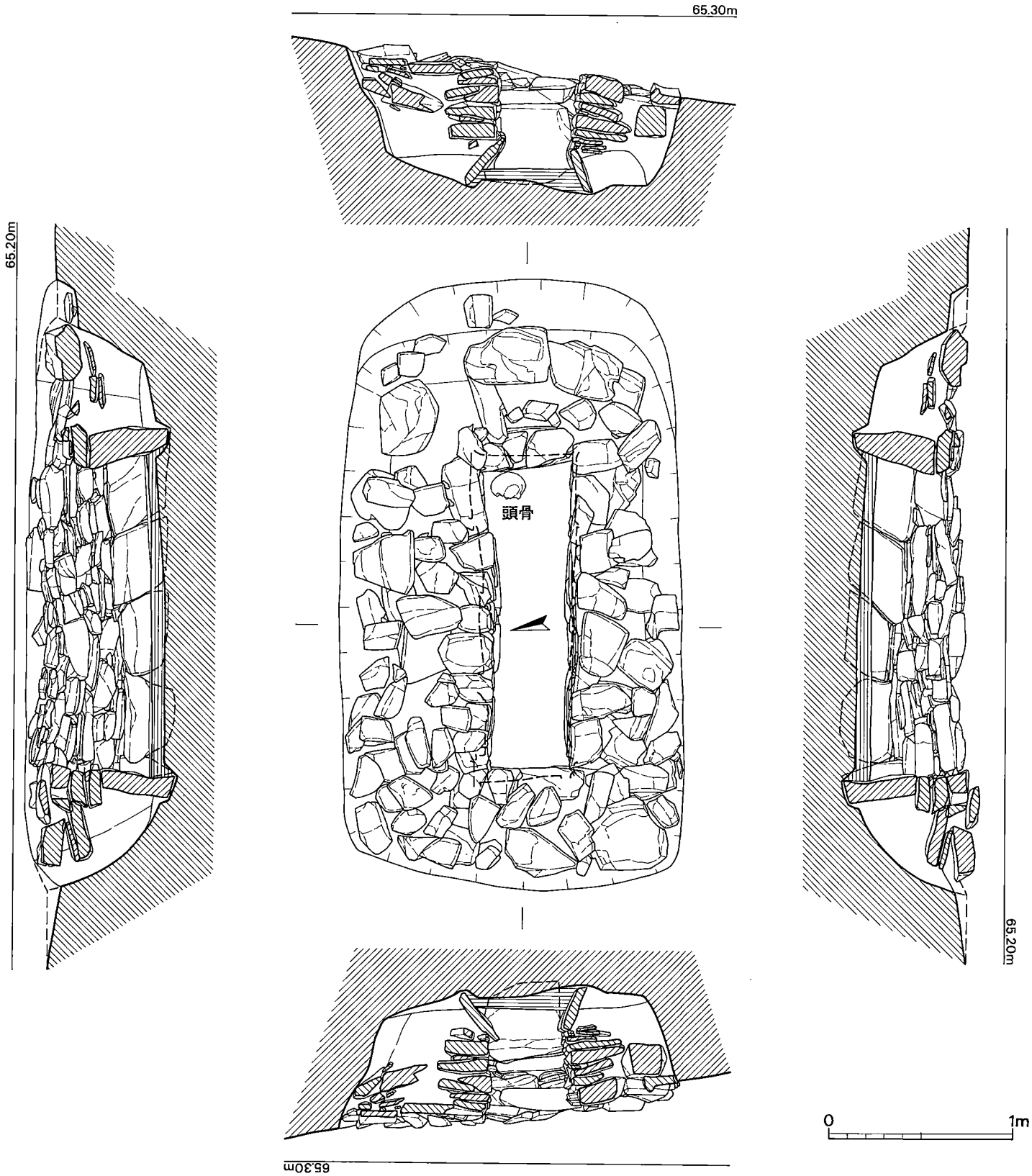


第 132 図　C－4 地山整形面実測図（1/100）

C－4



第 133 図　C－4 実測図（1/60）



第 134 図　C－4 主体部実測図（1/30）

主体部（図版74・75，第134図）

掘方は長円形を呈し，長さ3.08m，幅1.8m，深さ約65cmを測る。

石室の主軸はS78°Eにおく。蓋石は存しない。

石室の構造は，側壁で南北両基底部石とも横長に立ち，その上段に薄目の板石を用い平積みする。また小口部では，東西両方とも方形の板石が立ち，側壁と同じく上段に平積みする。基底部石は，小口部と側壁では若干小口部の石が大形を用い，高さも高く積みが少ない。床面には粘土を敷き，石室内全面に赤色顔料の塗布を認める。そして，石室裏側には基底部から上部の控え積みまで連続して，石室の石材よりも大きめの石で裏込めを密に行う。また，石室に若干の変容が見られる。それは，側壁中央部が若干内側に迫出している。石積みの過重によるものであろうか。石材は，大半が片岩であるが，控え積みしている石に砂岩が若干含まれる。

石室内法は長さ178cm，東側幅58cm，西側幅52cmを測り，深さは，蓋石が除去されているのみで，他の部位は壊されていないと考えられるので60cm強であろう。

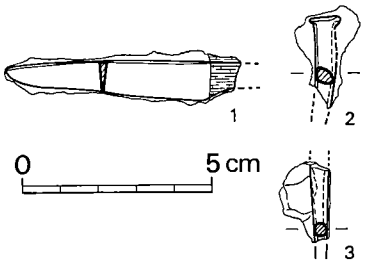
東小口側から，頭骨左側が出土している。

石室内副葬品はなく，出土遺物は全て周溝からである。出土品は刀子・陶質土器片・須恵器瓿や，内面に赤色顔料が付着する土師器椀などである（第133図）。これらは，石室東側周溝内出土の須恵器瓿を除いて他は，北側周溝内出土である。

出土遺物（図版76，第135・136図）

鉄刀子（第135図1）身の長さ5.3cm，背の厚さ2mmを測る。茎を欠損している。

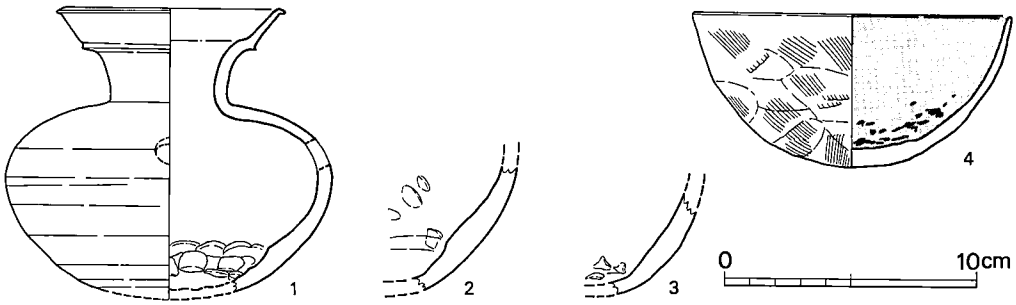
不明鉄片（第135図2・3）共に細長い棒状のものと思われる。2は一端が方形に平たく，釘の頭のようにも見える。



第135図　C－4出土鉄器実測図（1/2）

須恵器瓿（第136図1）石室の東側周溝内出土である。口縁部を半損し，胴中央部⅓を欠損している。復原口径8.4cm，胴部最大径12.9cm，器高11.4cmを測る。孔は欠損する。口縁部は頸部から大きく開く。端部は上面やや甘く尖り，折れ曲がって外へ強く張り出している。口縁部と頸部の境には，外面に角を有し，シャープな稜がつく。口縁から外面で肩部，内面で胴中央部まで回転ナデ，胴部から底部まで，外面は回転ヘラ削りの後水引き，内面は明瞭でないが，雑なナデであろう。また，内面底に棒状の先端で突いたと思われる痕跡がある。全体的にシャープなつくりである。胎土に細かい石英粒を若干含み，焼成は堅緻である。口縁から頸部内面と外面胴肩部は灰をかぶっている。全体に淡灰～暗灰色を呈す。

陶質土器瓿（第136図2・3）共に胴部から底部の小片である。2は外面丁寧なナデ，内面体部



第 136 図　C－4出土土器実測図（1/3）

回転ナデであり，内面体～底部にナデの上から棒状先端による圧痕が見られる。胎土に黒色細粒子若干含む。焼成やや堅緻。淡灰色を呈す。3は外面ヘラ削りの上丁寧なナデ，内面雑なナデであり，内底面に弱い棒状突き圧痕が1ヶ所見られる。底部平底気味である。胎土に細かい砂粒若干含み，焼成堅い。内面暗小豆色，外面灰黒～小豆色を呈す。

土師器椀（第136図4）口縁部半損で，他は完存である。外面体部以下は細かい雑なハケ目，口縁部横ナデである。また，外面体部下位に凹凸が目立ち，手持ちヘラ削りの痕と思われる。内面底部に著しく朱が付着している。これは，椀に朱を入れていたと推察される。胎土に粗く大きな石英粒と微細砂粒が若干含まれ，焼成やや甘い。暗茶色を呈す。

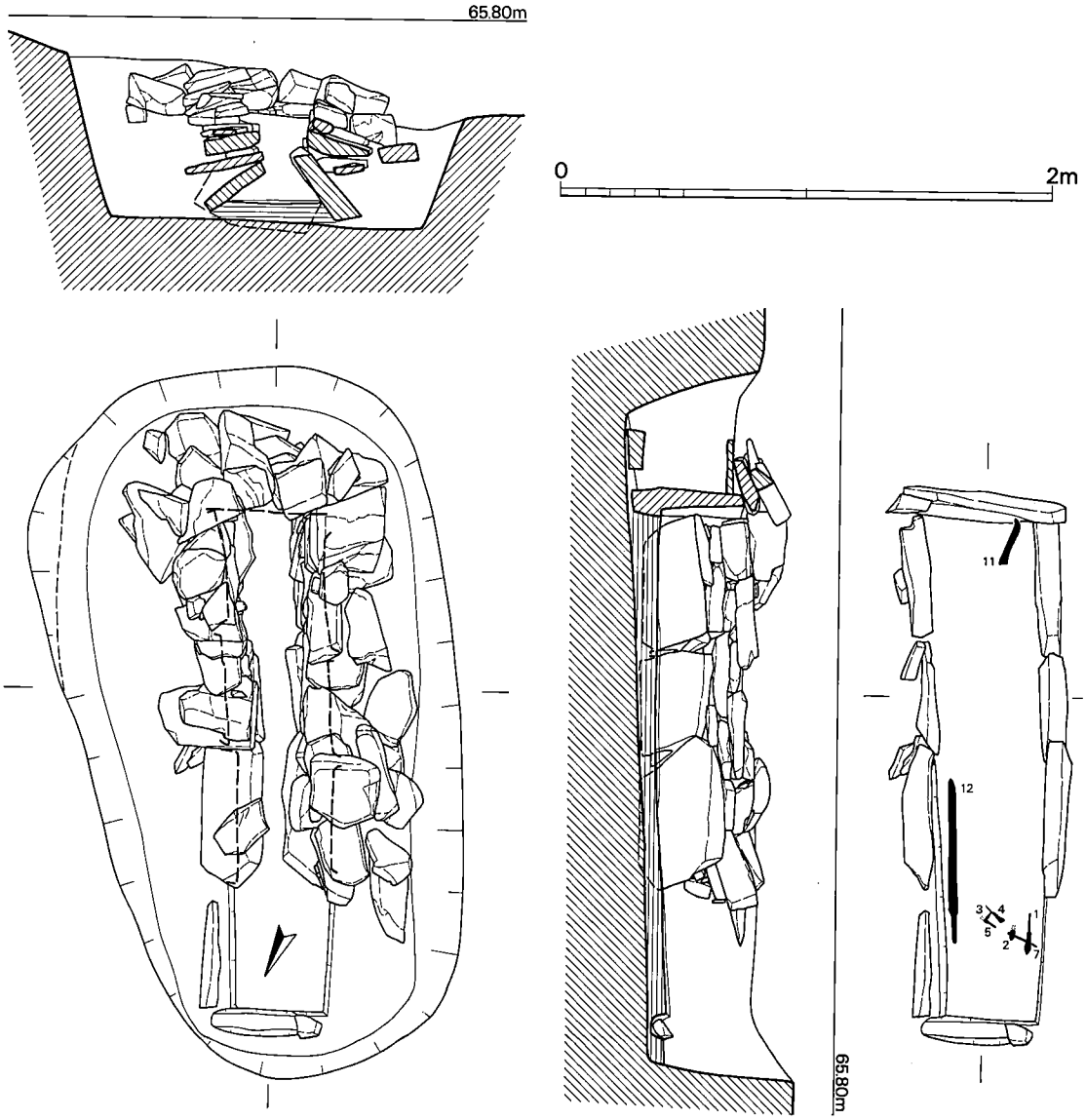
以上，C－4について述べた。本古墳からは周溝内出土の遺物によりその年代が推定できる。1の瑳は，内面底部の調整や胴の張り方から，古式の様相を呈するが，口縁部のシャープさを始め，全体的に新しくなる要素も持ち合わせている。また，椀4は明らかに5C初頭の様相を呈するものである。共に共伴するのは確実であろう。それにより，椀4は古式のものであるが，瑳1は，5C前半代と考えられ，初頭までのぼらないであろう。本古墳の時期は，5C前半代が与えられる。瑳2・3は極めて小片であり，本古墳に伴うものではなく混入品であろう。

なお人骨鑑定結果によると，被葬者は熟年の男性であった。　（平嶋）

5．C－5

20号墳とC－3とに挟まれた斜面裾の，やや平坦となる位置に営まれる。周溝は残存しない。隣接するC－3，C－4の周溝の状況からみると，当初より周溝が無かった可能性も考えられる。標高65.5mの辺りに位置し，等高線に平行に築造されている。

主体部（図版76・77，第137図）

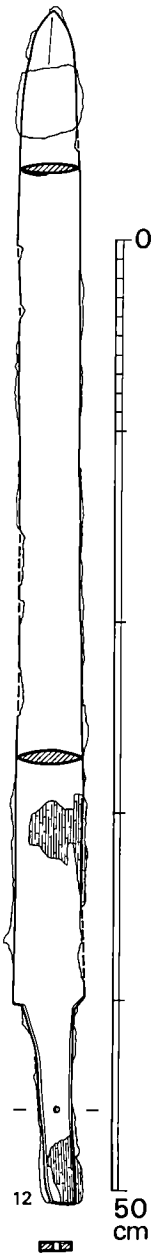


第 137 図　C－5実測図（1/30）（右端図は復原図）

主軸をN23°Wにとり，南々東に頭位を置く石棺系竪穴式石室である。

掘方は南北に2.88m，東西に1.62mの長楕円形プランを呈し，石室内床面まで0.55mの深さとなる。底面は全体に南側へ傾斜するが，平面に掘られ，その上に厚さ7～12cm程を盛って整地して石室床面となしている。掘方は一段掘りである。

石室内法は長さ2.03m，南端で0.46m，北端で0.36mとなる。石室は北端で大きく破壊されている。そして横断面図に見る如く，側壁基底立石が内側へ大きく倒れ込んでおり，本来の形



第 138 図
C－5出土鉄剣
実測図（1/4）

態を呈していない。これは先に記したように，掘方底部に一度整地盛土してから，石室を構築している為に，基底部の掘り込みが無く，その強度が弱かった結果，上部の積み石の重量に耐え切れずに，倒れ込んだものと考えられる。

左右側壁は基底部に板石を横長に立てており，南端小口に立てられた板石は他のどれよりも大きい。基底立石より上は板石の小口積み乃至平積みを行う。南端小口の裏側墓坑底には，裏込め根石が4石みられる。積石最上端から石室底までは0.53mを測る。

石室床面には，石枕・敷石等は設けられない。使用石材は全て緑色片岩で，蓋石も全く残存しない。遺骨の小片（1cm大）2片が残存していたが，その部位は明らかでない。

石室床面の頭位にあたる南端部に鎌，中央から北寄りの東壁際に鋒先を頭方向へ向けて剣が，また，北端寄りの位置に鉄鏃7＋α本が副葬されていた。

出土遺物（図版77，第138・139図）

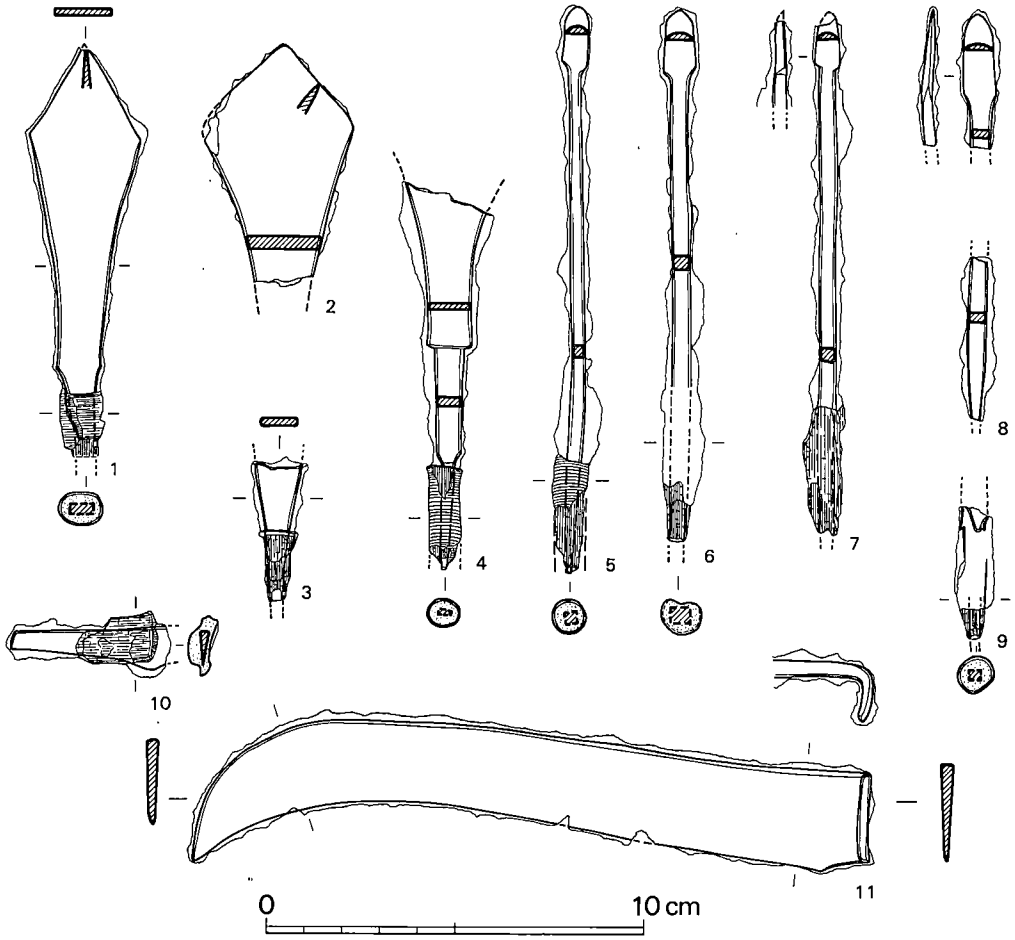
鉄剣（12）全長62.6cm，身長52.2cm，最大身幅3.7cm，厚さ0.8cmを測る。関部は片側が削ぎ関風になり，茎部は身部の中心線より片側へ寄る特徴をみせる。鋒先も僅かに片方へ曲がる。茎部中央に目釘穴1孔がみられるが，木釘であったものか，鉄釘は残らない。身部裏面には多くの鞘木質が残る。鋒先部には鎬稜がみられる。

鉄鏃（1～9）1は茎部近くに張り出し部をつくる変形の圭頭広根斧箭式で，最大身幅2.9cmを測る。 2は圭頭広根斧箭式である。3・4は広根式の下半部であり，茎部には樺・木質が良く残存している。4は茎の箆被部分に至るまで2ヶ所の段部をつくり，異質である。5～8は，片丸造細根鑿箭式である。8の身部は2.2cmとやや長く，柳葉式的である。5は沓巻が明瞭である。

鉄刀子（10）茎部長3.7cmで，身部へ急に細身となるタイプとなろう。茎部に柄木質が残る。関部で最大幅1.1cmを測る。

鎌（11）全長17.9cm，最大幅2.6cm，背厚さ0.3cmを測る。先端寄りでゆるく内湾し，先端は細く尖る。基部の折り曲げ部の状況から柄の装着角度をみると，刃部と柄は100度であったと推定できる。

以上のC－5の出土遺物をみると，特徴ある鉄剣は柿原H・D－1，池の上4号墳，同D－5，同D－8の各出土例と共通するものである。また，鉄鏃



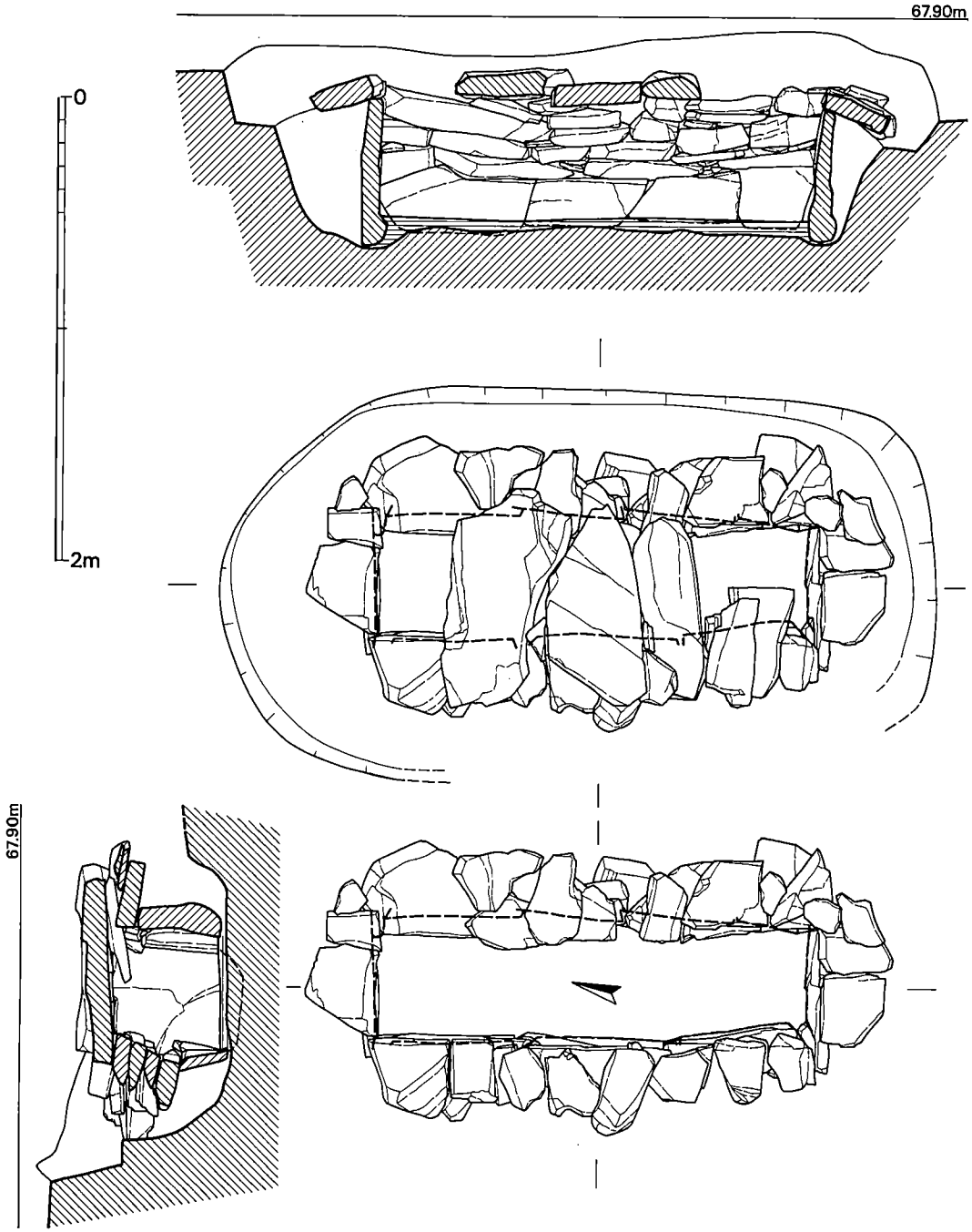
第 139 図　C－5 出土鉄器実測図（1/2）

等も当該期のものと共通する点が多い。よってC－5石棺系竪穴式石室は，5C前半を降るものではなく，それも，5C前半の前半以前の所産であろう。（中間）

6．C－6

20号墳と21号墳に挟まれた，斜面裾近くに位置する。周溝は残存しない。というよりも，斜面であることを考慮すると高位側に残存しても良い筈で，当初より無かったと考えられる。標高67.5m付近に位置し，斜面に平行に築造されている。

C－6



第 140 図　C－6実測図（1/30）

主体部（図版78，第140図）

主軸をＮ５°Ｗにとり，北に頭位を置く石棺系竪穴式石室である。

掘方は，南北に3.12mの長楕円形で，中途で段をなす２段掘りとなる。西側は斜面下位にあたる為，掘方上端線は明確でない。石室内床面は石室構築後，土を４～７cm程埋めて，掘方基底面の凹凸をならしている。

石室内法は，長さ1.87m，幅は北端部で0.53m，南端部で0.39mとなる。基底部は板石を横長に立て，東側壁で４枚，西側壁で３枚用いる。両小口部にもひときわ大きい板石を立てる。側壁の基底部立石は上端レベルを揃えている。それより上は，板石の小口積みが行われる。東側壁では内側へのせり出しが幾分みられるが，全体としてはそう顕著ではない。蓋石が大石３枚と若干残り，南北両側は残存しない。

石室内床面には何らの施設も施されない。遺骨・副葬品等皆無である。（中間）

７．Ｃ－７

６号墳の北東側，Ｃ－３１，Ｃ－２，Ｃ－４，Ｃ－８に囲まれる平坦面に位置する。周溝は残存しない。標高65.25m付近に，等高線に平行に築造される。

主体部（図版79・80，第141図）

主軸をＮ66°Ｗにとり，略東に頭位を置く竪穴式石室である。

掘方は，東西に2.47m，南北に1.72mの楕円形を呈する。中央横断面の状況にみられるように，２段掘りとなっている。

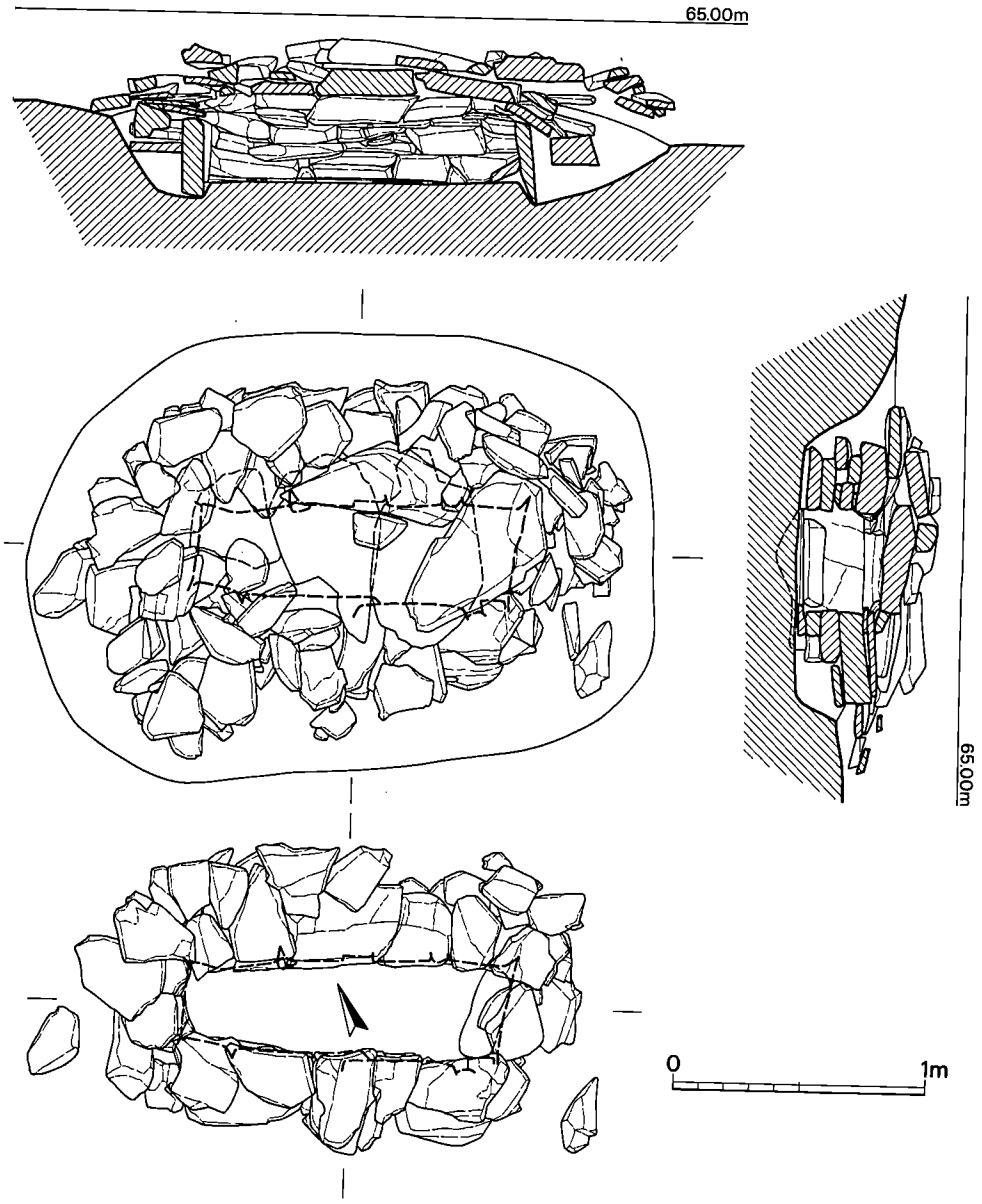
石室は，他の石棺系竪穴式石室と異なり，両小口部のみに板石を立てるタイプで，両側壁ともに最基底部から板石を平積み乃至小口積みとするものである。よって「石棺系」という概念を与え得る類か否か，更に検討を要する。後論でこの種墓制を細別したい。

石室内法は長さ1.28m，幅は東小口部で0.36m，西小口部で0.3mとなる。かなり小さい部類である。壁は上述の如く両小口部のみに板石を立て，両側壁は最下部から板石の平積み乃至小口積みが行われる。両小口裏側には，裏込めがしっかりと行われる。側壁の内側へのせり出しは殆ど無く，ほぼ垂直に内面を揃えている。

蓋石は，基本的には３枚であるが，隙間が空く為，更に同程度の大きさの板石を斜め・横位にかぶせる。そして小ぶりの板石を多くその上面や周縁部に乗せ，それらが控え積みへと拡がっている。極めて丁寧な覆石状況である。

石室床面東端には，幅14cmの板石が小口立石に立てかけて斜めに置かれて，枕石とされている。石室の深さは0.35mとやや浅い。石材は緑色片岩を使用しており，石室内には，遺骨・副

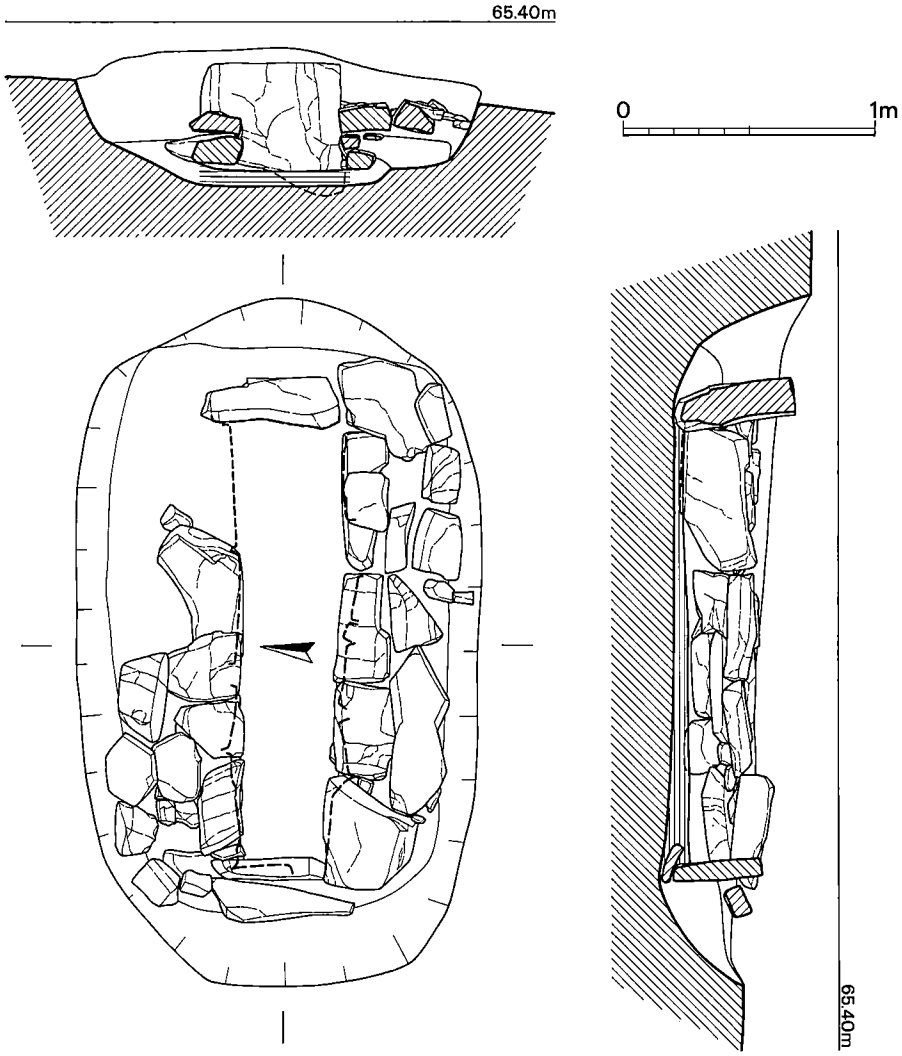
葬品は皆無である。　　（中間）



第 141 図　C－7実測図（1/30）

8．C－8

本古墳は緩斜面で，22号墳のすぐ南横に位置する。盛土は確認できない。また，周溝も無く，



第 142 図　C－8実測図（1/30）

墳丘を推定するものは全く無い。しかし，土饅頭が存していたと推測される。

主体部（図版80・81，第142図）

石室主軸をN83°30′Eにおき，等高線に直交して築く。掘方は2.71×1.59mの長円形を呈する素掘りである。深さ35～50cmで穿つ。

石室は，側壁の上位の積みが除去されている。残存の構造は，両小口に板石が立つ。側壁は基底部石が南側の東小口脇部分のみで横長に立ち，他は床に平らに据える。その上段は平積み

である。北側では，東小口脇の石が，木の根除去の際一緒に抜け，原形を留めないが，南と対峙して横立つものであろう。西小口寄りは南側壁と同様である。また側壁裏に控え積みの下位の部位が残っている。石材は全て緑色片岩である。

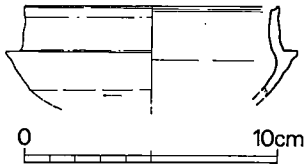
内法は長さ173cm，幅中央部40cm，西小口側35cm，東小口側46＋αcmを測る。

遺骨が残っていないので明確にできないが，地形的に東から西へ傾斜し，東小口石が西小口に比して大きい点から，頭位は東側であると推定する。副葬品は無い。

以上，C－8について述べた。ここで一つ注目される点は，側壁基底部石が一部を除いて，基底部より平積みされる点である。多くの石棺系竪穴式石室は，基底部石を全て小形なりとも立てて据えていたものであり，石棺系を想起させる要因でもあったのが，本石室では異なった形をしている。また，後述するC－21・23などは，側壁全て平積みされている。当石室は，C－1などの基底部石を立てるものと，C－23などの基底部より平積みにするものの折衷様式である。

C－8付近出土遺物（第143図）

C－8付近の表採の須恵杯身である。口縁から体部への小片であり，口縁端部上面に沈線が入り凹みをもつ。外面体部下端にヘラ削りが見られ，他は回転ナデである。胎土に粗い石英粒を若干含む。焼成やや堅い。灰色を呈す。陶邑Ⅰ型式第4段階期のものである。本C－8に伴うものとは考えられえず，却って北東隣のC－9に伴う可能性が高い。



第143図　C－8出土須恵器実測図（1/3）

（平嶋）

9．C－9

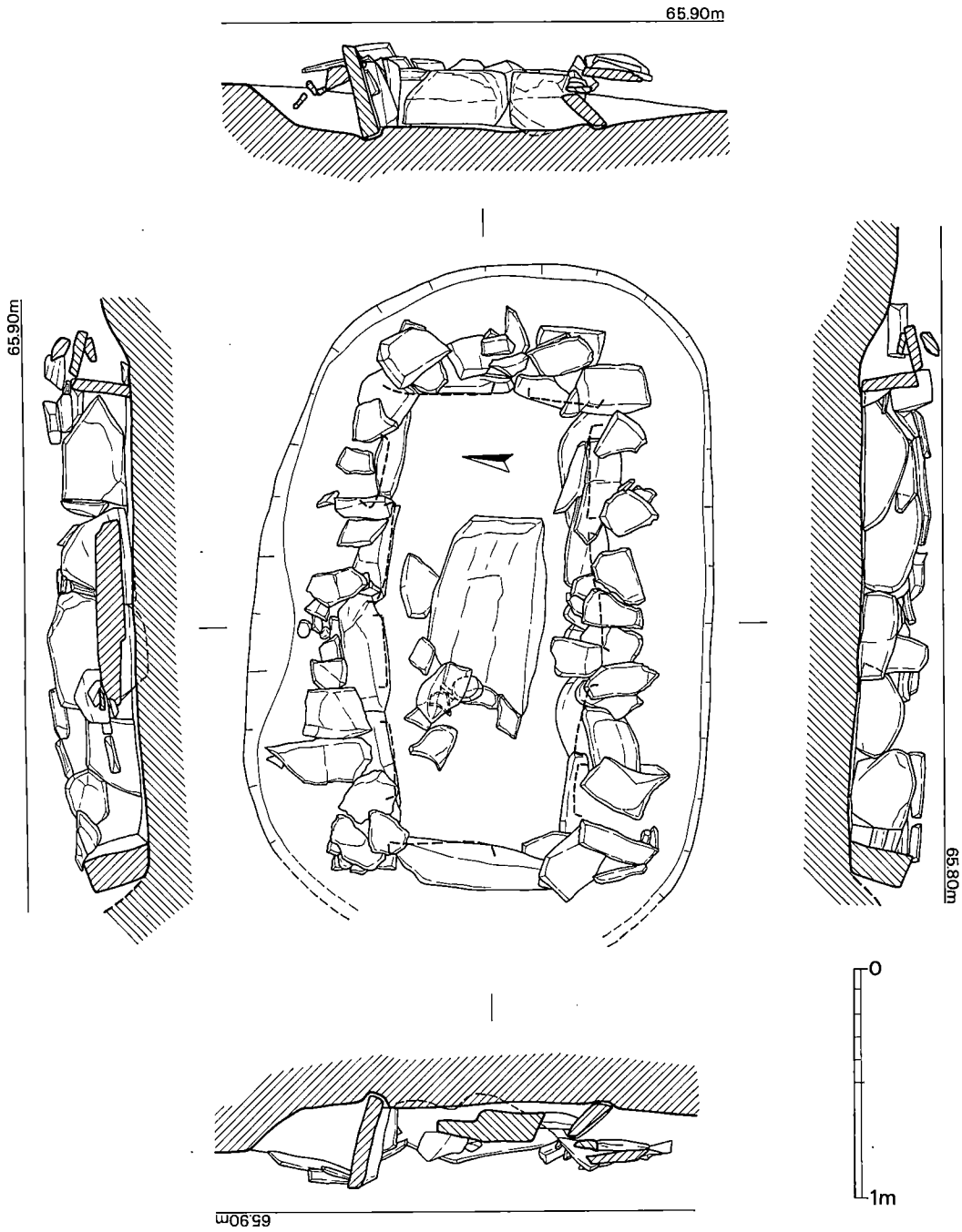
22号墳の東側の，C－8，C－11，D－4に囲まれた部分に位置する。平坦面に近い緩斜面で，標高65.5mの辺りに築造されている。周溝は確認されていない。

主体部（図版82・83，第144図）

主軸をN82°30′Eにとり，略東を頭位とする石棺系竪穴式石室である。

掘方は，東西に3.0m，南北に2.03mの楕円形プランを呈し，深さ0.15m前後と浅い。石室床面は長さ1.95m，幅は東端で0.9m，西端で0.78mを測り，他の多くの石棺系竪穴式石室よりも長くて幅広い形態をなす。

石室側壁の腰石は，墓坑底を余り掘り込まずに，板石を横長に立てており，頭位と思われる東小口部に2枚，北側壁に4枚，南側壁に5枚，西小口部に1枚を使用する。ただ，各石材間



第 144 図　C－9実測図（1/30）

に隙間が出来たり，殊に両側壁の西端は，幅20cm程の石材の無い部分もある程で，全体に極め

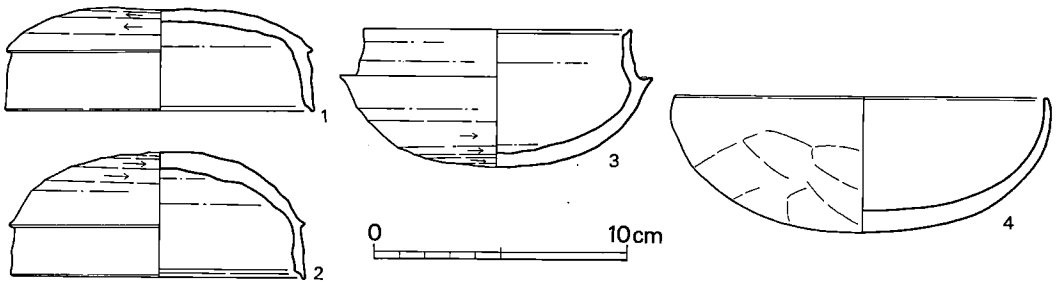
て雑な構築である。この腰石立石の上位は小板石を小口積みにしている。南側壁は大きく内傾するが，これは上述の，基底部を掘り込まない手抜き工事的地業の結果であろう。

石室上半は大きく破壊され，蓋石は残存しない。ただ，石室内中央に大きな板石が落ち込んでおり，この直上に須恵器蓋杯3個が乗っていた。この大板石は，やはり本来蓋石であり，上述した如き側壁の脆弱さの為に，築造後わりと早い時期に落ち込んで，上半の破壊・石材の採出を免れたものと考えられる。

石室床面の敷石・石枕等の施設は無い。遺骨，床面での副葬品も無い。

出土遺物は，上述の本来蓋石上に供献されたと思われる須恵器蓋杯3点と，石室内埋土上層から出土した土師器椀1点である。

出土遺物（図版83，第145図）



第 145 図　C－9出土土器実測図（1/3）

須恵器杯蓋（1・2）1は口径12.1cm，器高4.0cmを測る。天井部が平坦で，口唇端は内傾して凹面をなす。天井外面は右廻り方向の回転ヘラ削りを施し，その範囲は稜近くまで及ぶ。天井内面中央は丁寧にナデており平滑である。胎土に，表面が溶ける黒色粒子が目立つがかなり精良で，焼成堅緻である。天井外面は灰かぶりして淡灰黄色をなし，他は淡灰色を呈する。2は天井部が丸く，左廻りの回転ヘラ削りが½強施され，他は天井内面まで回転ナデがみられる。胎土に粗石英粒やや目立ち，黒褐色細粒子がかなりみられる。焼成堅緻で，内面は淡紫灰色，外面は紫灰～淡灰色を呈する。全体にかなりシャープで口径11.6cm，器高4.9cmを測る。

須恵器杯身（3）口径10.5cm，器高5.4cmを測り，杯蓋2と全く同様の調整を施す。立ち上がりは，内傾度がわずかで，口唇部は内傾して凹状をなす。胎土，焼成ともに杯蓋2と同様で，内外面ともに灰色をなす。杯蓋2と完全にセットをなす。

土師器椀（4）口径14.7cm，器高5.3cmの大型品で，内外面磨滅するが，底外面は，手持ちヘラ削りかと思われる。胎土精良で外面淡赤褐色，内面は淡茶色をなす。

以上の遺物から，C－9の築造年代を考えてみよう。まず，須恵器蓋杯類は明らかに供献品

と思われる。蓋1は天井部平坦なこと，回転ヘラ削りが広く及ぶこと，内面に丁寧なナデを施すことなどの諸特徴から，陶邑Ⅰ型式第3段階に相当するものである。これに対し，セットをなす2・3は，上述の特徴が無くなる。立ち上がりの内傾度は弱く，まだ第3段階の様相を示すが，器形その他から，陶邑Ⅰ型式第4段階のB類に相当しよう。また，土師器椀も内湾化が顕著で，5C前半代の古い方には位置付けられない。

以上のことから，C－9は，陶邑Ⅰ型式第3・4段階に位置付けられ，新相を採用すると5C中頃の築造が考えられよう。（中間）

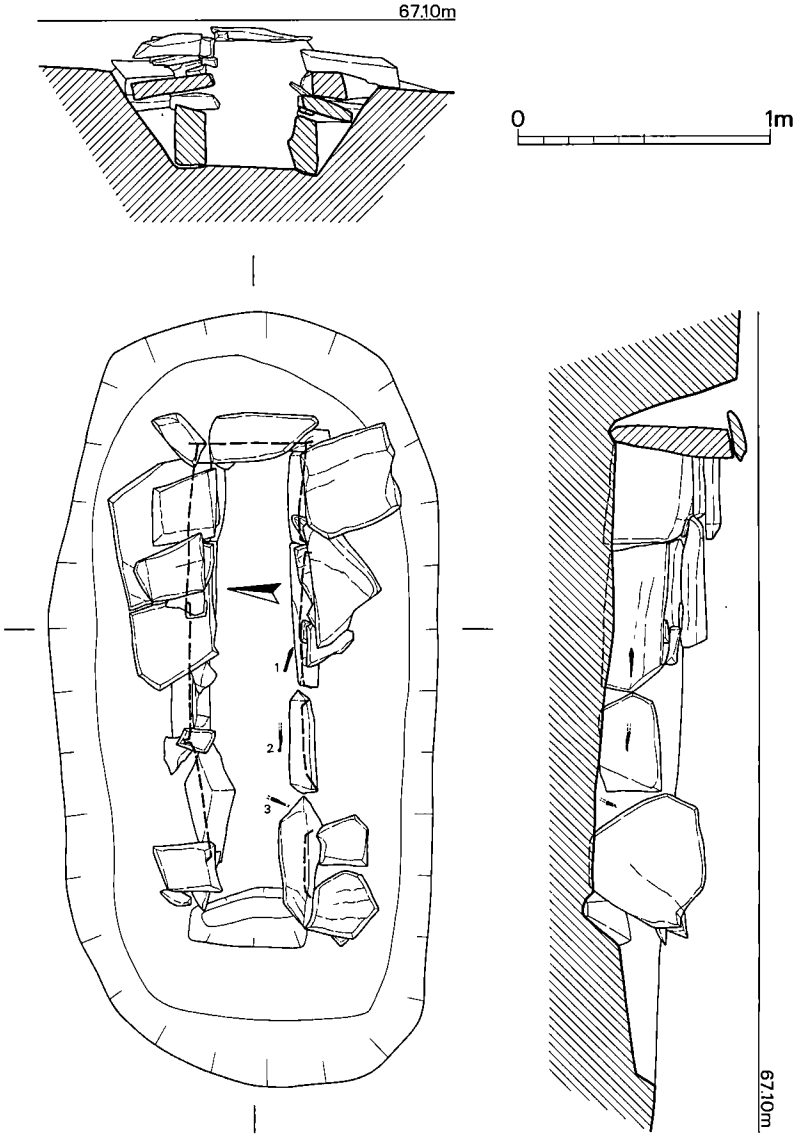
10. C－10

本古墳は，緩斜面の21号墳の西側10mに位置する。全く盛土は認められず，周溝も有していない。従って墳の規模は不明である。

主体部（図版84，第146図）

本石室はN85°Eに主軸をおく。掘方は，3.06×1.54mの細長い長円形を呈し，25～40cm穿つ。

石室の残存状態は悪く，全蓋石と西小口壁を欠損する。また，他の部位でも基底部石のみか，その上段に



第146図　C－10実測図（1/30）

2～3段の石積みを残す程度である。欠損している西小口に，基底部石の掘方と目される穴が残っている。他の基底部石は東小口も含めて立ち，その上段に平積みする。石材は全て片岩である。

石室の内法は，長さ西基底部石掘方までで175cm，幅東側43cm，西側で36cmを測る。残存高は最大で50cmである。

敷石や赤色顔料の痕跡は認められない。

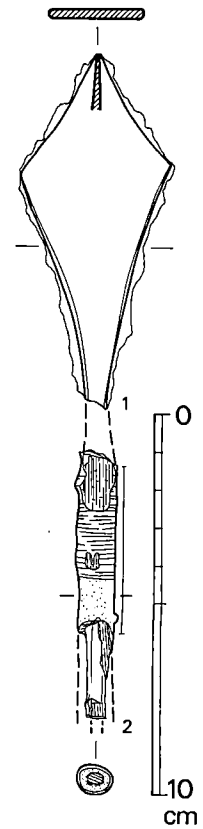
頭位は，遺骨が残っていないので判然とはしない。しかし，地形的面や石室の東西の内法により東側であろう。

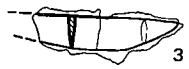
副葬品としては，石室内より鉄鏃と刀子片が出土している。しかし，床面からかなり浮いているので，棺外副葬品の流れ込みの可能性もある。

出土遺物（図版84，第147図）

鉄鏃（1・2）1・2は同一個体かとも思われるが，1の茎の幅に対して2は，幅広でかつ厚い点から別個体であろう。1は変形圭頭斧箭式の身の部位である。残存長9.2cm，最大幅4cm，厚さ3mmを測る。2は茎のみで，木質と沓巻が銹着している。

鉄刀子（3）断面により，背部と刃部の存在が認められる。刀子の鋒部片である。残存長3.8cm，背部の厚さ2mmである。





第147図 C－10出土鉄器実測図（1/2）

以上，C－10について述べた。本石室は幅が狭く，粗略な造りに見え，石棺の様である。しかし，基底部石の上端面は，側壁部と小口部では明らかに高さに違いが認められる。（平嶋）

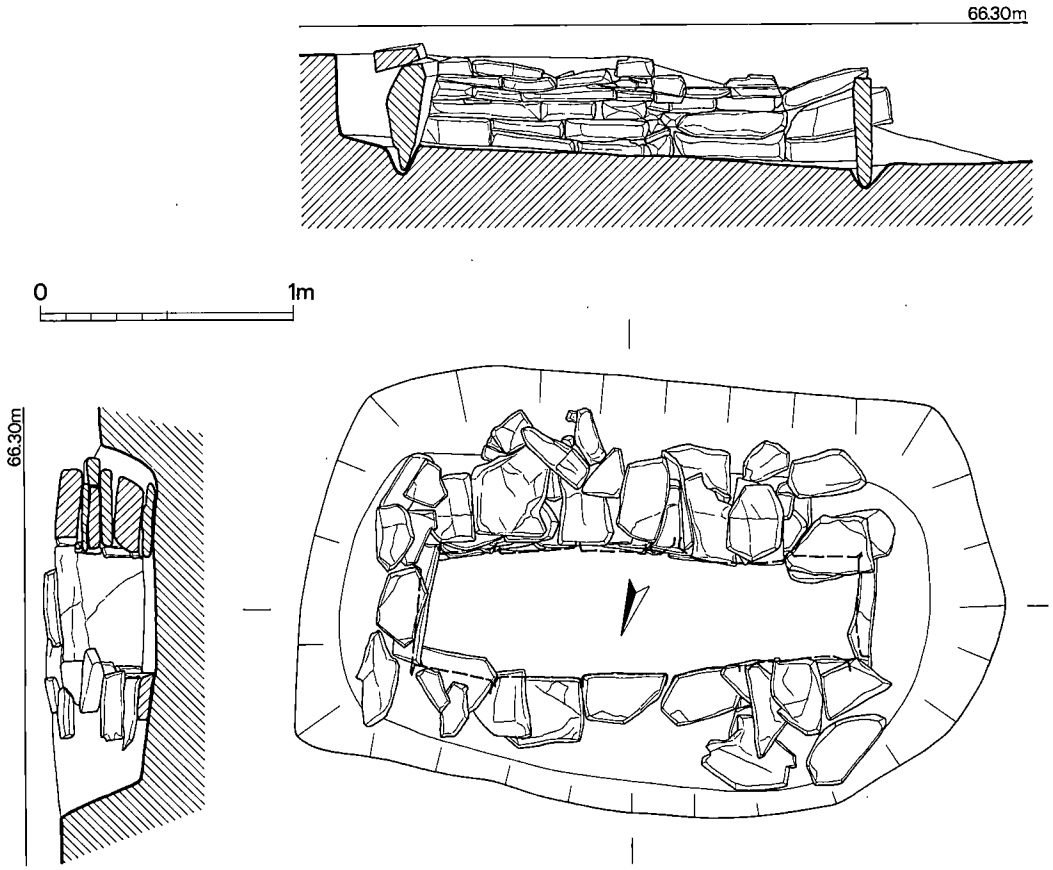
11. C－11

22号墳の北東側で，C－9，C－12，C－10，D－2に囲まれた位置に所在する。平坦面に近い緩斜面で，標高66mの辺りに築造されている。周溝は確認されていない。

主体部（図版85，第148図）

主軸をN71°Eにとり，略東に頭位を置くと思われる竪穴式石室である。

掘方は，東西に2.8m，南北に1.72mの不整長方形プランを呈し，一段掘りである。西端辺りは，斜面下位の為，掘方上端線は明確でない。また，墓坑底全体が西側へ傾斜している。



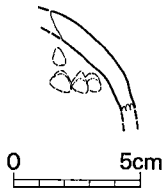
第 148 図　C－11実測図（1/30）

石室は両小口端のみに板石を立てて，南北両側壁は最下部から板石の平積み乃至小口積みを行っている。床面内法は，長さ1.75m，幅は東端で0.45m，西端で0.4mとなる。両側壁の内側へのせり出しは，一部で見られるものの，顕著ではなく，大旨ほぼ垂直に内面を揃えている。現存積石最上端から石室床面までの深さは40cm程である。石材はすべて緑色・黒色片岩を使用する。

石室内床面の敷石・石枕等施設は無い。遺骨・副葬品等も皆無である。墓坑内埋土中から須恵器小片１点が出土したのみである。

出土遺物（第149図）

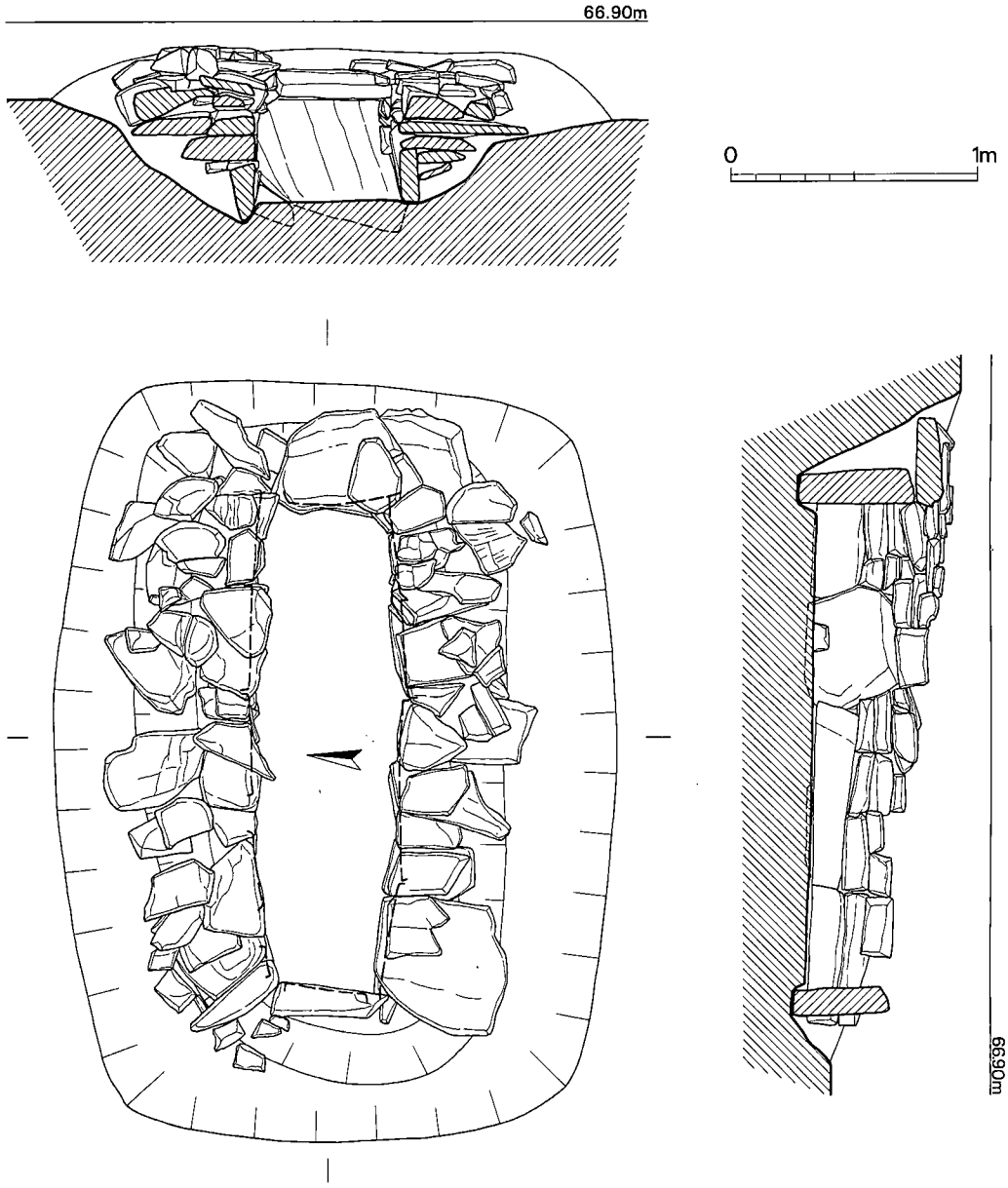
須恵器片　瓶或は小型壺の肩部付近の小片で，外面は回転ナデを施す。内面には指頭押圧痕が多くみられる。胎土に細石英粒幾らか含み，焼成堅緻



第 149 図　C－11 出土須恵器実測図（1/3）

で，内面暗青灰色，外面下位は灰黒色を呈する。外面肩部には暗黄緑色の自然釉がみられ，器壁断面は濃小豆色をみせる。（中間）

12．C－12



第 150 図　C－12実測図（1/30）

本墳は，緩斜面に築き，C－10，11，13に囲まれて位置する。盛土は形跡すら認められない。また，周溝も有せず墳形は不明である。

主体部（図版85・86，第150図）

本石室はN85°Eに主軸をおき，標高66.5mに構築する。掘方は3.07×2.3mの長円形を呈し，深さ10～55cmで穿つ。

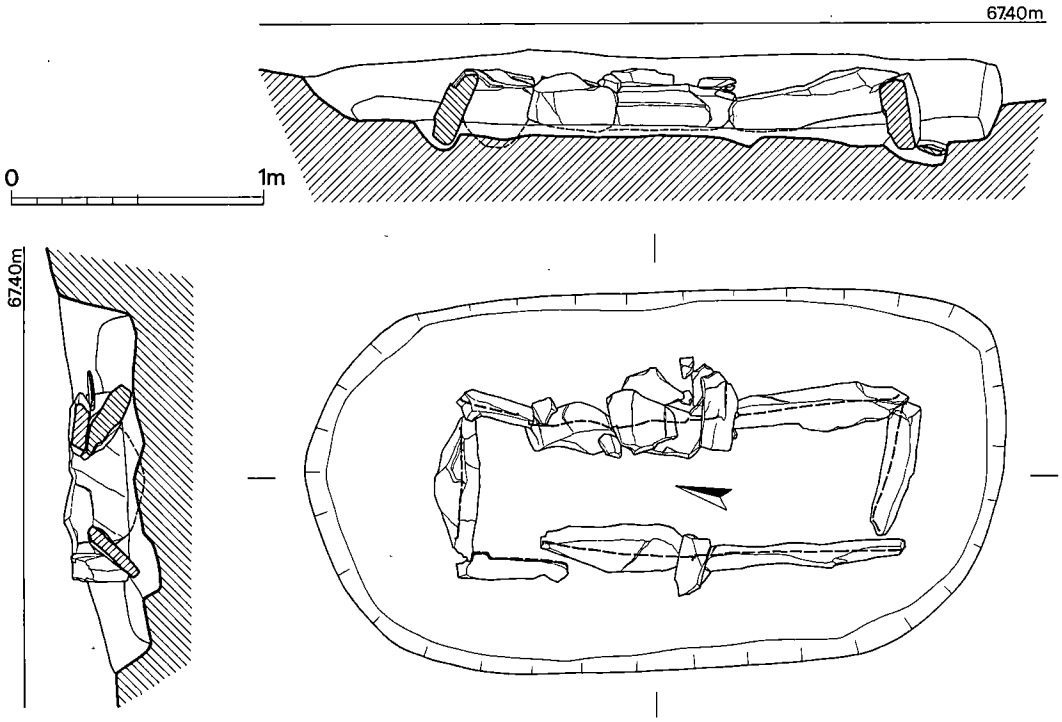
石室の残存状態は，蓋石を欠損し，また東から西へ向かって石積みの欠損が著しい。石室構造は，四壁ともに基底部石が立ち，その上段に平積みをなす。また，石室周囲に小石を用いて控え積みがなされる。赤色顔料の塗布は形跡すら見られない。石材は全て片岩である。

石室の内法は，長さ198cm，幅東側53cm，西側47cm，中央部60cmを測る。また，石室の高さは，残りの良い東側で50cmを測る。

頭位は，遺骨が残っておらず，明確には成し得ないが，斜面が東から西に傾斜する状況や，石室幅の測値，また，小口部の基底部石が若干ではあるが，東側が大形となる点から東側であろう。

（平嶋）

13．C－13



第 151 図　C－13実測図（1/30）

本古墳は，緩斜面でC－10，12のすぐ北に位置する。標高67.5mに築かれる。

また，本墳も盛土は残存していない。周溝を有さない為，墳の形状も不明であるが，土饅頭状を呈していたことが推察される。

主体部（図版86，第151図）

本石室の主軸は，N14°Eにおき，等高線に対して平行方向に築く。掘方は2.77×1.5mの長円形を呈し，深さ15～30cmで穿つ。

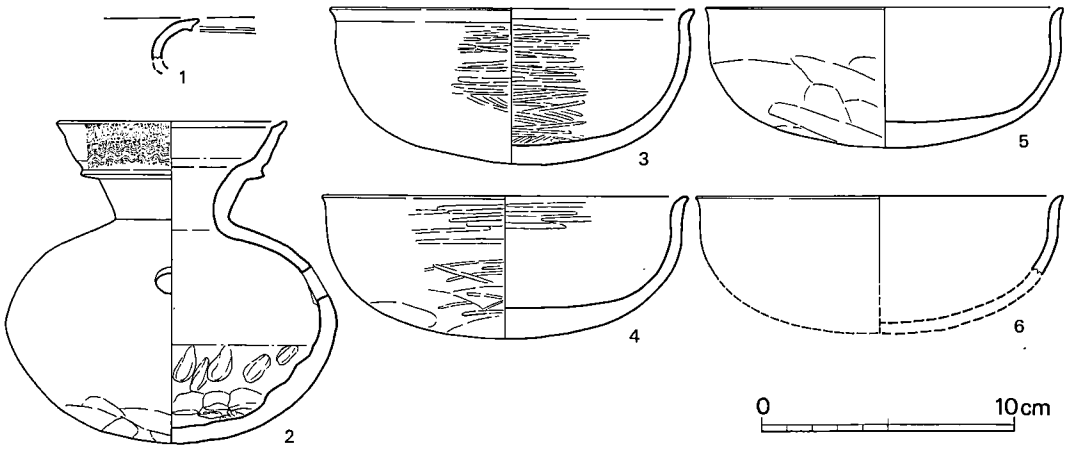
石室の残存状態は非常に悪く，本石室の上に山径が通り，本来浅く構築されていたことによるのであろう。状態としては，四方壁はほぼ基底部石のみ残り，東側壁中央に若干の積みが残る。

構造は全基底部石を横長に立て，東側壁に一段のみの平積みである。全壁面やや内傾している。基底部石の根が浅い為と，上層の山径からの荷重によるものであろう。床面に薄く粘土が敷かれる。赤色顔料の痕跡なし。石材は片岩である。

石室内法は，長さ168cm，幅北側57cm，南側59cmである。

頭位は，遺骨が無いので判然とはしないが，南小口幅や床面の傾斜から南とも考えられる。しかし，小口石の大きさからは，北とも見做せる。さらに，論拠は無いが，地形的に鑑みて，谷の奥は北側であり，見かけの地形は，北側が高く見える点から北枕と想定する。

出土遺物は，明確に本墳に伴うものであるのか否かは断定し得ないが，遺構検出作業の際に，本石室直上から須恵器甕や土師器椀などが出土している。



第 152 図　C－13出土土器実測図（1/3）

出土遺物（図版87，第152図）

須恵器片（1）口縁部の小片である。口縁は大きく外反し，外へ尖る端部となる。端部下方に

三角形に張り出しを有し，稜がつく。内外面ともに回転ナデである。胎土は精良にして，焼成堅い。内面灰かぶりにより灰色，外面黒色を呈する。口径15cm前後でやや小形の広口壺であろう。

須恵器瓶（2）口縁部⅔を欠損し，他に胴部付近を部分的に僅かに欠損する。口縁端内面で，わずかな凹みを有し，口縁と頸部の境は外へとび出し稜がつく。頸部肉厚である。胴部中位はやや角がつき，丸底の底部となる。内外面口縁から胴部は回転ナデ，底部外面は手持ちのヘラ削り痕の上をナデ，内面は棒突き痕が見られ，やや上位に指オサエ圧痕的な凹みがある。孔内面に穿孔の際に隆起した若干の粘土のはみ出しが見られる。口縁部中位に幅8㎜程で9本歯の櫛による波状文を細かく施す。また，内面口頸部と外面肩部に自然釉がかかる。暗灰緑色を呈す。胎土に粗い石英粒が若干目立ち，焼成堅緻である。外面黒色，内面胴部は暗青灰色を呈す。

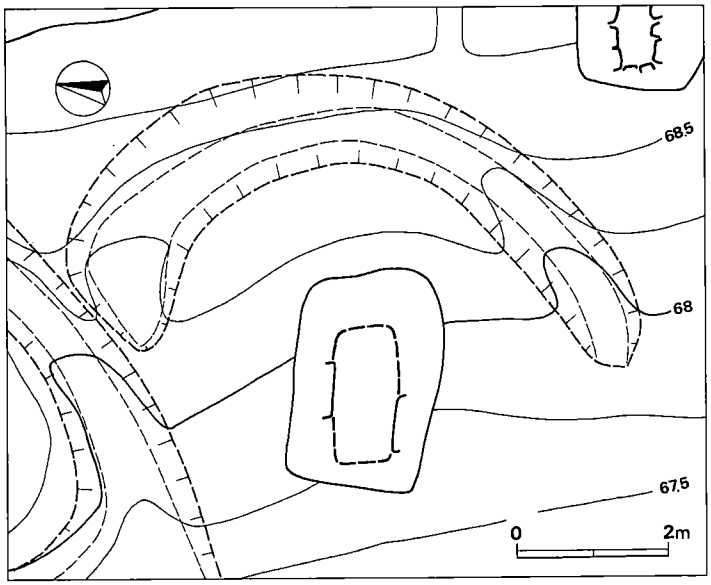
土師器椀（3～6）全て底部肉厚で，底部と体部の境で肉薄となる。口縁は端部で外反する。3は端部の外反が強く，折れ曲がり，弱い稜がつく。3はほぼ完形で，4・5は口縁⅓を欠損，6は口縁小片である。口径は，5は14cm，他は14.3cm，器高は5.7～6.6cmを測る。

3は外面やや磨滅気味ではあるがヘラ磨き，内面底部ヘラ磨き，他は横ヘラ磨きである。4は口縁から体部は横ナデの後横ヘラ磨き，底部は外面手持ちヘラ削りの後に雑なヘラ磨きで，内面は体部中位から磨滅著しく不明である。5も内面磨滅が著しく不明で，口縁部内外面に横ナデ，外面体部から底部は，磨滅気味ではあるが手持ちヘラ削りの後ナデであろう。5は横ナデを施す。胎土は全て精良であり，4に赤茶色粒子がかなり含まれる。焼成全て良。3は地色は黄褐色，4・5は内面淡茶色，外面淡黄褐色で，5は部分的に黒褐色で，6は明茶～黒色を呈す。6以外には赤茶色スリップを内外面にかける。

以上がC－13の付近より出土した遺物である。これらが確実にC－13に伴うものであるか否かは断定できないが，土師器椀の形態的酷似や，須恵器瓶と小片の特徴から同時期と考えられ，ある一定の時を示す点から本石室に共伴するものと推定する。ではその時期であるが，瓶より考えられる。底部の調整や胴部の形態に若干古式の様相を呈しているが，底部丸底となり，口縁部の波状文を細かく施す点などから，5C中頃のものと考える。（平嶋）

14．C－14

8号墳の南東に隣接して，C－34，C－35の南側に位置する。主体部が丁度里道にかかって，その大半を破壊されている。緩斜面に占地し，標高68m辺りに築造されている。周溝は東側に半円形に残存する（第153図）。南北径8.0mを測り，深さは30cm弱程である。墳丘盛土等全く残らない。



第 153 図　C－14地山整形面実測図（1/100）

主体部（図版87・88，第154図）

主軸をN79°Eにとり，頭位をほぼ東に置く，幅広大型の石棺系竪穴式石室である。

掘方は，西半が削平されて残らないが，東西長軸長3.03＋αm，南北幅1.82mの略長方形プランを呈する。深さは東端で40cm程しか残らない。

石室壁は，北側壁中央と南側壁西端の各１石が残るのみで，他は全て抜かれている。腰石に板石を横長に立てて，その上に板石の小口積みを行ったものと考えられる。また，それら抜き跡から，石室床面内法は長さ1.93m，幅は東端で0.89m，西端で0.78mを測り，他の石棺系竪穴式石室と全く異なり，幅広の羽子板状プランを呈する。

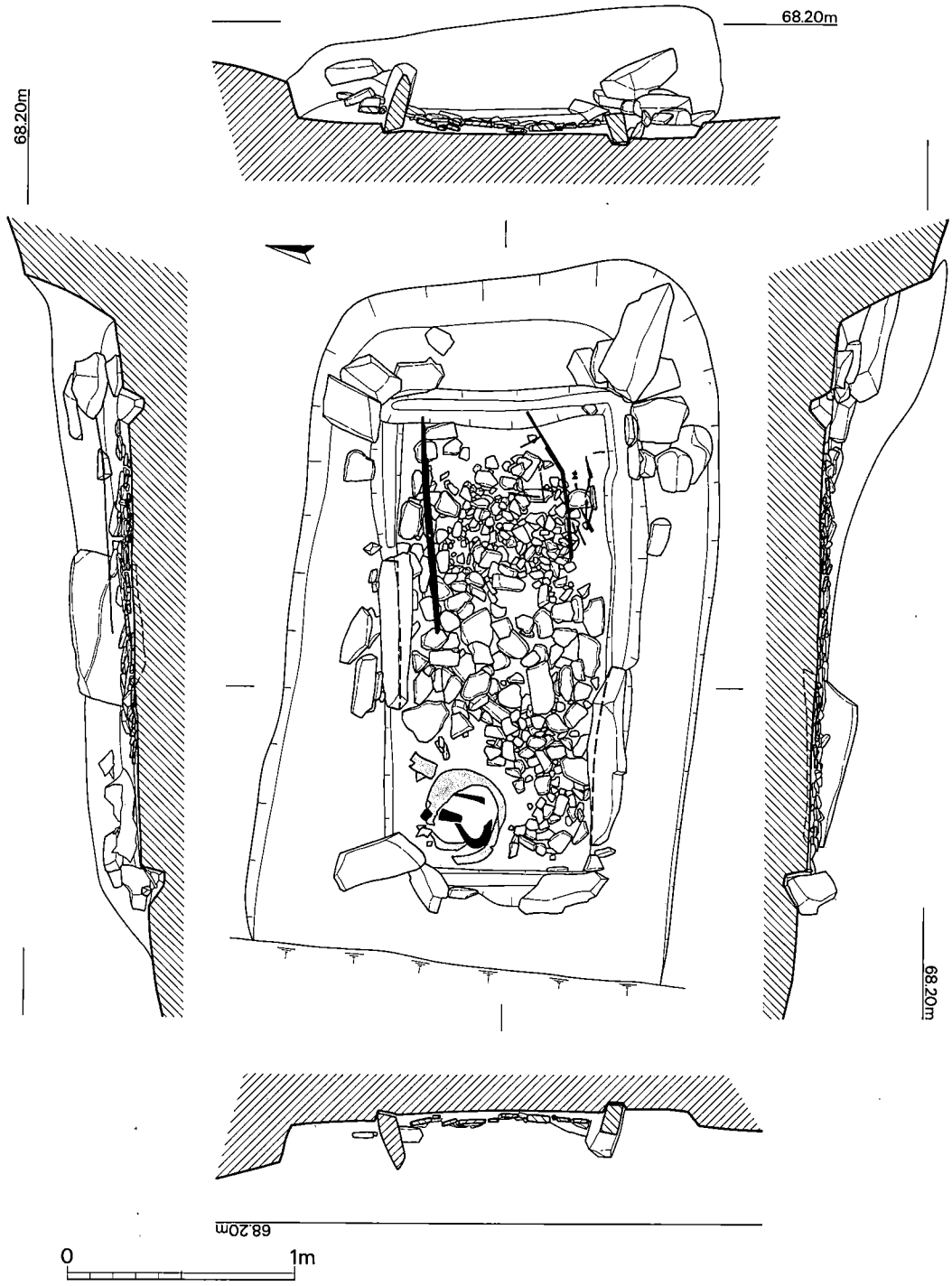
腰石の基底部を締める根石，また，裏込めの石が特に東辺りに良く残存しており，かなり丁寧な築造であったと推定できる。床面には主に中央付近に小板石を敷き，東西両端寄りには，緑色片岩の小転石を敷く。しかし，この両者の範囲の区別は明確ではない。床面には赤色顔料が各所に残存するが，側壁内側には残らない。

遺物出土状況（図版88～90，第155図）

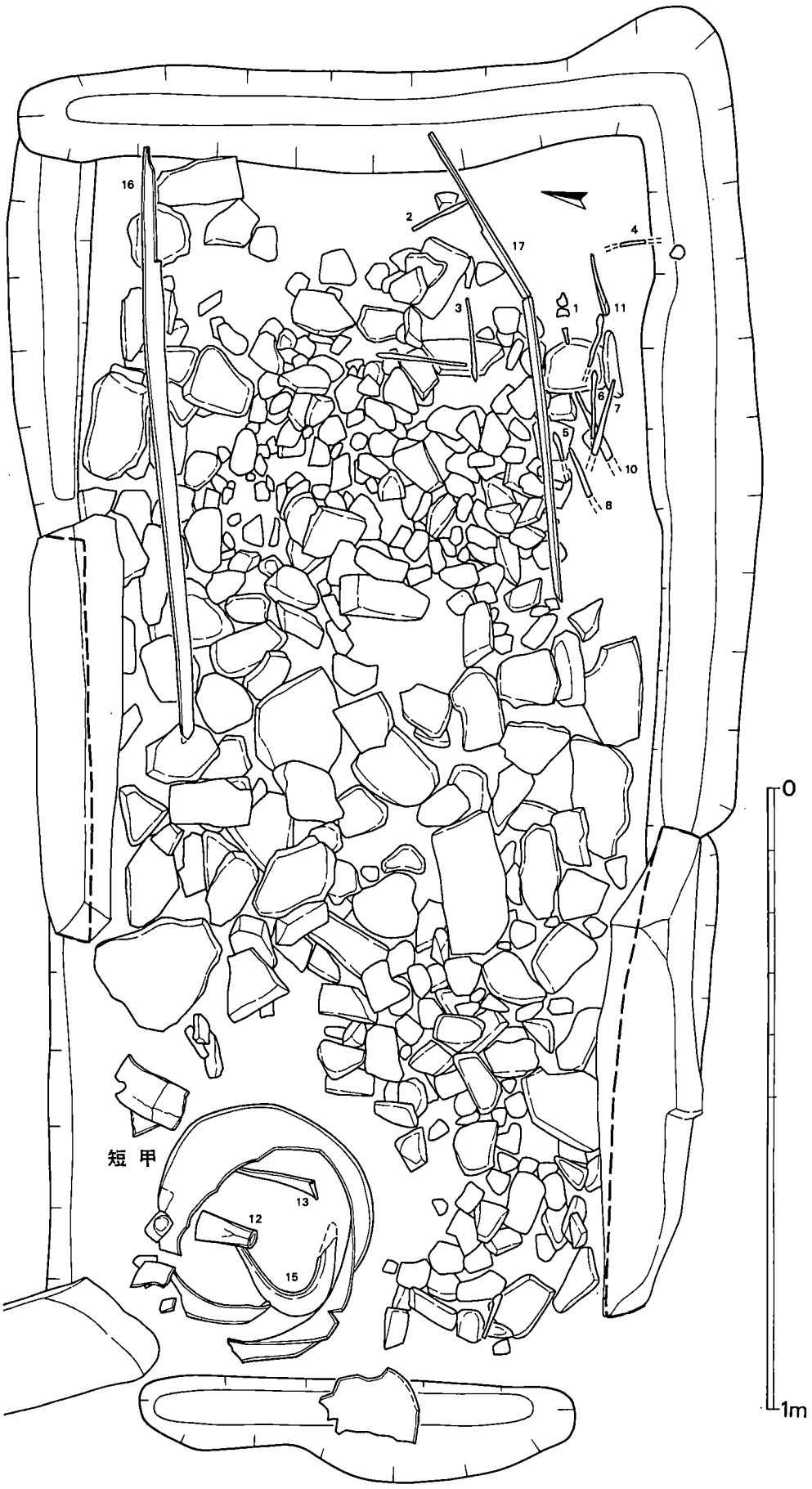
石室内床面各所から鉄製品多量が出土した。まず，東北に側壁に沿って太刀１振が鋒先を西に向けて出土した。また，東南隅では，床面敷石上より鉄鏃・刀子類がかたまって出土し，その上方10cmの浮いた位置に，太刀１振が中途で折られた状態で出土した。この太刀は石室攪乱時に原位置を動いたものであろう。

また，西北隅では短甲が発見され，その内側には鎌・鉄斧・鋤先各１点が納められていた。これらは，その下端が小転礫敷石に錆着していた程で，原位置を動いていないものと考えられる。

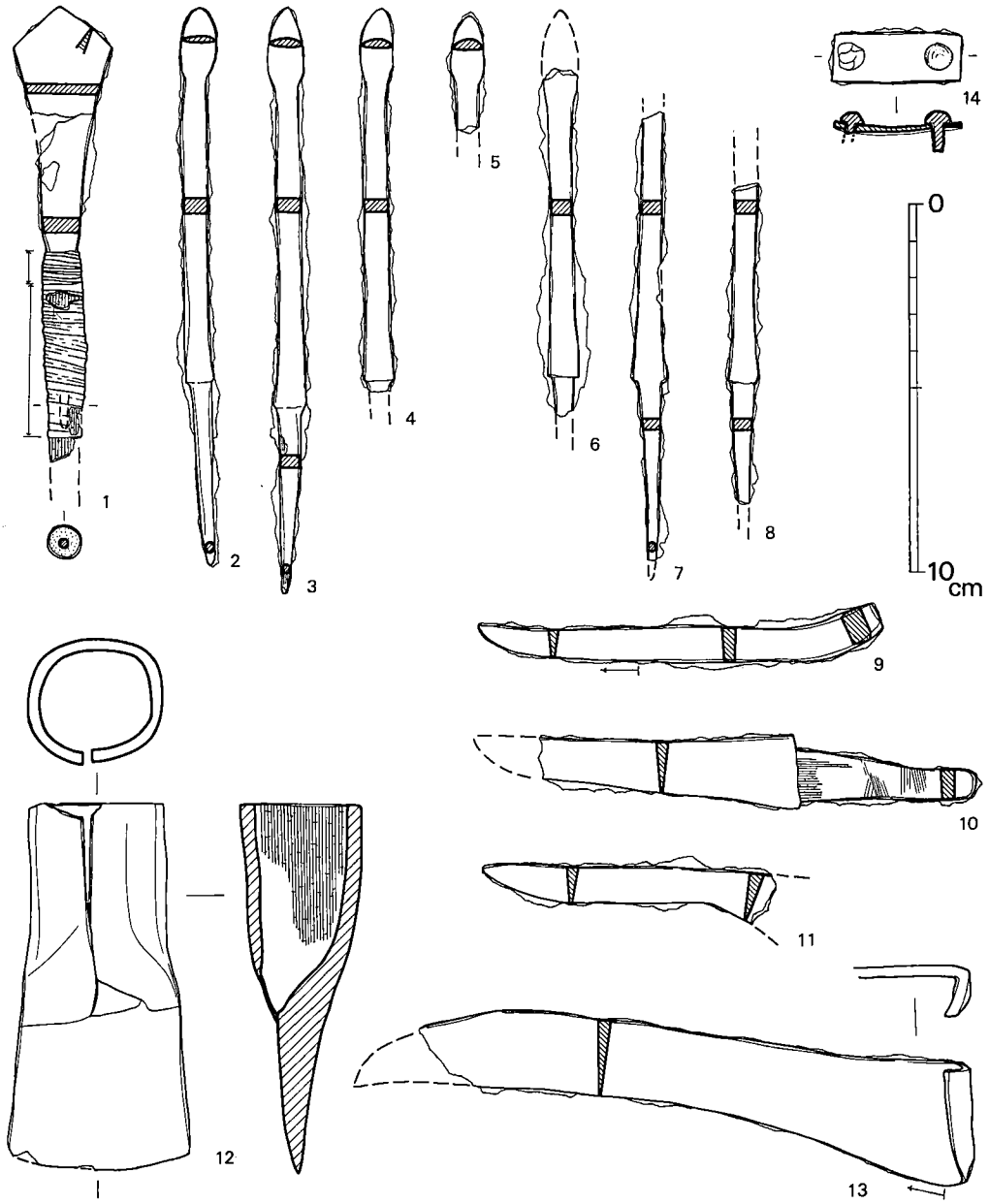
このような，東半の武器副葬に対する西端位置の防禦用武具と農工具の副葬は，意図的な様相がみられ，当該期墓制における副葬品の在り方として，貴重な資料となろう。



第 154 図　C－14実測図（1/30）



第 155 図　C－14遺物出土状態実測図（1/10）



第 156 図　C－14出土鉄器実測図①（1/2）

出土遺物（図版90・91，第156～158図）

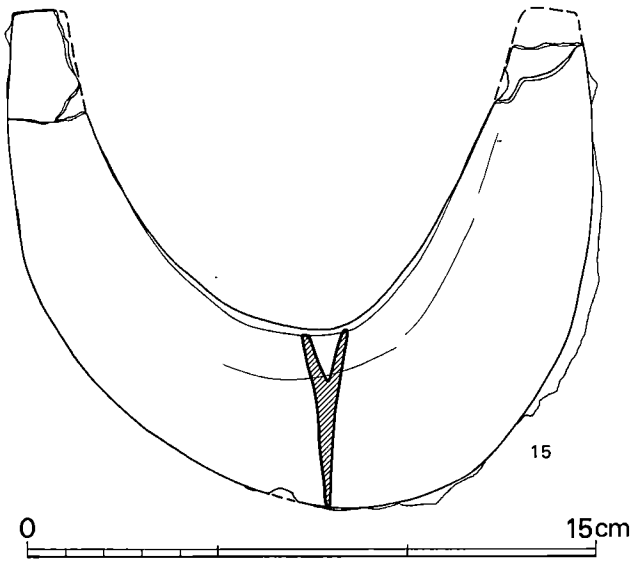
短甲　上半の殆んどを欠失し，裾廻り部のみ残る。銹が著しく，取上げに困難をきたし，現在処理・復原中であるので，出土時の状況から記す。裾廻り端直径41cm，現存高10cm程である。

裾から高さ10cmの所で直径30cm程となる。裾端は幅５mm程に鉄板を折り返した，或いは皮覆せかと考えられるわずかな肥厚部が全周に巡る。鉄板の接合状況等，現状では全く観察不能であるが，下位に上位の部分がずれ落ちた状況も無いことから，皮綴じのタイプではなく，鋲留式ではないかと考えられる。これ以上の事は現状では知り得ず，今後処理・修復の作業が進み次第，詳細な報告を公にする機会を作りたい。

鉄鏃（１～８）１は圭頭広根斧箭式で，沓巻が良く残る。全長11.4cm，鋒最大幅2.7cmとなる。茎部分は木箆の上に，4.1cmの部分に樺沓巻を行ない，更に箆被際0.9cm範囲内にやや太めの糸を８～９回巻き締めている。（図版91参照）２～６は両丸造箆被細根鑿箭式である。４・５は片丸造気味となる。２は全長15.2cm，茎部長5.0cm，３は全長15.9cm，茎部長5.0cmを測る。７・８も１～６と同類となろう。

鉄刀子（９～11）９は身部が短く，茎尻が曲がる類である。全長11.1cm，刃部は鋒先から4.4cmのみで，曲がった茎尻部へと厚くなっており，0.6cmの厚さとなる。茎部分には木質等残らない。10は，両角関で身部先へと細身となってゆくタイプである。茎部の中央には鉄地に密着した糸ではない細い繊維が巻きつけられていて，その上に柄の木質が被さっている。11は残存長8.0cmを測り，関部際で急に幅広くなる類である。使用研ぎ減りによるものであろうか。

鉄斧（12）短甲内に納められていたもので，僅かに有肩状となる形態をなす。全長10.0cm，刃部幅4.9cm，袋部内径3.1×2.7cmを測る鍛造品である。袋内面には柄の木質が残存する。重量190ｇとなる。



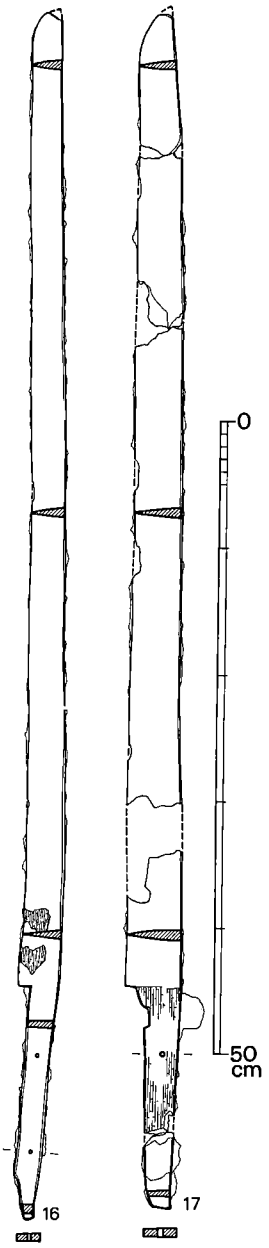
第 157 図　Ｃ－14出土鉄鋤先実測図②（1/2）

鉄鎌（13）短甲内に納められていたもので，刃先部分は出土時より欠損していた。現存長15.1cm，最大幅3.4cmを測る。基部折り曲げ部の状況からみると，柄と刃部の角度は110°程であったと推定できる。ただ，柄部の木質らしきものは残存しない。

留金具（14）長さ3.5cm，幅1.3cmの細長い長方形で２鋲が付くものである。本石室中から他に，馬具関係の鉄器は見当たらず，短甲に付随する金具とも考えられる。

鋤先（15）短甲内に納められていたU字形鋤先で，左右の幅15.5cm，長さ13cmの小振りの類である。左右でやや非対称に片寄っている。袋部の木質の残存は明瞭でない。刃の幅が広めであるのも特徴的である。

太刀（16・17）16は全長95.6cm，刃渡り77.0cm，身部最大幅3.4cm，棟厚さ0.75cmを測る。全体に内反り形態で，茎部分も関付近から内側へ強く寄る。片角関で，茎尻は3.7cmのところから一段細く厚くなる。目釘穴が2ヶ所みられるが鉄釘はみられない。17も長大なもので，全長94.8cm，刃渡り77.4cm，最大身幅4.4cm，棟厚さ0.75cmとなる。16よりも身幅の広いものである。刃部は全体に僅かに内反りを呈し，茎部も内側へ寄っている。片角関で，茎部刃部側の関際から1.5cmの位置に幅1.7cm，深さ0.4cmの角張った抉り部が認められる。茎部の目釘穴は1孔みられるが，銹出部分にもう1孔存在する可能性もある。目釘穴に鉄釘はみられない。茎部表面には柄木質が残存する。



第 158 図　C－14出土鉄刀実測図③（1/6）

以上のC－14の様相をまとめてみよう。石室形態は，幅の広い石棺系竪穴式石室としたが，竪穴系横口式石室の可能性も検討せねばなるまい。肝心の前面部分（西端側）が残存しないので，明らかでないが，石室床面プランからみると，9号墳のそれと酷似している。ただ，9号墳では板石の仕切石が置かれ，両袖石の痕跡も明瞭であり，このC－14の状況とは明らかに異なる。C－14の西端小口部分の掘り込みは，他の部位の抜き跡と変わらず，仕切石の抜き跡とは考え難い。また，その抜き跡脇に根石が残ることも，仕切石の可能性を弱くする。以上のことから，C－14は完全に四壁が築かれたC－40や，C－9等と同様の構造であったと考えられる。これについては，C－9とC－14の，床面内法が全く同規模であることも傍証となろう。

ただ，C－14が敷石・朱の存在，裏込め等の構築上に於ける丁寧さなどに加えて，短甲・太刀2振りを始めとする副葬品の豪華さなどから，同時期に於ける他石室より傑出した厚葬であったことが判かる。その被葬者は，共同体の中に於いて武術に優れた，村の英雄であったのであろう。

（中間）

15．C－15

本墳は緩斜面で，21号墳の西７ｍに位置する。盛土は認められず，また，周溝も検出されない。ゆえに墳の形状は不明である。

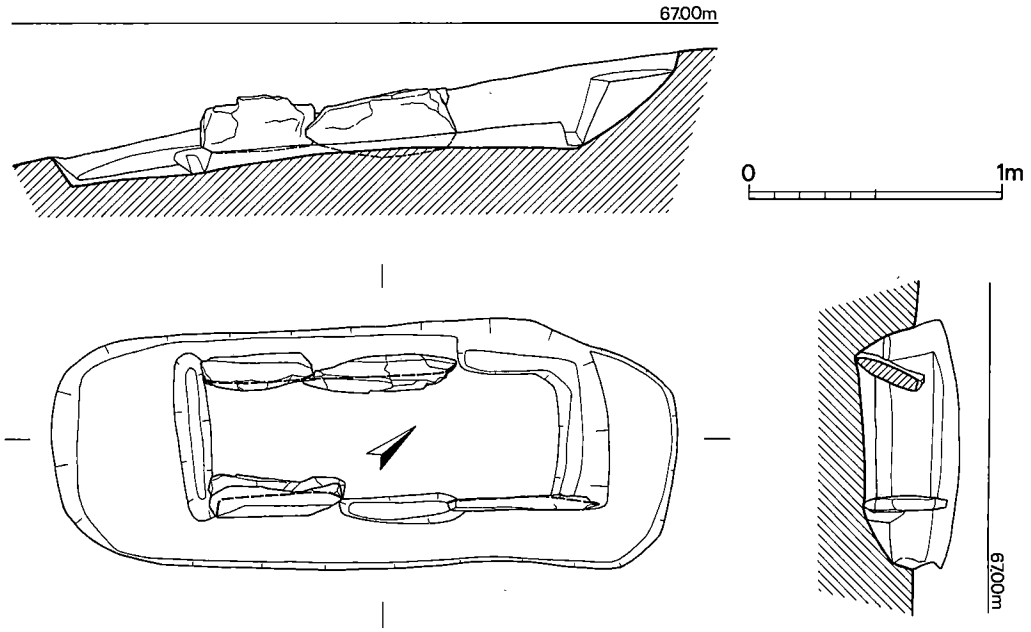
主体部（図版92，第159図）

石室の残存状態が著しく悪く，左右の側壁に於いて，基底部石が各２枚横長に立ち残っている。けれども，それらを欠損している部位には，基底石を据える掘方が検出され，石室の形状を知り得る。主軸はN40°Eであろう。掘方は，2.48×0.95mの長円形を呈し，深さ10～40cm程で穿ち，素掘りである。

石室の内法は，長さ138cm，幅北側48cm，南側46cmを測る。

石室床面は若干傾斜し，５～10cmで粘土を敷く。赤色顔料塗布は見られない。使用されている石材は片岩である。

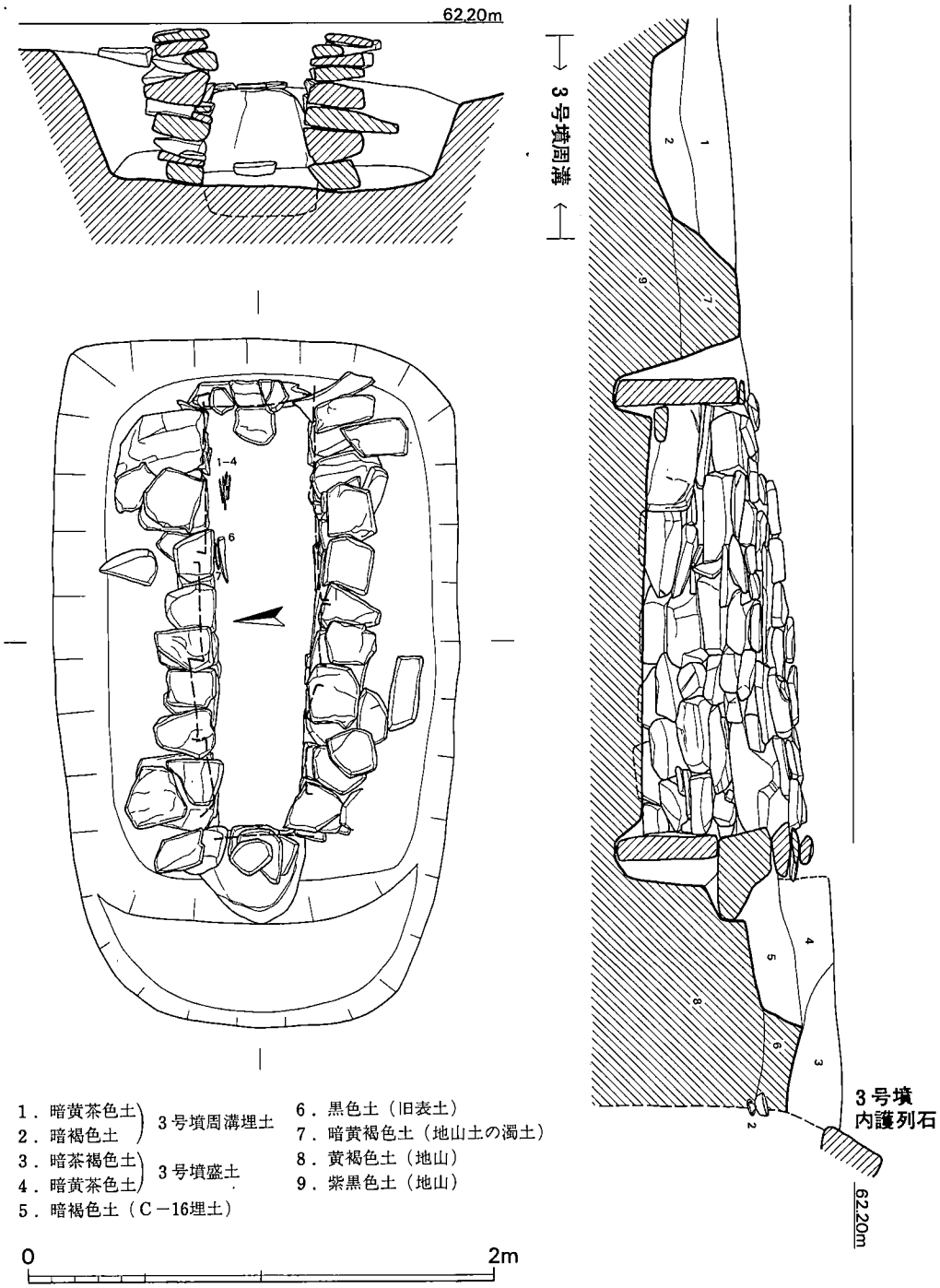
副葬品，遺骨，またその他の遺物は無い。（平嶋）



第 159 図　C－15実測図（1/30）

16．C－16

３号墳墳丘内の周溝内側に検出された。標高62mの平坦面に築造されている。周溝は確認さ



第 160 図　C－16実測図（1/30）

れていない。3号墳よりも古い。

主体部（図版92・93，第160図）

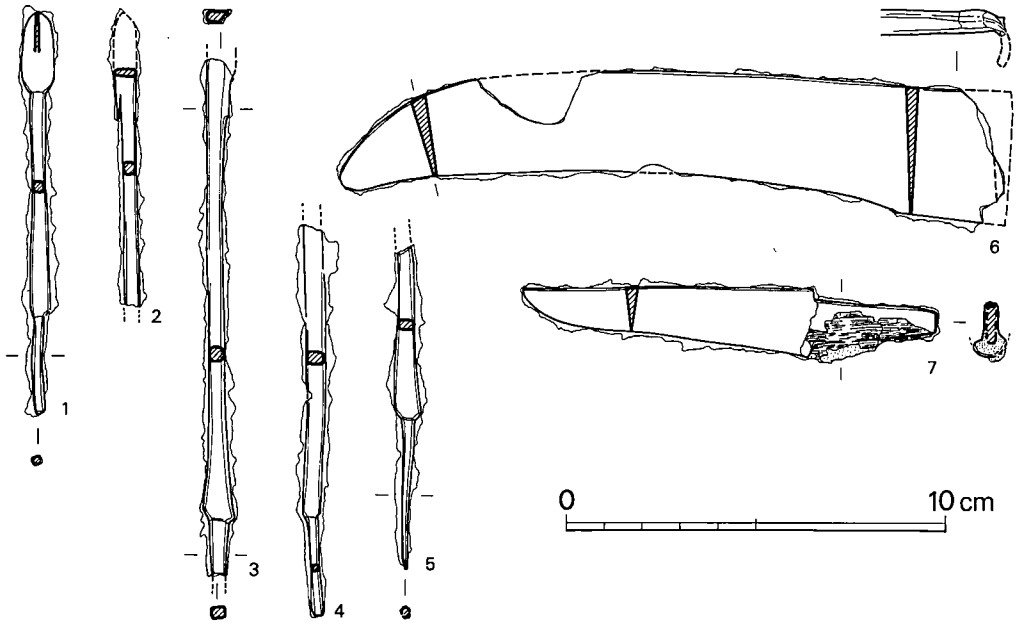
主軸をN84°34′Eにとり，頭位をほぼ東に置く竪穴式石室である。

掘方は，東西2.95m，南北に1.75mの隅丸長方形プランを呈し，西端は二段掘り状となる。3号墳内護列石と近い為，土層観察を行ったが，3号墳盛土がC－16掘方の上面にかぶさっており，明らかに3号墳の方が新しいことが判った。

石室床面内法は，長さ1.84m，幅は頭位の東端で0.46m，西端で0.39mとなる。東西両小口部分には厚手板石を立て，南北両側壁は最下位から板石の平積み乃至小口積みを施す。蓋石は残らない。現存積石最上端から，石室床面までの深さは0.67mとなる。石材は全て緑色片岩を使用する。側壁の内側へのせり出しは，部分的に幾らかみられるが，殆んど垂直気味に積まれている。

石室内床面東小口部分に，小さめの板石の枕石が1枚置かれている。朱等の使用は認められない。

石室内床面北東壁際，つまり，遺体からみると右肩付近から右腹脇部分にあたる位置で，副葬鉄器類が出土した。鉄鏃4本は全て鋒先を頭位へ向けており，鎌は足先方向，刀子は頭方向に先端を向けている。鎌のこの出土状況をみると，柄を付けずに刀子と並置した可能性が考えられる。



第 161 図　C－16出土鉄器実測図（1/2）

出土遺物（図版93，第161・162図）

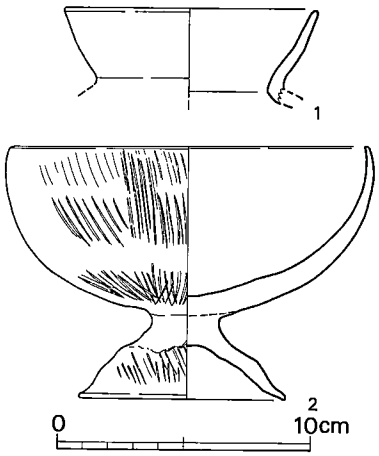
鉄鏃（1～5）2と5は接合すべきもので，実質4本である。1のような箆被細根鑿箭式のもの，2のように片側のみに腸抉をつくる片刃箭式のものがある。3も片刃タイプとなろう。1は全長10.8cmの短いものである。

鉄鎌（6）全長は17.6cm，基部最大幅は3.6cm，背の厚さ0.4cmの小振り類となる。刃部側の基部寄りは，一応刃状をなすが，柄着装部で研ぎ残し部かと考えられる。基部付近の柄木質等は残存しない。

鉄刀子（7）全長11.0cm，身長7.7cm，最大身幅は関際で1.8cmを測る。茎部には木質の上に鹿角柄が残存する。

土師器壺（1）小甕あるいは，小型丸底壺的な器形であろうか。3号墳Dトレンチ（C－16との関係をつかむ為に設け，図示した土層図のトレンチ）の3号墳盛土部分から出土したもので，C－16築造の際に関連した遺物であろう。口径10.0cmの薄手口縁片で，中途で中ぶくらみの特徴を示す。

土師器台付椀（2）C－16の西側旧表土中出土品（図示）で，土層の関係から，明らかにC－16よりも古いものである。口径14.1cm，器高9.9cmを測る。丸く内湾する大ぶりの椀に，低く小さい脚台を付ける，稀種である。椀部外面の上下と，脚台外面に，極めて粗雑なハケ状工具による調整が施される。一見ヘラで刻みつけたようで，文様としての意図も感じさせる。橙褐色の完形品である。



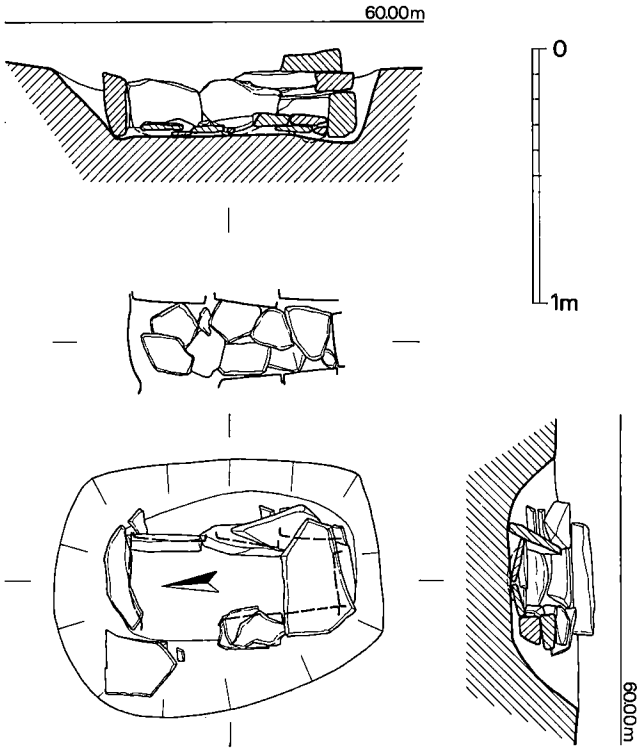
第162図　C－16付近出土土師器実測図（1/3）

以上のC－16は，小口部のみ立石で，両側壁小口積みの竪穴式石室であり，他の石棺系竪穴式石室と趣を異にする。副葬品の鉄器類は，鎌も小振りであり，全体に格段新しい様相は認められない。土師器1はC－16の築造に関係する遺物と考えられ，布留式の特徴を良く示している。また，土師器2は，その調整技法に弥生後期終末乃至庄内式的イメージを感じさせる類である。以上のことから，C－16は，布留式期の後半段階の築造と考えられ，4C後半～末の年代が与えられよう。

（中間）

17．C－17

本墳は，2号墳前面の墳丘裾に位置する。極めて小形のものであり，周溝を有していない。



第 163 図　C－17実測図（1/30）

また，盛土の形跡も認められず，墳丘の形状は不明である。

主体部（図版94，第163図）

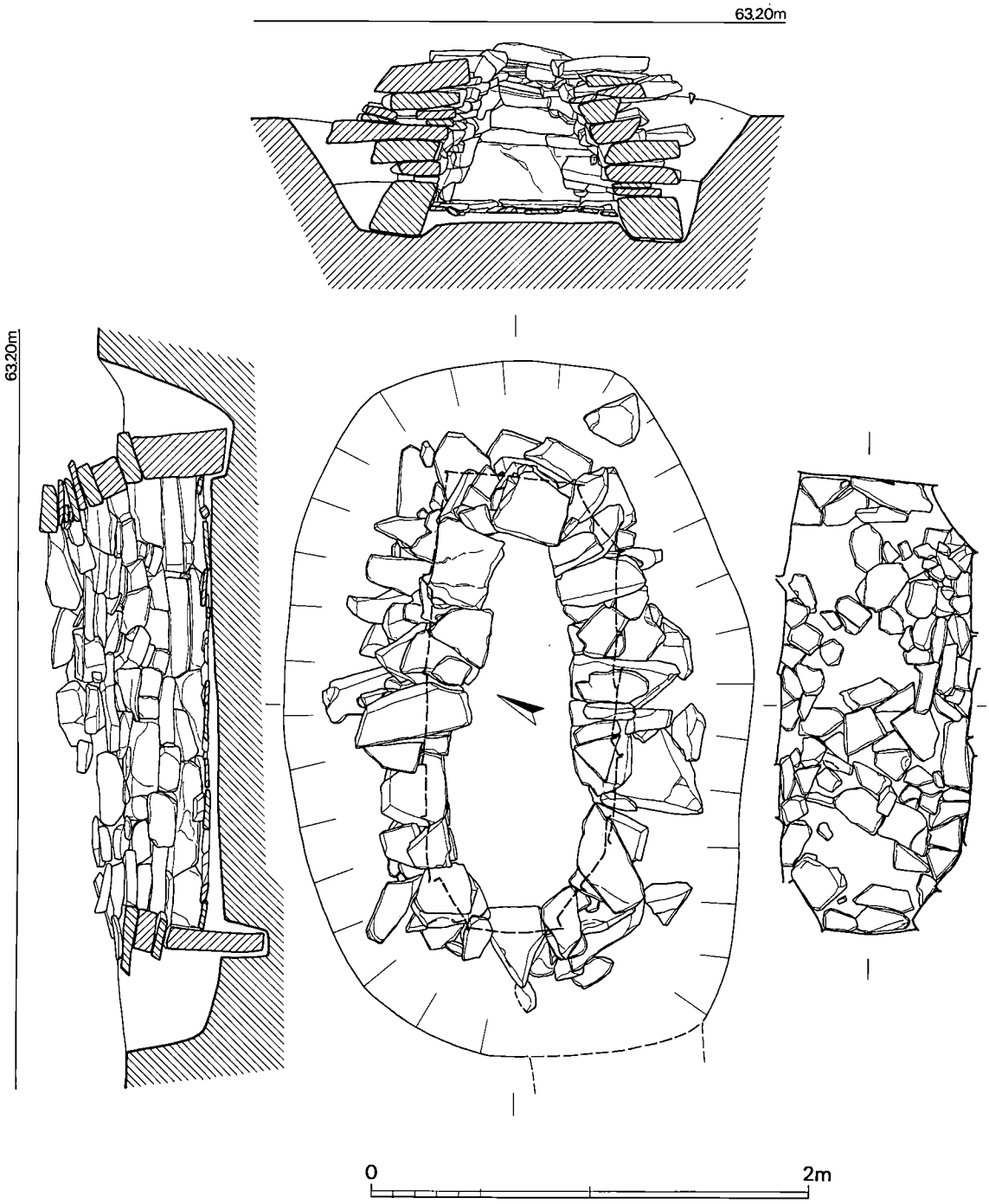
本石室は主軸をN 5°Wにおく。掘方は130×99cmの歪んだ方形を呈し，深さ15～25cmで穿つ。石室は等高線平行に築く。石室の残存状態は，西側壁を一部基底部石から欠損し，蓋石が1枚残り他は欠損する。

石室の構造は，欠損している部位以外，全壁基底部石が横長に立ち，その上段部に部分的に平積みする。これは壁の上面を合わす為に行われたものであろう。また，南小口部の平積みはやや石室内側に張り出し，持ち送りがなされる。石室内に赤色顔料の痕跡は無い。床面には，やや大きめの板石で石敷きを行う。厚さが様々で，部分的に重なり，床面凸凹している。内法は長さ81cm，幅南側24cm，北側約30cmで平面プランは若干北が広い。頭位も北であろう。また深さは南側で15cmを測り，他壁の高さもほぼ15cmあり，この直上に蓋石が被る。石材は全て片岩である。副葬品，その他遺物は無い。

以上のように，本墳は非常に小形のものであって，小児用の竪穴式石室ではないだろうか。本石室と同型のものとしてはC－20が検出され，C－20も小児用であると思われる。（平嶋）

18．C－18

2号墳の周溝に近い北東側，C－24・C－26の南に位置する。丁度2号墳のBトレンチ端にかかり，その土層の観察からは2号墳より古いか同時期であると判断できた。標高63m辺りの平坦面に位置する。周溝は確認されていない。



第 164 図　C－18実測図（1/30）

主体部（図版94，第164図）

主軸をN62°30′Eにとり，東北東に頭位を置く石棺系竪穴式石室の舟形タイプである。

石室内床面内法は，長さ2.08m，幅は東北東小口部で0.6m，中央部で0.86m，西南西小口部で0.43mを測る。中央が膨らみ，両小口側で狭まるという不整の舟形プランを呈し，他の石棺系竪穴式石室とは全く様相を異にする。両小口には厚手の板石を立てるが，頭位とされる東北東小口のものは部厚く，「板石」という感じがせず，まさに腰石的様相が強い。そして，それは他の石棺系竪穴式石室にみられるような壁体高全体に占める高さの圧倒性が，ここではみられず，½以下の高さにすぎない。

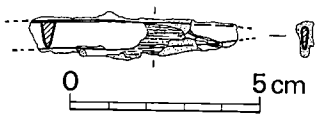
両側壁最下段も20cm程の部厚い石材を横長に立てる。孰れも深く埋め込んでいる為，一見平積み状に見えるが，そうではなく実は，その基底石は腰石的性格を感じさせる類なのである。これは，２段目以上に板石を使用するのと対称的であり，石材選択の違いが歴然としている。

石室内面は四方から壁がせり出してきており，その横断面形態はまさに合掌屋根型石室のそれを彷彿とさせる。床面には小板石の敷石がみられる。現存積石最上端から敷石直上までは0.7mとかなり深い。

床面の頭位と思われる東北東小口際の敷石直上から，鉄刀子片１点が出土した。

出土遺物（図版94，第165図）

鉄刀子　残存長5.5cm，最大幅0.8cm，厚さ0.35cmを測る。身部と茎部の区別が明瞭でない。茎側に木質が残存する。



第 165 図　C－18出土刀子実測図（1/2）

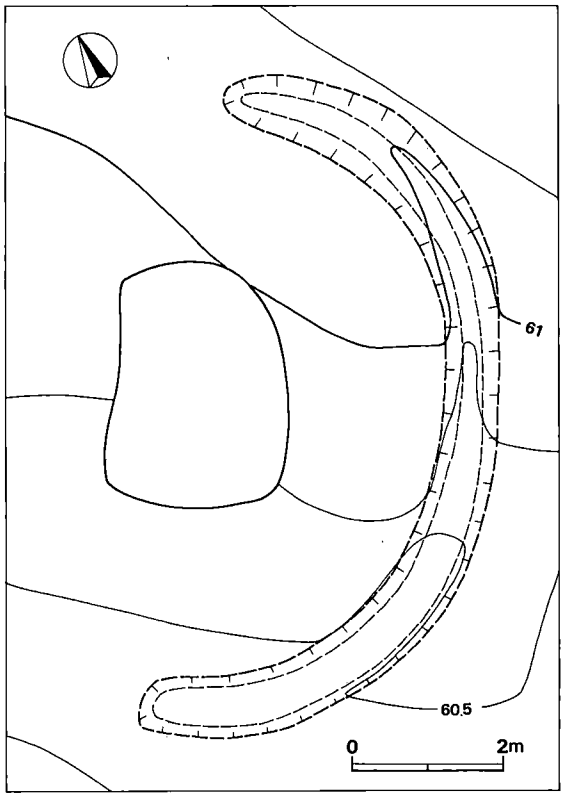
このC－18は形態的に，他の石棺系竪穴式石室とは区別して，舟形プランタイプとでも称すべき異類である。これは後記するC－46などと共通するもので，石室の構造の各特徴からみて，石棺系竪穴式石室から変化したもので，より新しい形態であると考える。ただC－９，C－14のような幅広タイプのものとは異なり，既述した腰石的様相や壁の持ち送りの状況などから，横穴式石室と強く関連すると考えられる。以上のことから，C－18は本遺跡中に於ける横穴式石室成立後の所産ではないかと考える。（中間）

19．C－19

２号墳と３号墳に挟まれた緩斜面に位置する。主体部は著しく破壊されている。東側に，半円形に周溝が残る。深さ0.25mと浅く，最大幅0.8m程の周溝である（第166図）。

主体部（図版94，第167図）

周溝中央部に3.23×2.33mの略長方形の墓坑がみられ，その部位に主体部が存在したと考える。墓坑底までの深さ20cm程で，極めて浅く残りが悪い。当初現表土直下から陶質土器壺が出土して，それを実測して取上げた。最終的にはこの土器は，墓坑中心の直上から出土したことになる。取上げ当時は，この下に埋葬主体があるとは全く予想しなかった為，それ以下に掘り下げることはしなかった。そして，そのすぐ脇にあった檜の大株をチェンブロックを使って除去した。更に，2・3号墳調査終了後，重機を用いて表土・檜根等を削除して，C－19の墓坑を検出し得た次第であった。以上の状況から，下半僅かのみ残っていた石室・石材を度重ねて除去してしまった可能性が強い。



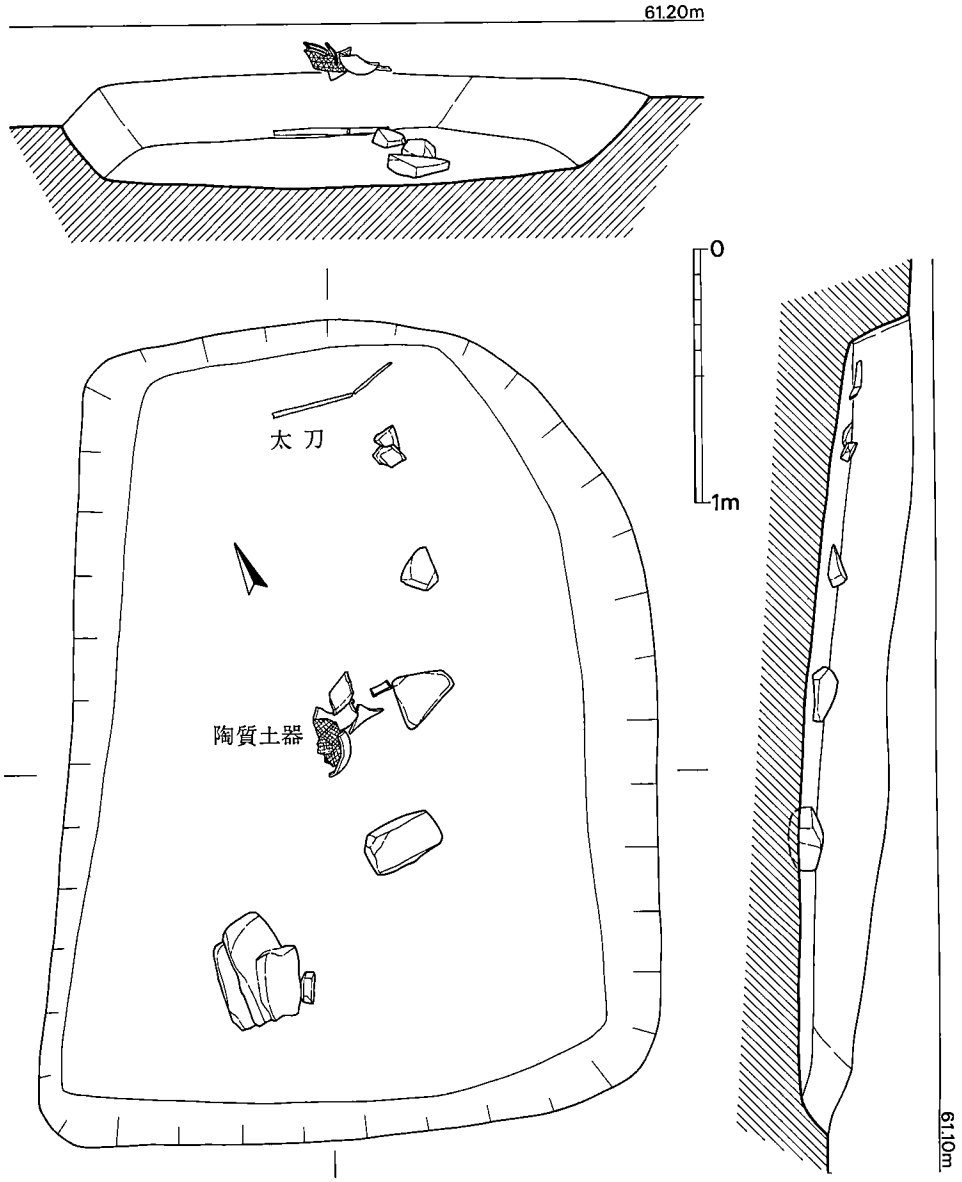
第 166 図　C－19地山整形面実測図（1/100）

墓坑底には何らの掘り込みも残らず，残存していた板石も立てたものは見当たらない。図示した石は，底面についているもののみを残したもので，他に攪乱状に浮いた，かなりの量の板石は除去した。以上のことより，当埋葬主体は，最下位から小口積みとした竪穴式石室であった可能性も考えられるが，明確ではない。木棺墓等ではないことは，攪乱石材の量からみて明らかである。墓坑底の広さから，C－9のような幅広タイプで，腰部立石が掘込まれない部類となるとも考えられる。

出土遺物は，墓坑内北端近くに折れた太刀1振りがあるが，原位置を示すとは考えられない。墓坑中心の底面から40cmの高さで，先述の陶質土器壺が出土した。これは，当主体への供献品として蓋石上に置かれたもので，蓋石とともに落ち込んだものと考えられる。この状況はC－9にもみられる所である。また，周溝からは壺口縁片が出土している。

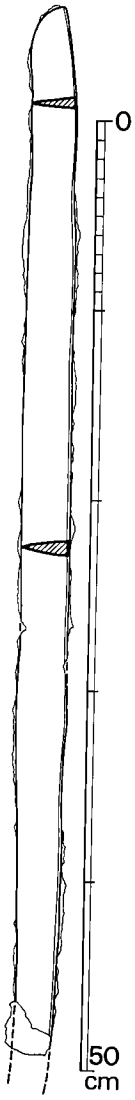
出土遺物（図版95，第168・169図）

太刀　現存全長55.1cm，最大身幅2.6cm，棟厚さ0.75cmを測る。全体に内反りとなるタイプで，C－14出土品に匹敵する類である。

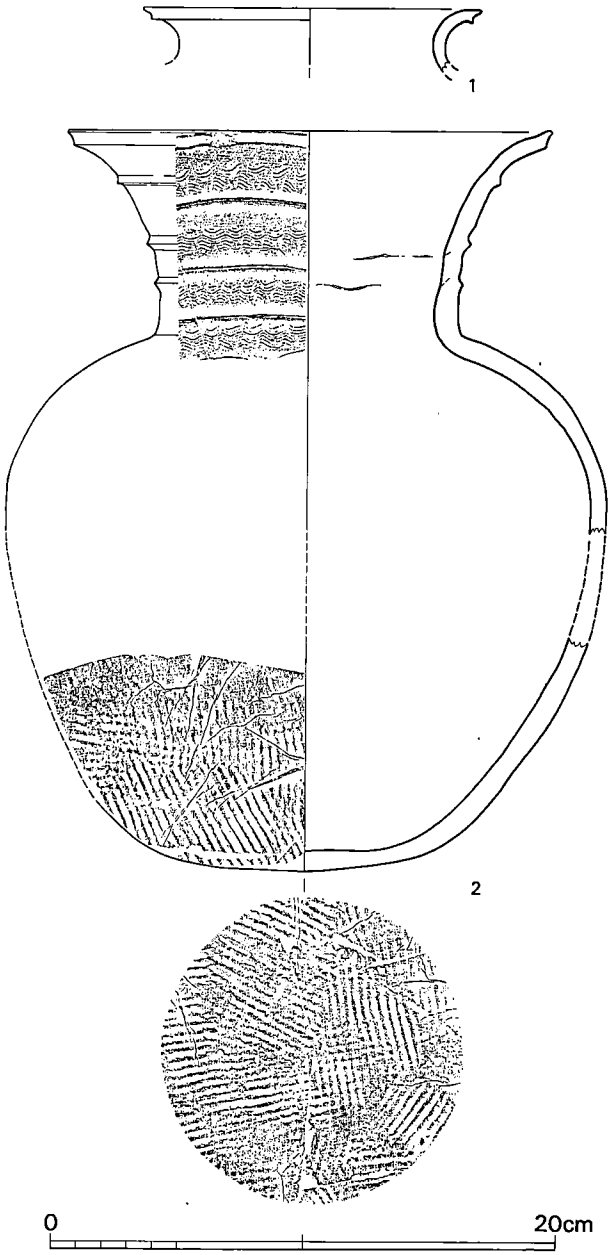


第 167 図　C－19実測図（1/30）

陶質土器（1・2）1は周溝内出土壺口縁片で，復原口径13.4cmを測る。丸く屈曲して外反する口縁片で，端部上端は鋭く突出する。下端との間は凹状となる。内外面とも回転ナデを施し，胎土に細砂少量含み，焼成堅緻で外面は灰黒色，内面の上半は灰かぶりして灰色，下半は黒色を呈する。2は，胴中位で接合しないが，他は殆どが残る供献品である。口径19.2cm，頸部径12.0cm，胴部最大径23.7cmで，器高は29.1cm前後と推定される。口縁端は外面が凹状をなし，



第 168 図　C－19出土鉄刀
実測図（1/4）



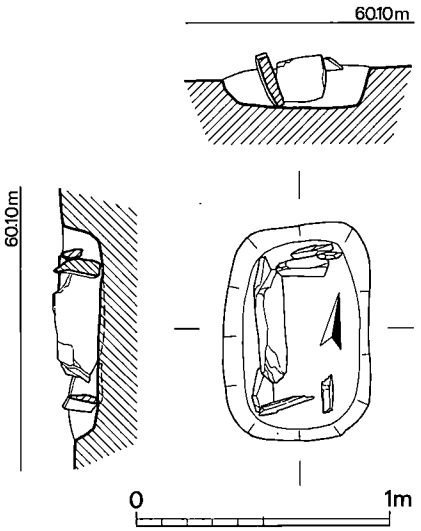
第 169 図　C－19出土土器実測図（1/3）

上端が張り出す。頸部に3条のシャープな凸帯をつまみ出し，その間と上下の4ヶ所に櫛描き波状文の文様帯をつくる。施文工具は8本歯で，振幅が小さい。胴部下半から底部には条線状平行叩目が施され，部分的に条蓆状となる。その上位では部分的にナデ消している。他外面と

内面胴肩位までは回転ナデ，内面胴中位から底面までは手持ちの横ナデ，或いは丁寧なナデが施される。胎土に粗石英粒を僅かに含み，焼成堅緻で頸部外面は灰黒色，他の内外面はやや紫褐色気味を呈する。底部は不安定な平底風となる。

以上のC－19は，主体部の構造が明らかでないことが最大の難点である。残された土器の検討をしたい。陶質土器壺は，池の上Ⅲ式の諸特徴を良く示している。ただ頸部が長く延びて文様帯が増加している類例が現在まで寡聞であること，胴下位外面一部でのナデ消しの状況などから，これらが新しい要素を示すものかとも考えている。以上のことから，当C－19は5C前半代のうちでも，或いは中頃にいくらか近い時期との感触を持っている。（中間）

2号墳の西側，C－22の南側の緩斜面に位置する。標高60mの辺りに営まれる小規模墓である。周溝等は確認されていない。



第 170 図　C－20実測図（1/30）

主体部（図版95，第170図）

主軸をN10°Wにとり，頭位を北に置くと思われる小児用石棺系竪穴式石室である。現存状況は，板状片岩の立石しか残らないが，周辺の石棺系竪穴式石室と同時代の小児用のものと考えて，ここでは敢えて組合わせ箱式石棺墓とは呼称しない。

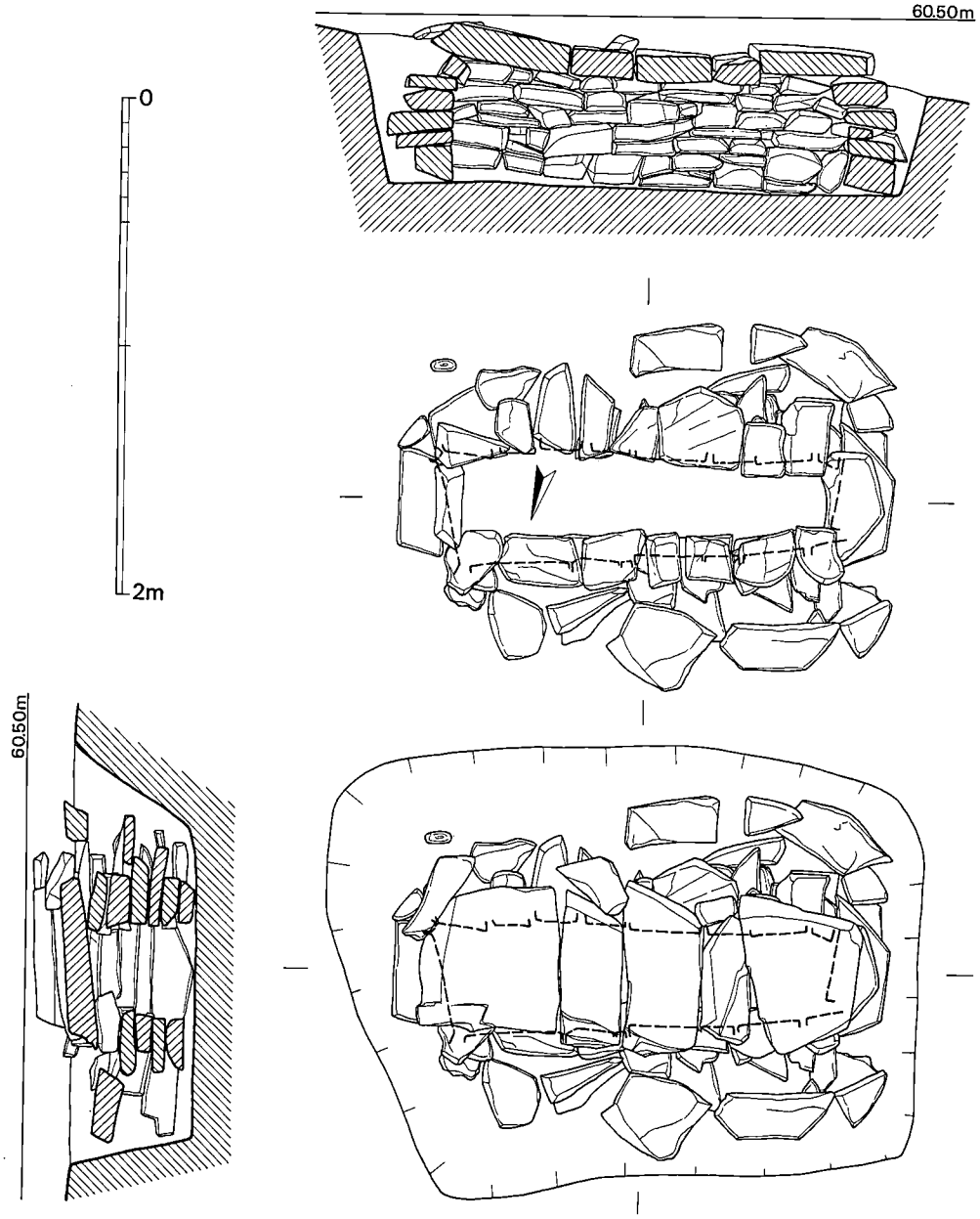
石室床面内法は，長さ0.48m，幅は0.15m内外である。壁のうち東北側は残存しない。現存最高部から床面までは0.18m程と浅い。

床面には敷石・枕石等みられない。壁の立石上に板石の小口積みが行われたかどうかは明確でないが，積まれなかった可能性が高い。孰れにしろ，遺体を囲っただけの簡素なものであろう。

遺骨・副葬品等も皆無である。（中間）

21．C－21

本墳は，谷筋に面し3号墳の前面に位置し，標高60.5mに築く。盛土は認められず，また，



第 171 図　C－21実測図（1/30）

周溝も有していない。よって墳形は不明である。

主体部（図版96，第171図）

本石室は主軸をN75°Eにおく。掘方は，2.33×1.75mの歪方形を呈し，深さは40～60cm程

で穿つ。

石室は，蓋石が完存しており原形を留めている。蓋石は5枚で，広く大きめの板石を東西の端に用い，その間に割合に小形の細長い板石を置き，石室を覆う。蓋は東側の石が斜めになり，他は水平をなす。石室内は四壁とも基底部より平積みする。小口部は，基底部に柱状の塊石を据え，上段に板石を積む。両側壁では，板石や塊石を混ぜ合わせて乱積み的に行い，両小口寄りでは間隙が目立つ。しかし，中央部では規格的であり，間隙が見られない。赤色顔料の痕跡は孰れの部位にも認められない。石材は全て片岩である。

石室の内法は，長さ159cm，幅東側42cm，西側31cm，高さ45cmを測る。頭位は遺骨が残っていず，明確にはできないが，地形的，石室内の傾斜により東側であろう。

副葬品・その他遺物は出土していない。　(平嶋)

22．C－22

本墳は3号墳の南側周溝脇で，C－19のすぐ西側に位置する。標高60.5mに築く。盛土は認められず，周溝も有していない。墳形は不明である。

主体部（図版96，第172図）

本石室は主軸をN71°45′Eにおく。掘方は，3.55×1.87mの長円形を呈す。2段掘りであり，下段に直接石室を埋め込むように構築する。深さは1段目で10～20cmで，下段で更に10～20cm穿つ。

石室は，南側壁が著しく壊されて，基底部石すら欠損する部位もある。また，北側壁でも一部石積みが欠損している。また，床面は発掘作業の際掘り過ぎて段を有する。石室内法は，長さ182cm，幅東側36cm，西側29cmを測る。石室高は現状で25cmを測る。

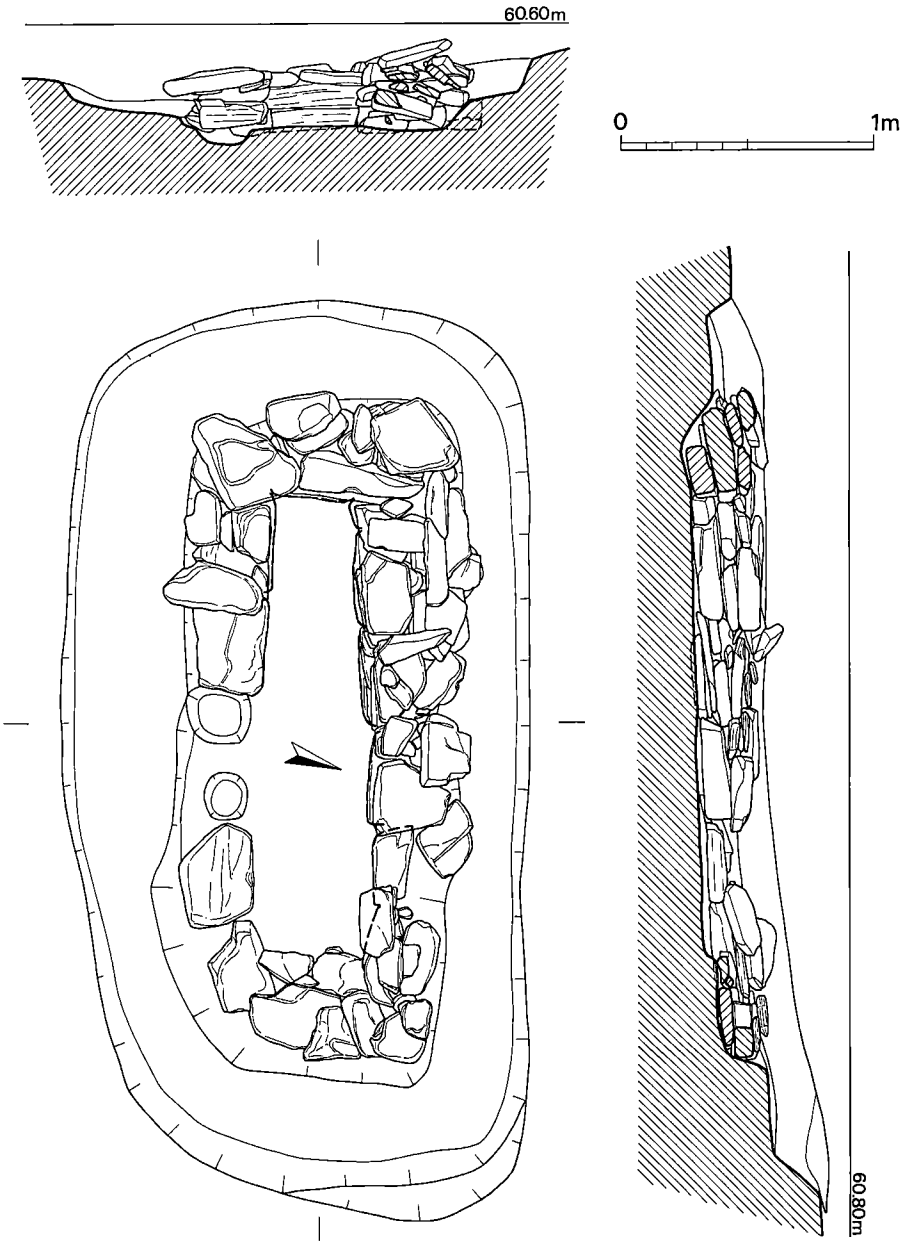
構築は，C－21と同様に，全壁基底部より平積みされている。石は大小あるが全て板石で構築される。石材は若干砂岩を含み大半は片岩である。赤色顔料の痕跡は認められない。

掘り過ぎてはいるが床面が東から西に傾き，地形的にも同様である点や，幅が割合東に広く，頭位は東であろう。

副葬品，その他の遺物は皆無である。　(平嶋)

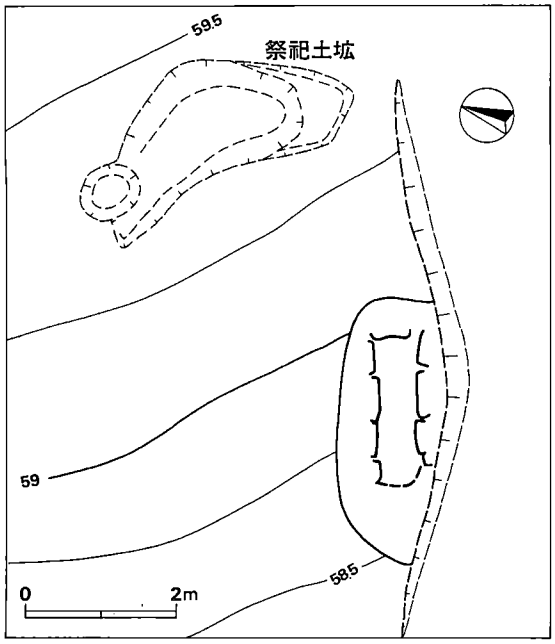
23．C－23

3号墳の南方，2号墳の西方の里道に面した発掘区際で，検出された。標高59.5m辺りの緩斜面に位置する。



第 172 図. C－22実測図（1/30）

石室中心から3.5mの北東位置に弧を描くように掘込みがみられたが，これは周溝ではなく，微高墳丘裾に掘り込まれた，祭祀土坑と考えた方が良かろう。この土坑は長さ3.45m，最大幅1.65mの三日月形的なプランを呈し，その中央部へと深くなっている。北西端部は炭化物を含む



第 173 図　C－23地山整形面実測図（1/100）

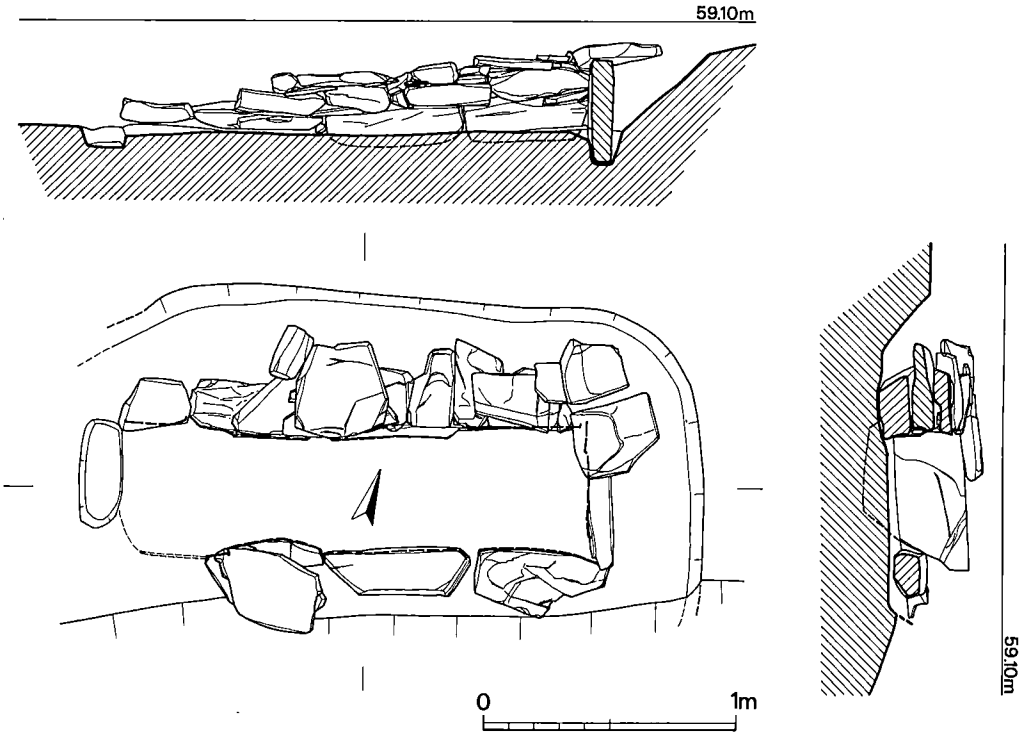
新しい穴に切られている。最深部は45cm程で，その底面に陶質土器壺１点，土師器椀４点・小壺１点，鉄鋤先１点が供献されていた。貴重な一括資料である。

主体部（図版97，第174図）

主軸をN71°30′Eにとりほぼ東に頭位を置く竪穴式石室である。

掘方南縁と西端は，現里道と斜面下位側とで削除されている。石室も上半と西・南側を大きく破壊されている。

石室床面の内法は，長さ1.85m，幅は東小口際で0.5m，西小口際で約0.45mとなる。東小口部には大きめの板石を立てており，西小口には抜き跡しか残らない



第 174 図　C－23主体部実測図（1/30）

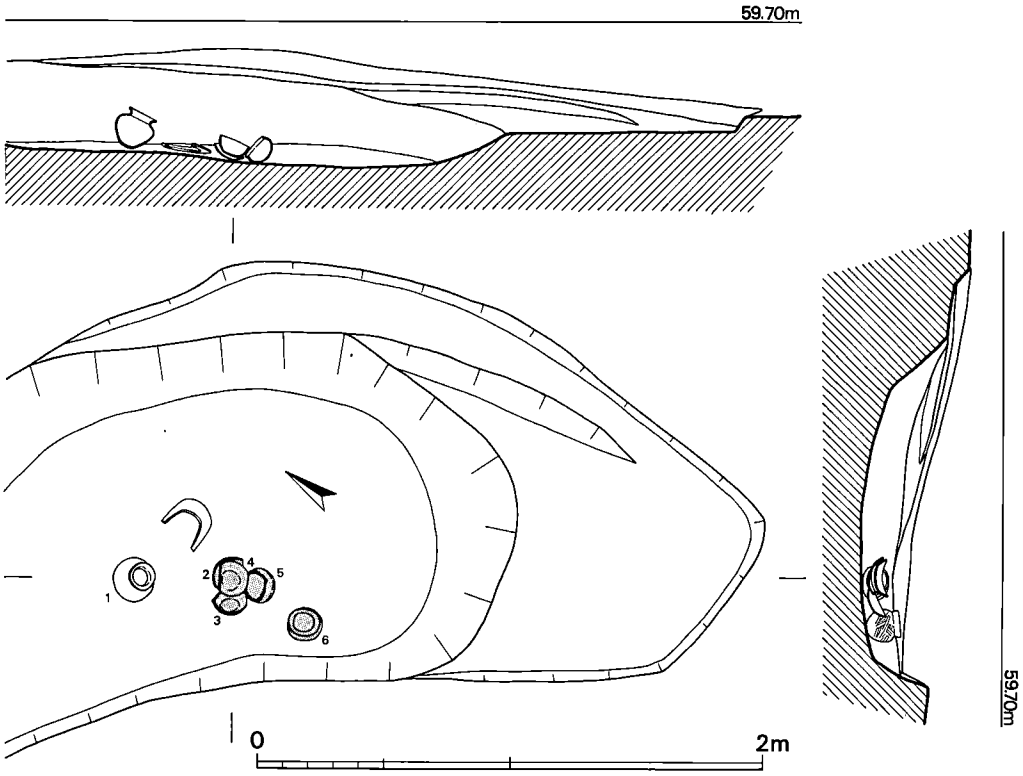
が，これも板石を立てたものであろう。南北両側壁は最下位から板石の平積みが行われる。石材は全て緑色片岩である。現存積石最上端から石室床面までの深さは0.37mである。

石室内には副葬品・遺骨等皆無である。敷石・枕石等も施されない。出土遺物は既述した北東側祭祀土坑内の一括出土品のみである。

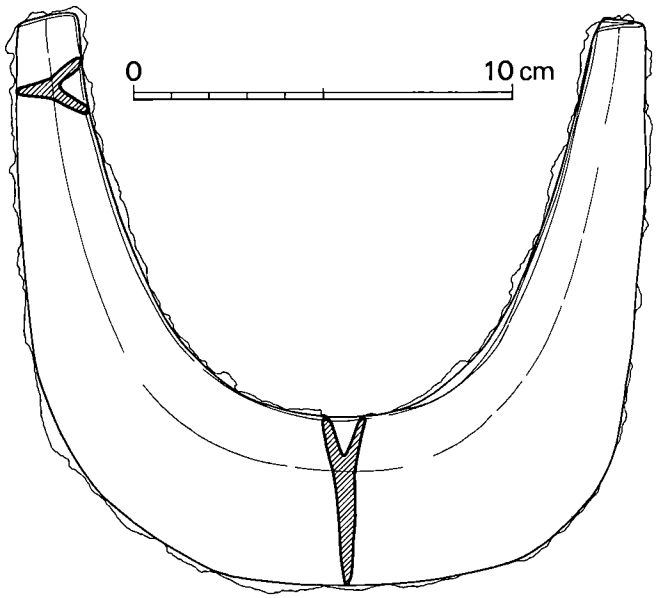
出土遺物（図版98，第176・177図）

鉄鋤先（第176図）他土器とともに，北東側三日月状土坑内出土品で，最大幅16.7cm，長さ15.0cm，刃部中心の幅4.4cmを測る。U字形鋤先としては，Y字袋部も全体に良く残り，やや小振りで整った形態をなしている。木質は残らない。

陶質土器短頸壺（1）口径11.7cm，器高13.4cm，胴部最大径16.3cmとなる完形品である。口唇外面凹状となり，胴中位付近にヘラ削り痕が残るが，その位置まで上半は回転ナデとなる。胴外面下半から底部へは，平行条線状叩目を施す。胴外面中位付近に於ける調整順は，ヘラ削り→叩目→回転ナデの順である。内面は下半まで回転ナデで，下位から底内面は斜方向のナデツケがみられる。底内面は押えナデ後の未調整のままの凹凸がある。あて具痕ではない。胴肩部



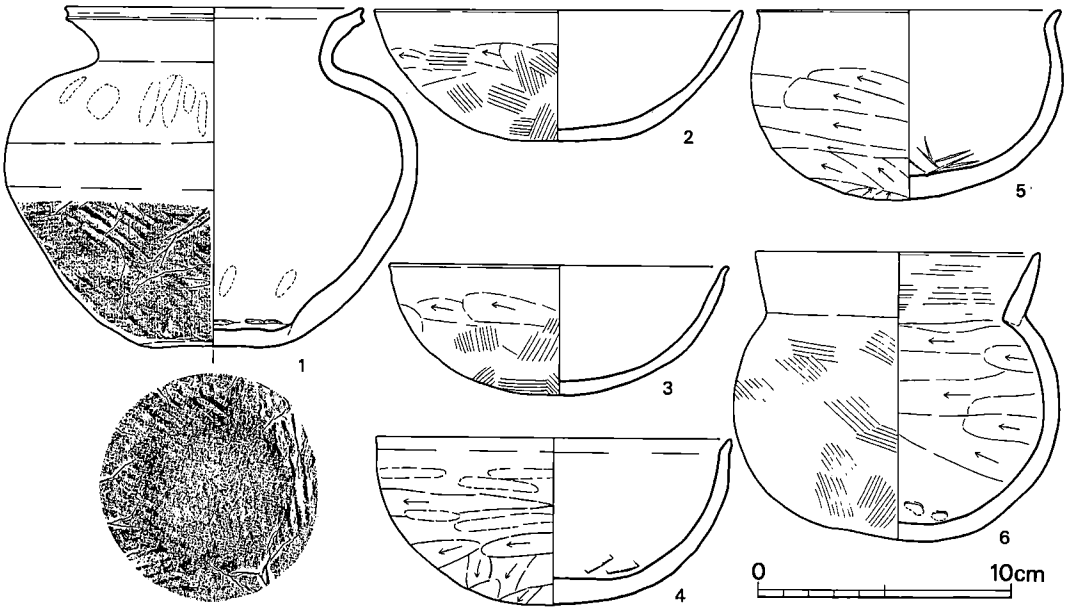
第 175 図　C－23祭祀土坑遺物出土状態実測図（1/30）



第 176 図　C－23祭祀土坑出土鉄鋤先実測図（1/2）

外面には指オサエの凹部分が全周にかなりみられる。胎土に細石英・長石等幾らか含み，焼成やや堅緻で，暗紫褐色を呈する。底部はごく僅かに上げ底気味となる安定する小さめの平底状を呈する。

土師器椀（2～5）2は口径14.5cm，器高5.15cmを測る。口縁が直線的に開く皿状の形態をなす。外面は手持ちの雑なヘラ削りの上に粗い雑なハケを施す。口縁内外面横ナデ，内面は平滑で丁寧なナデを施す。内外面の一部に赤茶色スリップが残る。3は口径13.4cm，器高5.1cmを測り，口縁外面が極く僅かにへこむ。体部外面は手持ちヘラ削りの上に雑なハケを施す。全体に薄手で，内面は磨滅する。4は口径14.1cm，器高6.5cmの深いタイプである。口縁は短く外方へ折れる。体部外面は横位～斜位の手持ちヘラ削



第 177 図　C－23祭祀土坑出土土器実測図（1/3）

り上に，雑な横位ヘラ磨きを施す。内底面にはハケ工具端圧痕が残り，その上をナデ消している。外面全体に赤茶色スリップをかけている。5は口径12.0cm，器高7.5cmを測り，口縁が短く外反し，全体に丸く深い器形となる。外面にはわりと丁寧な手持ちヘラ削りが施され，内底面の中心には略放射状の板状工具端圧痕がみられる。体部上半内外面は横ナデを施す。外面の一部に赤茶色スリップが残る。

土師器小壺（6）口径11.3cm，器高11.2cm，胴部最大径12.9cmを測る。口頸部中位は極僅かに外方へ中膨みし，底部は斜めではあるがやや安定する平底状をなす。口縁内面は横ハケの上を横位ナデ消し，外面は横ナデ，胴部外面は粗い雑な斜めハケを施す。胴内面は横位ヘラ削りがみられ，内底付近は指オサエ痕を残すナデ調整が行われる。口縁から胴肩部付近に部分的に赤茶色スリップが残る。胎土精良の完形品である。

以上のC－23は，両側壁を最下段から平積みにする竪穴式石室を主体部とし，北東側に祭祀土坑を伴う異例である。祭祀土坑の遺物は，古墳時代前期的な農具副葬と，銘々器及び陶質・土師器の小型壺のセットとなっている。椀類は重ねられ，祭祀使用済みの器の供献状況を示している。

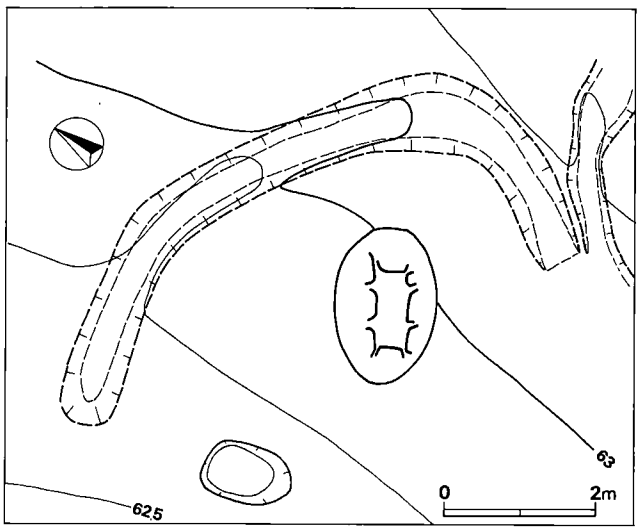
陶質土器（1）は，池の上II式の特徴を良く示している。土師器椀類は，布留式の特徴を良く残しており，5C初頭前後と考えられるが，土師器小壺は口縁の状況にやや新しい傾向をみせ，5C前葉的な感じを与える。

以上の各土器の編年観から，このC－23は池の上II式にほぼ該当する，5C初頭を中心とする時期と考えておく。（中間）

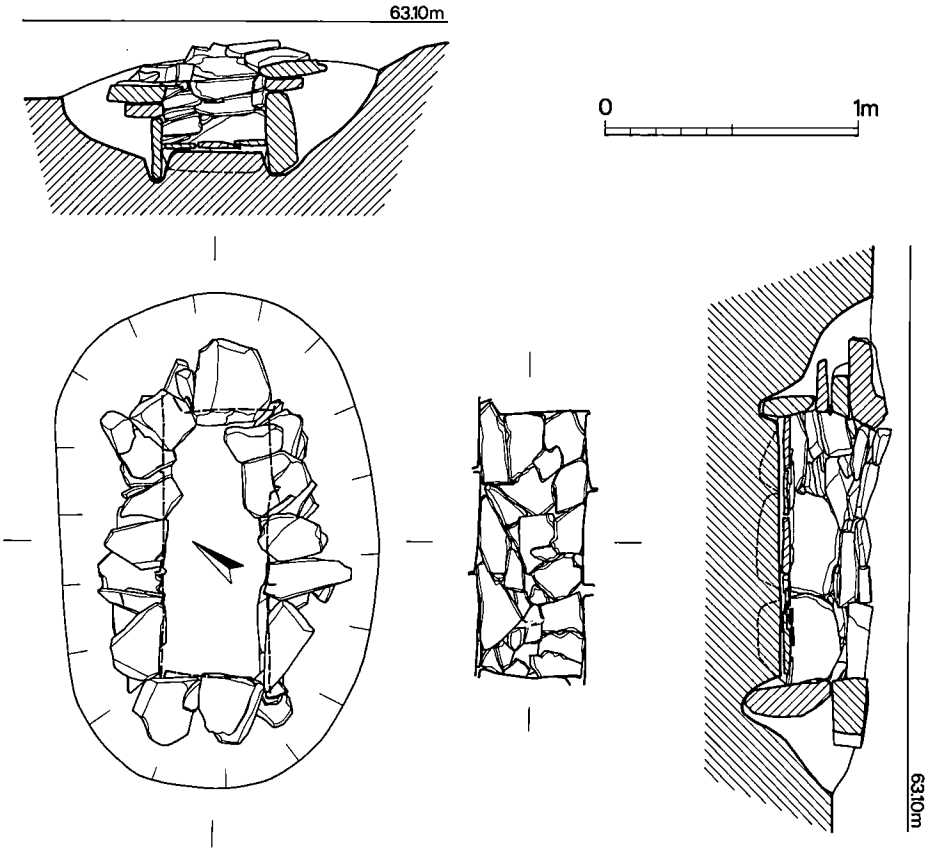
24．C－24

2号墳の北東側の，C－18・C－26に囲まれた位置に築造されている。標高63m付近の平坦面に営まれる。

周溝は，東から北西側へ不整半円形に残る（第178図）。石室中心から外径で，東側3m，北西側4.5mとなり，幅は1.1～0.7m，深さ25cm前後である。周溝



第178図　C－24地山整形面実測図（1/100）



第 179 図　C－24実測図（1/30）

南東端でC－26の周溝と接するが，切り合うことはない。

主体部（図版98・99，第179図）

主軸をN65°30′Eにとり，頭位を北東に置く石棺系竪穴式石室である。

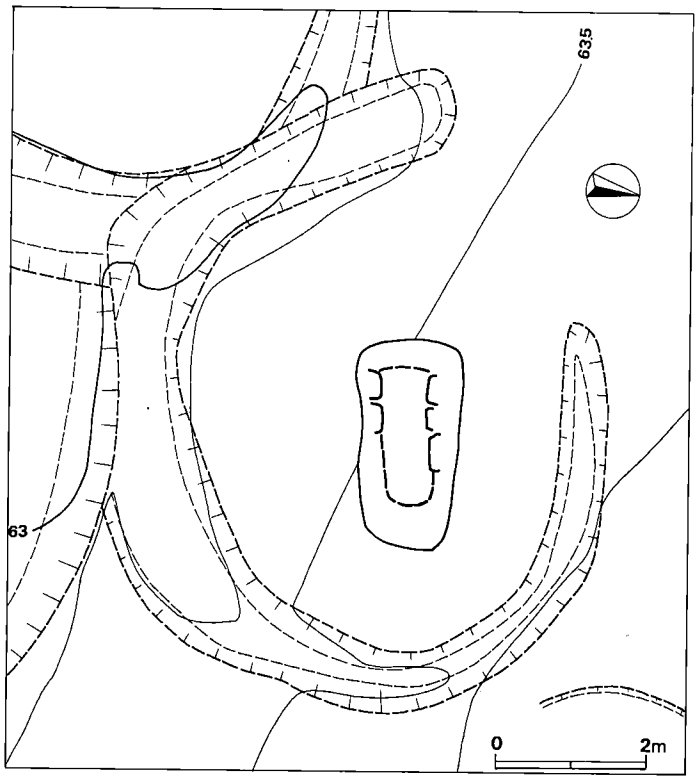
掘方は長軸上で1.95m，短軸上で1.26mの長円形を呈する。石室床面内法は長さ1.04m，幅は北東端で0.43m，南西端で0.42mとなる小規模タイプである。床面には小板石の敷石が施され，側壁は最下位が板石を立てて，それから上に平積みを行う。最下位の立石は深く埋め込まれる。頭位と思われる北東小口の立石は，他に比べて低く，その壁面の高さの½以下である。平積み部分を観察すると，所謂重箱積み的な部分もみられる。壁面内側へのせり出しは北東半でかなり顕著である。

以上のことからC－24は，床面プランこそ異なるが，C－18の舟形タイプの構造と良く類似しており，或いは同類の小児用形態となるかと考えられる。

25．C－25

4号墳の北東側，19号墳・C－3・C－2に囲まれた位置に営まれている。標高63.5m付近の平坦面に位置する。4号墳・19号墳よりも古い。

周溝が西側に陸橋部を残して巡らされる(第180図)。石室中心より外径で東側3.5m，北側2.7m，西側4.5m程となり，幅1.5～0.6m，深さ20～30cmとなる。南西側で4号墳周溝に切られ，更に南側で19号墳周溝に切られる。



第 180 図　C－25地山整形面実測図（1/100）

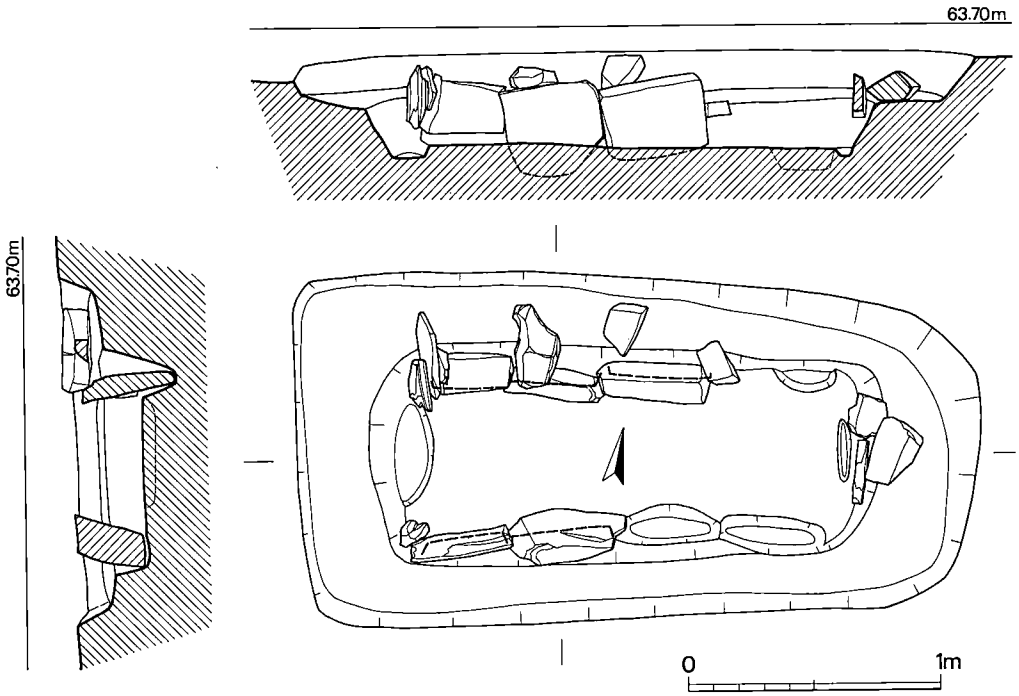
主体部(図版99, 第181図)

主軸をN77°30′Eにとり，頭位を西に置くかと思われる石棺系竪穴式石室である。

掘方は長軸上2.69m，短軸上1.37mの略長方形プランを呈し，その中に更に側壁を立てる範囲ぎりぎりの墓坑を掘り込むという，2段掘りの形態をとる。

石室は大規模に破壊されているが，その内法は，長さ1.61m，幅は西小口際で0.6m，東小口際で0.52mとなる。壁最下部は両小口・側壁ともに板石を立てたもので，その裏に若干の裏込め石がみられる。それより上は板石の平積みが行われる。残存する側壁からみると，最下位立石から既に内傾しており，全体に内側へのせり出しが考えられる。

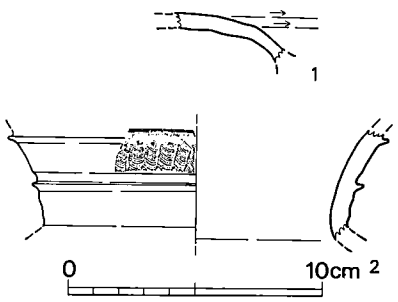
石室内床面の敷石・枕石等はみられない。遺骨・副葬品等も皆無である。ただ，南側周溝内から陶質土器或いは初期須恵器的小片が2点出土した。しかし，これらは当C－25に対する供献品とは見做し得ない。



第 181 図　C－25実測図（1/30）

出土遺物（第182図）

須恵器片（1・2）1は杯蓋片と考えられ，外面上位に回転ヘラ削り，それより下と内面は回転ナデが施される。胎土精良で，焼成堅緻，外面は自然釉が僅かにみられ，全体に灰かぶりする。内面は灰色をなし，器壁断面は小豆色を呈している。2は壺頸部片で，復原頸部径12.0cmを測る。外面には上向き気味の非常にシャープな細い凸帯をつまみ出し，その間に細かい櫛描波状文を施す。他内外面は回転ナデが施される。胎土精良で焼成堅緻，青灰色を呈する。



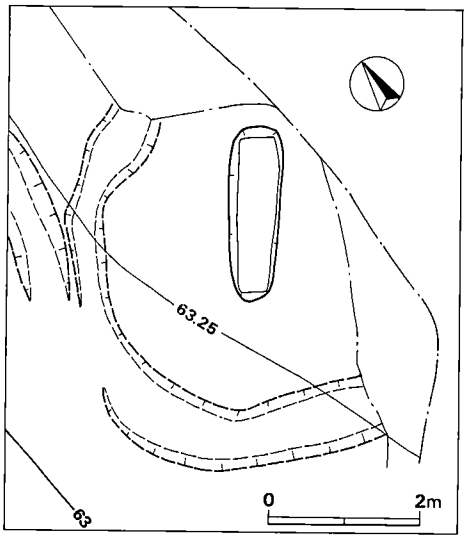
第 182 図　C－25出土土器実測図（1/3）

以上の2点は，小片のため不明確ではあるが，2の細かい櫛描波状文などから，初期須恵器の段階と考えられる。南側周溝が19号墳周溝に切られていることから，19号墳関係遺物の流れ込みの可能性が考えられる。（中間）

26．C－26

2号墳の北東側の，C－18・C－24の東に占地する。標高63.25mのH尾根の西裾際の平坦になった部分に位置する。

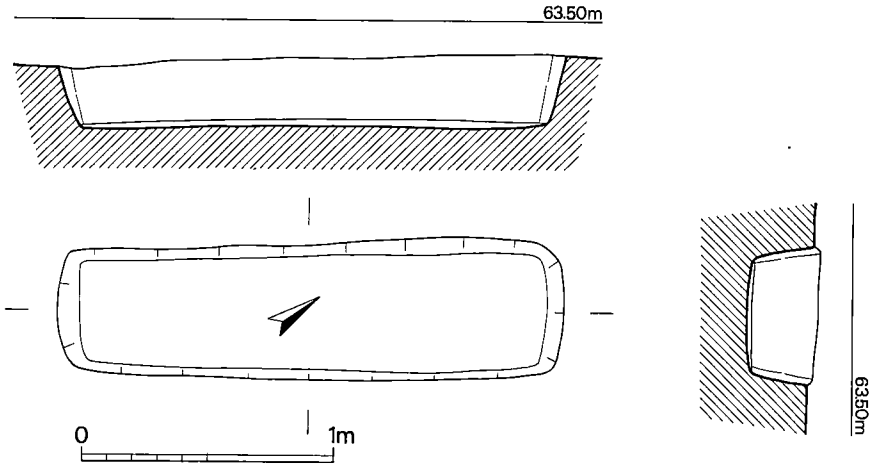
周溝は発掘区範囲内の西半部のみ調査したが，東半部にも当然巡るであろう（第183図）。主体部中心から外径で北西へ2.5m，南へ3.3mの略円形をなし幅は1.0～0.4m，深さ20cm前後となる。



第 183 図　C－26地山整形面実測図（1/100）

主体部（図版100，第184図）

主軸をN34°30′Eにとり，北東側に頭位を置く土坑墓である。上端で長さ2.03m，幅は北東側



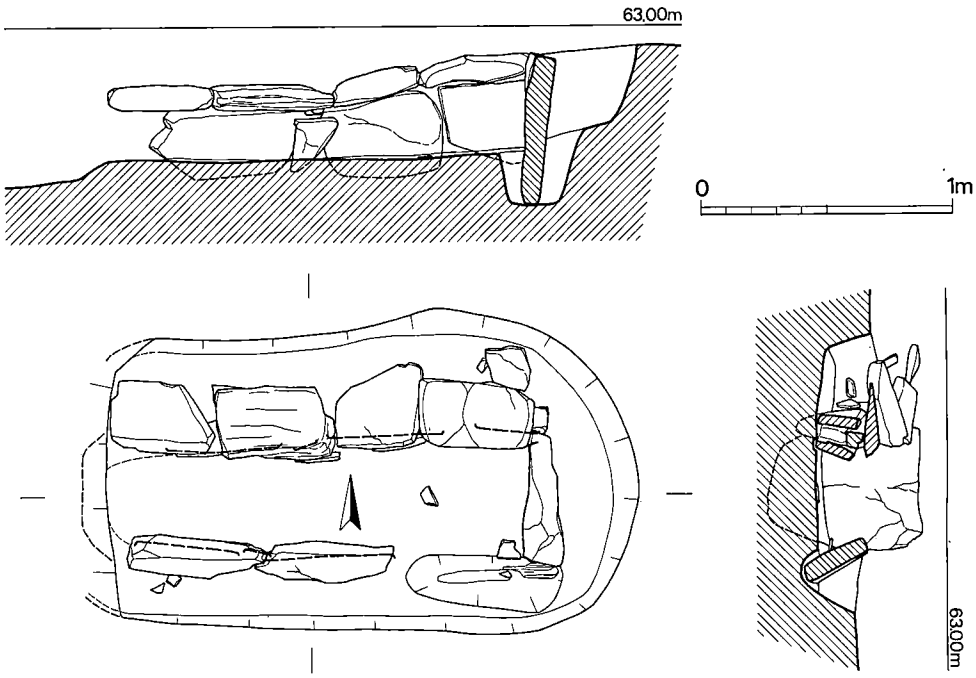
第 184 図　C－26実測図（1/30）

で0.56m，南西側で0.5m，下端が長さ1.87m，幅は北東側で0.46m，南西側で0.39mの長方形プランを呈する。床面は平坦で，木棺等の痕跡は認められない。遺骨・副葬品等皆無である。

以上のC－26は，この柿原古墳群I地区における唯一の素掘り土坑墓を主体とするものである。主体部構造は全く異なるが，整美な墓坑・周溝を有すること等から，他の石棺系竪穴式石室群と年代的に全く異なるとは考えられない。むしろ，殆ど同時代のものと想定して，何らかの事情で，時間・空間的に普遍的な葬法である素掘り土坑墓の形態をとったものと考えたい。

（中間）

27．C－27



第 185 図　C－27実測図（1/30）

本墳は４号墳のすぐ西に位置し，４号墳の墳丘内に含まれる。標高62.7mに築く。盛土は認められない。周溝も無い。

主体部（図版100，第185図）

本石室はN89°45′Eに主軸をおき，等高線に平行して築く。掘方は，西側が削平されており，東西長さ2.11＋αmであり，南北1.27mの長円形を呈し，深さ15～20cm程である。

石室は，掘方同様に西側小口を欠損し，南側壁で東小口寄りの基底部石を欠損，また，上段の積みも欠損する。残存している構造部は，東小口が方形の石を立てている。側壁部は，北側で基底部石を横長に立て，その上段には平積みを１段行う。また，南側は基底部石が横長に立つのみである。北側壁に異質の構造を有し，それは基底部石間の隙間に，石室内側と裏側から小板石を立てて塞いでいる。赤色顔料の痕跡は認められない。石材は片岩である。

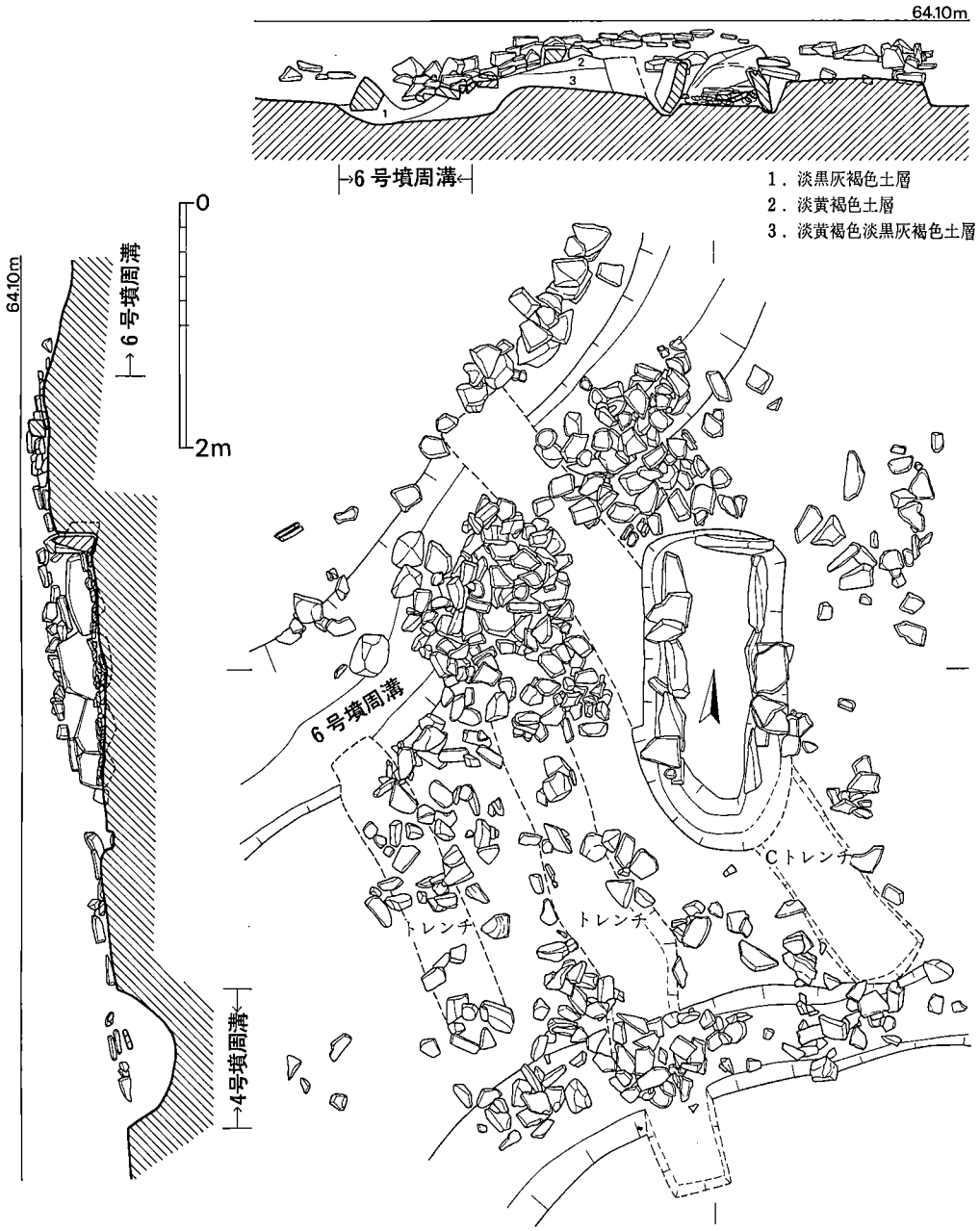
石室の内法は，長さ167＋αcm，幅東側50＋αcm，西側36＋αcmで，残存最大高35cmである。

副葬品・その他の遺物皆無。

尚，本墳は著しく破壊されていたが，それは４号墳の築造の際，地山整形により削平され壊されたものであろう。　（平嶋）

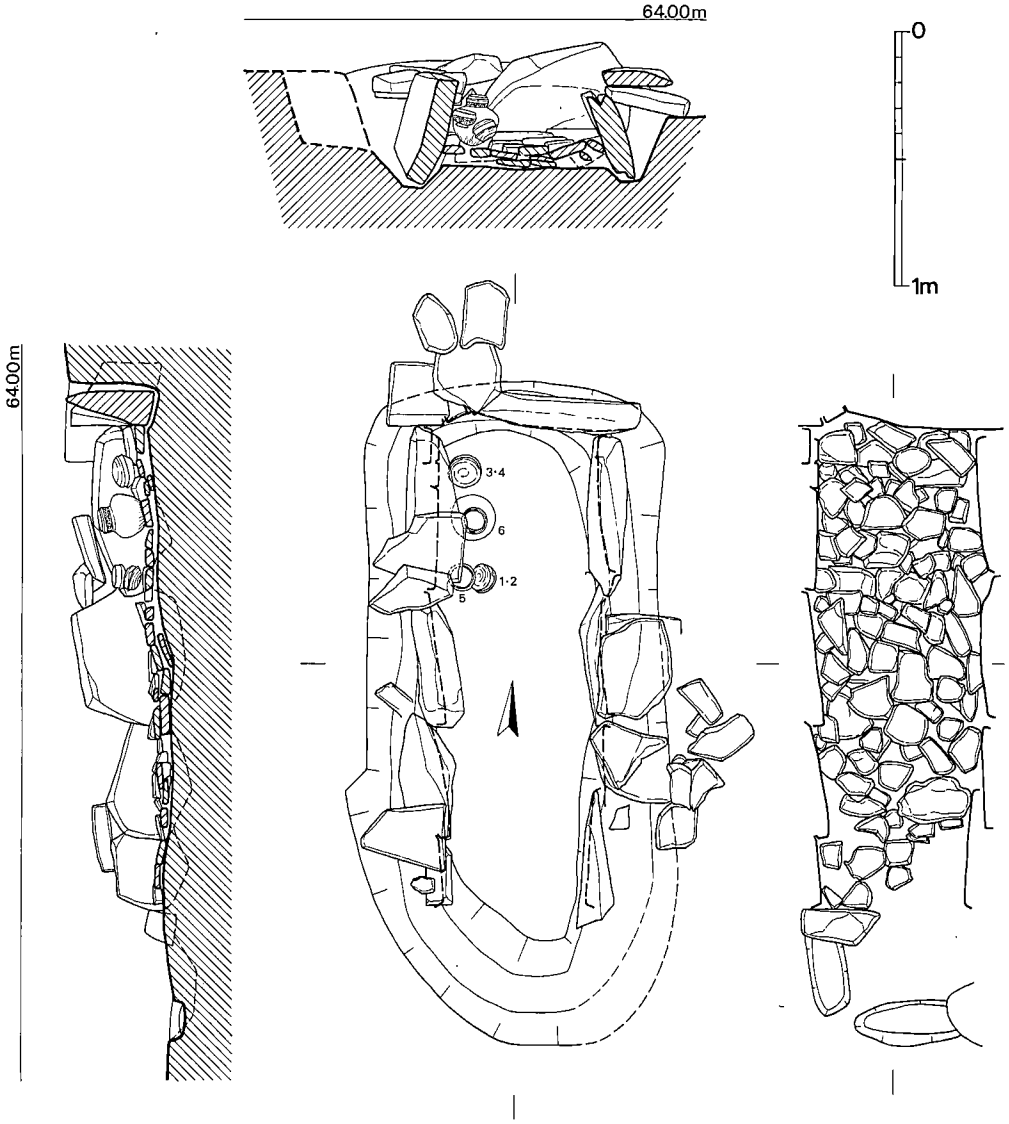
28．C－28

4号墳と6号墳に挟まれた，やや平坦面に位置する。標高63.5m付近で，小板石集積状を呈する葺石を有する特異な埋葬主体である。4号墳・6号墳よりも古い。



第 186 図　C－28実測図（1/60）

葺石と思われる小板石集中部分は，主体部中心から北へ2.7m，西へ2.5m，南へ3.5m範囲内であり，現状ではまばらな部分もかなりある（第186図）。土層観察により，地山上に最大25cm程の盛土をし，主体部墓坑掘削後に，小板石を周囲に寄せ集めたものと判断された。墳丘裾廻りに基底石を配置することも無く，ただ全体に寄せ集めたという感じである。周溝も在るかと考えてトレンチを多く入れたが，確認出来なかった。通常の古墳の葺石の概念とは趣を異にするものではあるが，一応ここでは葺石的な性格のものとして把えておきたい。尚，小板石の重なり具合は１層が基本的で，集中する所で部分的に２～３層となる程度であり，所謂積石塚的



第 187 図　C－28主体部実測図（1/30）

のではない。

主体部（図版101，第187図）

主軸をＮ４°Ｗにおき，頭位が殆ど真北と考えられる石棺系竪穴式石室である。

石室内法は，長さ2.28m，幅は北小口際で0.63m，南小口寄りで0.56m程となる。南端側が大きく破壊されており。今ひとつ明確さを欠く。石室床面は全体に長く，やや幅が広く，他の石棺系竪穴式石室とは若干規模が異なる。床面には小板石の敷石がみられる。小口部及び両側壁には板石が横長に埋め込まれるが，その上端レベルは著しく不揃いである。それより上は板石を平積みとするが，それらは周辺部葺石へと連続しており，同時に積まれたものと考えられ，その周辺は控え積み的である。

本石室は側壁が内傾し，床面プランも出入りが著しく不整的で，北西隅などは丸味を帯びるなど，諸点で，その規模も含めて，Ｃ－９のような幅広タイプやＣ－18のような舟形タイプと様相が似通っている。どちらのタイプとも判断し難く，年代的にみて，両タイプの中間的なものと考えるのが妥当かと思う。即ち，幅広タイプ（Ｃ－９・Ｃ－14等）→Ｃ－28 →舟形タイプ（Ｃ－18等）の石室構造の系統がたどれるようである。

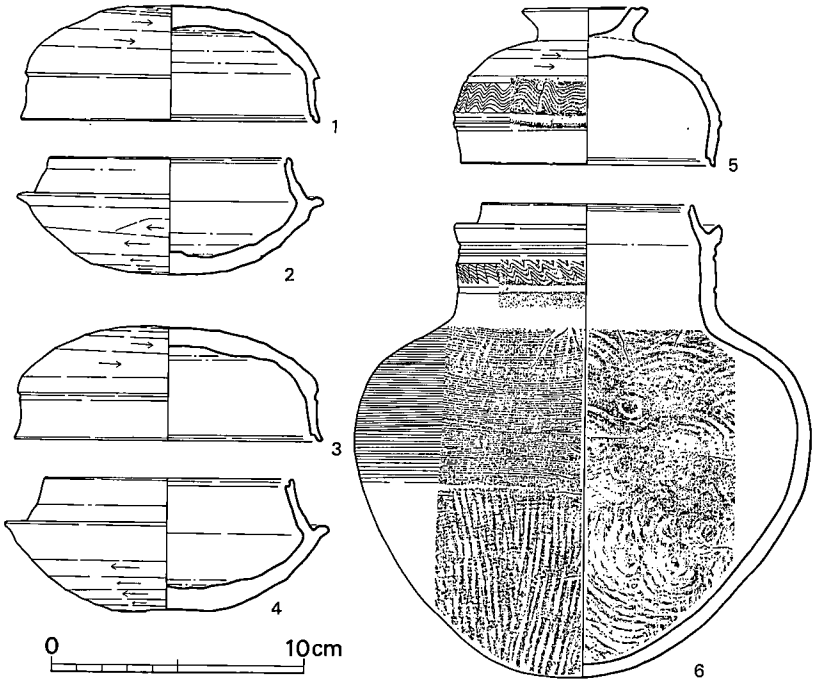
石室内北西の側壁際には，須恵器杯蓋のセット，酸化焔焼成杯蓋のセット，蓋付壺のセットが副葬されていた。

出土遺物（図版102，第188図）

須恵器蓋杯セット（１・２）１は口径11.7cm，器高4.5cmを測る。口縁内側に浅く細い沈線を巡らせ，天井外面は広い範囲に左廻り回転ヘラ削りを施す。内面中心まで回転ナデを施す。２は口径9.6cm，受け部径12.1cm，器高4.6cmを測る。成形・調整技法は１と同様であるが，外面の回転ヘラ削りは受け部近くまで施している。内面中心には僅かに一ヶ所，小さく，一方向へのナデツケがみられる。胎土は孰れも，極く僅か粗石英粒を含み，焼成堅緻で，１は暗青灰色，２は淡青灰色を呈する。孰れも各部位が非常にシャープである。

酸化焔焼成蓋杯セット（３・４）孰れも土師質焼成で，所謂須恵器の生焼けではない。３は口径12.1cm，器高4.5cmを測る。天井外面の回転ヘラ削りは外面稜付近にまで及び，口縁内面には鋭い沈線を巡らす。内面中央には一方向へのナデツケがみられる。４は口径9.9cm，器高5.2cmを測る。外面のヘラ削りはかなり及ぶが３ほどではない。内底面には指１本の一方向へのナデツケがみられる。３・４ともに製作技法は完全に須恵器そのものである。しかし，両方とも茶色のスリップをかけており，明らかに土師質焼成を意図したもののようである。

須恵器蓋付壺（５・６）５は口径10.0cm，器高6.2cmで，内湾気味の体部につくり，輪状撮を付けたものである。撮部上端には浅い沈線を巡らせ，体部外面には回転ヘラ削りを施す。太めの



第 188 図　C－28副葬土器実測図（1/3）

沈線間に，歯数９～10本の櫛描波状文を施し，天井内面には僅かにナデツケがみられる。外面は灰かぶりして一部に自然釉がたまり，内面は青灰色をなす。６は，口縁に受け部をつくり，頸部には６本歯のやや粗い櫛描波状文を巡らす。器高18.7cm，口径8.3cm，胴部最大径18.1cmを測る。胴部外面上半は叩目の上を目の細かいカキ目（１cmに11本）を施す。下半は細かい条蓆状叩目を密に施す。胴部内面は青海波が全面密にみられる。５・６ともに胎土に粗・細石英粒を多く含んで特徴的ですらある。６は内外面ともに淡青灰色を呈する。

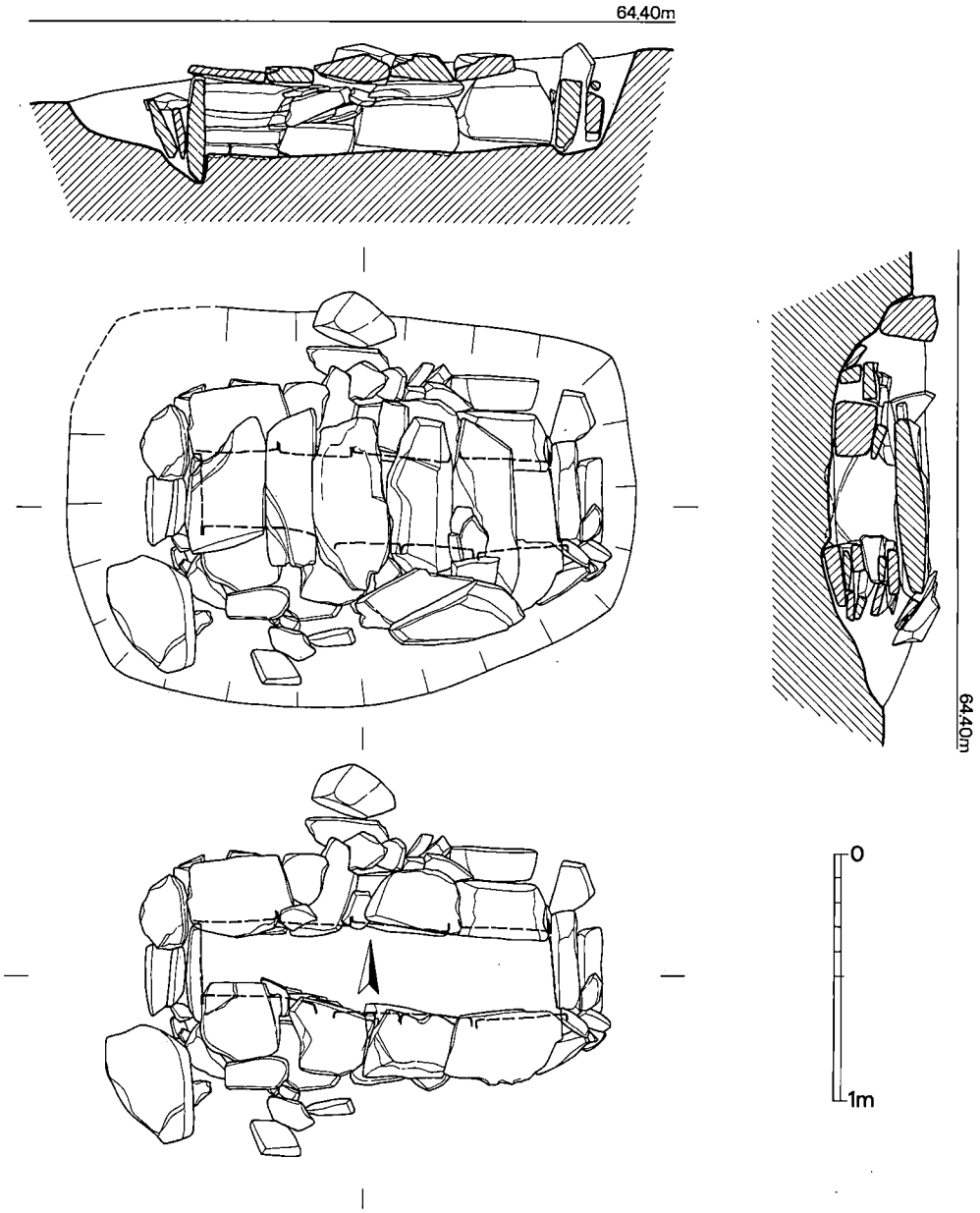
以上のＣ－28の年代について若干検討してみよう。石室構造は前述した如く，幅広タイプから舟形タイプへの中間形態ではないかと考えた。

副葬土器類のうち，蓋杯類は，陶邑Ｉ型式第４段階と考えたＣ－９の２・３よりも小径化し，立ち上がりの内傾化，蓋外面稜の退化等が目立ち，陶邑Ｉ型式第５段階併行期の所産と考えられる。酸化焔焼成の蓋杯はやや法量が大きいがほぼ同時期と考えられよう。蓋付壺は他類例に乏しいが，稜線等全体に鈍くなった特徴を有し，口縁端部は蓋受け部分の形状など，蓋杯類に共通する点が多く見受けられる。

以上の副葬品の様相からＣ－28は，陶邑Ｉ型式第５段階の時期と考え，５Ｃ後半のうちの中頃，つまり５Ｃ第３四半期の末頃の築造と考えられる。　（中間）

29．C－29

7号墳の北東，6号墳の北西側の平坦面に位置する。標高64m辺りで，岩盤露頭の近辺に築造されている。周溝はみられない。



第 189 図　C－29実測図（1/30）

主体部（図版103，第189図）

主軸をN89°Eにとり，頭位を東に置く竪穴式石室である。

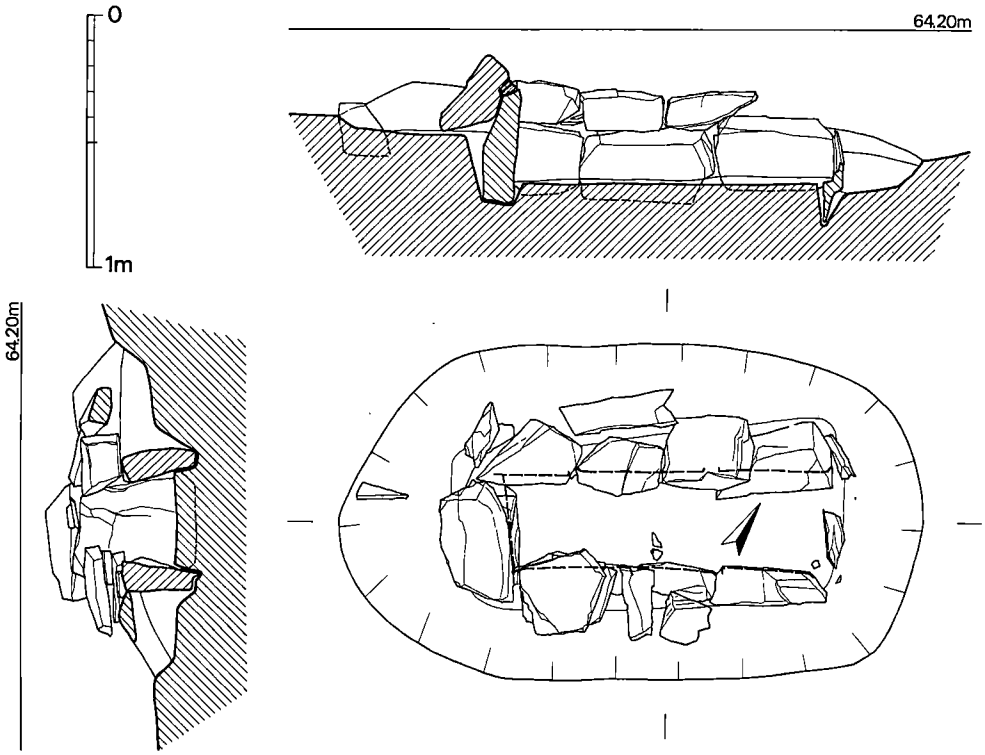
墓坑西北隅付近には黒色片岩の岩盤が露頭しており，墓坑横断面ではいくらか2段掘り的様相をみせる。石室床面内法は，長さ1.43m，幅は頭位と思われる東小口際で0.34m，西小口際で0.3mと，全体に短めの小振りタイプである。

西小口は板石を立て，その裏には複数の裏込め石がみられる。北側壁の東寄りでは，最下位に部厚い石材を平積みとしており，腰石的様相をなすが，他部位では扁平な片岩板石を最下段から平積みとする。蓋石が東端の1枚分を除いて他に5枚残存しており，旧状が良く保たれている。蓋石縁には控え積みに連続する板石が一部乗っており，全体に裏込め石も多く，丁寧な築造を彷彿とさせる。蓋石の状況からみると，小口端両立石の上には平積みは行なわれていない。石室の深さは30cmと浅い。

石室床面には敷石・枕石等存在しない。遺骨・副葬品とも皆無である。（中間）

30．C－30

本墳は，6号墳の東側周溝脇に位置し，標高63.8mに築く。盛土や周溝は認められない。



第 190 図　C－30実測図（1/30）

主体部（図版103，第190図）

本石室は主軸をN56°45′Eにとる。掘方は2.31×1.32mの長円形を呈し，南西側で段を有している。深さは5～25cmである。

石室は蓋石を欠損し，北東方向が若干欠損し，北東側の小口は根部を残して割欠し，側壁も積みを欠損する。構築法は小口，側壁の基底部は板石を立て，その上に塊石を平積みする。現存高は50cmを測り，原形もほぼ同じ高さで，蓋石を被せるものであろう。赤色顔料の痕跡は認められない。石材は全て片岩である。

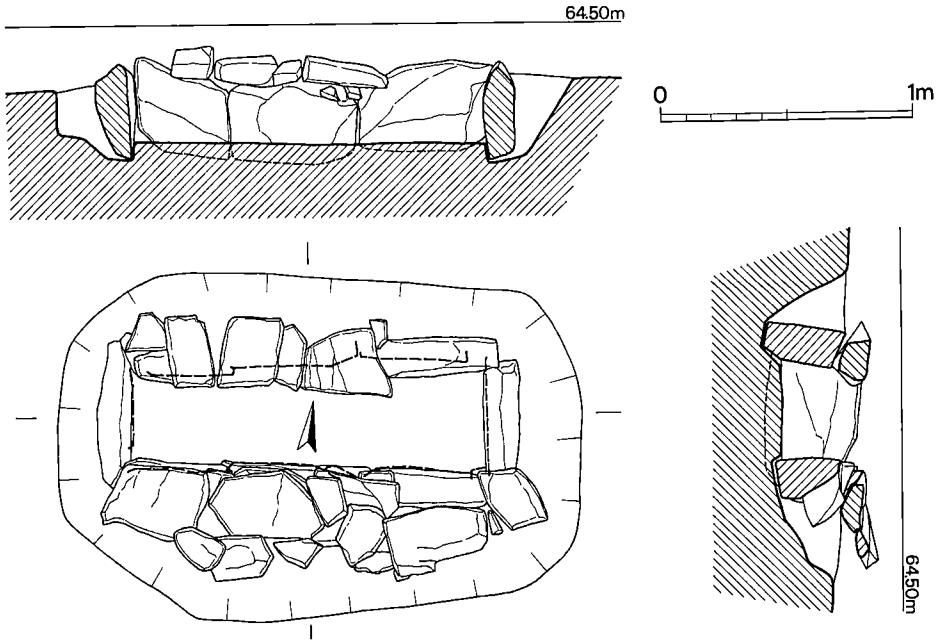
内法は，長さ124cm，幅南西側37cm，北東40cmを測り，北東側へ広くなっている。

石室内法では北東側が広く，頭位は北東側となるようであるが，地形的には南西から北東へ傾斜する。また，小口石も北東側は根部のみの残片であるが，いかにも貧弱な感じで，南西側小口の方が大きく厚い石を据え，上段の石も頑強な感じを受ける。これらの点から頭位は南西方向であろう。

（平嶋）

31．C－31

6号墳周溝外の北東側，C－7の南西側に位置する。標高64.25m付近の平坦面に営まれる。周溝はみられず，主体部上半の殆どを削除されている。



第 191 図　C－31実測図（1/30）

主体部（図版104，第191図）

主軸をN81°Eにとり，東へ頭位を置く石棺系竪穴式石室である。

石室内床面内法は，長さ1.40m，幅は東小口端で0.43m，西小口端で0.36mを測る。全体にやや小振りのものとなる。石室側壁の最下段には厚手の板石を横長に立てて，その上端レベルは大旨揃っている。それから上は板石の平積みが行われる。南側壁外側には控え積みが若干みられる。現存積石上端から石室床面までの深さは37cm程となる。

石室内からの遺骨・副葬品の出土は皆無である。（中間）

32．C－32

本墳は，6号墳の北側周溝脇に位置し，標高64.3mに築く。周溝を有さず，盛土も認められない。墳形不明。

主体部（図版104，第192図）

本石室の主軸はN73°30′Eにとる。掘方は2.93×1.86mの長円形プランを呈し，深さ50～70cm程穿つ。

石室は，蓋石の一部を欠損するのみで，ほぼ完存の状態で検出された。蓋石は，大形の板石を5枚用いて，石の合せ目に小板石をのせ，或いは詰め込んで目張りをする。

また，構築法は基底部石を立て，その上段に平積みを行う。基底部石は，西小口と両側壁部でその上面が揃い，東小口では若干高くなり，根部も深く埋め，石の厚さも他部位に比べて厚く頑丈である。石積みの部位では，不規則な塊石を使用したためか，蓋石同様に積みの隙間に小石を詰め込み，目詰めを行う。赤色顔料塗布が行われる。石材は全て片岩である。

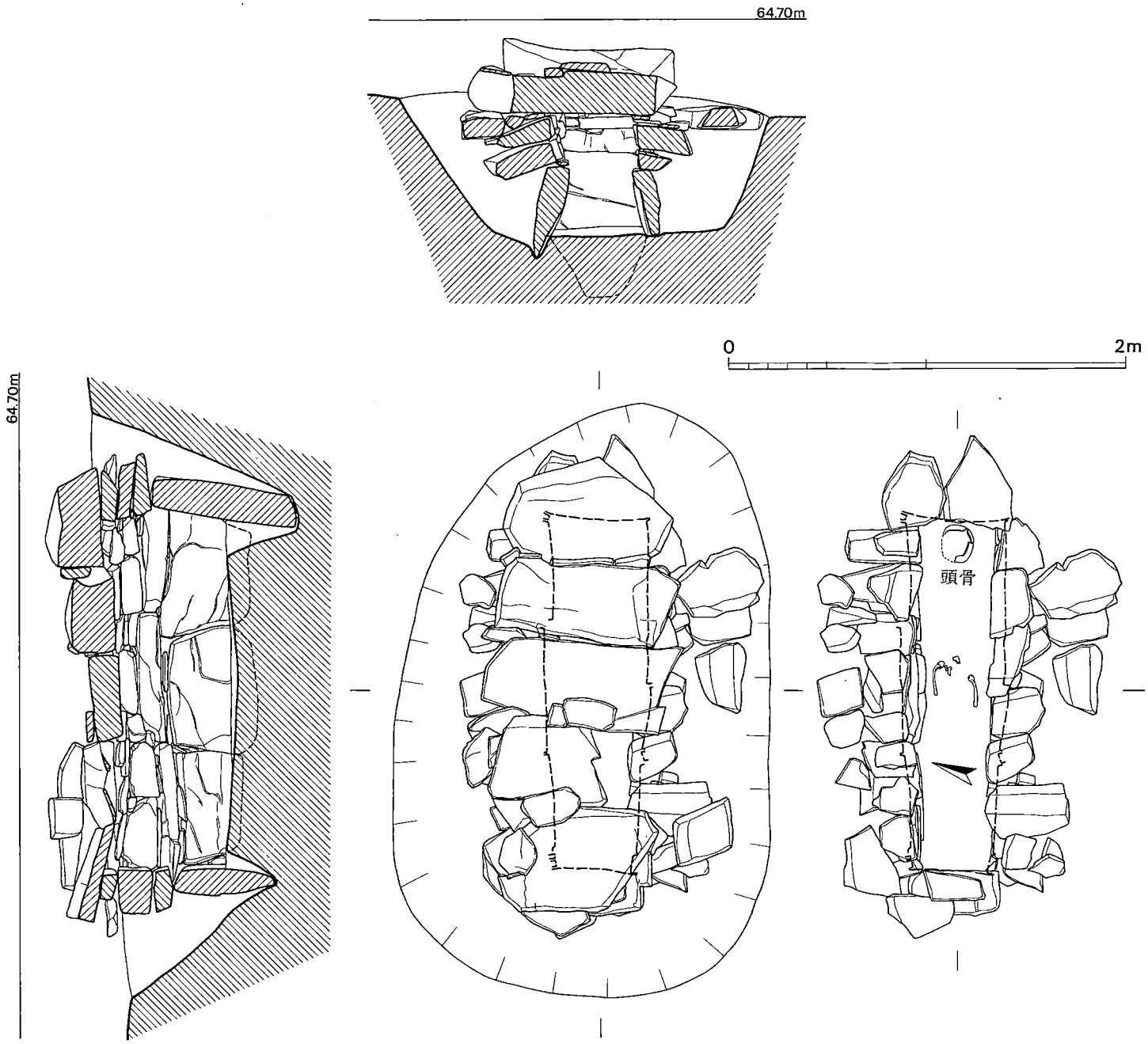
石室には人骨が残存し，頭骨，下肢骨とその他骨片が確認された。しかし，蓋石除去の際，蓋目詰めの石が頭骨上に落下し破損した。頭位は東小口側である。

石室内法は，長さ174cm，東小口（頭位）幅49cm，西小口幅37cm，高さ55cmを測る。

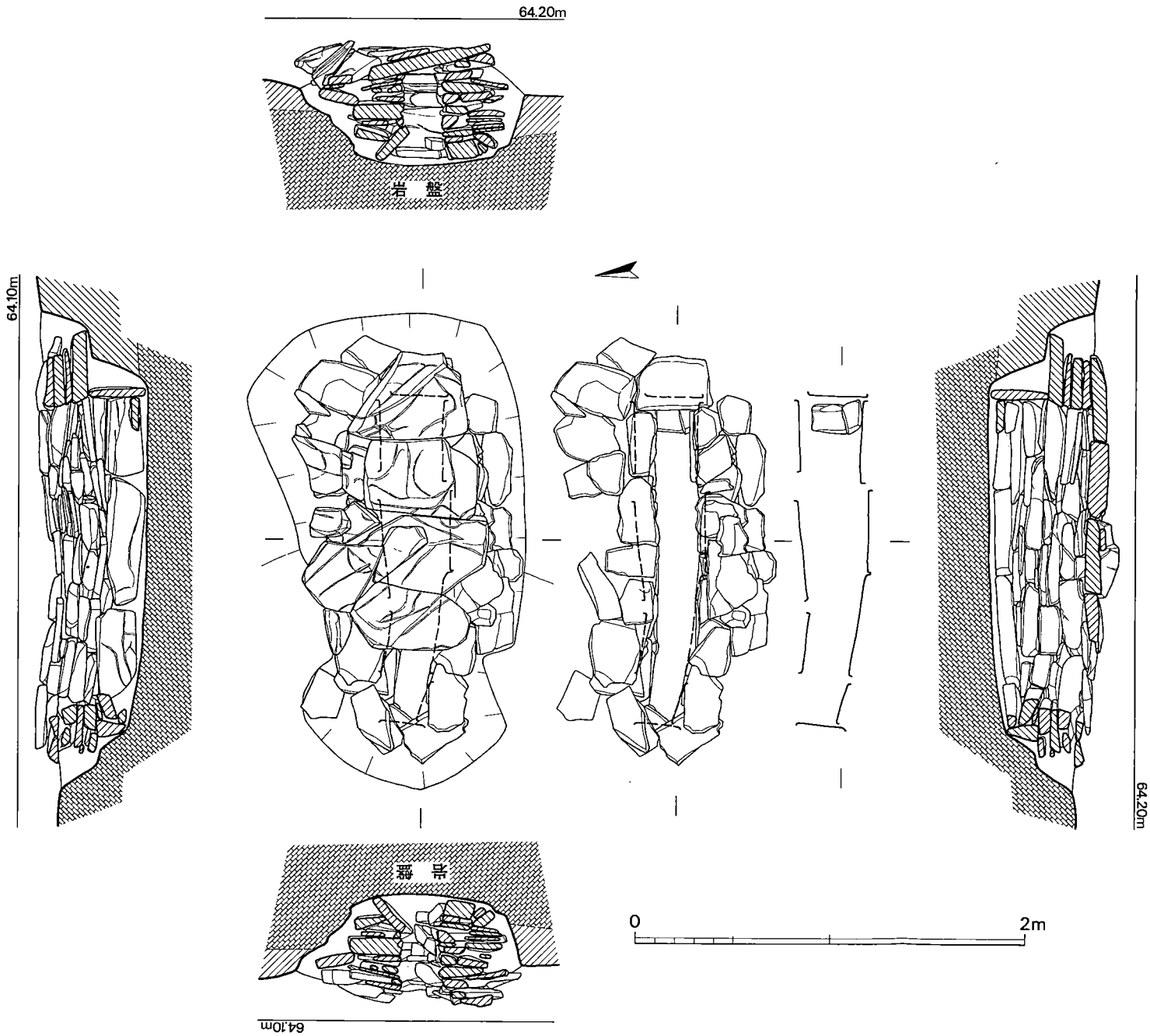
副葬品，その他の遺物は皆無である。

以上がC－32についての報告である。本石室に於いては人骨が残存し，頭位が明確にできた。本石室に於いての頭骨の位置は東側であり，頑丈な石を小口の基底部石としている部位である。即ち，石室構造による頭位推定の一状況証拠を得たわけである。また，ここでは傾斜がゆるく，断言はできないが，一般に地形の傾斜面の高い方に頭位を置くという推定の根拠ともなり得る。

人骨の鑑定結果によると成年の女性であった。（平嶋）



第 192 図　C－32実測図（1/30）



第 193 図　C－33実測図（1/30）

33．C－33

本墳は6号墳と7号墳間で，6号墳の墳丘裾に位置する。周溝及び，盛土は認められない。

主体部（図版105，第193図）

本石室はS88°30′Eに主軸をとる。掘方の上面西半と，そこより東へ傾斜して，墓坑西端下位まで岩盤である。本石室の掘方はほぼ岩盤を穿って構築される。2.43×1.15mの歪長円形を呈し，深さ35～50cm穿つ。2段掘りの形状をとる。

石室は，蓋石として大形の板石が4枚残り，一部欠損している。蓋石の上には，やや小形の板石を部分的に載せ，目張りを行う。石室の構造は，両小口に大きさが若干異なるが板石を立て，その上段に平積みする。また側壁では，南北両側壁で異なる構築法をとることが一瞥してわかる。北壁は基底部石に板石を用いて立て，その上段に割合薄手の板石を平積みする。南壁は，北壁に比べて厚手の板石を用い，基底部から平積みする。北壁基底部石が傾き，上段が内側へ迫り出し，南壁はほぼ直に立つ。西小口と両壁には密に裏込めを行う。赤色顔料は孰れにも認められない。枕石が東小口部におかれる。即ち，頭位も東である。石材は岩盤と同種の片岩である。

石室内法は，長さ168cm，東小口（頭位）幅34cm，西小口幅20cm，高さ50cmを測る。

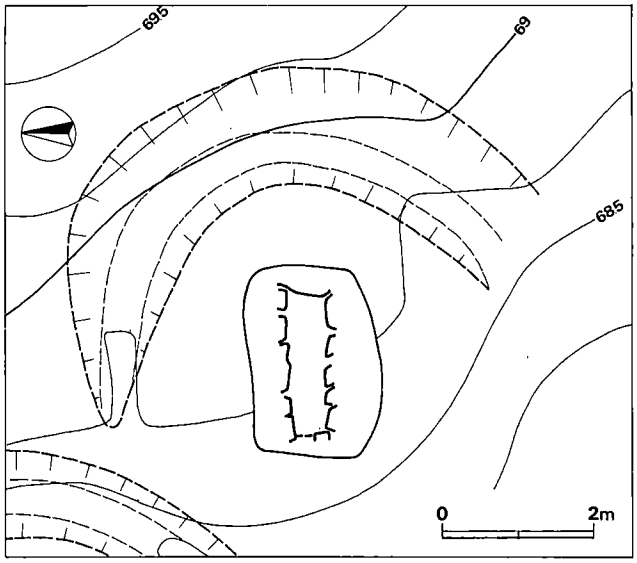
遺骨，副葬品は無い。

以上がC－33についてである。ここで注目するべき点は，岩盤に掘削してまでも石室を構築した点である。前回報告のH地区に於いては，岩盤を刳貫いて石蓋土坑墓を形成したD－1・2などがみられたが，本石室はそれらと全く異なり，あくまでも石室構築をその目的としている。掘方が2段掘りとなる形状にしても，岩盤刳貫きを最低限に止める為の工夫であり，小口部下段の上面と基底部石の上面が面を合せ，上段の積みへと連続している。構築者が労働力を最小限におさえ，石室を構築する為であろう。（平嶋）

34．C－34

21号墳の北方，8号墳の東南方でC－14・C－35に隣接して営まれる。標高69m前後の緩斜面に位置する。東半の斜面高位側に馬蹄形に周溝が巡る（第194図）。石室中心から外径で4m，内径で2.5mを測り，幅は最大1.6m，深さ30cm程であった。C－14周溝との切り合い関係は明瞭でない。

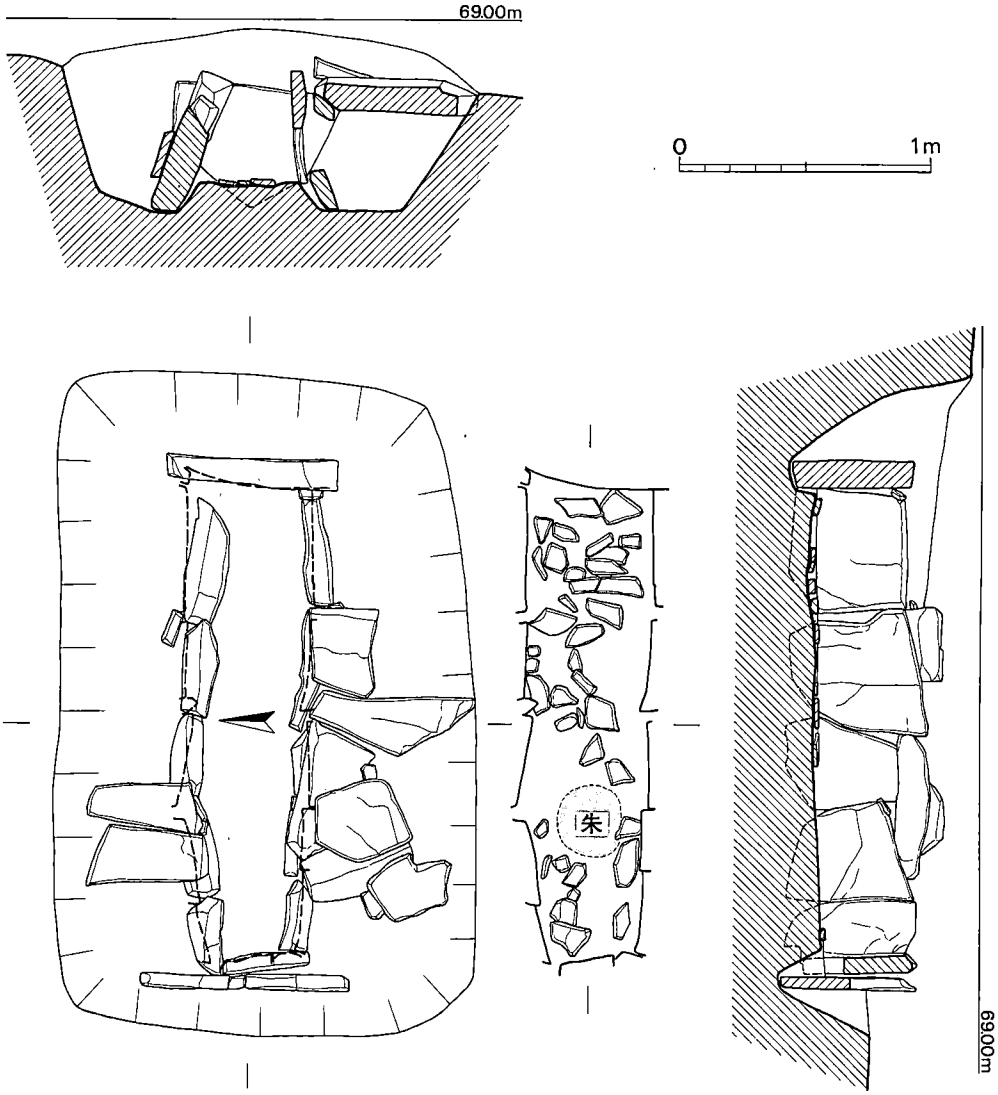
主体部（図版105，第195図）



第 194 図　C－34地山整形面実測図（1/100）

主軸をN88°31′Eにとり，頭位を東に置く石棺系竪穴式石室である。

石室内法は，長さ1.86m，幅は東小口際で0.49m，西小口際で0.34mとなる。石室上半は大きく破壊され残りが悪い。側壁・小口壁は板石を縦長に立て，その上端レベルは全て意識的に揃えられているようである。西小



第 195 図　C－34実測図（1/30）

口の裏側には更に2板石を立てて，小口立石を補強するかの如くである。側壁立石の上には板石の平積みを行う。これらの様相は，組合わせ箱式石棺墓の壁の形態と非常に近く，本遺跡内の他石棺系竪穴式石室群と明らかに異なる形態を示す。

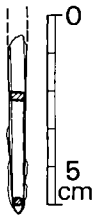
石室内床面には小板石の敷石が散乱状態で残る。中央より西側床面には朱の散布がみられる。

石室内床面に於ける副葬品・遺骨は認められなかった。ただ，床面から10cm浮いて，鉄鏃片1点が出土した。また，周溝内埋土中より土師器椀片1点が出土した。

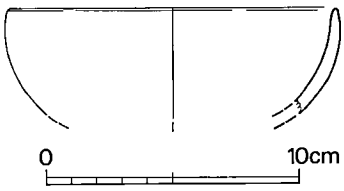
出土遺物

鉄鏃（第196図）現存長4.5cmで，断面は長方形をなす。鉄鏃の茎部分と思われるが，木質は全く残存しない。

土師器椀（第197図）復原口径13.0cmを測り，全体に丸味をもって立ち上がる器形をなす。内外面磨滅して調整不明である。胎土に黒色細粒子を多く含む。焼成やや良く肌色をなす。



第 196 図
C－34出土鉄器実測図（1/2）



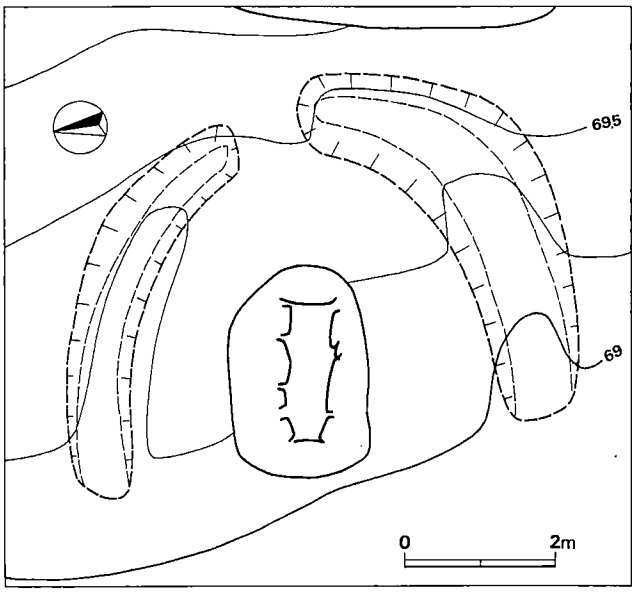
第 197 図　C－34出土土師器実測図（1/3）

以上のC－34は，石室の構造そのものが，他の石棺系竪穴式石室よりも，組合わせ箱式石棺墓のそれに近似した異類である。周溝出土の土師器椀は破片資料であり，供献品とは言えないが，体部が丸くなってきており，新相を呈している。少なくとも5C前葉以降のものとされ，本C－34の築造年代は5C中頃前後に求められるかと考える。（中間）

35．C－35

8号墳の東側で，C－14・C－34・C－39等に囲まれた位置に営まれる。標高69.5～70m辺りの斜面に築造されている。

東側に周溝が巡る（第198図）。その東端で0.9mの間が陸橋として掘り残されている。石室中心から周溝外縁まで3.



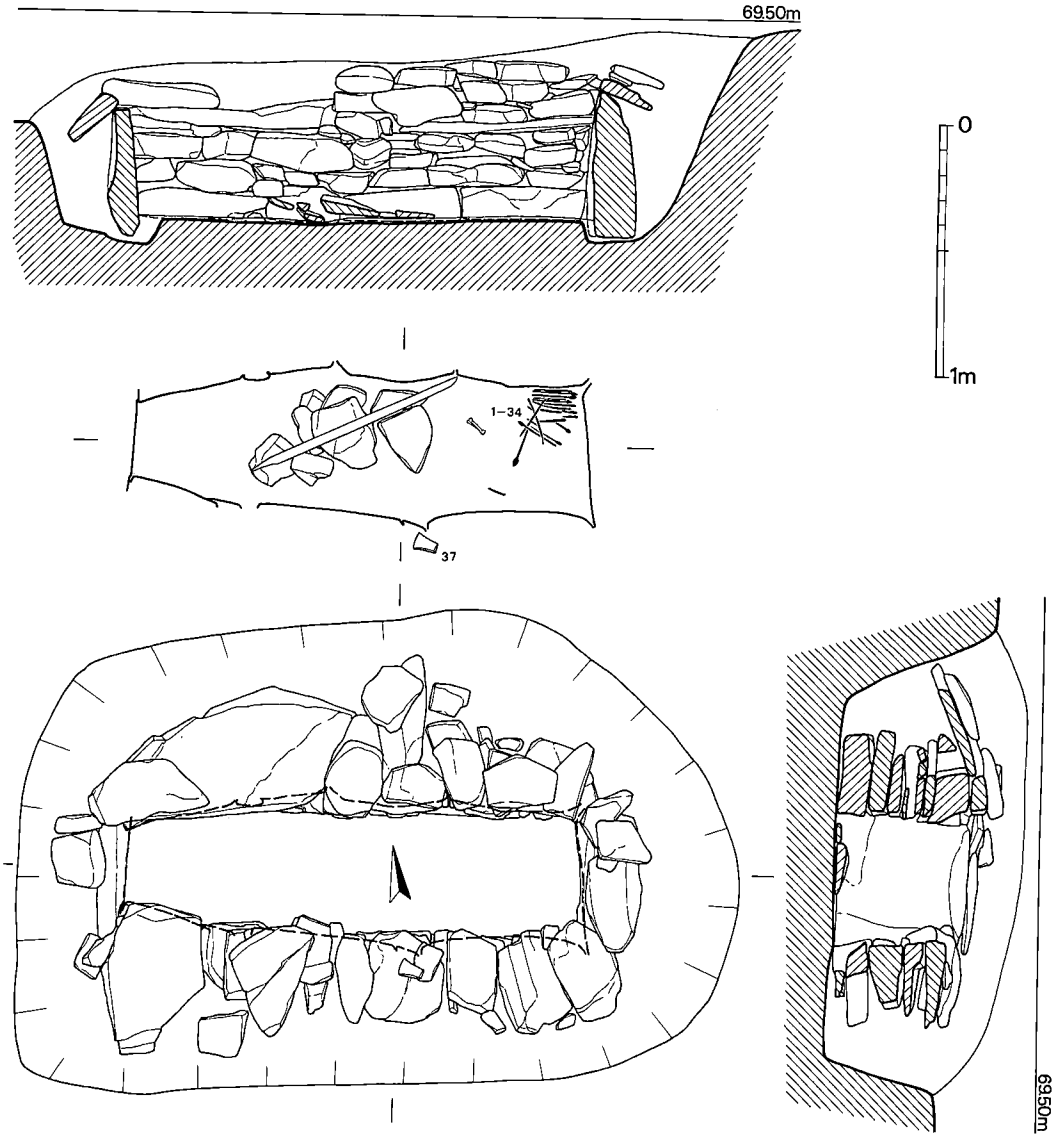
第 198 図　C－35地山整形面実測図（1/100）

5～3.2m，幅1.7～0.9m，深さは20～25cmと浅い。

主体部（図版106，第199図）

主軸をN81°Eにとり，東に頭位を置く竪穴式石室である。

石室床面の内法は，長さ1.81m，幅は東小口際で0.55m，西小口際で0.32mとなる。全体にやや舟形気味のプランを呈する。両小口には大きな板石を立てており，頭位と思われる東小口



第 199 図　C－35実測図（1/30）

のものは他を圧する如きである。南北両側壁は板石の平積みで，最下段にやや厚手の板石を選択使用しているようである。両小口立石は垂直或いは外傾気味に立ち，両長側壁も殆んど内側へのせり出しはみられず，内面を揃えている。

石室中央付近に小板石数枚が残り，その上位に鉄刀１振りがのる。これらの板石は一応石室床面に着いてはいるが，原位置を保つと思われる東端の鉄鏃群の直下には全く敷石がみられず，やはり，敷石とは見做し難い。石室内西半のみが盗掘・攪乱を受けて，刀が捨て置かれたものか，或いは，南側壁上の鉄斧の如く，石室外上面に置かれていたものが，側壁の崩壊により石材とともに落ち込んだものかと考えられる。

副葬品は，上述の中央の太刀の他に東北端の鉄鏃22（＋４）本，刀子２本，南壁積石上に鉄斧１点が出土している。

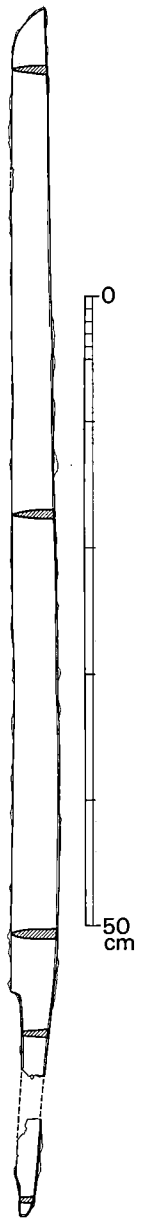
出土遺物（第200～202図）

太刀（第200図）全長96.0cm，刃渡り78.0cm，最大身幅3.8cm，棟厚さ0.75cmを測る。刃部は僅かに内反りとなり，片角関から茎部へと更に内反りに曲がる。茎部の目釘穴は１ヶ所は確実であるが，もう１ヶ所は銹のため明確でない。茎尻は更に一段細くなる特徴を持つ。この太刀は全体的にＣ－14副葬太刀16と類似する。

鉄鏃（１～34）１は，円頭広根斧箭式のもので，全長10.8cm，最大幅3.0cmを測る。２～26までは，ほぼ同型式で，片丸造箆被鑿箭式で，僅かに腸抉り状をなすタイプである。2・6などは身部長く柳葉式的である。全長は18.5～17.2cmの間のものが多く，10の如く15.2cm程のやや短めのタイプもある。茎部には木質やその上に沓巻きが良く残るものが多い。29～34も恐らく同類と考えられ，都合22＋４本程度となろうか。

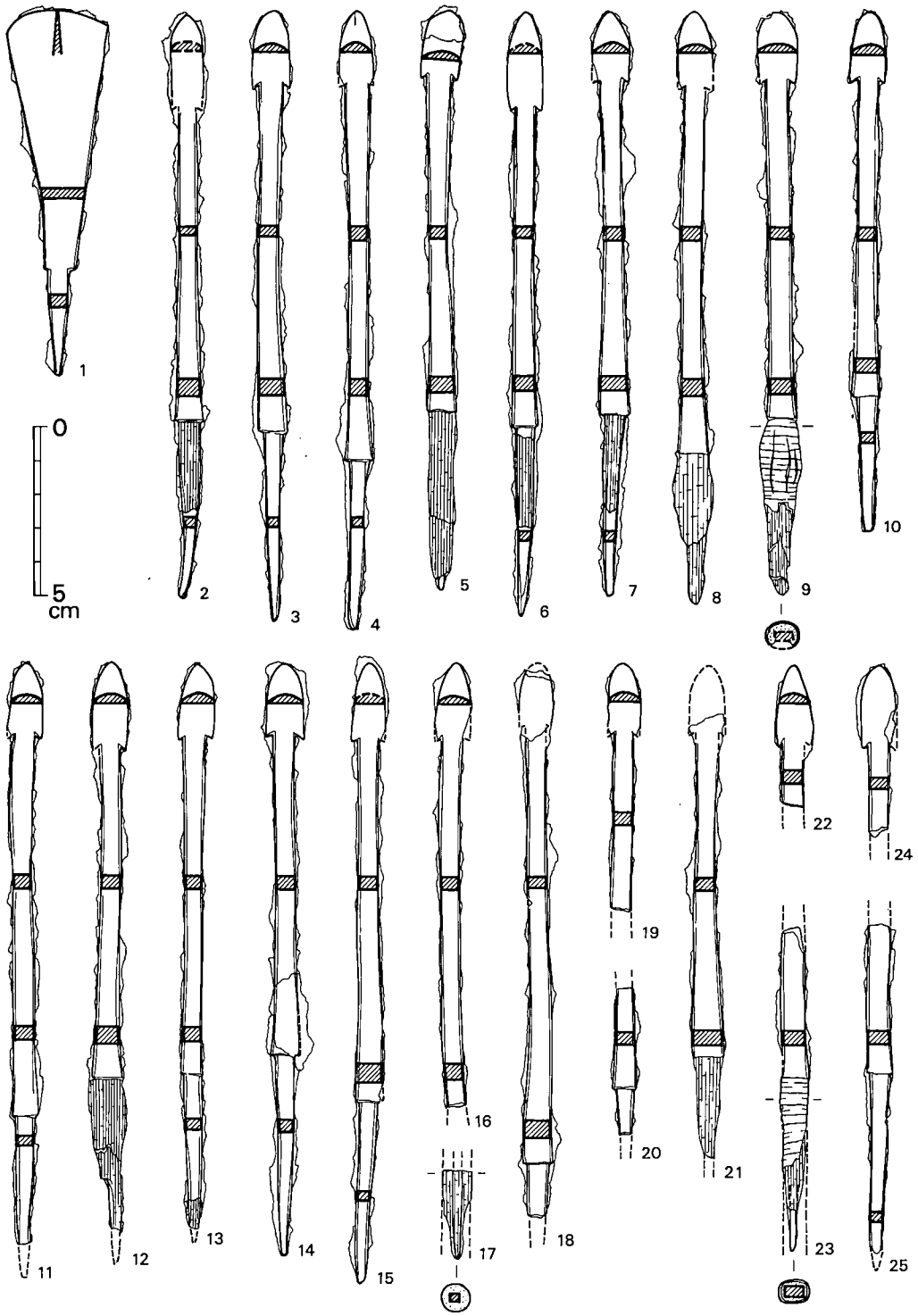
鉄刀子（35･36）孰れも鋒先部のみ残る。35は現存長4.3cm，身幅0.75cmを測る。36は現存長2.3cm，身幅0.8cmを測る。

鉄斧（37）全長9.0cm，刃部幅5.5cm，袋部内径2.9×1.9cmを測る。はっきりと有肩となる小型鍛造品で，手斧的である。袋内面に木質は残存しない。

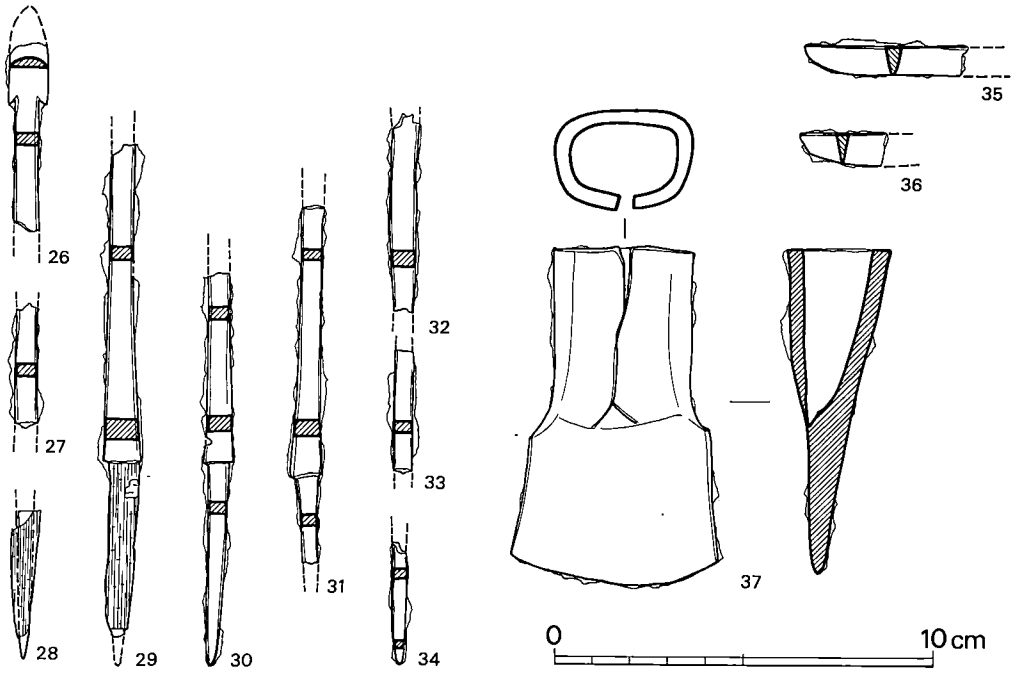


第 200 図
Ｃ－35出土鉄刀
実測図（1/6）

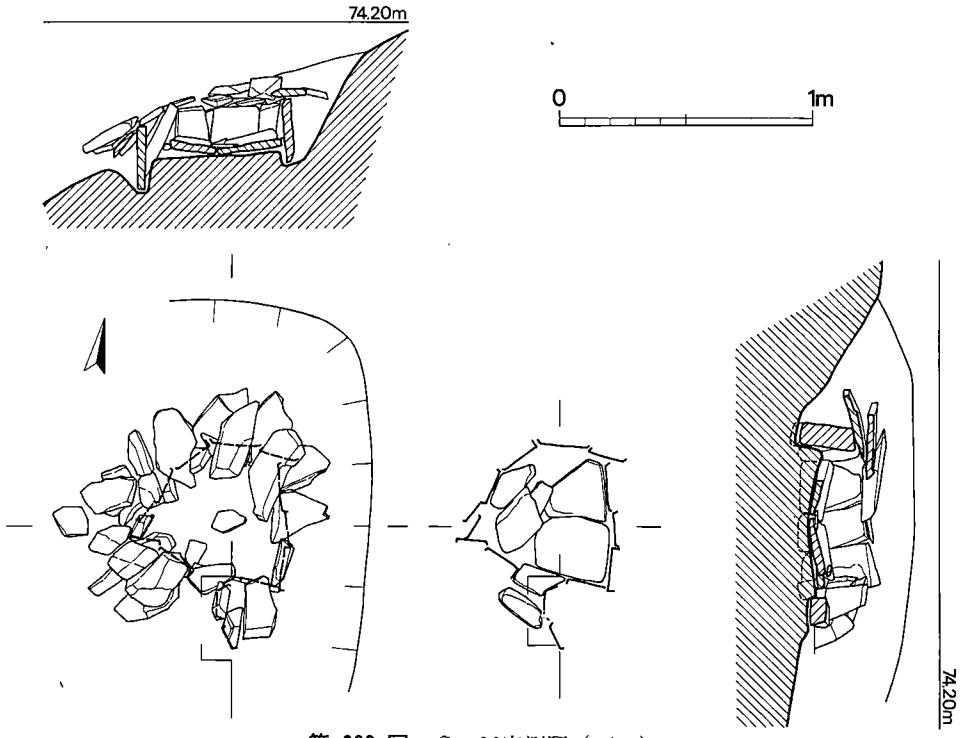
以上のＣ－35には，鉄製武器類が多く副葬されていた。Ｃ－14例と類似する太刀，多量の鉄鏃などの攻撃用武器は，この群の石室中でも最有力者の副葬品内容を呈している。構造面からみて，初期に近い時期の族長墓であろう。（中間）



第 201 図　C－35出土鉄器実測図①（1/2）



第 202 図　C－35出土鉄器実測図②（1/2）



第 203 図　C－36実測図（1/30）

36．C－36

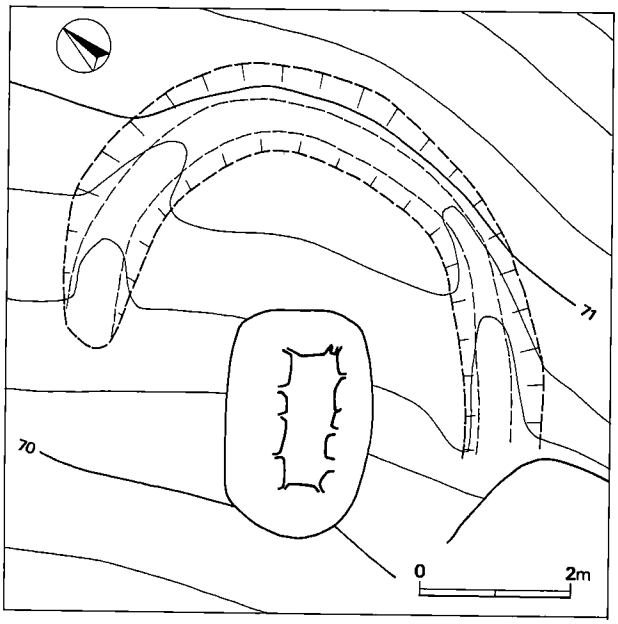
本墳はC－37・38の東側で，標高74mに位置する。盛土，周溝は認められない。

主体部（図版108，第203図）

本石室は，舟型タイプの極小形の横口式石室であろう。主軸はN 7°30′Eにとる。基底部石全て立ち，その上段に若干板石による積みが見られる。また，床面に板石による石敷きを行っている。内法は，玄室の長さ52cm，幅は奥で28cm，玄門部で56cm，高さは現存で15cmを測る。石室全長は80cm程である。赤色顔料は認められない。石材は全て片岩である。

遺骨，副葬品は皆無である。（平嶋）

37．C－37



第 204 図　C－37地山整形面実測図（1/100）

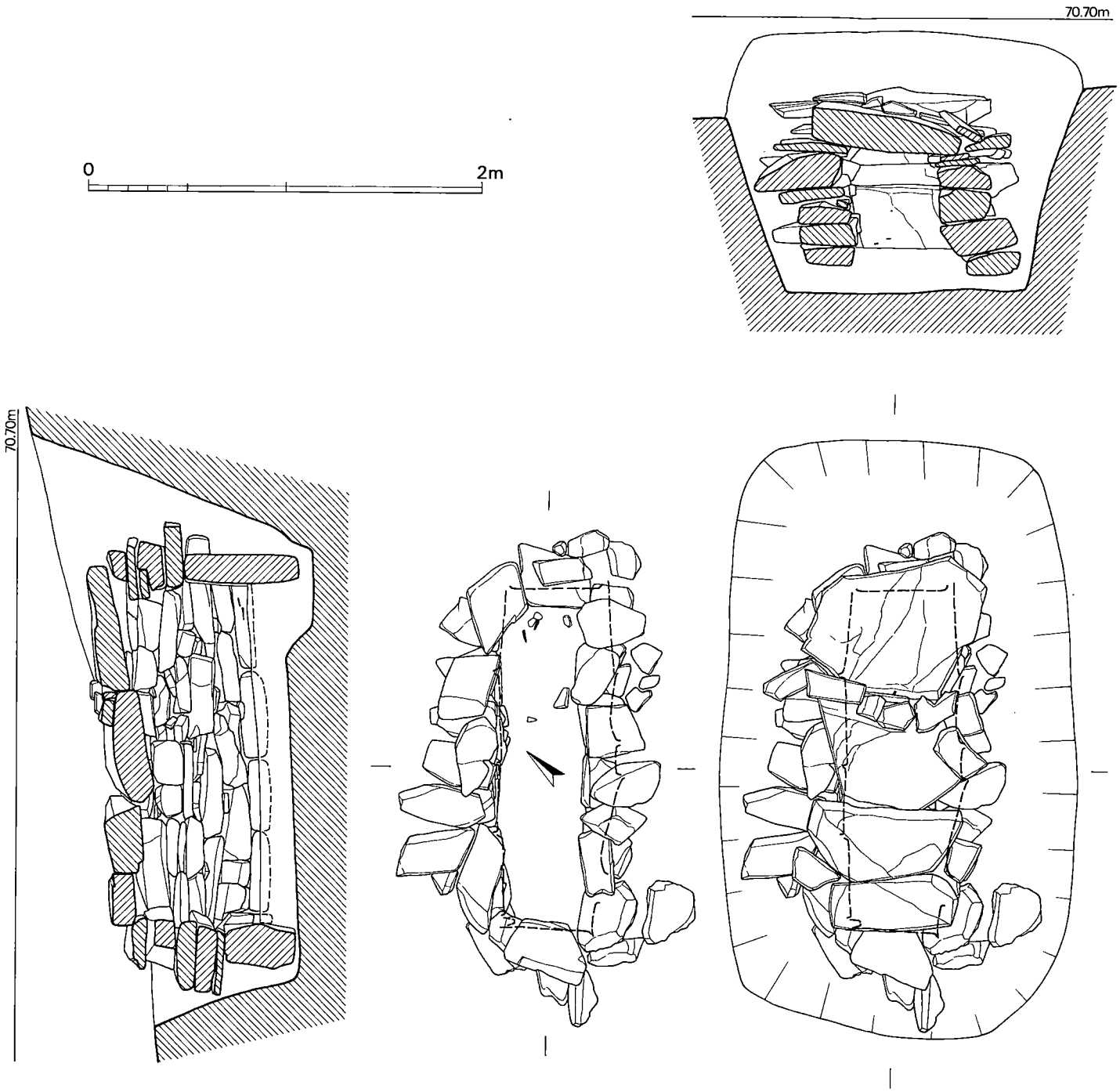
C－35・C－38の東隣の，勾配がややきつくなってきた斜面に位置する。主体部付近は標高70.5m程で，等高線に直交するように築造されている。1号竪穴住居跡よりも古い。

斜面高位側に馬蹄形周溝が巡る。（第204図）石室中心から周溝外縁まで南東へ3.1m，北東へ4.5m，北へ4.0mとなり，幅は1.1～0.8m，深さ40～20cm程である。南東側で1号竪穴住居跡が周溝を切る。

主体部（図版108・109第205図）

主軸をN48°Eにとり，頭位を北東に置く竪穴式石室である。

石室内床面の内法は，長さ1.72cm，幅は北東小口端で0.52m，南西小口端で0.45mとなる。両小口には厚手の板石を立てており，その上に4～5段の板石平積みを行う。両側壁は最下位から板石の平積みを行っている。その上下に石材選択の差はみられない。蓋石まで完全に残存しており，頭位の北東端に最大の板石をかぶせ，足位側へと順次小さくなる板石を都合4枚蓋



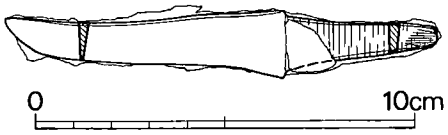
第 205 図　C－37実測図（1/30）

とする。実は，南西端にもう１枚あったが重機による表土はぎの際，除去してしまった。北東端の最大の蓋石と中央の蓋石との境目には，小板石を並べている。粘土目貼り等はみられない。両側壁の内側へのせり出しは南側で若干みられる程度で，それ程顕著ではない。

石室床面には敷石・枕石等は施されない。北東小口際のほぼ頭位右脇に当る部位に，鉄刀子１点が副葬されていた。遺骨は残存しない。

出土遺物（図版109，第206図）

鉄刀子　全長11.5cm，身長7.4cm，身最大幅1.8cmを測る。鋒先寄りが端反りとなるタイプで，茎部には木質の上に縦方向の樺巻き風の痕跡がみられる。（中間）

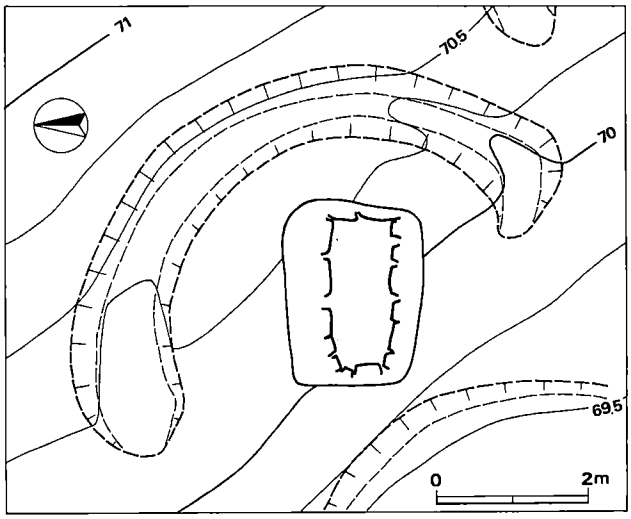


第 206 図　C－37出土鉄器実測図（1/2）

38．C－38

C－37の北西，C－39の北東に隣接している。標高70m前後の辺りの，勾配がいくらかみられる斜面に営まれる。

周溝は東半の斜面高位側に，馬蹄形に掘削されている（第207図）。石室中心から周溝外縁まで，東側で３m，北側で3.9mとなり，幅は1.3～0.9m，深さは0.25m程である。



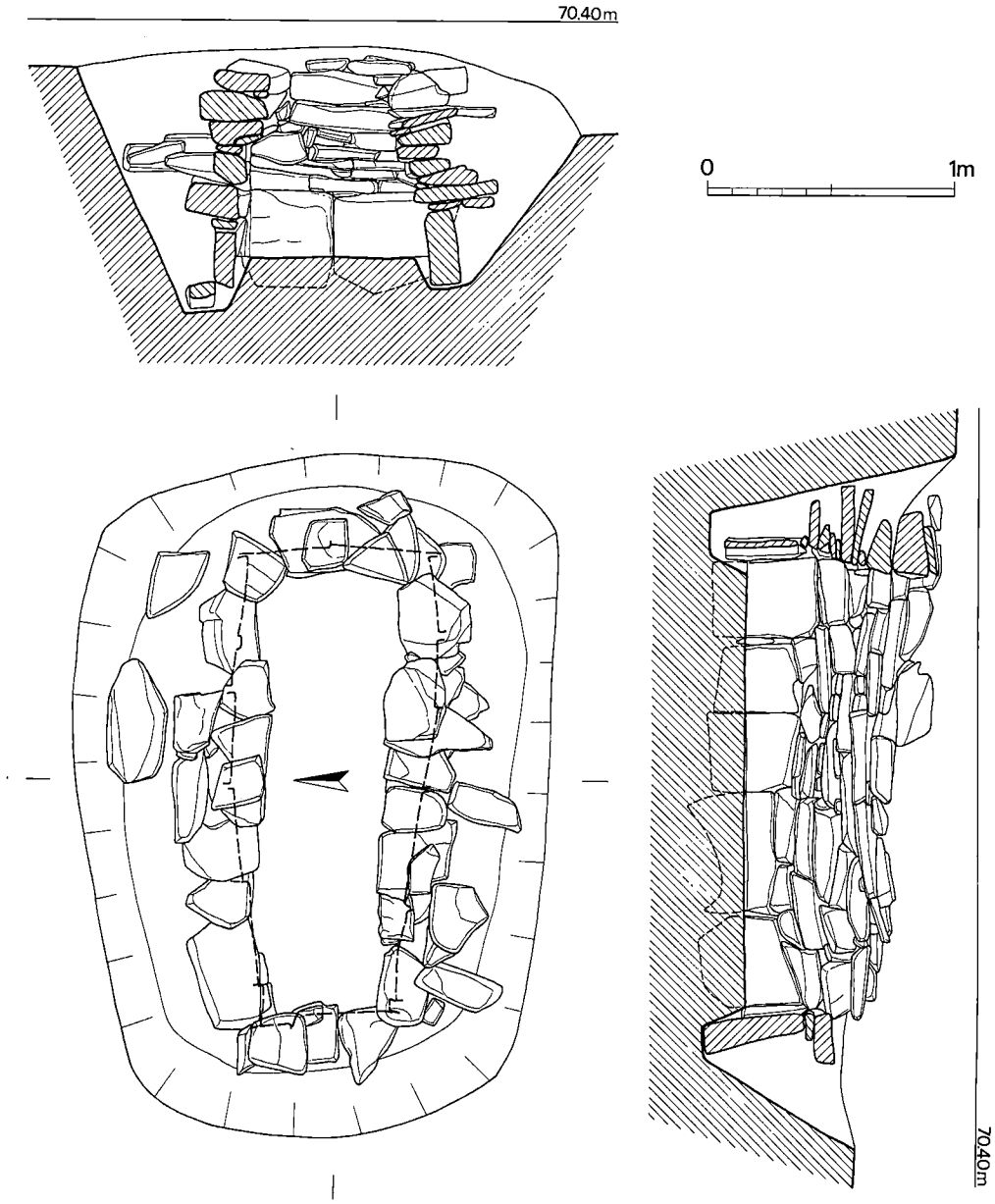
第 207 図　C－38地山整形面実測図（1/100）

主体部（図版109・110，第208図）

主軸をN89°45′Eにとり，東に頭位を置く石棺系竪穴式石室である。

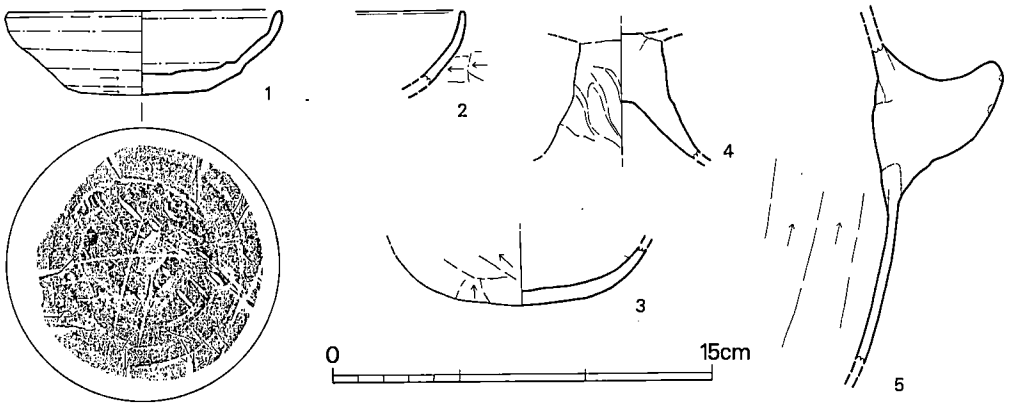
石室床面内法は，長さ1.9m，幅は東小口際で0.73m，中央部東寄りの最大幅部位で0.82m，西小口際で0.52mと，両側壁胴張りのやや幅広の舟形プランに近い形状をなす。

両小口部の最下段は，各々２枚の板石を直列して立てており，両長側壁では南壁で板石を縦長に立てるものが多く，北壁では横位に低く立てるものが多い。全体として，腰立石の上端は両小口部も含めて大略揃っている感が強い。これは既述のC－34の様相と良く似通っている。



第 208 図　C－38実測図（1/30）

また，東小口部の立石上には８段の板石平積みがみられ，最下部立石の壁面全体の高さに対する割合は½以下であり，腰石的性格を知ることができる。ただこれらは未だ薄手の板石であり，C－18のような舟形タイプとは幾らか趣が異なる。また，小口部に２枚の立石を用いることはC－９などの幅広タイプに近いとも言える。石室内の内側へのせり出しは，平積部分全て



第 209 図　C－38出土土器実測図（1/3）

にみられ，全体に持ち送りの傾向が目立つ。

蓋石は残らないが，現存積石最上端から床面までは0.75mと深く，C－18に類似する。

床面には枕石・敷石等みられない。石室内副葬品・遺骨等も皆無である。ただ周溝内埋土中から土器小片が幾らか出土したが，孰れも本C－38の供献品とは見做し難い。

出土遺物（第209図）

須恵器杯（1）口径10.9cm，器高3.2cmの蓋身逆転して身となる可能性の強いタイプである。2号墳出土須恵器分類のⅢ類にあたり，7C前葉代の所産である。底外面は右廻りの回転ヘラ削り，サの字形のヘラ記号がみられる。

土師器椀（2・3）2は薄手の未だ内湾しないタイプで，外面には手持ちヘラ削りが施される。3は底部片で，未だ大型タイプにはならないと思われ，外面には手持ちヘラ削りかと思われる痕跡が残る。内面は丁寧なナデで平滑である。

土師器高杯（4）脚柱径3.2cmと小さく，充実するタイプである。全面磨滅するが，外面には指によりシボリ風の凹凸がみられる。

土師器甕（5）把手部分で，胴部内面はヘラ削り上げ，外面は磨滅するが，ハケではないようである。把手は器壁に挿入されるタイプで，全体に小さめである。把手端外下面に2点の浅い凹点を付けている。全体に器壁薄く精製品であろう。

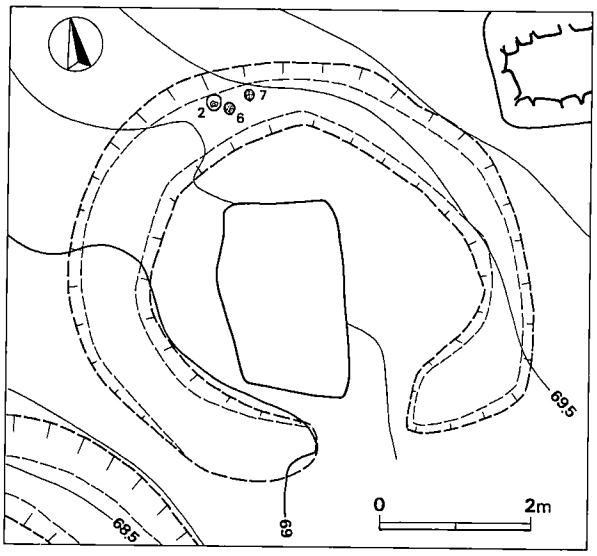
以上のC－38は，上述の如く石室構造に於いて，その床面プラン・規模，壁面構造等，他の石棺系竪穴式石室とは趣を異にする。そして，それは，C－9のような幅広タイプとC－18のような舟形タイプ両方の特徴を見出し得る。更にC－34のような箱式石棺的状況にも近い。これらのことから，このC－38は幅広タイプのものが，箱式石棺的構造の影響下に舟形タイプへ

へ移行する段階であると考える。

遺物は周溝出土の破片のみであるが，供献品とみられるものは無い。須恵器杯1は明らかに後代の所産であり，このC－38の斜面上位に占地するK-1・C－42・C－36等に関する遺物と考えられる。土師器類はそれ程新しいものはみられず，把手付甕5なども古いタイプではないかと考える。これらは少なくとも5C後半以前の所産であり，本石室築造時に関する遺物と考えられる。

（中間）

39．C－39



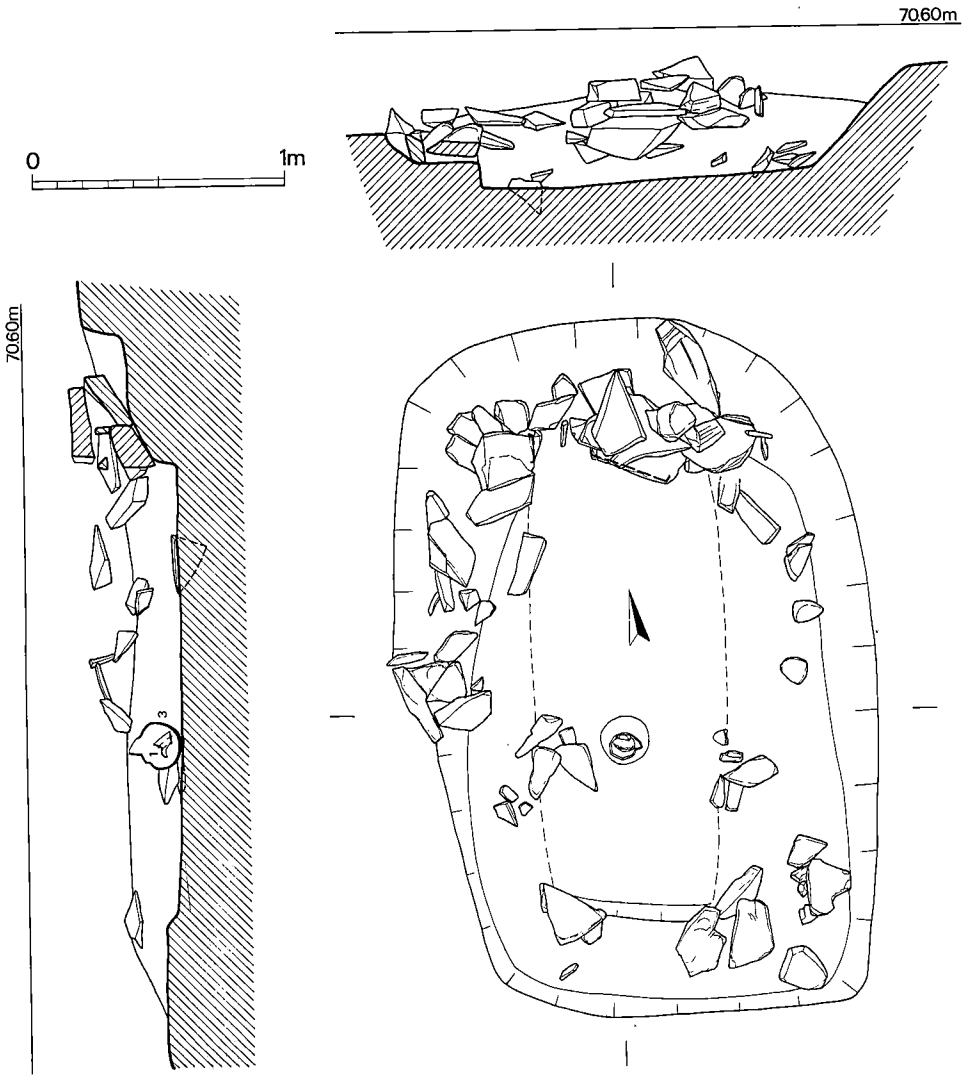
第 210 図　C－39地山整形面実測図（1/100）

8号墳の北東側，C－38の南西側に挟まれた位置に築造されている。標高69～69.5mの緩斜面に営まれる。C－14などと同様に，主体部は里道にかかっており，大きく破壊されていた。

主体部周縁をほぼ円形に巡る周溝が確認された（第210図）。南端は1.2m間を掘り残して陸橋としている。主体部中心から周溝外縁までは，西側で2.9m，北側で3.3m，東側で3.3mとなり，幅1.2～0.7m，深さは20cm前後と浅い。周溝北側底面には陶質土器瑯1点と土師器椀2点が並べて供献されていた。

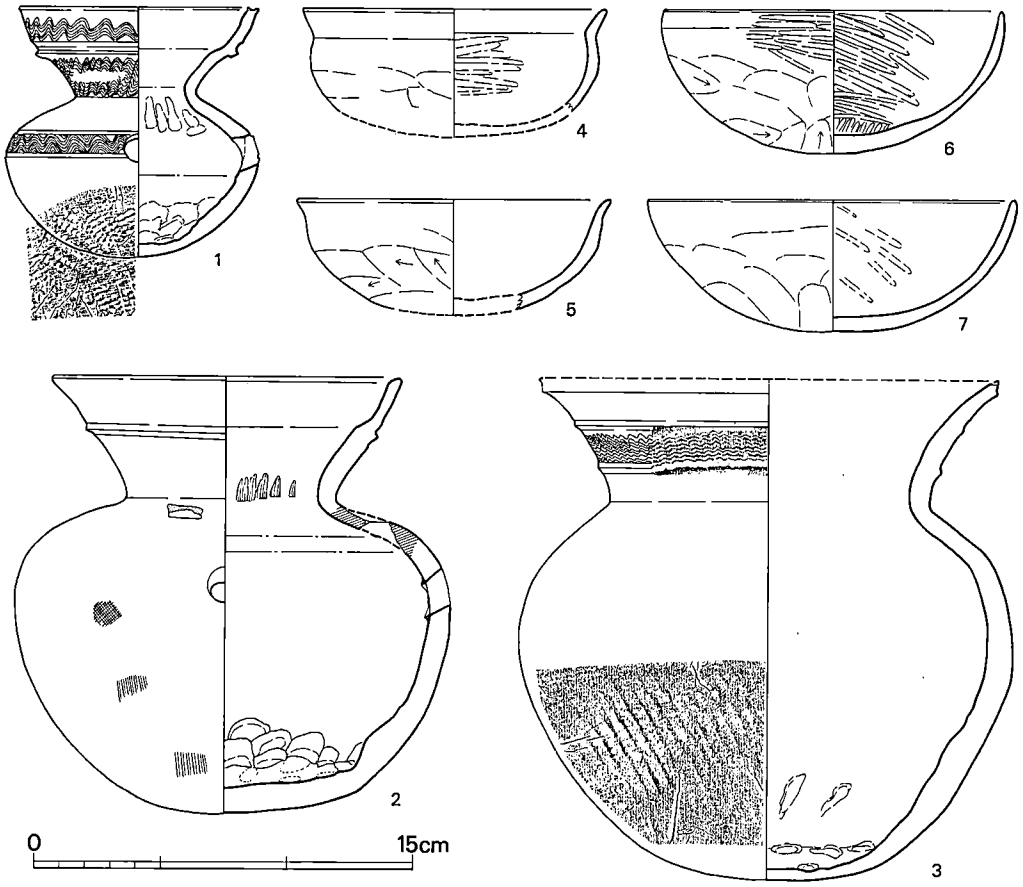
主体部（図版110・111，第211図）

主軸をN11°Eにとり，頭位を北に置くかと考えられる竪穴式石室であろうか。主体部は墓坑の確認すら難しいほど攪乱が著しく，石室内副葬土器も後述する如く，異常な出土状態であった。多量の攪乱された石材を除去して石室確認を行ったが，図示する如く，確実な積石は北小口部から北西壁の極一部のみであった。これからみると，小口部分も最下段から平積みを行う竪穴式石室の可能性が高い。ただ，最下部平積みから更に低く床面が下がる傾向がみられ，一段素掘りの上に壁を積むタイプかとも考えたが，明確ではない。敷石その他の諸施設も全く不明である。



第 211 図　C－39実測図（1/30）

石室中心部に陶質土器壺が，更にその中に初期須恵器瑰大片が入れられた状態で出土した。壺は地山面に着いており，この破壊攪乱された石室に於いて異様であった。これらの事から，当初石室内に壺が副葬されており，やや年代が下降した時期に最使用の目的なのか，攪乱を受けて須恵器瑰が壺の中に入れられて置かれたものと考える。これらの事情は，周溝内供献の土器が当初の一括品であり，石室内壺と同時期を示し，須恵器瑰が明らかに後代のものであることからも，首肯できる。



第 212 図　C－39出土土器実測図（1/3）

出土遺物（図版111，第212図）

陶質土器壺（3）口縁最上端を欠くが，口唇外面は僅かにへこみ，頸部の極めて低い2条の凸帯間に，振幅の狭い櫛描波状文（9本歯）を施す。底部は安定してすわる平底風丸底で，胴中位より僅か下位までの内外面は回転ナデ，外面の下位から底部にかけては，太い平行条線状叩目を施す。胴内面下半は斜位のナデツケ状，底内面は凹部多く未調整のままである。胎土に微細な石英・雲母粒をいくらか含む。焼成は軟質で灰白褐色を呈する。器壁が底部を除いて全体に部厚い。

陶質土器瓶（2）周溝内供献品で，口径13.8cm，器高17.2cm，胴部最大径17.2cmを測る。肩が張り，安定する平底状をなす。胴部円孔の反対側の肩部に，焼成後の穿孔がみられる。意図的なものであろう。胴部外面下位は平行条線状叩きの上をナデ消しており，底外面は手持ちヘラ削りの上に雑なナデを施している。内面下半は雑な斜めナデ上げ状で，凹凸かなりみられる。

底内面は特徴的な上方からの棒状工具による突き圧痕がみられる。頸部内面の最も内側に出た部分に，上下方向の擦痕が認められ，底内面の突き圧痕と関連するものと思われる。胴部円孔の右下方には，経緯1cmに11本前後の布目圧痕がみられる。布による回転ナデが知られる。胎土に粗石英粒僅かと，細石英粒等をかなり含む。焼成堅緻で，肩付近は灰かぶりしている。淡青灰色～灰黒色をなす。全体に鈍い感じで，器壁が部厚く，非常に重く安定している。

須恵器瓹（1）壺3の中に入れられていたもので，胴部下半の½弱を欠損する。口径9.4cm，器高9.9cm，胴部最大径10.0cmの小型瓹である。口縁上端凹状につくり，各部位ともシャープである。繊細な浅い櫛描波状文を施す。底部は丸底で，外面には格子目的な叩目を施し，底内面は，あて具痕でも棒突き痕でもない未調整的な凹凸状のままにしている。胎土精良，焼成堅緻で，口縁～頸内面・胴部外面上半は灰かぶりで淡灰色，他は淡青灰色をなす。

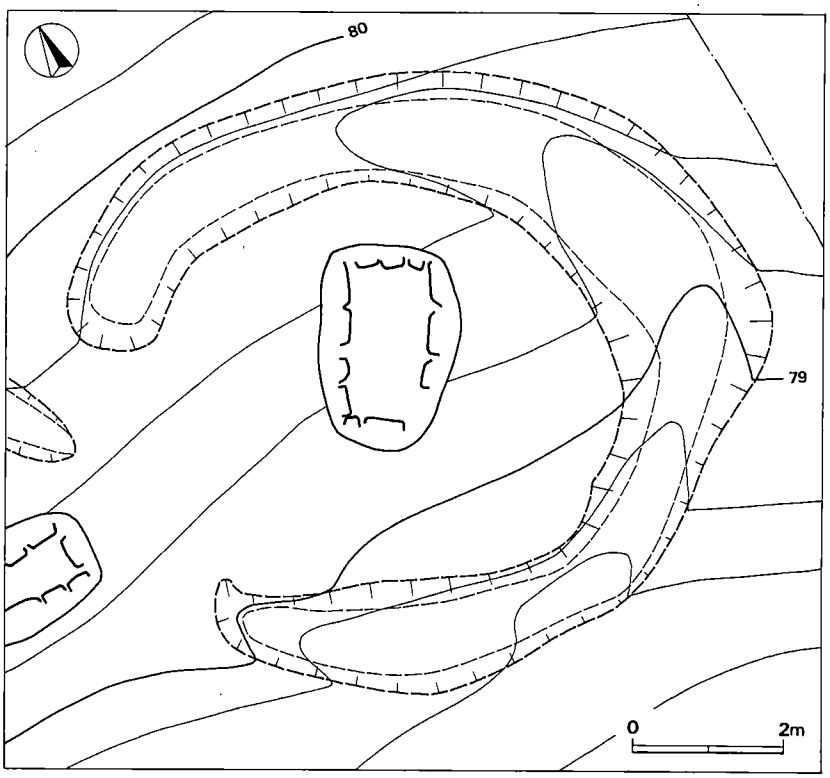
土師器椀（4～7）4・5は主体部埋土中，6・7は周溝内供献土器である。4は口径12.0cmの小片で，内面には横位ヘラ磨きが施され，外面は手持ちヘラ削りかと思われる。5は口径12.5cmの小片で，底外面は手持ちヘラ削り，内面は丁寧なナデが施される。6は口径13.3cm，器高5.6cmを測る。口縁外面が僅かにへこむ。内面から外面上位には，横～斜位の雑なヘラ磨きが施され，体部外面はやや磨滅するが，手持ちのヘラ削りを施す。7は口径14.6cm，器高5.1cmの，浅めの皿形に開くタイプである。全体に磨滅しているが，ほぼ6と同様の調整であろう。

以上のC－39出土土器について検討してみよう。1の須恵器瓹は胴部最大径位がまだ上位にあり，口径も胴最大径よりも小さく，口唇上端面も内傾していない。以上の諸特徴から陶邑Ⅰ型式第3段階併行期のものと考えられる。陶質土器3の壺はやや短めの口頸部，振幅の小さい櫛描波状文，やや肩の張る胴部の器形等，池の上Ⅰ式に近い。しかし，口唇部の形状等からみると池の上Ⅱ式的傾向をみせる。陶質土器2の瓹は肩の張る器形，厚手で稚拙なつくり等，古い傾向をみせる。ただ，口縁部は内湾気味に開き，端部が内傾的であり，新しい傾向を感ずる。土師器椀4・5は口縁外反し，布留式後半期の特徴を見せる。6・7は，未だ内湾化していない類で，陶邑Ⅰ型式第3・4段階を伴うC－9出土椀より古式を呈し，池の上Ⅱ式を伴うC－23出土椀と同形態で，ハケの有無等から，幾らか本C－39例の方が新しいと言える。

以上のことから，C－39は池の上Ⅱ式を中心とした。ほぼ5C初頭前後の築造と考えられ，C－23よりは後出するものであろう。また，須恵器瓹1は，陶邑Ⅰ型式第3段階の5C前半代の中頃に近い時期のもので，後から入れられたものと考える。（中間）

40．C－40

10・11号墳から谷を挟んだ北東側に位置する。谷最奥部の尾根が下がって幾らか緩斜面とな



第 213 図　C－40地山整形面実測図（1/100）

った狭い部分を利用して，C－41とならんで築造されている。

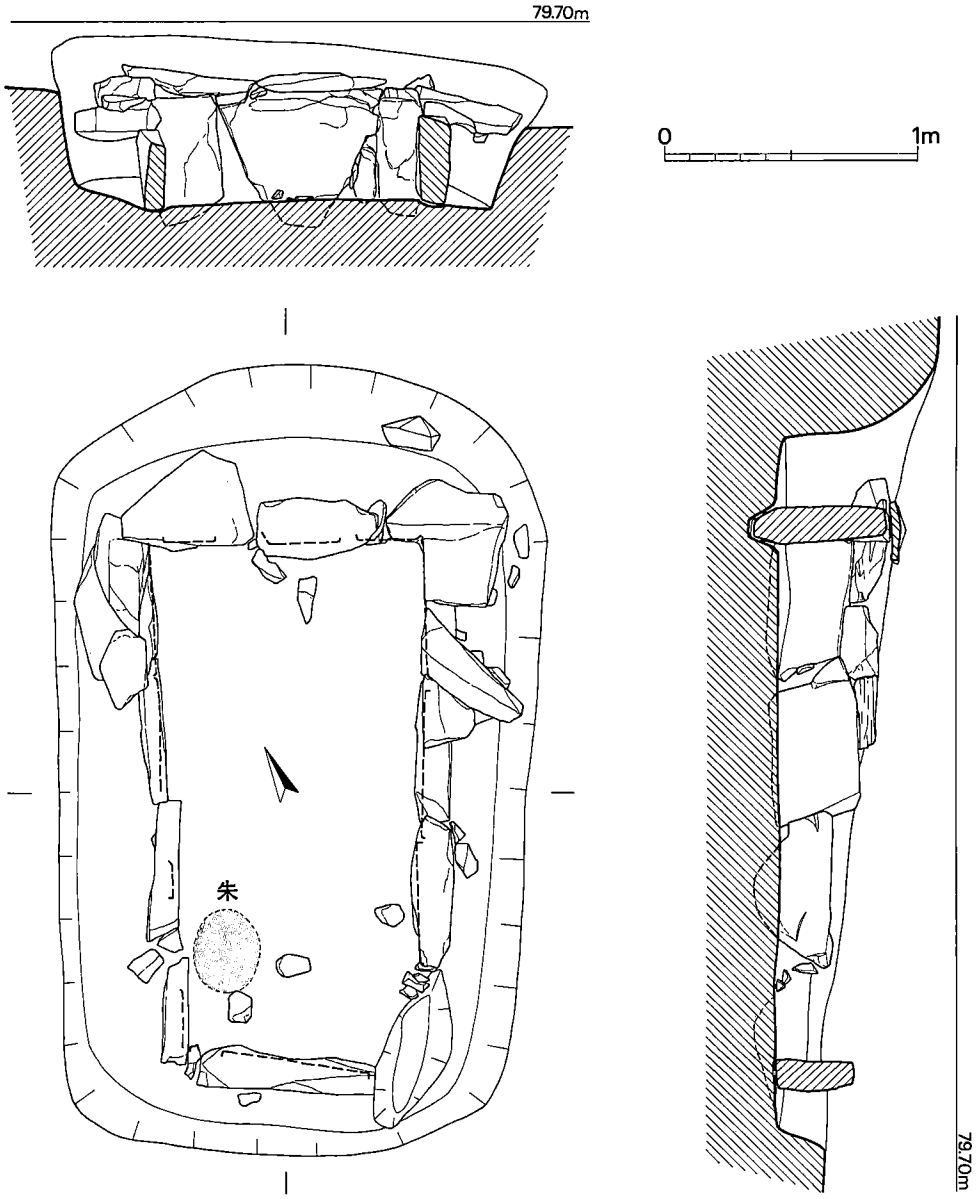
略円形の周溝が検出された（第213図）。西側の3.2mの間が陸橋部として掘り残されている。石室中心から周溝外縁までは，東側で5.1m，北側で3.5m，南側で4.6mとなる。幅は2.2～1.0m，深さ0.2～0.15mと浅い。

主体部（図版112・113，第214図）

主軸をN26°45′Eにとり，頭位を北北東にとる幅広いタイプの石棺系竪穴式石室である。

石室内床面の内法は，長さ2.05m，幅は北側小口際で1.09m，南側小口際で0.9mとなる。石室は上半が大きく破壊され，立石腰石部程度しか残存しない。北側小口壁は3板石を縦長に立てており，両側壁及び南小口部分は板石を横長に立てている。それより上には板石の平積みが施される。

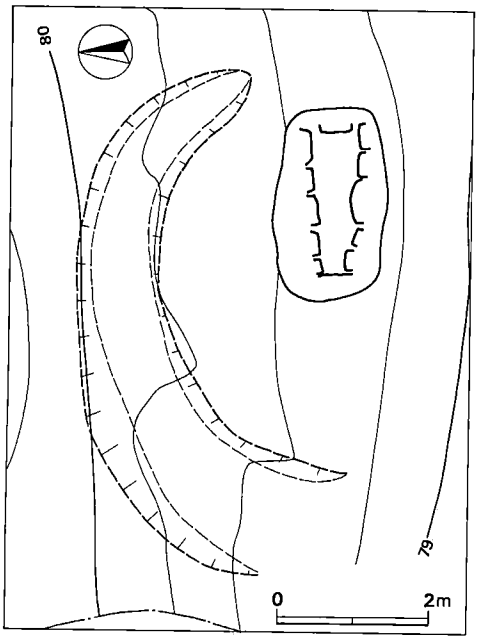
床面には敷石がみられたが，攪乱で動いているものが多く，原位置を留めるものは少ない。床面・南西隅近くに朱の散布部分がみられる。副葬品・遺骨等は皆無である。



第 214 図　C－40実測図（1/30）

以上のC－40は，C－9，C－14と同じ幅広タイプであり，竪穴系横口式石室の可能性も無いではない。しかし，前面側施設が残存せず，明確な事は言えない。孰れにしろ，C－9・C－14と同時期の5C中頃に近い後半代の築造と考えられる。（中間）

41．C－41



第 215 図　C－41地山整形面実測図（1/100）

前述のC－40の西側に隣接する位置，即ち，谷最奥部の狭い緩斜面に築造されている。北側に馬蹄形周溝が検出された（第215図）。石室中心から周溝外縁まで，北側で3.3m，北西側へ4.9mとなる。幅は1.7～0.9mで，深さは0.15m前後と浅い。

主体部（図版113，第216図）

主軸をS89°45′Eにとり，東に頭位を置く竪穴式石室である。

石室内床面の内法は，長さ1.93m，幅は東小口際で0.59m，西小口際で0.45mとなる。両小口部には厚手の板石を立てており，南北両側壁は最下段から板石の平積みを行っている。北側壁は内側へのせり出しがいくらかみられる。

石室内床面には小板石の敷石が残る。遺物は，南西端の足位にあたる部分に，鉄鏃が集中して副葬されていた。中央付近にも１本みられたが，石室内攪乱の際移動したものであろう。

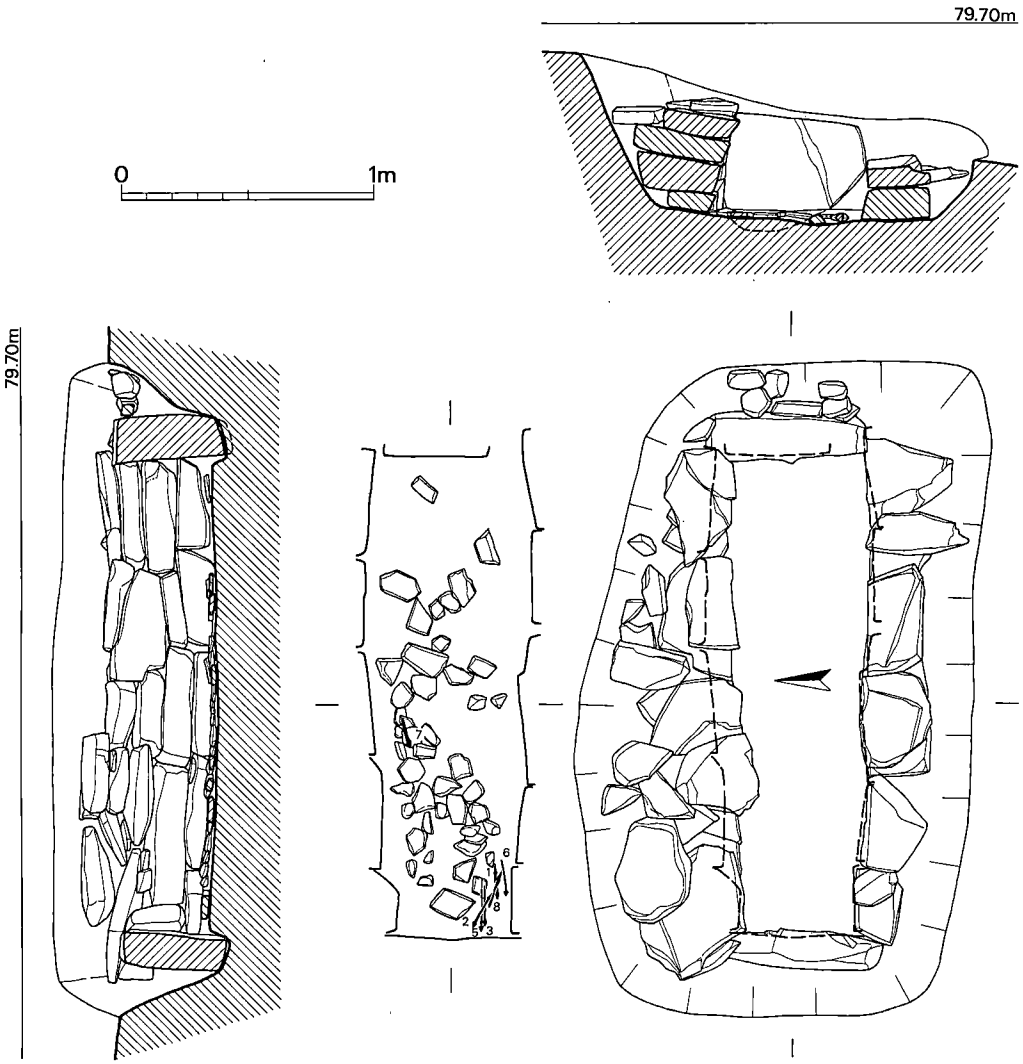
出土遺物（図版113，第217図）

鉄鏃（１～10）１は丸味を帯びた圭頭斧箭式で，細長いタイプである。箆被際よりわずかに下方から木箆と沓巻がみられる。最大幅2.3cmを測る。２～10は細根箆被鑿箭式で，９のように腸抉状につくるものもある。２・５は両丸造，６・７は片丸造である。５は全長15.2cm，茎長4.6cmを測る。９は３と同一個体と思われる。10も７の下半部と考えられる。９の身部断面は銹出著しく，明らかではない。

（中間）

42．C－42

本墳は，C－47とC－38の間に位置し，K－１の直ぐ南横に位置する。盛土及び周溝等は認められない。

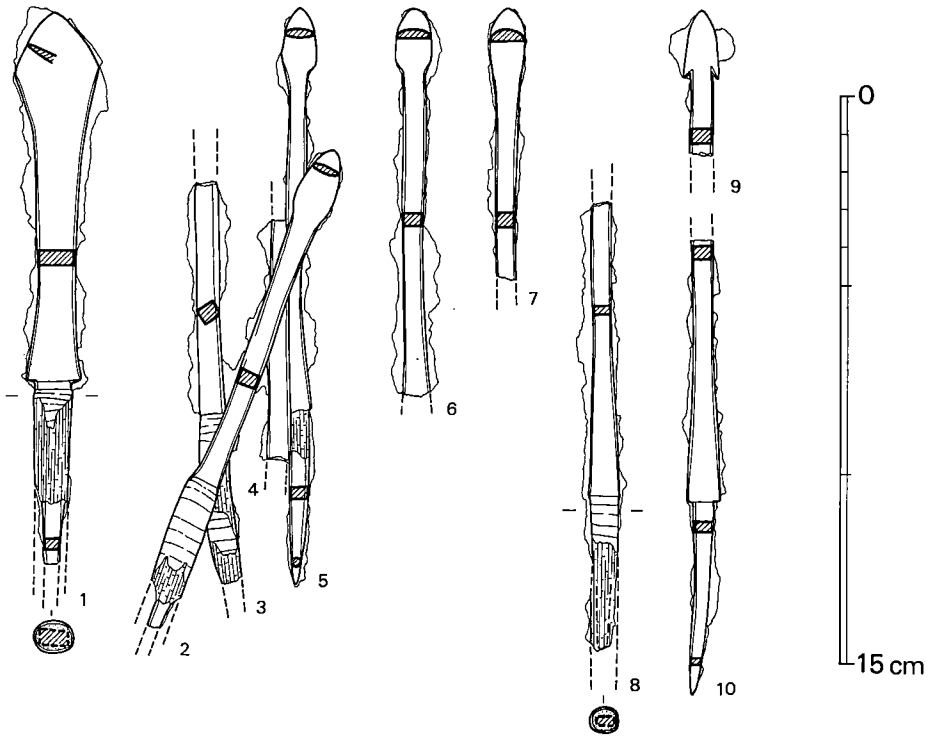


第 216 図　C－41実測図（1/30）

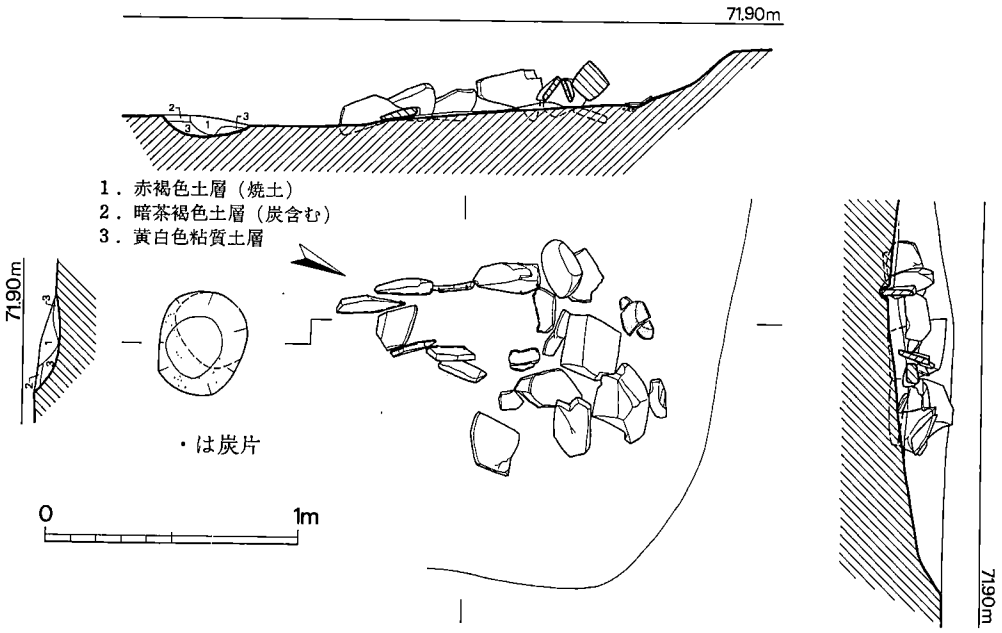
主体部（図版114，第218図）

本石室は，N66°30′Eに主軸をおく。掘方は削平が著しく確かではないが，1.6＋α×1.5＋αmの歪円形を呈すであろう。

石室は，基底部石が疎に立って残存するのみである。周囲に礫が散点している。礫も本石室の構築材であったのであろう。また，南側に小口が存在せず，東西の基底部石間に平らに石を据えている。これは框石を想起させる。本墳は横口式の小石室であろう。赤色顔料は認められない。石材は片岩である。また，石室の50cm程前面に穴があり，埋土にカーボン粒を若干含ん



第 217 図　C－41出土鉄器実測図（1/2）



第 218 図　C－42実測図（1/30）

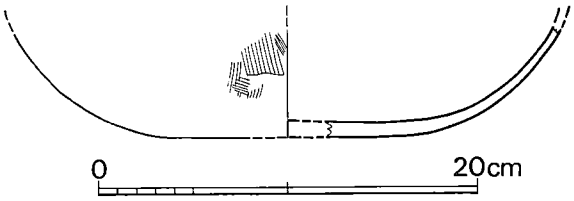
でいる。本石室の祭祀によるものであろう。

内法は，長さ60cm，幅は奥壁で22cm，開口部で16cm，現存高は10cmである。

遺骨は残存していない。副葬品は，石室北側に土師器甕片が出土している。頭部に供献されたものであろう。

出土遺物（第219図）

土師器甕片　底部～胴下位の小片である。外面ナデの後上位のみハケ目，内面ナデツケである。また，内面に半円形の押圧的痕跡があり，ヘラケズリ痕と考えられる。胎土に小砂粒を含み，焼成良。内面薄茶色，外面くすんだ薄茶～暗黒色を呈す。



第 219 図　C－42出土土師器実測図（1/4）

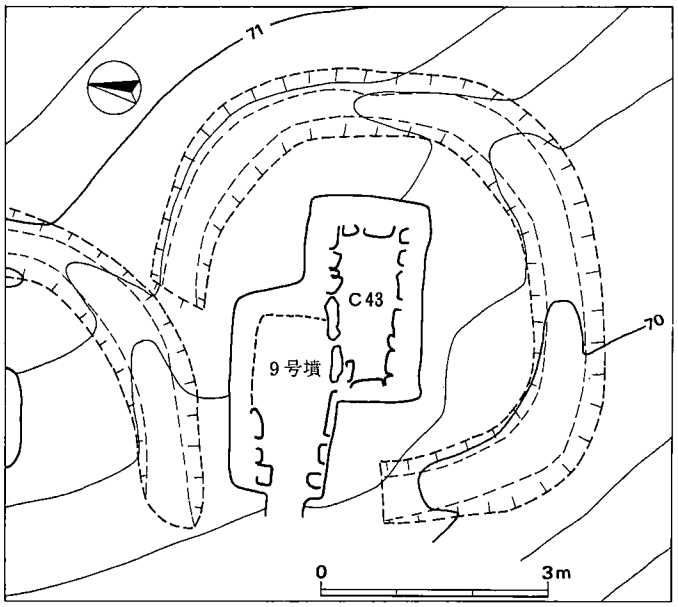
以上がC－42についてである。本石室は非常に残存状態が悪いが，頭位部掘方内に供献と考えられる土師器甕片が出土した。甕片は極めて小片であり，原形を推定するには不可能である。しかし，底部平底気味であり，直横の土師器甕棺と同時期の６Ｃ末～７Ｃ初めのものであろう。

（平嶋）

43．C－43

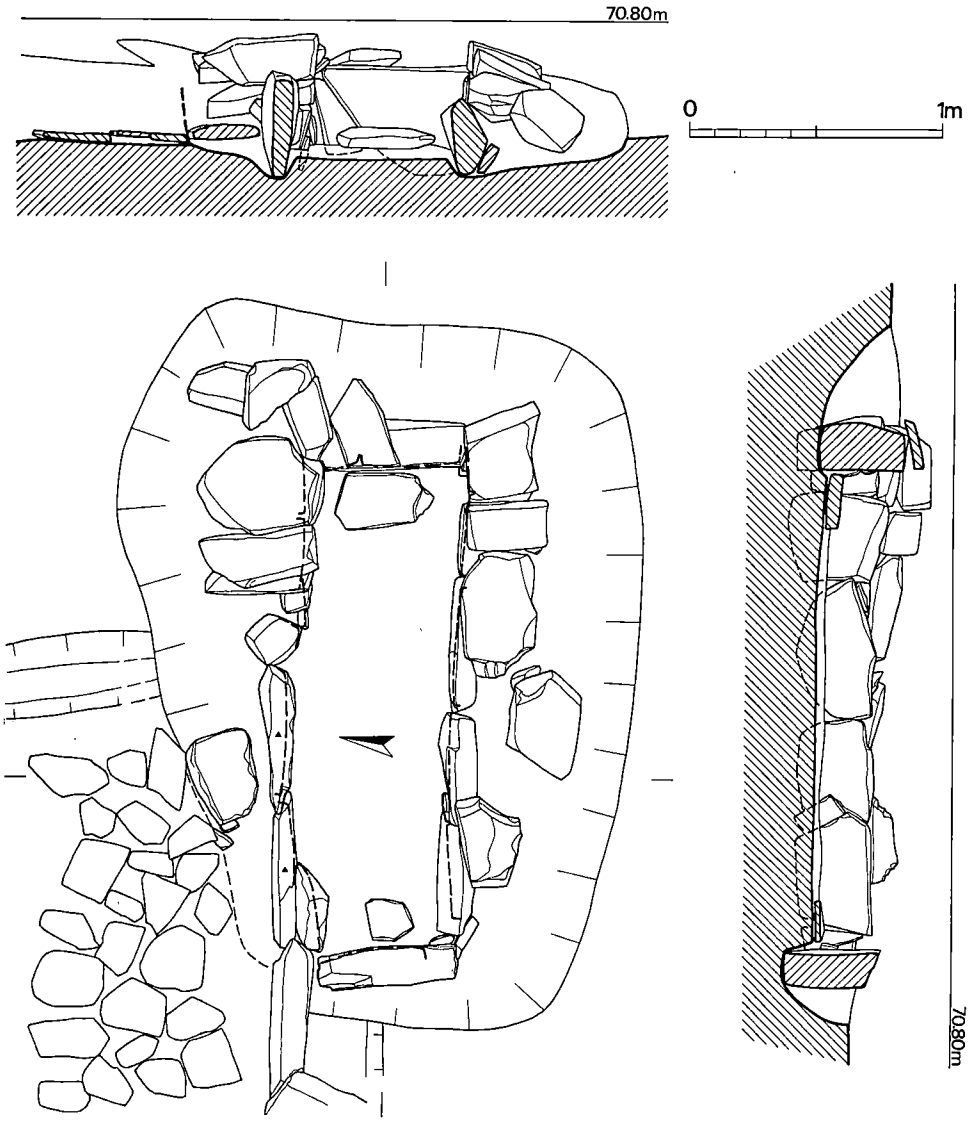
８号墳の北の方，９号墳と切り合う形で検出された。標高70.5m前後の緩斜面に位置する。

周溝は９号墳の周溝と重なるようにして全周の¾程検出された（第220図）。北西側が陸橋的なものかどうか明らかでない。石室中心から周溝外縁まで，北側で2.9m，東側で3.5m，南側で3.1mとなる。幅は1.1～0.8m，深さ最大0.



第 220 図　C－43地山整形面実測図（1/100）

3mと浅い。周溝の切り合い関係から，9号墳より新しいことが判った。

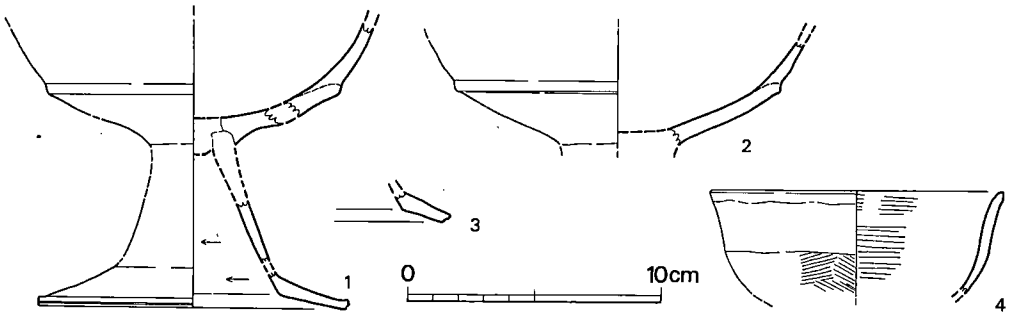


第 221 図　C－43実測図（1/30）

主体部（図版114，第221図）

主軸をN80°Eにとり，頭位を東に置く石棺系竪穴式石室である。

墓坑は北～北西側で9号墳石室を切り込んで掘られている。更に9号墳の南東隅の腰石2枚を，そのままC－43の側壁立石に利用している(図中▲印)。まさにちゃっかり石室と呼ぶべき



第 222 図　C－43出土土師器実測図（1/3）

類であろう。

石室内床面の内法は，長さ1.91m，幅は東小口際で0.66m，西小口際で0.54mとなる。やや広めのタイプとなる。両小口部には板石を立てており，南・北両側壁も板石を横長に立てている。その上端面レベルはほぼ揃っている。それから上は，板石の平積みが施される。

石室内床面には，東端に板石が1枚残り一応枕石と考えられる。西端にもかろうじて残った敷石がみられ，当初は敷石を設けていた可能性もある。

出土遺物は，副葬品や明らかな供献品は見られない。ただ，石室墓坑内埋土中より土師器片若干が出土した。

出土遺物（第222図）

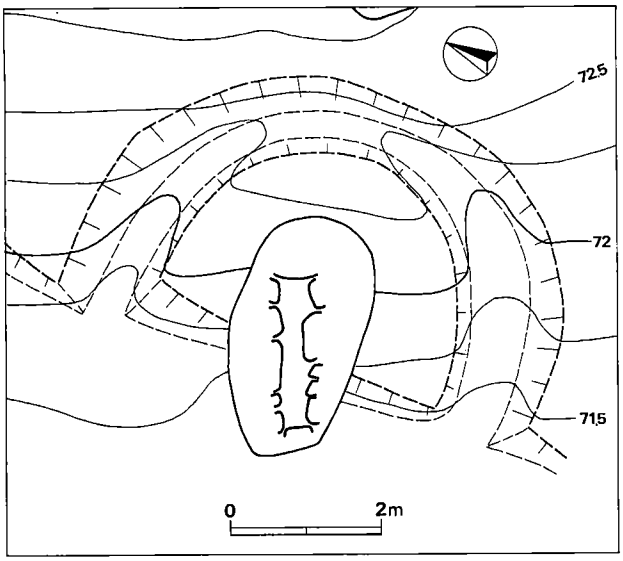
土師器高杯（1～3）1は各部小片を図上復原したものである。復原脚端径12.2cmを測る。杯部はやや丸みを帯びて開き，脚端には細い沈線を巡らす。脚柱部内面は回転方向へのヘラ削り，外面は丁寧にナデている。2は1とほぼ同器形をなし，内外面の極一部に丹塗り痕が認められる。3は裾拡がりの短い脚端部片で，端部に凹線を巡らす。

土師器椀（4）復原口径11.6cmの小型品である。口縁外端は粘土はみ出しで段をなし，内面は横位のハケ，外面上半は横ナデ，下半はハケを横～斜位に施す。

以上の遺物は，高杯は特に9号墳石室内埋土中出土のものと同一型式，或いは同一個体の可能性が強く，C－43に伴う可能性は少ない。椀4は古い様相を残すが，これもC－43の時期を示すとは考えられない。（中間）

44．C－44

本墳は23号墳のすぐ南側で，H地区丘陵裾の谷筋やや奥に位置し，地形も若干急な傾斜を示している。標高72m程に築く。



第 223 図　C－44地山整形面実測図（1/100）

盛土は認められない。けれども，南北径6.5mを測り，東側に馬蹄形を呈する周溝が検出された（第223図）。しかし，本墳の西半は里道により削平されており，同期に周溝も削平されたと考えられる。本来，周溝は一周するものと推察する。それにより，墳形を円墳と見做せば，規模は南北3.25m，東西3.7mの楕円形を呈するものであろう。

主体部（図版114，第224図）

主体部は主軸をN64°Eにおく。掘方は南北1.8m，東西2.63＋αmを測り，長円形を呈するものであろう。深さ最大で70cmを測る。東小口部で2段掘りの形状を呈するが，これは小口基底部を構築する為で基底部石の掘方と考えられる。

石室は，蓋石が東半に3枚残り，蓋の合せ目に目貼りの為に板石がおかれる。また，石室内は，蓋石同様東半は残りが良いが，西半は里道により壊されて，石室下位の部分しか残っていない。構造は，小口部が板石を立て，側壁は両側とも基底部分から平積みを行う。また，裏込めが石室中位から上半に行われる。石室内に赤色顔料塗布の痕跡が見られる。他施設はみられない。石材は全て片岩である。

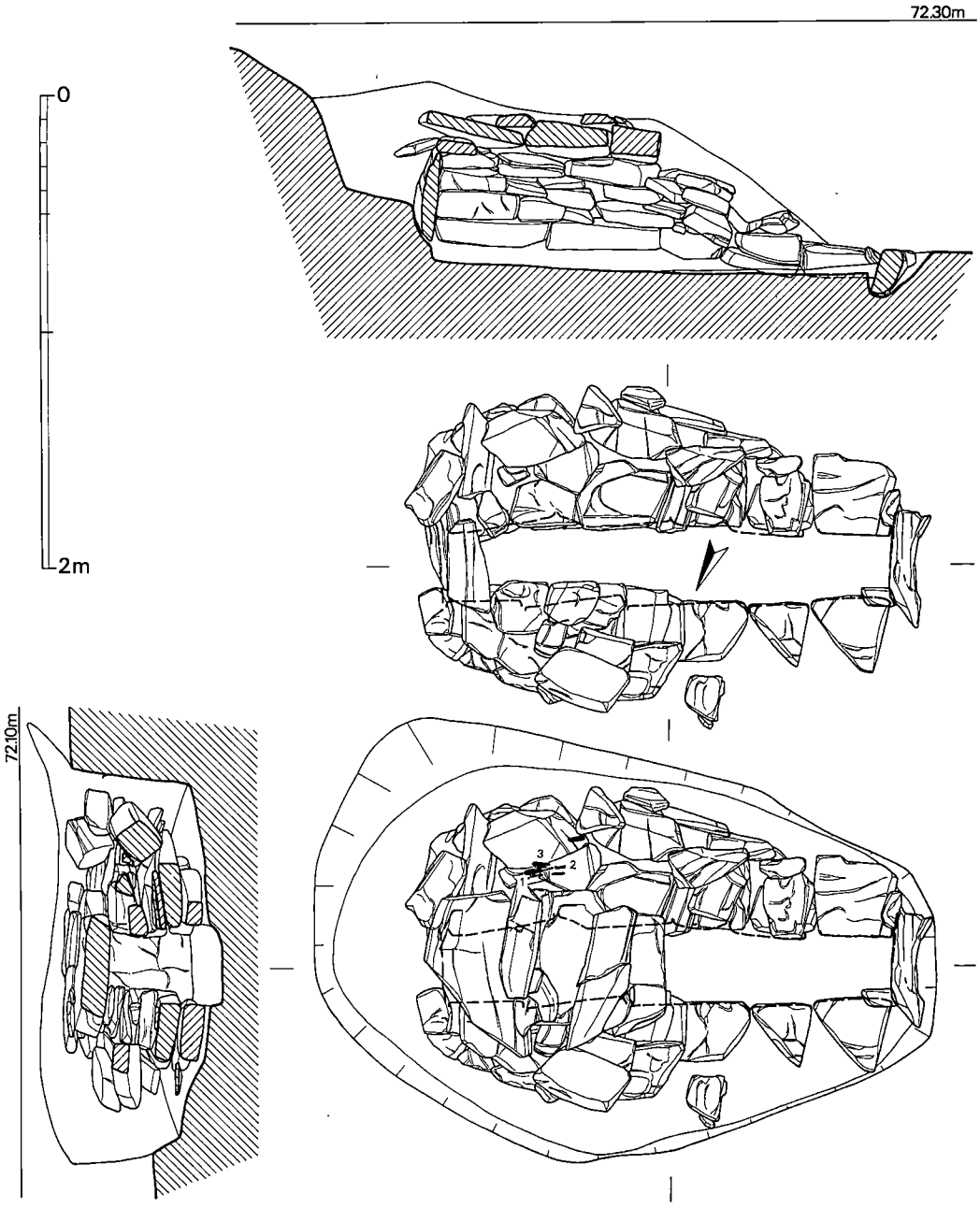
内法は，長さ190cm，幅は東側28cm，西側27cm，高さ45cmを測る。頭位は，西小口部が破壊され遺骨も枕石も無いので判然とはしない。けれども地形的に考え，東側と考える。

副葬品は，石室上の蓋石南側脇より，鉄鏃・鉄刀子が出土している。

出土遺物（図版115，第225・226図）

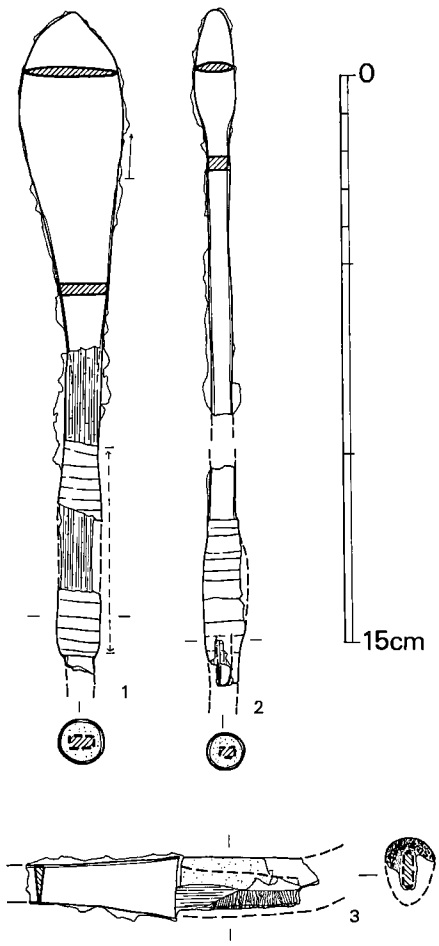
鉄鏃（1・2）1は広根両丸造柳葉式で，残存長17.5cm，身部長9cm，身幅2.8cm，身の厚さ3mmを測る。2は両丸造箆被鑿箭式で，残存長10.7cm，身部長2.2cm，身幅1.1cm，身の厚さ3mmである。

鉄刀子（3）両関を有する鹿角装の刀子である。残存長7.3cm，身背部厚さ2.5mmを測る。茎に木質の下に糸状のものが錆着している。

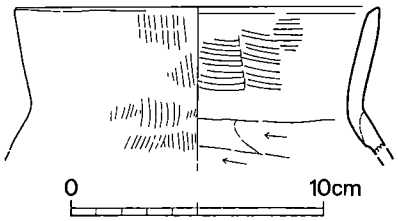


第 224 図　C－44実測図（1/30）

土師器壺（第226図）口縁から肩部の小片である。石室内埋土より出土した。内面口縁は横ハケ，頸部以下はヘラ削りであり，外面は粗く，雑な縦ハケの後口縁から頸部は横ナデを施す。また，断面に頸部で素地土の継ぎ目が見られる。胎土に粗い石英を若干，細かい砂粒を多く含む。焼成良である。内面暗茶褐色，外面煤によるものか，暗褐色を呈す。



第 225 図　C－44出土鉄器実測図（1/2）



第 226 図　C－44出土土器実測図（1/3）

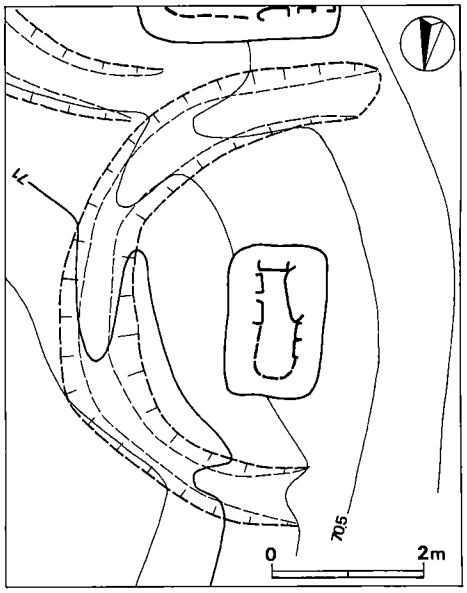
この土器は，器形・調整手法からみて，５Ｃ中頃以降のものでは無く，５Ｃ前半代のうちでも初頭に近い年代が考えられる。この年代は，Ｃ－44の石室構造と矛盾するものでなく，ほぼ築造年代を示しているものと考えられる。

（平嶋）

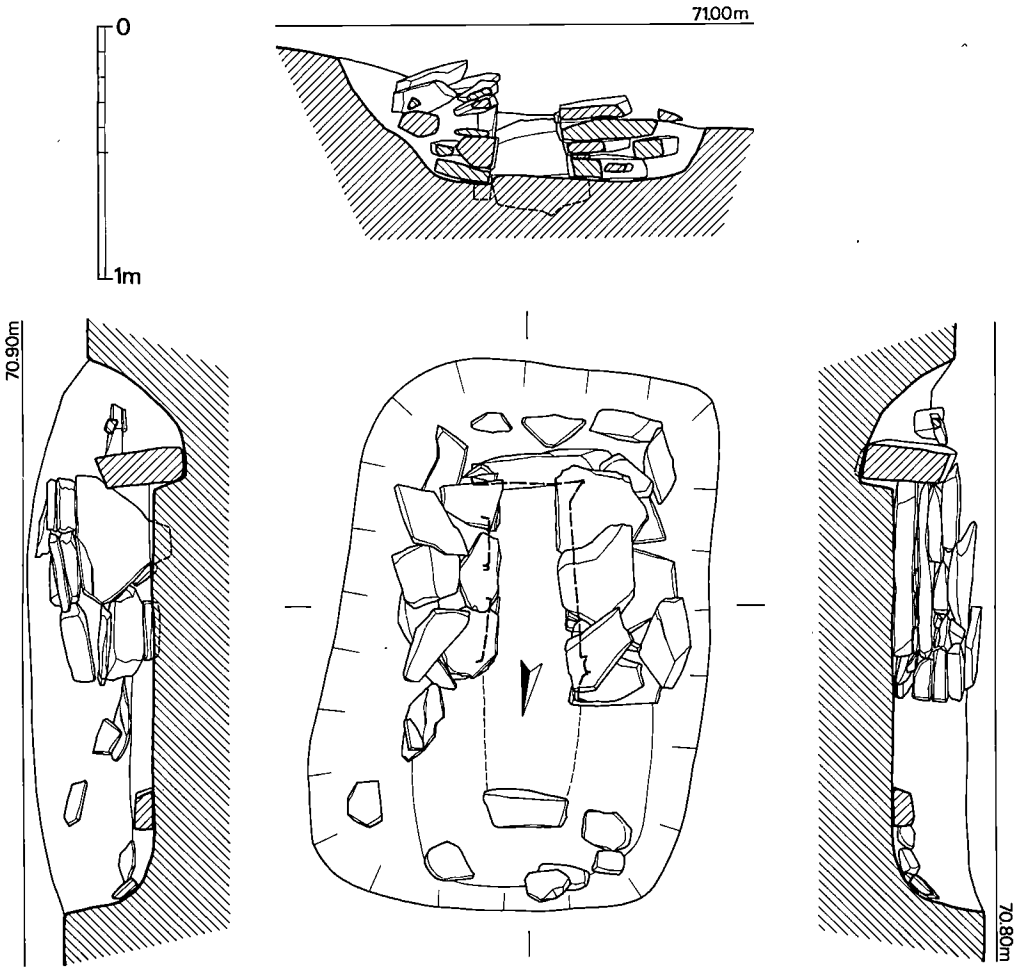
45．Ｃ－45

９号墳の北に隣接して営まれる。標高70.5m前後の緩斜面に位置する。

東側の斜面高位側に馬蹄形周溝が検出された。（第227図）主体部中心から周溝外縁までは，北側で2.7m，東へ2.8m，南へ3.2mあり，幅は1.1～0.8m，深さは0.25m弱である。



第 227 図　Ｃ－45地山整形面実測図（1/100）



第 228 図　C－45実測図（1/30）

主体部（図版116，第228図）

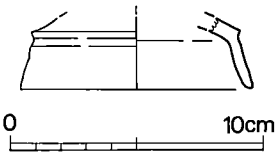
主軸をＳ９°Ｅにとり，頭位を南にとると思われる竪穴式石室である。

石室内床面の内法は，長さ1.23m，南小口際で0.33m，北小口際で0.3m以下である。全体に小規模である。石室北半と，上半を大きく破壊されている。南小口部は板石を立てており，また，東側壁南端の１枚も板石を立てている。他の残存部位側壁は最下部からの板石平積みである。また，北小口部は最下部の板石平積みが１枚残り，他の石材が無い部分も立石の掘り込みはみられず，最下部からの板石平積みであったと考えられる。裏込め・控え積みがかなりみられる。壁の内側へのせり出しが，幾らか認められる。

石室内床面に敷石はみられない。床面全体に薄く朱の痕跡が認められる。副葬品・遺骨は残存しない。北側周溝内より須恵器蓋片が出土している。

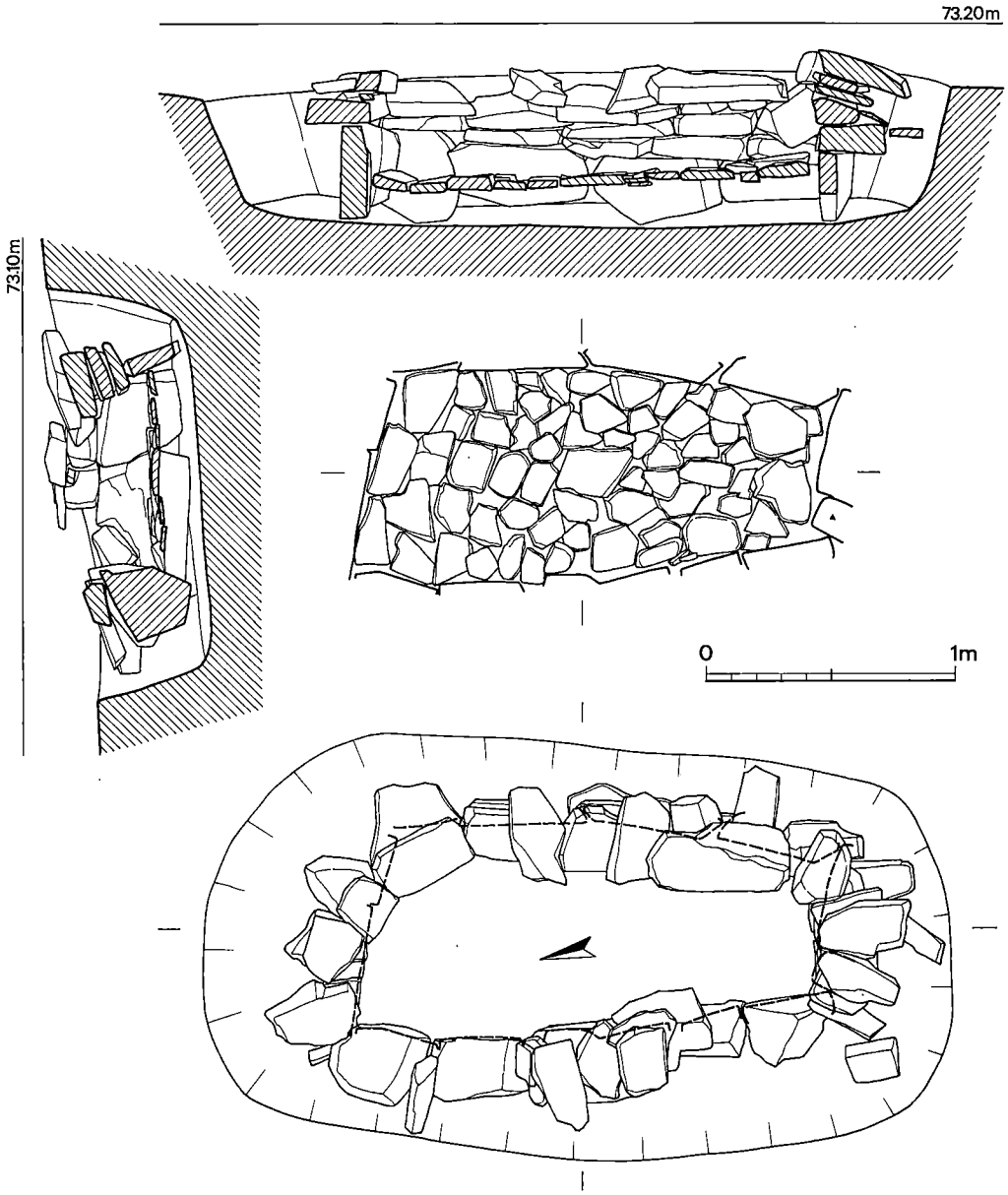
出土遺物（第229図）

須恵器蓋　復原口径9.2cmの小さなもので，壺類の蓋となるかと考えられる。外面稜はシャープで，内外面ともに回転ナデを施す。胎土精良で，焼成幾らか甘く，灰色を呈する。



第 229 図　C－45出土須恵器
実測図（1/3）

この土器は口縁端部が内側へ面をなさず，丸いままであり，



第 230 図　C－46実測図（1/30）

陶邑Ⅰ型式第２段階を下ることはない。このＣ－45が，石棺系竪穴式石室と竪穴式石室との折衷的構造を示していることからも，５Ｃ前半代の中頃の築造とされようか。　（中間）

46．Ｃ－46

９号墳の北方27mの位置の，急斜面裾と谷の間の狭い緩斜面に築造される。標高73mの辺りに等高線に平行するように営まれる。周溝は認められない。

主体部（図版116，第230図）

主軸をＮ13°15′Ｅにとり，頭位を略北に置く舟形プランの石棺系竪穴式石室である。

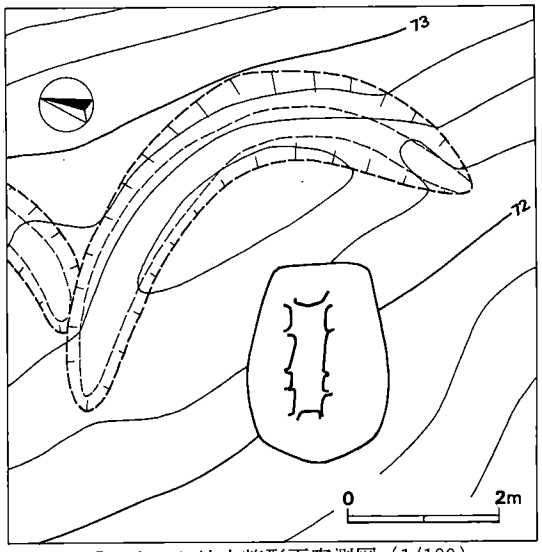
墓坑底は平坦で，その土に盛土しながら，側壁・床面を構築している。石室床面内法は，長さ1.81m，幅は北小口際で0.8m，南小口際で0.52mを測る，歪な舟形プランを呈する。北小口部は２枚の板石を立てており，南小口部は低い板石を横長に立て，その西側の隅はその間隙を充塡するように小板石の平積みを行っている（図中▲印）。東・西の側壁最下部は板石を横長に立てるが，南側では塊石を腰石状に置く部分もある。これらの板石は深く埋め込んで，床面上に出る部分はかなり低い。上位には板石の平積みが施される。壁の内側へのせり出しは，東側壁で顕著である。

床面は盛土の上に板石の敷石が密に施されている。副葬品・遺骨は皆無である。

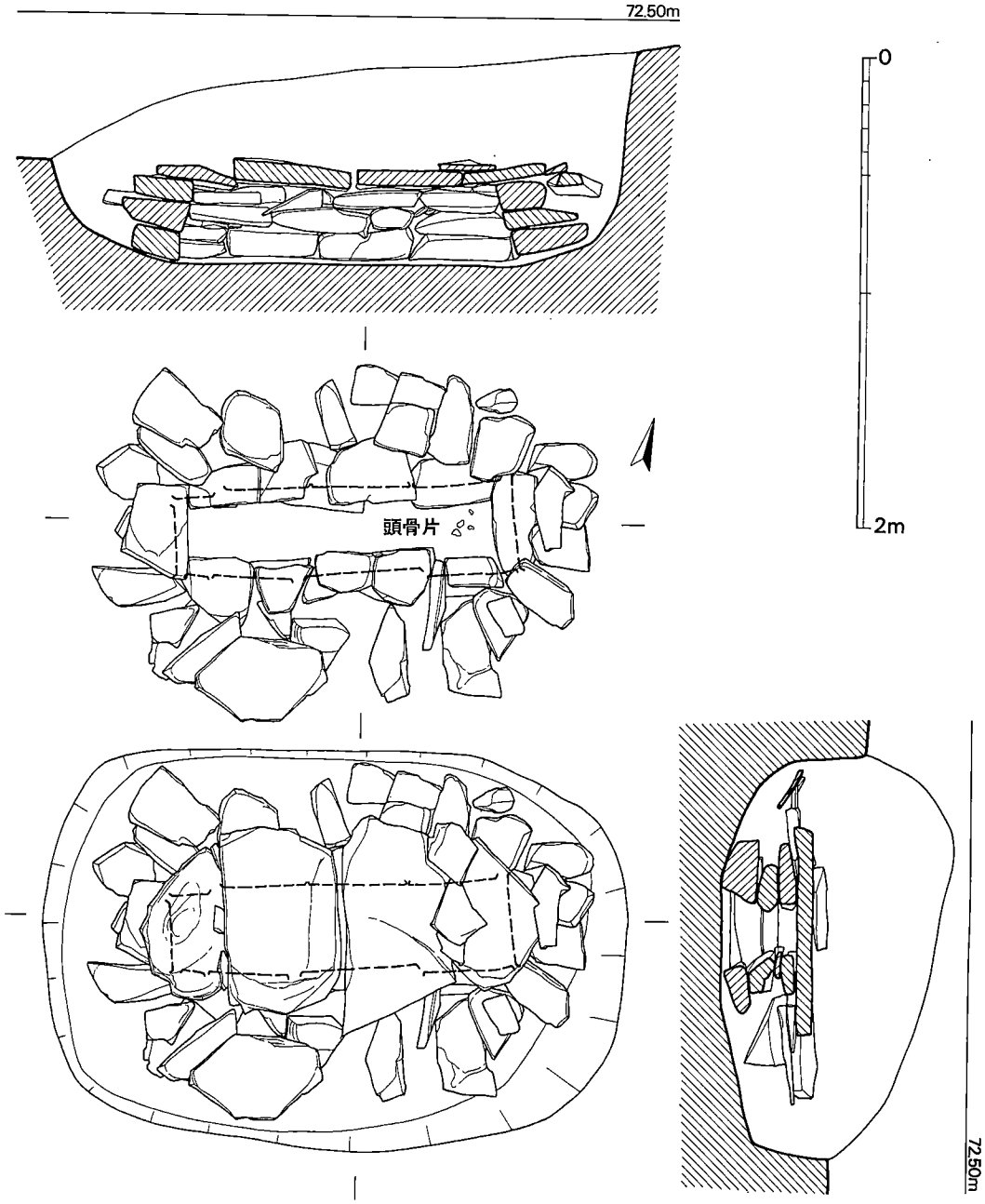
以上のＣ－46は，その床面プラン・壁体の構造等が，Ｃ－18に酷似しており，まさに舟形プランのタイプとして一型式設定し得るものである。出土遺物が無いので時期は確定出来ないが，石棺系竪穴式石室の最終末形態として把えられよう。　（中間）

47．Ｃ－47

本墳は23号墳の前面で，やや勾配が急な所に位置する。標高72.5mに築く。盛土は認められない。周溝は北東側に馬蹄形を呈し，石室中点から北へ3.3m，東へ3.8mを測る（第231図）。即ち，墳形は若干楕円気味の円墳と推定される。



第 231 図　Ｃ－47地山整形面実測図（1/100）



第 232 図　C－47実測図（1/30）

主体部（図版117，第232図）

本石室は主軸をN72°Eにおき，等高線に直交して築く。掘方は2.49×1.71mの略長方形を呈

し，深さ40～90cmで穿つ。

石室は完存している。蓋石は4枚用いて石室を覆い，蓋石の会せ目に若干小板石や小礫を用いて目貼り・目詰めを行う。室内構造は四壁ともに割合厚手の板石を用い，基底部より平積みする。赤色顔料は孰れにも認められない。東側床面に頭骨と思われる骨片が認められた。石材は片岩である。

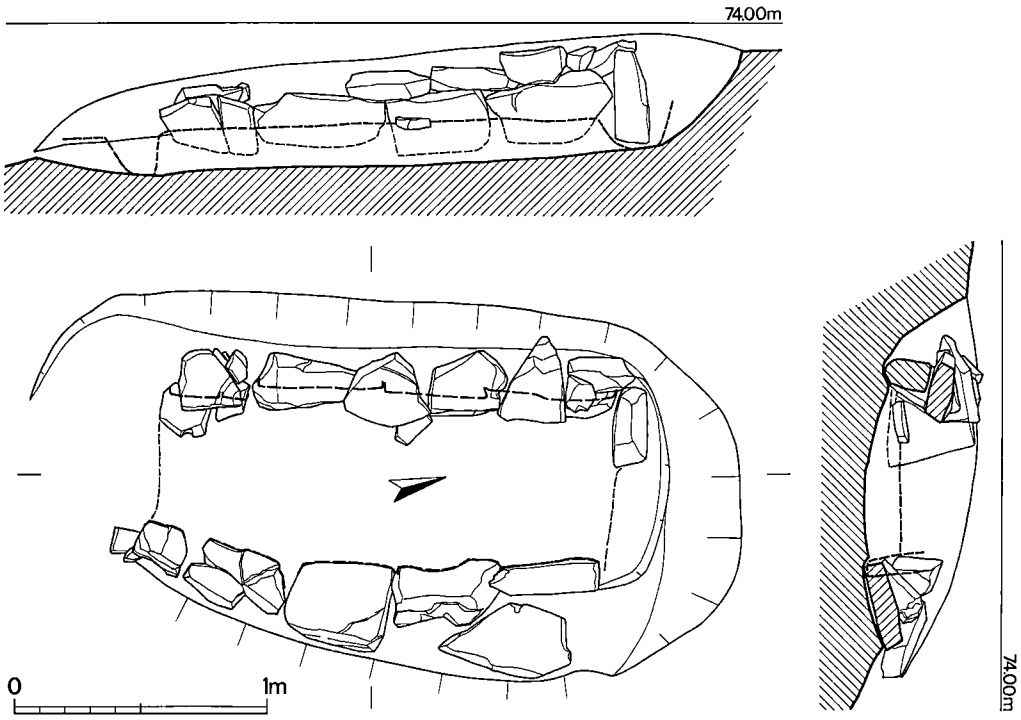
石室内法は長さ1.45m，東側幅39cm，西側幅30cm，高さ30cmを測る。

なお，人骨の鑑定結果によると，乳児である。（平嶋）

48．C－48

谷を挟んでC－46の対岸，10号墳・C－49の南側に位置する。標高74mの辺りのかなり勾配のきつくなる斜面に築造されている。周溝は検出されていない。

主体部（図版118，第233図）



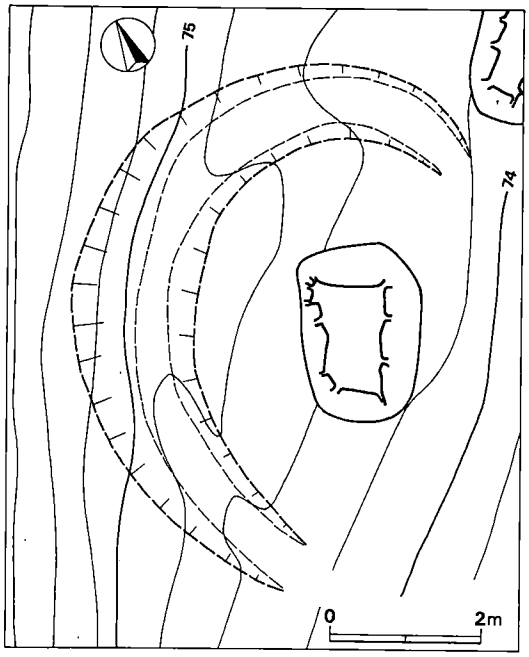
第 233 図　C－48実測図（1/30）

主軸をN15°Eにとり，頭位を略北に置く，石棺系竪穴式石室である。斜面に築造されている為，上半の殆どが破壊され，特に東壁側の基底部立石は殆ど谷側へ倒れている。斜面上位からの土砂崩れ等によるものかと考えられる。

石室床面の内法は，長さ1.8m前後，幅は北小口際で0.64m，南小口際で0.53mとなる。やや幅広いタイプである。北小口部は2枚の立石が行われたと考えられ，幅広タイプ的特徴を示している。東西両側壁は板石を横長に立てているが，孰れも低い。それから上は板石の平積みを行う。

石室床面には敷石等みられない。また，副葬品・遺骨も皆無である。　（中間）

49．C－49



第 234 図　C－49地山整形面実測図（1/100）

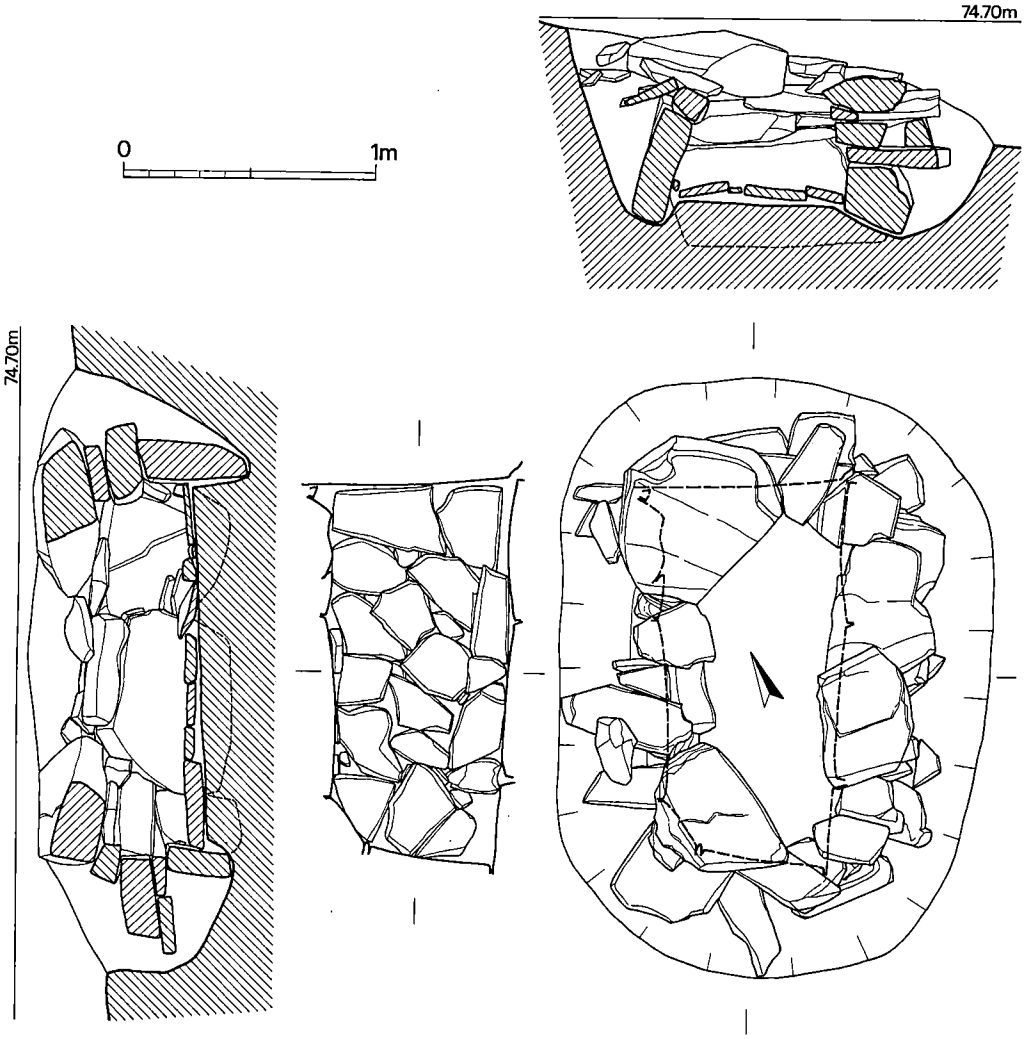
10号墳の南側の斜面に位置する。標高74.5m辺りで，等高線に平行に築造されている。斜面高位側の西半部に馬蹄形周溝が検出された（第234図）。石室中心から周溝外縁までは，北側で3.5m，西側で3.7mとなり，幅は1.7～0.7m，深さは40cm程となる。北側に直径3.5mの円形状範囲に，7C後葉代の須恵器を伴う黒色包含層があり，その南端が，このC－49の周溝北端の上にかぶっていた。この事から，本石室は7C後葉よりは古いことが判った。

主体部（図版118・119，第235図）

主軸をN25°30′Eにとり，頭位を略北に置く石棺系竪穴式石室である。

石室内床面の内法は，長さ1.42m，幅は北小口際で0.7m，南小口際で0.6mとなる。長さは短いが，幅が広めで，南西隅などは小口部から西側壁へ斜めになっており，以下述べる諸特徴からも，まさにC－18やC－46と同じ舟形タイプのやや小さい部類とされよう。

両小口及び長側壁の基底部には，部厚い板石を横長に立てるが，孰れも大きい石材である。東側壁には部厚い石を平積み的に据えたものもみられ，孰れにしろ，すべて腰石的状況が強く



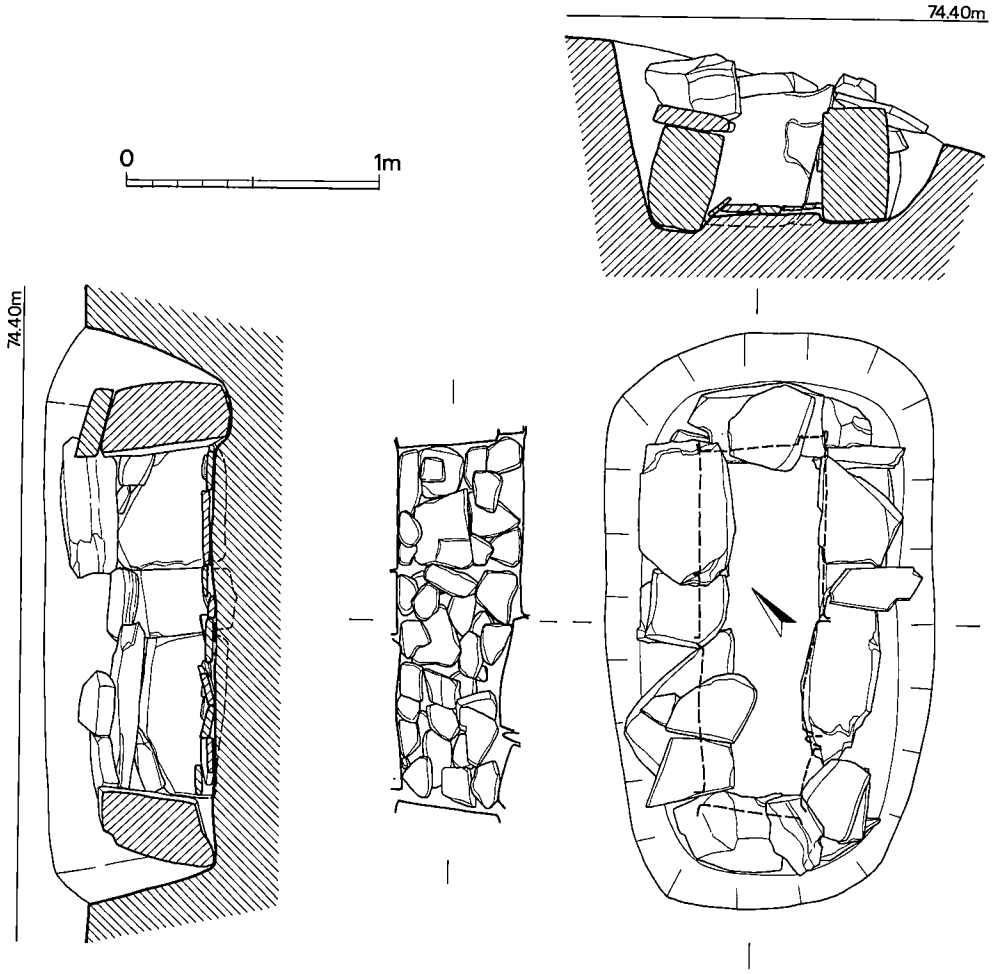
第 235 図　C－49実測図（1/30）

看取される。これらより上の板石平積み部に於いても，ひとかかえもある部厚い大きな石材をのせており，それらは孰れも強く内側へせり出すものである。

床面には大きめの板石の敷石がみられる。副葬品・遺骨は皆無である。　（中間）

50．C－50

上述のC－49の北東側，10号墳の南側に隣接する。標高74m辺りの急斜面裾の，僅かに緩や



第 236 図　C－50実測図（1/30）

かになった部分に，等高線に平行して営まれる。周溝は検出されていない。

主体部（図版119，第236図）

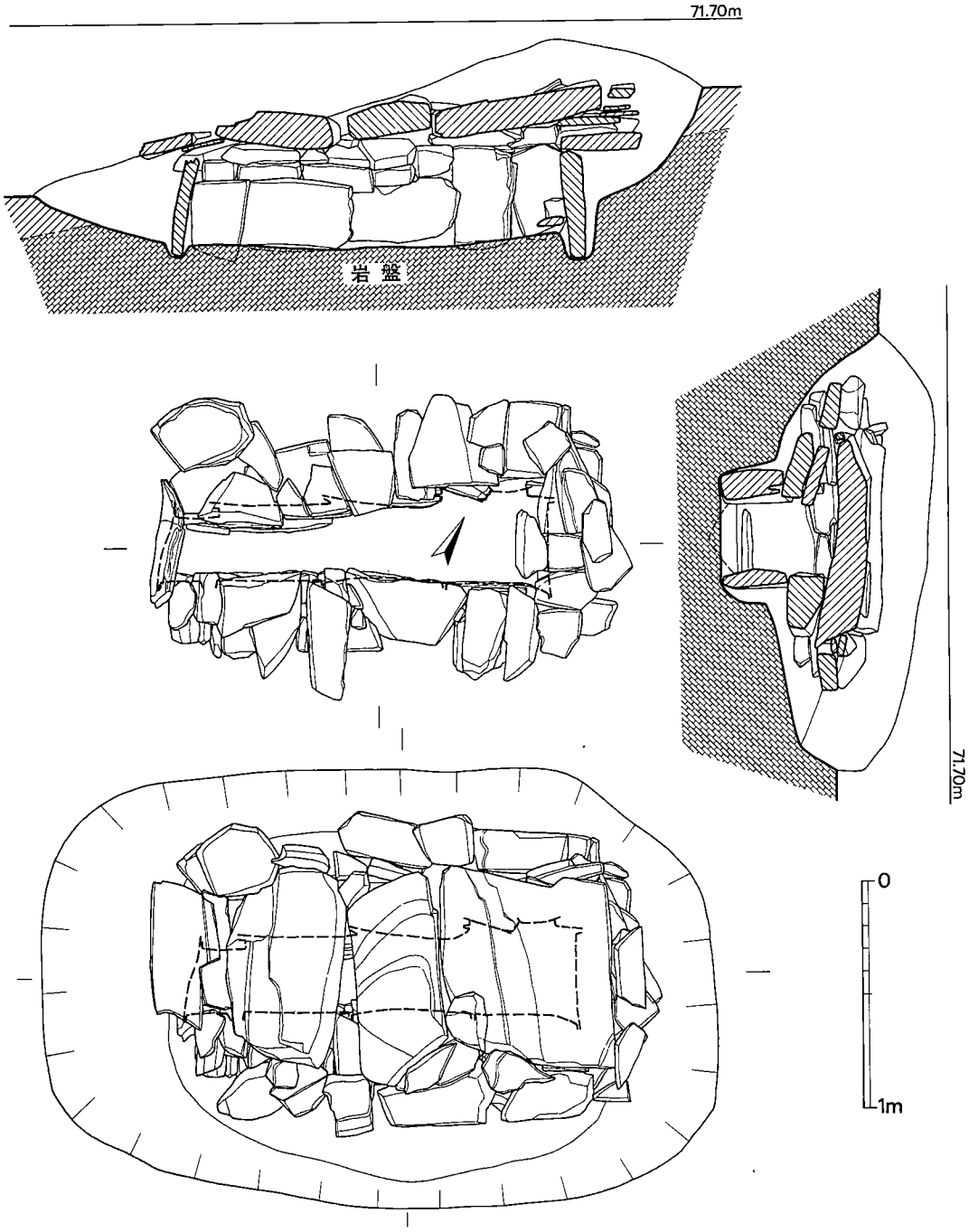
主軸をN43°15′Eにとり，頭位を北東に置く，石棺系竪穴式石室である。

石室床面の内法は，長さ1.44m，幅は頭位側で0.49m，足位側で0.38mとなる。両小口部及び両長側壁の最下段は，厚さ25cm以上の部厚い石材を横長，或いは部分的に縦長に立てている。それから上は板石の平積みであるが，C－49同様，部厚い石材ものせている。

石室床面には板石の敷石が施されている。副葬品・遺骨は皆無である。

以上のC－50石室構造は，C－49と酷似する。床面プランは，わりと整った長方形の如くで

あるが，壁の部厚い石材の選択は腰石的であり，敷石の状況も類似する。C－18やC－46の舟形プランタイプと同型式と考えられよう。（中間）



第 237 図　C－51実測図（1/30）

51．C－51

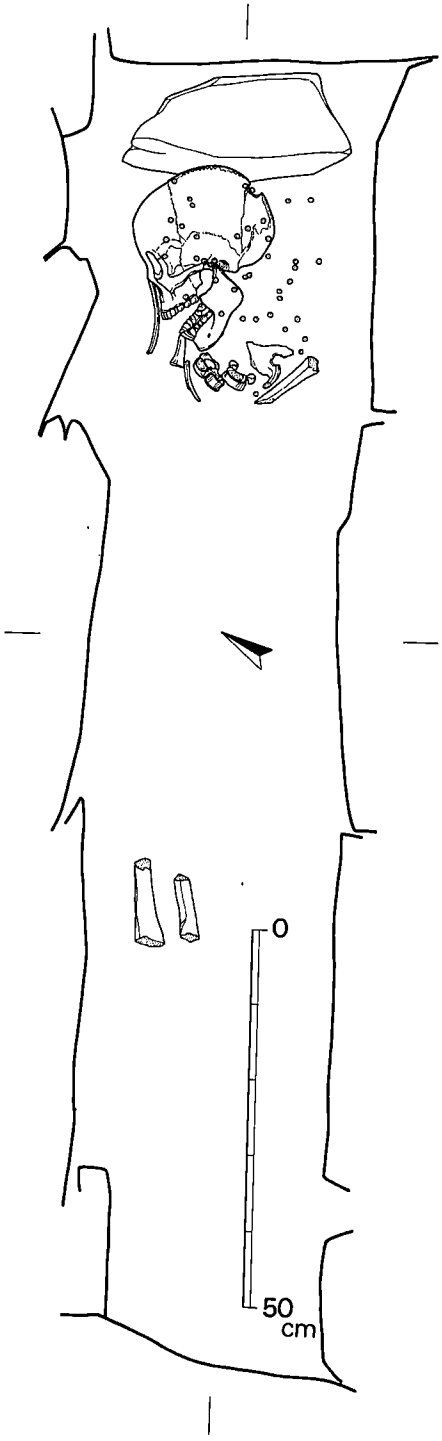
Ⅰ地区の大きな谷からY字状に谷筋が分かれてゆくが，その間に挾まれた狭い舌状尾根上に位置する。C－52・53等とともに，小支群を形成している。標高71～71.5mの辺りで，尾根筋中心線より西側へ寄った部分に築造されている。これは，C－52・53も同様である。尾根筋上及び東斜面側は，軟質片岩の岩盤が表土直下に露頭しており，幾らかでも土のかぶっている西斜面側に占地したものと考えられる。周溝は検出されなかった。

主体部（図版120，第237図）

主軸をN60°Eにとり，北東に頭位をおく石棺系竪穴式石室である。墓坑は2段掘りになっており，その下段掘り込みは，側壁立石ぎりぎりの範囲のみの狭長な部分である。図示した如く，黒色片岩の軟質岩盤が下半に存在し，それを掘り込んでいる。

石室内床面の内法は，長さ1.7m，幅は頭位側で0.4m，足位側で0.27mと狭長である。これは蓋石の大きい事，墓坑の広さからみると異様に写るが，下位の岩盤部分の掘り貫きに最小限の範囲が目された結果と考えられる。本遺跡内の他の岩盤掘り貫きのものでも狭長なものが目立つのは，このような理由によるのであろう。

石室側壁は，小口部分も含めて，その下部に板石を横長（部分的に縦長）に立てている。その上位には板石の平積みが行なわれる。ただ，多くて2段程度積むのみである。蓋石は頭位側に大板石を置き，都合4枚の大小板石を使用す



第 238 図　C－51人骨・玉出土状態実測図
(1/10)

る。蓋石外側の控え積みもかなりみられる。

石室床面北東端には，板石の枕石が置かれる。敷石は無い。枕石からずれ落ちた形で頭骨が横転しており，その隣に鎖骨・肋骨・上腕骨・脊椎等の遺骨が残存していた。また，床面中央部より南西側には，大腿骨の一部が残存していた。

頭骨周辺とその下位にはガラス小玉59点が出土した。（第238図）これは，枕石上及びそれから北東小口壁までの間には出土しておらず，もし，当初，頭が枕の上にきちんとのせてあったとすると，首飾りの玉と考えられる。逆に当初より頭が現状のように枕石よりずれていたとすると，髪飾りの可能性もある。

また，石室掘方の南外際上面から，鉄製鋤先１点が出土した。

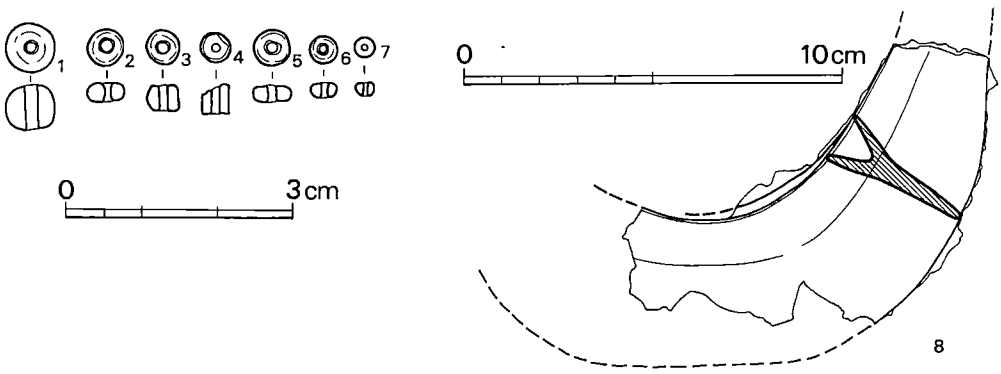
出土遺物（図版121，第239図，第３表）

ガラス小玉　計59点出土したが，大小各種ある。特大型（１点）は径10.8㎜，厚さ9.7㎜，重量0.3ｇとなり，色は濃紺である。中型（11点）は平均径4.4㎜，厚さ3.0㎜，重さ0.08ｇとなり，濃紺・淡青・黄緑色をなす。小型（45点）は平均径3.6㎜，厚さ2.4㎜，重さ0.05ｇとなり，すべて濃紺である。特小型（１点）は径2.3㎜，厚さ2.0㎜，重さ0.03ｇの濃紺色である。中には４のように，管玉半欠状のものが１点含まれる。

鉄鋤先　破片資料であり，全形は明確でない。やや小振りのタイプになりそうである。墓坑掘削に使用したものを供献したものであろうか。

以上の出土遺物は，ガラス小玉類も小さいタイプが殆どで，色調も各種ある。U字形鋤先も小振りであり，全体として古墳時代前半的様相を示している。本C－51は，他の石棺系竪穴式石室と同時期の５C前半代の範囲に収まるものであろう。

なお，人骨鑑定結果によると，当被葬者は，20代の女性であったということである。（中間）



第 239 図　C－51出土玉・鉄鋤先実測図（実大・1/2）

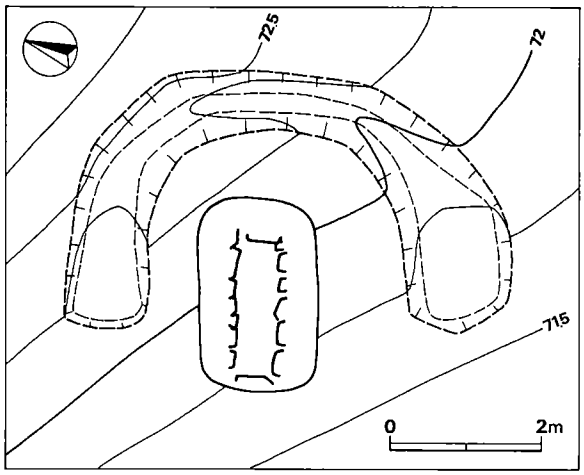
第3表　C－51出土小玉一覧表

（単位mm，g）

No.	材　質	色　調	径 ×厚さ×孔径	重　量	タイプ・図番号
1	ガ ラ ス	ダークブルー	10.8×9.7 ×1.6	0.3	特大　1
2	〃	ダークブルーグリーン	5.15×6.35×1.2	0.1	中　2
3	〃	ダークグレー	4.85×3.55×1.4	0.1	中　3
4	〃	ライトグリーン	3.85×(3.5/2.5)×1.1	0.1	管玉半欠状　4
5	〃	ダークブルー	4.65×2.4 ×1.1	0.1	中　5
6	〃	ダークブルー	3.4 ×2.05×1.0	0.05	小　6
7	〃	スカイブルー	2.3 ×2.0 ×0.7	0.03	特小　7
8	〃	ダークブルー	4.6 ×2.8 ×1.2	0.1	中
9	〃	〃	4.4 ×3.0 ×1.5	0.1	〃
10	〃	ライトブルー	3.8/4.3 ×2.9 ×1.25	0.07	〃
11	〃	イエローグリーン	4.2 ×1.9 ×1.0	0.07	〃
12	〃	〃	3.8 ×2.5 ×1.2	0.06	〃
13	〃	〃	4.15×1.95×1.1	0.06	〃
14	〃	〃	4.2 ×2.8 ×1.0	0.07	〃
15	〃	ダークブルー	3.9 ×2.6 ×1.0	0.06	小
16	〃	〃	3.7 ×2.6 ×1.1	0.05	〃
17	〃	〃	3.7 ×2.6 ×1.0	0.05	〃
18	〃	〃	3.6 ×2.6 ×1.0	0.05	〃
19	〃	〃	3.8 ×2.25×1.0	0.05	〃
20	〃	〃	3.65×2.25×1.0	0.05	〃
21	〃	〃	3.8 ×2.3 ×1.0	0.05	〃
22	〃	〃	3.5 ×2.15×1.0	0.05	〃
23	〃	〃	3.55×2.5 ×1.0	0.05	〃
24	〃	〃	3.55×2.2 ×0.8	0.05	〃
25	〃	〃	3.5 ×2.3 ×1.0	0.05	〃
26	〃	〃	3.45×2.2 ×0.8	0.05	〃
27	〃	〃	3.6 ×2.3 ×0.8	0.05	〃
28	〃	〃	3.6 ×2.2 ×0.8	0.05	〃
29	〃	〃	3.6 ×2.5 ×1.0	0.05	〃
30	〃	〃	3.4 ×2.2 ×0.8	0.05	〃

No.	材　質	色　　調	径 ×厚さ×孔径	重　量	タイプ・図番号
31	ガ ラ ス	ダークブルー	3.55×2.25×1.0	0.05	小
32	〃	〃	3.6 ×2.3 ×0.8	0.05	〃
33	〃	〃	3.6 ×2.2 ×1.0	0.05	〃
34	〃	〃	3.55×2.25×1.0	0.05	〃
35	〃	〃	3.55×2.45×0.8	0.05	〃
36	〃	〃	3.4 ×2.4 ×0.8	0.05	〃
37	〃	〃	3.45×2.3 ×0.8	0.05	〃
38	〃	〃	3.65×2.2 ×1.0	0.05	〃
39	〃	〃	3.7 ×2.1 ×1.0	0.05	〃
40	〃	〃	3.4 ×2.1 ×1.0	0.05	〃
41	〃	〃	3.65×2.1 ×1.0	0.05	〃
42	〃	〃	3.5 ×2.25×1.0	0.05	〃
43	〃	〃	3.4 ×2.4 ×0.8	0.05	〃
44	〃	〃	3.4 ×2.2 ×1.0	0.05	〃
45	〃	〃	3.3 ×2.5 ×0.8	0.05	〃
46	〃	〃	3.7 ×2.0 ×0.8	0.05	〃
47	〃	〃	3.4 ×2.4 ×1.0	0.05	〃
48	〃	〃	3.4 ×2.6 ×0.8	0.05	〃
49	〃	〃	3.55×2.55×0.8	0.05	〃
50	〃	〃	3.4 ×2.45×0.8	0.05	〃
51	〃	〃	3.6 ×2.45×0.8	0.05	〃
52	〃	〃	3.6 ×2.2 ×0.8	0.05	〃
53	〃	〃	3.45×2.5 ×0.8	0.05	〃
54	〃	〃	3.5 ×2.1 ×0.8	0.05	〃
55	〃	〃	3.7 ×2.4 ×0.8	0.05	〃
56	〃	〃	3.4 ×2.5 ×0.8	0.05	〃
57	〃	〃	3.6 ×2.2 ×0.8	0.05	〃
58	〃	〃	3.45×2.7 ×0.8	0.05	〃
59	〃	〃	3.4 ×2.5 ×0.8	0.05	〃

52．C－52



第 240 図　C－52地山整形面実測図（1/100）

前述のC－51の北側，つまり12～18号墳が占地する尾根から，南へ一段下がった舌状小尾根に位置する。C－51と同様に尾根筋より西側へ寄った場所に築造されている。

周溝は東半分の斜面高位側に，馬蹄形に検出された（第240図）。石室中心から周溝外縁までは，南側で3.3m，東側で3.15m，北側で2.6mを測る。幅は1.4～0.7m，深さ0.25m程である。

主体部（図版122，第241図）

主軸をN72°Eにとり，頭位を東に置く竪穴式石室である。

墓坑は一度軟質岩盤面まで下げて，更に中央部を長方形に，岩盤掘り貫きを行ったものである。この岩盤掘り貫き部には，東小口の立石がその内際に立てられるが他の両側壁ではその上端際に面を揃えて平積みされており，岩盤面が石室壁の一部となっている。

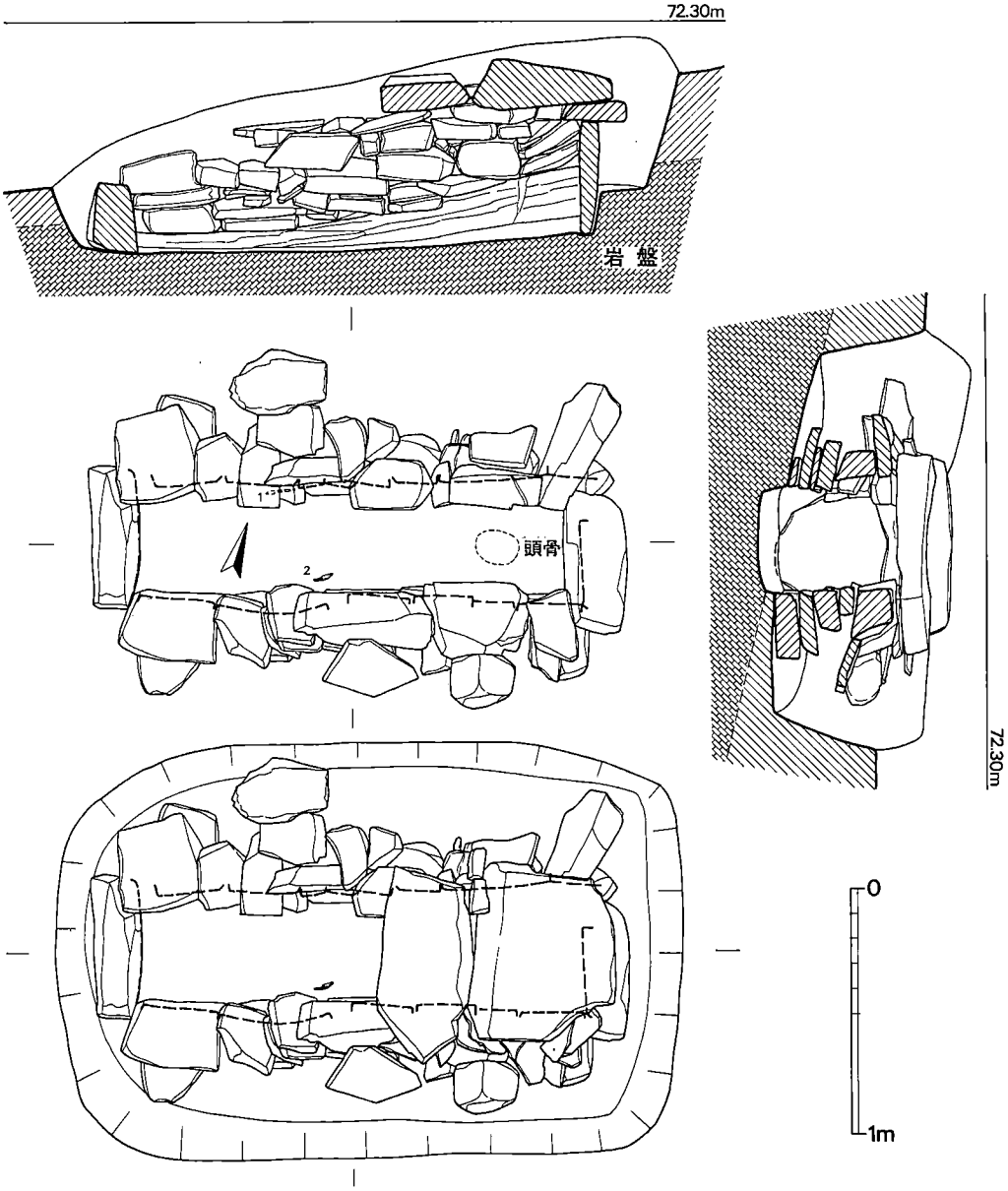
石室内床面の内法は，長さ1.78m，幅は東小口際で0.51m，西小口際で0.45mとなる。側壁は東位に深く岩盤が掘り貫かれ，西への掘り貫きは浅くなる。南北両側壁は最下段からの板石の平積みである。壁の内側へのせり出しは，部分的にみられるが，それ程顕著ではない。

岩盤掘り貫き壁を側壁として利用するものは，本遺跡内の岩盤部位築造の石室に於いて，かなりみられ，特別な石室構造型式として殊更区別する必要は無いと思う。基本的に竪穴式石室として把え，偶々，築造場所の違いにより，このような変型がみられるものと考えておく。

石室床面は岩盤そのままで，枕石は置かれない。また，床面・全側壁・蓋石内面の全てに，朱が塗布されていた。

東小口寄りに頭骨片が若干残存していた。また，床面中央より西寄りの南側壁際に鉄刀子1点，北側壁際に鉄鏃1点が副葬されていた。

出土遺物（図版122，第242図）



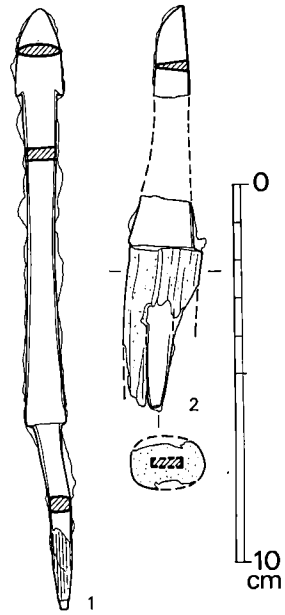
第 241 図　C－52実測図（1/30）

鉄鏃（1）全長15.9cm，身長2.3cm，茎長4.9cmを測る。片丸造り気味の箆被細根腸抉鑿箭式である。茎部には木質がいくらか残る。

鉄刀子（2）全長10.7cm，身長6.5cm，最大身幅は関際で1.7cmを測る。茎部には柄の木質が良

く残り，径2.0×1.4cmの楕円形の断面をなしている。

なお，人骨鑑定結果によると，熟年の男性（？）かと推定されている。（中間）



第 242 図　C－52出土鉄器実測図（1/2）

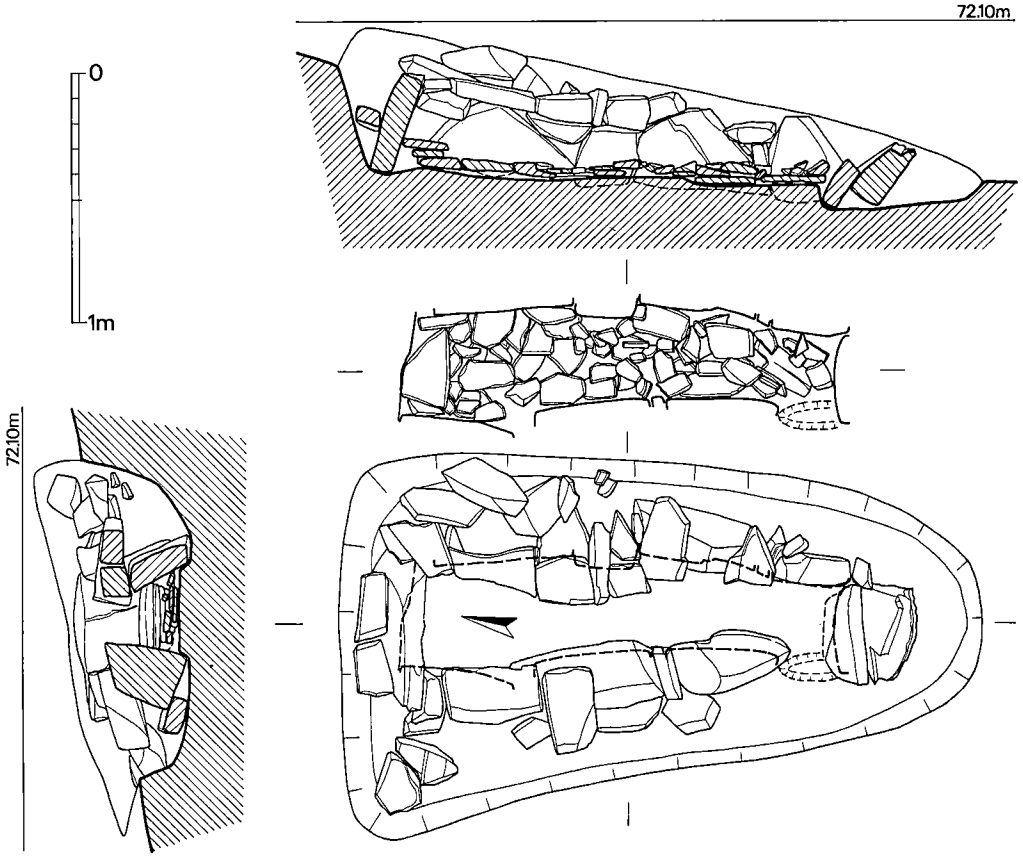
53．C－53

C－52の北西側の，舌状小尾根の付け根部に近く，その西斜面に営まれる。標高72m前後の辺りで，視覚的にかなり急な勾配の位置である。周溝は認められない。

主体部（図版123，第243図）

主軸をN13°15′Wにとり，頭位を略北に置く石棺系竪穴式石室である。

石室床面の内法は，長さ1.7m，幅は北小口際で0.39m，南小口際で0.27mと狭長である。両小口・側壁は，その最下位に厚



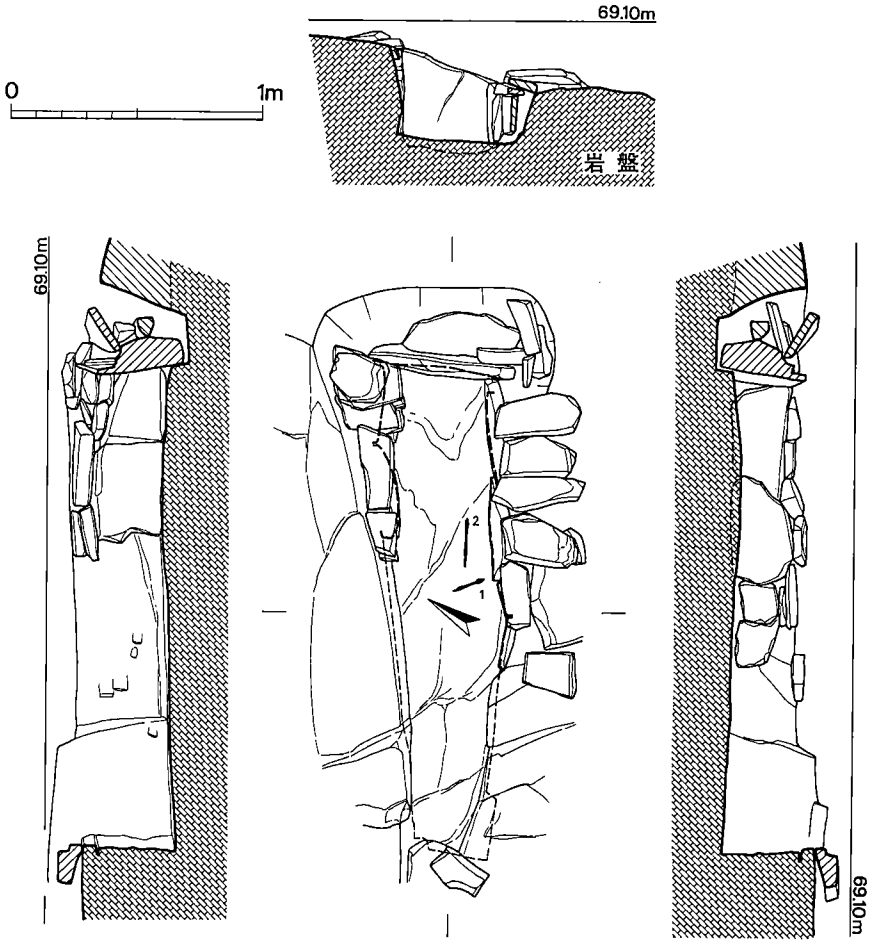
第 243 図　C－53実測図（1/30）

手の板石を横長に立てるが，その上端は極めて不揃いで粗雑な構築である。また，西側壁には極めて部厚い石材を横長に据えている。それらの下段立石は，北小口・東西両側壁ともに強く内傾しており，その上位の平積み部も内側へせり出している。南小口部は2枚の板石を重ねて立てるが，現状では外方へ倒れてしまっている。

床面には，不揃いな大小の板石片を敷くが，ただ投げ入れて踏みつけただけという如き粗雑な状況を呈している。北小口際には，敷石上に2枚の小板石を重ねて枕石としている。

石室内には副葬品・遺骨ともに残存しない。

以上のC－53は，一応石棺系竪穴式石室であるが，上述した如く，石材選択も部厚いものを使用したり，全体に構築法が粗雑で，敷石の状況も併考して，C－49・C－50のような舟形タイプに近いものと考える。（中間）



第 244 図　C－54実測図（1/30）

54．C－54

C－51～53の占地する，小舌状尾根上の南方低位置に築造されている。標高69m辺りの尾根筋から東寄りの部位に，等高線に平行して営まれる。周溝は確認されていない。

主体部（図版123，第244図）

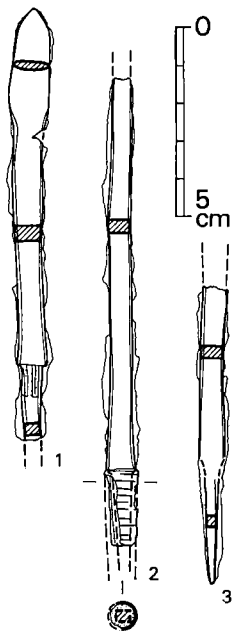
主軸をN58°49′Eにとり，頭位を東北東に置く石棺系竪穴式石室である。正確に言うと，西半を岩盤掘り貫きしたものである。

この位置では，表土直下は殆ど黒色片岩の軟質岩盤が拡がっており，当石室周縁でも西端斜面下位のみに，土が僅かに覆っているだけである。よって，当石室墓坑は大部分が岩盤掘り貫きによると言ってよい。

東側小口部の立石下のみを更に一段掘り込むが，他は略舟形の墓坑を床面平坦に掘っている。

石室床面の内法は，長さ1.93m，幅は東小口際で0.4m，西小口際で0.3mとなる。東小口部と北側壁の2枚，南側壁の4枚の板石は立てられている。ただ両長側壁の立石基底部は掘り込まれておらず，ただ岩盤上に載っているだけである。立石の上位には板石の平積みがみられる。西半の掘り貫きのままの部位に於ける平積みの状況は明確ではないが，西小口上に板石がのっており，或る程度平積みされていた可能性が考えられる。北壁の岩盤掘り貫きのままの部位には，図示の如く，手斧状工具を横位に使用した工具痕（幅5cm）が部分的に残っている。

石室内床面には鉄鏃3点が副葬されていた。遺骨は残存しない。



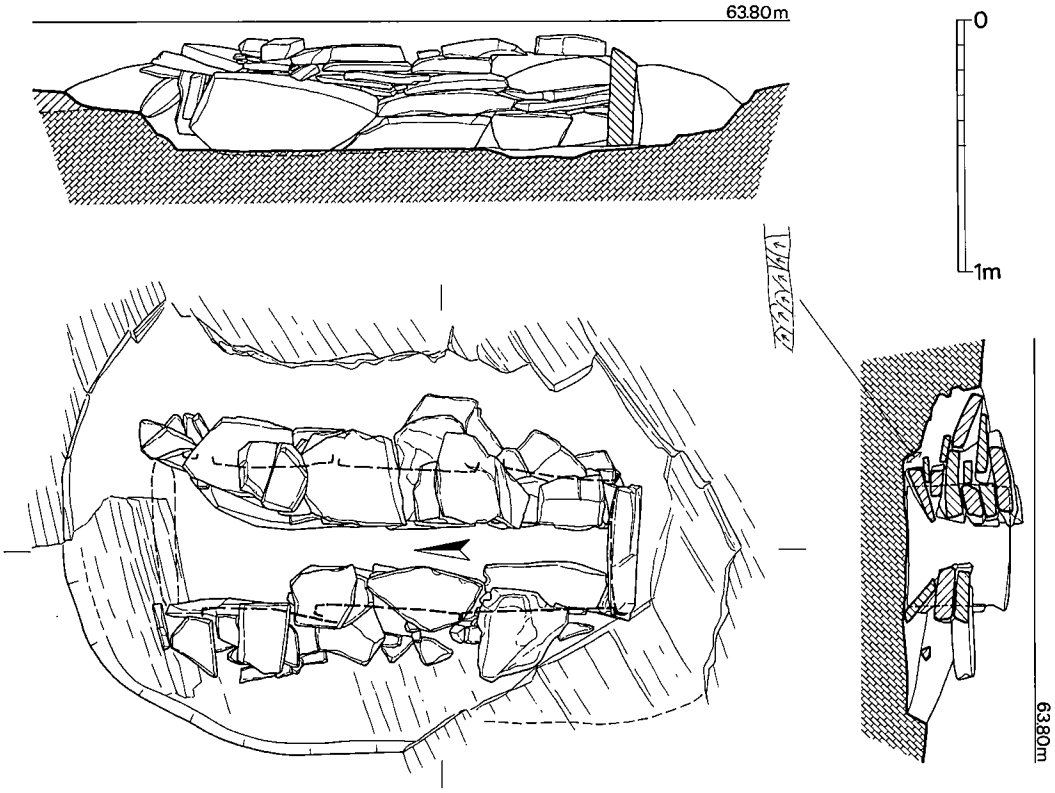
第245図　C－54出土鉄器実測図（1/2）

出土遺物（図版123，245図）

鉄鏃（1～3）1は両丸造箆被柳葉式で，やや短めのタイプである。2は1より長いタイプで，茎部には樺沓巻が残っている。（中間）

55．C－55

7号墳周溝外の北東側に位置する。表土直下に岩盤の露頭する部位に占地している。標高63.5m辺りの，谷から昇ってすぐの平坦面に築造されている。周溝は確認されていない。



第 246 図　C－55実測図（1/30）

主体部（図版123・124，第246図）

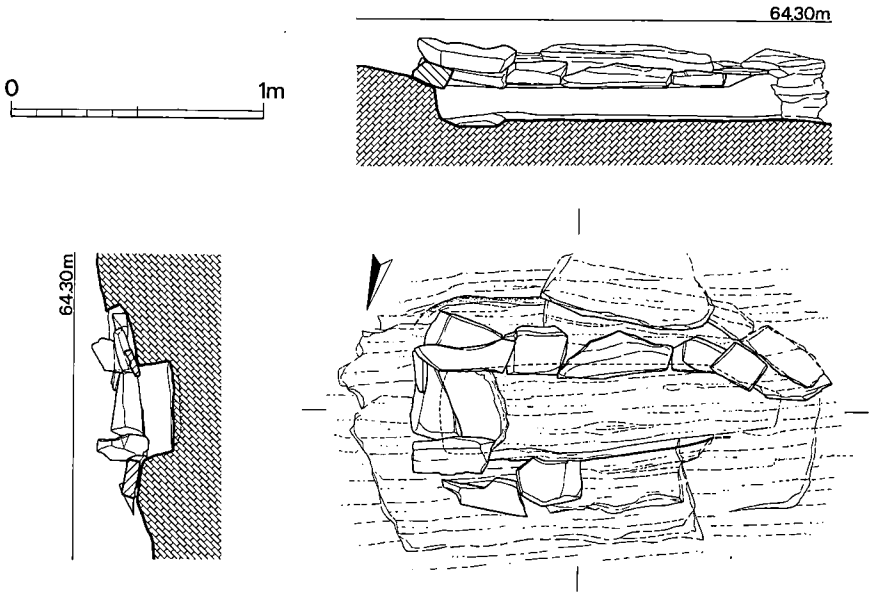
主軸をぴったし磁北にとり，頭位を北に置く石棺系竪穴式石室である。

石室床面の内法は，長さ1.7m，幅は北小口際で0.57m，南小口端で0.5mとなる。墓坑は岩盤を掘り貫いているが，C－52の如く床面部分を更に掘り下げることはない。南小口部は板石を立て，東西両側の最下段も板石を横長に立てる。この側壁の立石は，その基底部を岩盤に掘り込まない為か，孰れも内側へ倒れ込んでいる。これらより上は板石の平積みを行う。北小口部立石は抜かれている。

東側長側壁裏の岩盤掘り貫き面には，図示する如く，上から下への幅10cm以下の工具痕が残っている。これはC－54の工具使用法と異なる。工具そのものも異なるようである。

石室床面は岩盤面のままで，枕石はみられない。副葬品・遺骨も皆無である。　（中間）

56．C－56



第 247 図　C－56実測図（1/30）

6号墳の北西側，C－29・32・55に隣接して営まれる。標高64.25m辺りの平坦面に占地する。しかし，この辺りは表土直下に岩盤の露出する場所であり，C－55などと同様，岩盤掘り貫きを行っている。周溝は認められない。

主体部（図版124，第247図）

主軸をN73°15′Eにとり，頭位を東に置く，岩盤掘り貫きの竪穴式石室である。図に見る通り，床面部分を13cm程長方形に掘り貫いて，その上端縁に板石を平積みしている。一見，所謂盤棺上縁に積石した類にみえるが，このC－56の場合は掘り貫きも浅く，本遺跡の他石室の状況からみても，竪穴式石室乃至石棺系竪穴式石室の変種と把え得る。

石室床面の内法は，長さ1.35m，幅は東小口際で0.34m，西小口際で0.15mとなる。狭く小型の類である。東小口際の床面は，長さ27cmの範囲が3cm程掘り窪められており，横穴の枕部に刳り貫かれるものと同様な，刳り貫き枕部と考えられよう。

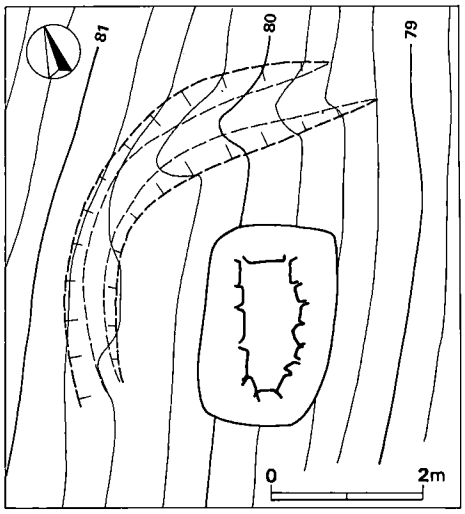
石室内からは副葬品・遺骨等全く出土しなかった。（中間）

57．C－57

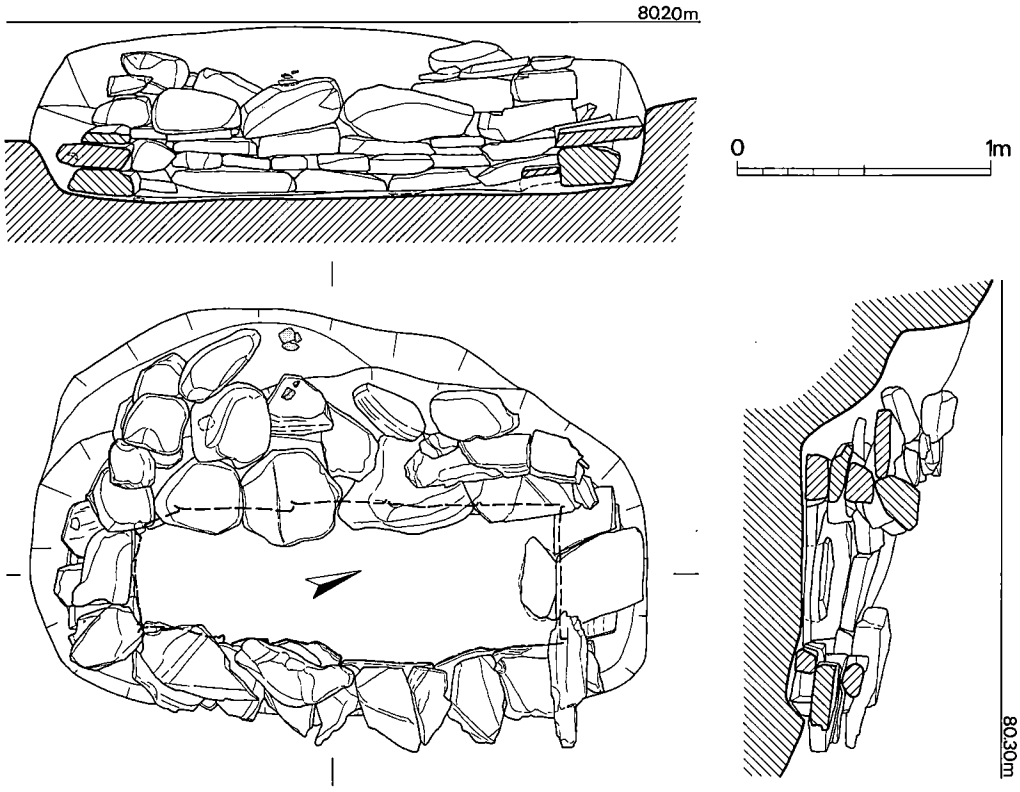
本墳はI区丘陵の東側斜面に位置し，標高80m程の急斜面に築いている。盛土は認められない。北西に馬蹄形周溝を有し（第248図），石室中点から西に2.7m，北に3.6mを測り，墳形は長円形を呈する。

主体部（図版125・126，第249図）

本石室はN20°Eに主軸をおき，等高線に平行して構築される。掘方は2.44×1.6mの長円形を呈し，深さ西側で60cmに穿つ。



第 248 図　C－57地山整形面実測図（1/100）



第 249 図　C－57実測図（1/30）

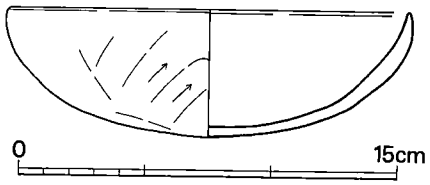
石室は急斜面に構築された為か，蓋石及び斜面に平行して上段の石積みを欠損している。構造は，四壁ともに板石を用い，基底部より平積みする。石室床面は粘土が敷かれていたのを掘り過ぎ，枕石が浮いた状態となってしまった。枕石は北側小口部に置かれる。赤色顔料は認められない。石材は若干の砂岩と他は片岩である。

石室内法は，長さ170cm，幅中央部で62cm，北側55cm，南側40cmで，高さは現存最大で40cmを測る。

遺骨は皆無であり，副葬品は石室の周囲に土師器片が散点していた。復原可能なものは，石室の西側から出土した土師器皿１点のみである。

出土遺物（第250図）

土師器椀　全体の⅔を欠損している。復原口径15.8cm，器高5.1cmである。全体的に磨滅が著しいが，口縁部内外面とも横ナデ，外面体部下は手持ちヘラ削りの後にナデであろう。他は不明である。胎土かなり精良にして焼成良。内面明るい赤茶色，外面黄褐～茶褐色を呈する。内外面に明赤茶色スリップがかかる。



第 250 図　C－57出土土師器実測図（1/3）

以上がC－57についてである。本墳出土の土師器椀は，C－39のそれに比べると，口縁やや内傾し，新しくなり，また，C－９出土の土師器椀は調整はほぼ同様であるが，口縁内湾気味であり，本墳出土のそれよりも新しくなる。それらの事により，本墳は５C前半代頃と考えられる。

（平嶋）

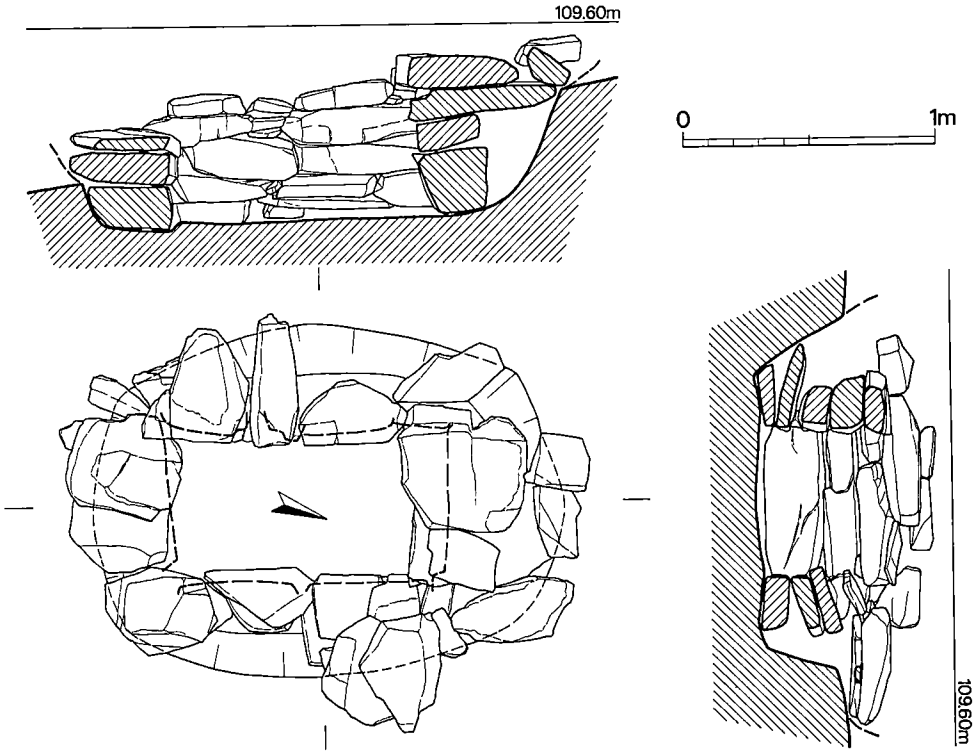
58．C－58

本墳は，Ｉ地区丘陵上に，単独で位置し，17・18号墳の北35m，比高差10m程上に存在する。標高109mに築く。盛土，周溝は認められない。

主体部（図版126，第251図）

本石室は主軸をN18°45′Wにおき，等高線に平行気味ではあるが，直交するように築く。掘方は，1.86×1.4mの楕円形を呈し，深さ15～50cmで穿つ。

石室は掘方より上面に張り出している。残存状態は，蓋石を欠損し，石積みは南側を欠損しているであろう。



第 251 図　C－58実測図（1/30）

構造は，北小口の基底部石は割に厚目の板石を用いてはいるが，四壁とも板石による平積みである。南小口側以外に控え積みがみられる。赤色顔料塗布が若干認められる。石材は全て片岩である。

石室内法は，長さ108cm，幅東西とも62cmを測る。頭位は北と考える。

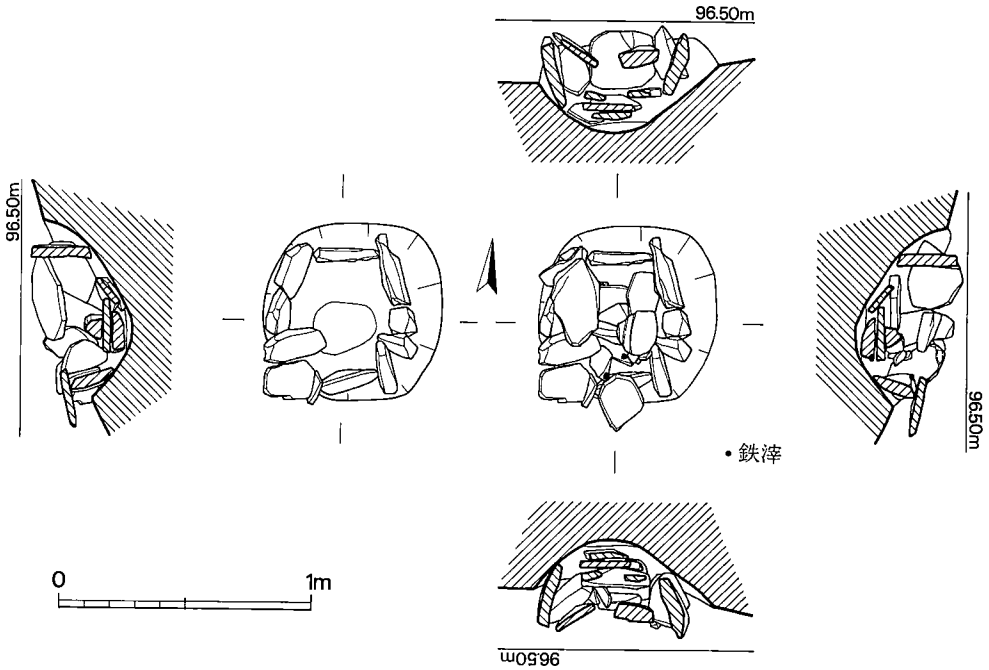
遺骨，副葬品は皆無である。　（平嶋）

59．C－59

17号墳の西側，丘陵尾根上より西斜面にあり，Ⅰ地区丘陵上に位置するのは当棺とC－58の2基のみで，標高96.5mの高さにあり，D－10土坑の北に接している。

主体部（図版127，第252図）

主体部は岩盤の地山に掘られた径0.7mの円形墓坑内に造られた小型の箱式石棺である。石棺



第 252 図　C－59実測図（1/30）

は方形に近く，棺内法は主軸長東側壁で0.45m，西側壁で0.47m，幅は北小口側で0.25m，南小口側で0.23mと狭少で，北小口の方が幅広く頭位であろうか。北及び南小口は1枚の板石が，両側壁は各々4枚の板石が縦長或は横長に据えられている。蓋石とみられる小板石が5枚ほど棺上部に遺存しているが，孰れも棺内へと傾き，側壁上端に構架しないものもある。

棺内底面には板石が5・6枚重なり合った状態で出土している。蓋石が棺内へ落下したものとも考えられるが，重なり状態からして底面敷石かと思われる。墓坑底面が断面摺鉢形を呈するため，底面高を整える目的で割石を重ねたのであろうか。

出土遺物として，棺内上部及び底面近くから鉄滓が2点出土したのみで，他の遺物はない。鉄滓は3㎝大のものと2㎝大の大小2種があり，大は11.8g，小は15.7gと小の方が重い。また，大の方には壁体片が付着している。

当C－59は，丘陵下の谷間部にみられる竪穴式石室・石棺系竪穴式石室群とは位置的にも構造的にも，出土遺物からも区別されるべきものであろうが，残念ながら当棺は時期の決定が困難であるため，詳細な比較はできない。（新原）

第4表　竪穴式石室・石棺系竪穴式石室等計測表

単位（m）

No.	主体部形式	主軸方位	床面絶対高	頭位	主軸方向	掘方(a) 長軸	掘方(a) 短軸	棺内法(b) 主軸長	棺内法(b) 頭位幅	棺内法(b) 足位幅	深さ	周溝	人骨	出土遺物	備考
C 1	石棺系竪穴式石室	N 81° E	61.5	東	斜面直交	3.76	2.14	2.13	0.7	0.56	(a) 0.7～0.8 (b) 0.6	北東¼円 半径3.5		土師椀	蓋石一部
2	〃	N76°30′ E	63.9	東	斜面平行	3.0	1.9	1.86	0.64	0.48	(a) 0.5 (b) 0.58＋α				
3	〃	N56°30′ E	63.8	北東	斜面直交	2.99	2.21	1.83	0.58	0.46	(a) 0.45～0.6 (b) 0.6＋α	南東陸橋 径9.0		(周溝)陶質甕、陶質壺片 土師椀、土師壺片	
4	〃	S 78° E	64.4	東	斜面平行	3.08	1.8	1.78	0.58	0.52	(a) 0.65 (b) 0.6＋α	北東⅓円 半径4.5	頭骨(左)	(周溝)須恵甕、土師椀、陶質土器片 鉄刀子、釘状鉄片	(熟年男性)朱
5	〃	N 23° W	65.05	南	斜面平行	2.88	1.62	2.03	0.4	0.36	(a) 0.5 (b) 0.5＋α		骨片	鉄剣、鉄鎌、刀子、鉄鏃	
6	〃	N 5° W	67.0	北	斜面平行	3.12	?	1.87	0.53	0.39	(a) 0.55～0.65 (b) 0.5				蓋石、全体半分
7	竪穴式石室	N 66° W	64.35	東	斜面平行	2.47	1.72	1.28	0.36	0.3	(a) 0.15～0.2 (b) 0.5				枕石、両側小口積
8	〃	N83°30′ E	64.8	東	斜面直交	2.71	1.59	1.73	0.46 ＋α	0.35	(a) 0.5～0.35 (b) 0.45＋α				
9	石棺系竪穴式石室	N82°30′ E	65.45	東	斜面直交	3.0 ＋α	2.03	1.95	0.9	0.78	(a) 0.15 (b) 0.3＋α			土師椀、須恵杯	
10	〃	N 85° E	66.5	東	斜面直交	3.06	1.54	1.75	0.43	0.36	(a) 0.25～0.4 (b) 0.5＋α			鉄鏃、刀子？	
11	竪穴式石室	N 71° E	65.8	東	斜面直交	2.8	1.72	1.75	0.45	0.4	(a) 0～0.35 (b) 0.4＋α				
12	石棺系竪穴式石室	N 85° E	66.1	東	斜面直交	3.07	2.3	1.98	0.53	0.47	(a) 0.1～0.55 (b) 0.5＋α				
13	〃	N 14° W	67.0	北？	斜面平行	2.77	1.5	1.68	0.57	0.59	(a) 0.15～0.3 (b) 0.2＋α			(覆土)須恵甕、土師椀	
14	〃	N 79° E	68.8	東	斜面直交	3.03 ＋α	1.82	1.93	0.89	0.78	(a) 0～0.4 (b) 0.25＋α	東馬蹄形 南北径8.0		短甲、鉄鋤先、鉄斧、鉄鎌 鉄刀、鉄刀子、鉄鏃	朱、敷石
15	〃	N 40° E	67.6	北東	斜面直交	2.48	0.95	1.38	0.48	0.46	(a) 0.1～0.4 (b) 0.2＋α				
16	竪穴式石室	N84°30′ E	61.5	東	斜面平行	2.95	1.75	1.84	0.46	0.39	(a) 0.35～0.7 (b) 0.75			鉄鎌、鉄刀子、鉄鏃	枕石
17	石棺系竪穴式小石室	N 5° W	59.65	北	斜面平行	1.3	0.99	0.81	0.3 ＋α	0.24	(a) 0.15～0.25 (b) 0.15				蓋石1枚、敷石
18	石棺系竪穴式石室	N62°30′ E	62.35	東	斜面直交	3.17	2.14	2.08	0.61	0.41	(a) 0.45～0.5 (b) 0.7＋α				敷石、舟形
19	?	N 26° E	60.75	北？	斜面直交	3.23	2.33	——	——	——	(a) 0.1～0.26 (b) ——	東西半円 東西径8.5		陶質壺、鉄刀	墓坑内に角礫が数点存するのみ
20	石棺系竪穴式小石室	N 10° W	59.75	北	斜面直交	0.85	0.57	0.48	0.19 ＋α	0.19	(a) 0.1～0.15 (b) 0.2＋α				
21	竪穴式石室	N 75° E	59.8	東	斜面直交	2.33	1.75	1.59	0.42	0.31	(a) 0.4～0.6 (b) 0.45				蓋石
22	〃	N71°45′ E	60.2	東	斜面直交	3.55	1.87	1.82	0.36	0.29	(a) 0.15～0.45 (b) 0.25＋α				
23	〃	N71°30′ E	58.65	東	斜面直交	2.5 ＋α	1.3 ＋α	1.85	0.5	0.45 ＋α	(a) 0～0.3 (b) 0.35＋α	北東⅙円 石室中点径5.5		(周溝)陶質壺、土師椀、土師壺 鉄鋤先	
24	石棺系竪穴式石室	N65°30′ E	62.65	北東？	斜面直交	1.95	1.26	1.04	0.43	0.42	(a) 0.2～0.35 (b) 0.3＋α	北東半円 径7.5			敷石、小児用
25	〃	N77°30′ E	63.25	西	斜面平行	2.69	1.37	1.61	0.6	0.52	(a) 0.25～0.3 (b) 0.25＋α	北西陸橋 径8.5			
26	土坑墓	N34°30′ E	63.1	北東	斜面直交	2.01	0.54				0.25	西¼円 半径3.0			
27	石棺系竪穴式石室	N89°45′ E	62.5	東	斜面平行	2.11 ＋α	1.27	1.67 ＋α	0.5	0.36 ＋α	(a) 0.15～0.2 (b) 0.35＋α				
28	〃	N 4° W	63.5	北	斜面直交	2.62	1.17	2.28	0.63	0.56 ＋α	(a) 0～0.3 (b) 0.25＋α			須恵有蓋長頸壺、須恵杯	敷石、葬石
29	竪穴式石室	N 89° E	63.85	東	斜面直交	2.30	1.57	1.43	0.34	0.3	(a) 0.1～0.4 (b) 0.3				蓋石
30	石棺系竪穴式石室	N56°45′ E	63.6	南西	斜面平行	2.31	1.32	1.24	0.37	0.4	(a) 0.05～0.25 (b) 0.5＋α				

（単位　m）

No.	主体部形式	主軸方位	床面絶対高	頭位	主軸方向	掘方（a）		棺内法（b）			深さ	周溝	人骨	出土遺物	備考
						長軸	短軸	主軸長	頭位幅	足位幅					
31	石棺系竪穴式石室	N 81° E	64.05	東	斜面平行	2.08	1.35	1.40	0.43	0.36	(a) 0.15～0.25 (b) 0.3				
32	〃	N73°30′E	63.65	東	斜面直交	2.93	1.86	1.74	0.49	0.37	(a) 0.5～0.7 (b) 0.55		頭蓋骨 下肢骨		（成年女性）蓋石
33	竪穴式石室	S88°30′E	63.45	東	斜面平行	2.43	1.15	1.68	0.34	0.2	(a) 0.35～0.5 (b) 0.6				蓋石、枕石
34	石棺系竪穴式石室	N88°31′E	68.35	東	斜面直交	2.64	1.65	1.86	0.49	0.34	(a) 0.15～0.6 (b) 0.4＋α	東⅔馬蹄形 半径4.0			朱、敷石
35	竪穴式石室	S 81° E	69.7	東	斜面直交	2.86	1.85	1.81	0.51	0.32	(a) 0.35～0.75 (b) 0.55＋α	東陸橋 馬蹄形径7.0		（石室内）鉄鏃、刀 （石室外）鉄斧	
36	横口式小石室	N 7°30′E	73.75	北	斜面平行	1.8＋α	1.4＋α	0.52	0.28	0.56	(a) 0～0.35 (b) 0.15				敷石
37	竪穴式石室	N 48° E	69.5	北東	斜面直交	3.02	1.82	1.72	0.52	0.45	(a) 0.55～1.3 (b) 0.55	北東馬蹄形 径7.0		鉄刀子	蓋石
38	石棺系竪穴式石室	N89°45′E	69.45	東	斜面直交	2.77	1.93	1.9	0.78	0.52	(a) 0.45～0.85 (b) 0.75＋α	北東馬蹄形 径7.5			
39	竪穴式石室？	N 11° E	70.0	北？	斜面平行	2.765	1.75	——	——	——	(a) 0～0.35 (b) —	南陸橋 径6.5		須恵甕、陶質壺 （周溝）陶質壺、土師椀	石室破壊
40	石棺系竪穴式石室	N26°45′E	79.0	北	斜面直交	3.16	1.86	2.05	1.09	0.9	(a) 0.2～0.6 (b) 0.45＋α	西陸橋 径8.5			朱、敷石
41	竪穴式石室	S89°45′E	78.95	東	斜面平行	2.6	1.56	1.93	0.59	0.45	(a) 0.2～0.6 (b) 0.35＋α	北⅓円 半径2.5～5.0		鉄鏃	敷石
42	横口式小石室	N66°30′E	71.55	北	斜面直交	1.6＋α	1.5＋α	0.6＋α	0.22	0.16	(a) 0～0.15 (b) 0.1＋α			（棺外）土師杯	
43	石棺系竪穴式石室	N 80° E	69.7	東	斜面直交	2.78	2.08	1.91	0.66	0.54	(a) 0.15～0.25 (b) 0.4＋α	北東陸橋 径7.0			枕石
44	竪穴式石室	N 64° E	71.25	北東	斜面直交	2.63＋α	1.8	1.9	0.28	0.27	(a) 0.1 ～0.7 (b) 0.45	東馬蹄形 径6.5		（棺外）鉄鏃、鉄刀子	蓋石半分、朱
45	〃	S 9° E	70.4	南	斜面平行	2.17	1.47	1.23	0.32	0.3	(a) 0.2～0.45 (b) 0.35	東馬蹄形 径6.0			朱
46	石棺系竪穴式石室	N13°15′E	72.4	北	斜面平行	3.0	1.67	1.81	0.8	0.52	(a) 0.45～0.55 (b) 0.45＋α				敷石、舟形
47	竪穴式石室	N 72° E	71.45	東	斜面直交	2.49	1.71	1.45	0.39	0.3	(a) 0.4～0.9 (b) 0.3	北東⅓円 半径4.0	頭骨片		（乳児）蓋石
48	石棺系竪穴式石室	N 15° E	73.6	北	斜面平行	2.83＋α	1.44＋α	1.8＋α	0.64	0.53	(a) 0.05～0.35 (b) 0.25＋α				
49	〃	N25°30′E	74.05	北	斜面平行	2.38	1.7	1.42	0.7	0.65	(a) 0.25～0.65 (b) 0.55＋α	西　半円 径7.0			敷石
50	〃	N43°15′E	73.7	北東	斜面平行	2.29	1.31	1.44	0.49	0.38	(a) 0.25～0.65 (b) 0.5＋α				敷石
51	〃	N 60° E	70.7	北東	斜面平行	2.95	1.93	1.7	0.4	0.27	(a) 0.5～0.7 (b) 0.45		頭骨、上腕骨 鎖骨、肋骨 大腿骨	ガラス玉、鋤先	（成年女性） 蓋石、枕石
52	竪穴式石室	N 72° E	71.45	東	斜面直交	2.52	1.68	1.78	0.51	0.45	(a) 0.45～0.65 (b) 0.45	東馬蹄形 径6.0	頭骨片	鉄鏃、鉄刀子	（熟年男性） 蓋石一部、朱
53	石棺系竪穴式石室	N13°15′W	71.55	北	斜面平行	2.52	1.25	1.7	0.39	0.27	(a) 0.05～0.4 (b) 0.2＋α				敷石、枕石
54	〃	N58°49′E	68.45	東	斜面平行	2.45＋α	1.0＋α	1.93	0.4	0.3	(a) 0.2～0.35 (b) 0.4＋α			鉄鏃	基底部岩盤刳貫
55	〃	N 0°	63.3	北	斜面平行	2.73	1.6	1.7＋α	0.57	0.5	(a) 0.1～0.3 (b) 0.4＋α				朱
56	〃	N73°15′E	63.9	東	斜面直交	1.5＋α	0.7＋α	1.35	0.34	0.15＋α	(a) 0～0.2 (b) 0.2＋α				基底部岩盤刳貫
57	竪穴式石室	N 20° E	79.5	北	斜面平行	2.44	1.6	1.7	0.55	0.4	(a) 0.05～0.6 (b) 0.4＋α	北西⅓円 半径3.0			枕石
58	〃	N18°45′W	108.85	北	斜面直交	1.86	1.4	1.08	0.62	0.62	(a) 0.15～0.5 (b) 0.6＋α				朱
59	石囲い	N 5° E	96.5	北？	斜面直交？	0.71	0.71	0.45	0.25	0.23	(a) 0.2～0.27 (b) 0.2			鉄滓２点	

D　竪穴住居跡の調査

1．1号竪穴住居跡（図版128，第253図）

8号墳の西方，C－37の南側に検出された。標高69.5～70.5mのやや勾配のきつくなる辺りに営まれている。北東隅付近でC－37の周溝端を切っている。

西壁側に竈を付け，4本主柱と思われる方形竪穴住居跡である。西辺長さ4.6m，北辺3.3m，東辺4.5m，南辺4.7mの不整方形プランをなす。深さは東側で0.65m，西側で0.15mで，床面は西側へ傾斜をみせる。貼り床等の作業は行なわれていない。

主柱穴は4本と考えられるが，その配置はやや平行四辺形的に歪む。主柱穴間心々距離は，南北に2.35～2.7m，東西に1.75～1.65mである。南側の2主柱穴には柱根の抜き跡がみられ，径10cm強の円形をなす。床面上には他に小ピットが幾らかみられるが，まとまりをみせるものは無い。

竈は，西壁のやや南寄りに作られ，袖の基層に黄褐色粘土を，その上にやや粘土質の茶黄褐色土をかぶせている。焚き口幅24cm，火床面は下端幅18cm程となる。煙道が外へ張り出す類ではない。

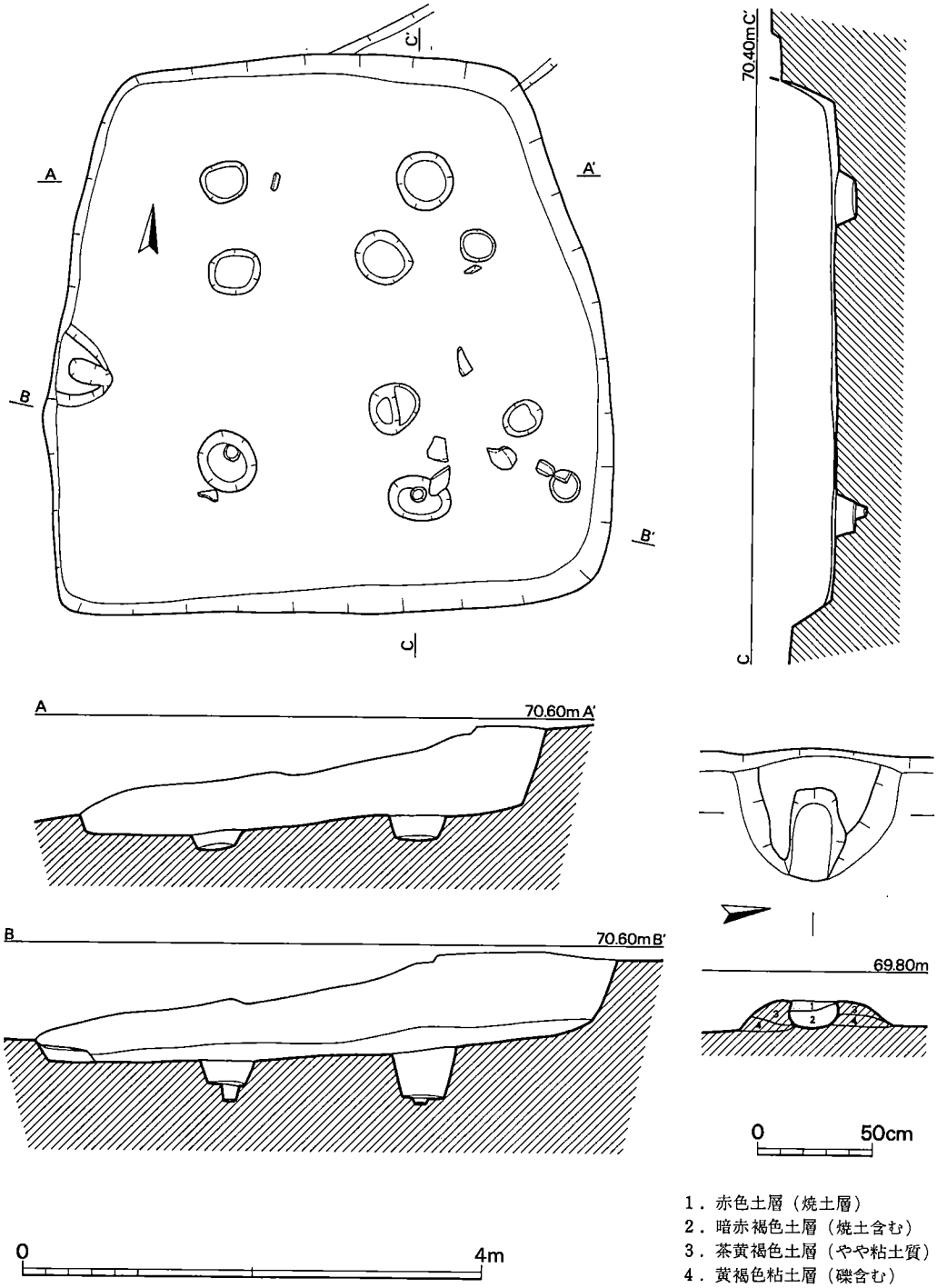
住居跡内床面から土師器類が出土した。

出土遺物（図版128，第254図）

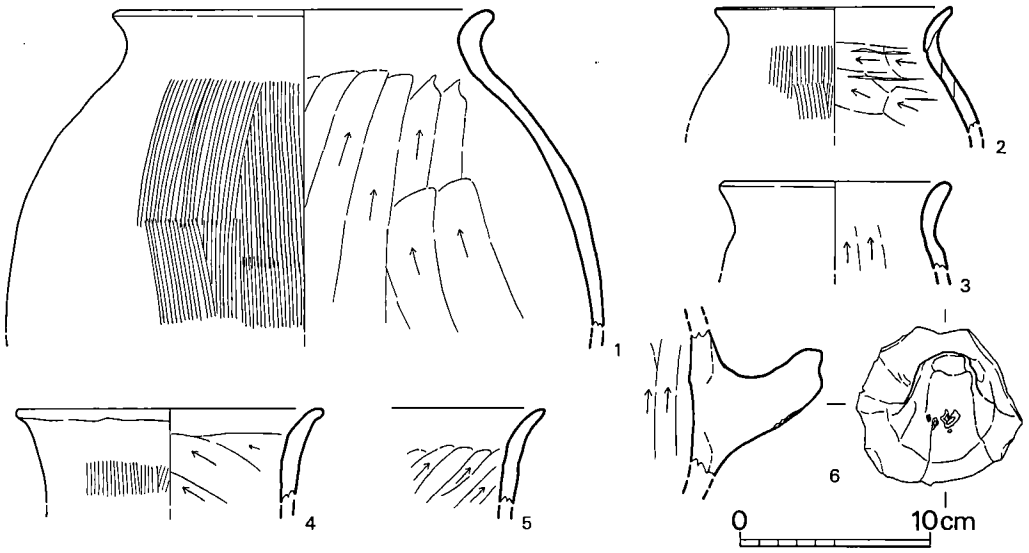
土師器甕（1～3・6）1は口径20.0cm，胴部最大径31.3cm程となる，胴の張る器形をなす。胴部外面はやや細かい密な縦ハケ，内面は縦位ヘラ削り上げが施される。口縁は僅かに肥厚し短く外反する。胎土に粗砂かなり含み，焼成良く，暗黄～淡茶褐色を呈する。2は，胴の張る小型甕で，復原口径12.4cmを測る。胴部外面はやや雑な縦ハケ，内面はヘラ削りを施す。内面には接合シワがみられる。外面は二次火熱を受けており，赤茶褐色をなす。3は口径12.0cmで，いくらか張る胴部となる小型甕である。全面磨滅して調整は明らかでない。外面に二次火熱を受けて，暗赤～暗褐色をなす。6は把手部分で，胴内面はヘラ削り上げ，把手部外下面には，明らかに意図的に細い棒先で刺突した痕跡を残す。

土師器甑（4・5）4は復原口径16.0cmの小型品である。外面は粗い縦ハケ，内面はヘラ削りを施す。口縁外端を丸く玉縁状につくる。5は外面縦ハケ，内面はヘラ削り上げを施す。

以上の1号竪穴住居跡は，その占地においても，人里離れた尾根裾の斜面に営まれた1軒の



第 253 図　1号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）



第 254 図　1号住居跡出土土師器実測図（1/4）

みであり，その特異性は如実である。

出土土器をみると，甕は胴の張る器形に，短く外反する口縁を付ける。また，把手外下端に棒による刺突を行うくせをみることができる。これらの土器の様相は，甘木市立野遺跡C地区の竪穴住居群出土土器と酷似しており，6C末～7C初期に比定できる。

この時期は，柿原古墳群I地区に於いて，胴張り複室の横穴式石室の盛行する時期であり，これらの古墳築造と1号竪穴住居跡とが無関係とは考えられない。古墳築造に伴う石材採出者達の仮小屋，或いは墓守り小屋等が考えられる。ただ，実際の2～6号墳の横穴式石室とは50m程離れており，古墳とは関係無い狩猟小屋等の可能性もあろう。（中間）

E　土坑群の調査

1．D－1（図版129，第255図）

20・21号墳の西側，C－15の南西隣の平坦面に位置する。標高66.3mの辺りに掘られた楕円形土坑である。

長軸をほぼ磁北に向けており，上端で長さ1.1m，幅0.83m，下端で長さ0.96m，幅0.58mを測る。深さは北端で0.38m，南端で0.2mとなる。

底面から0.1mの厚さに炭・灰混層がみられる。その上面に小板石・塊石が北側で4個，南側に1個みられる。これらの石は全く焼けた痕跡がみられないが，周壁は赤く焼けている。

出土遺物皆無で，火葬墓にしては骨が1片もみられず，石も焼けていないので，その可能性は少ない。山林地で地境を示すものとして，穴を掘り，中に消し炭を残すことがあると聞いており，その可能性が高いと考えられる。（中間）

2．D－2（図版129，第255図）

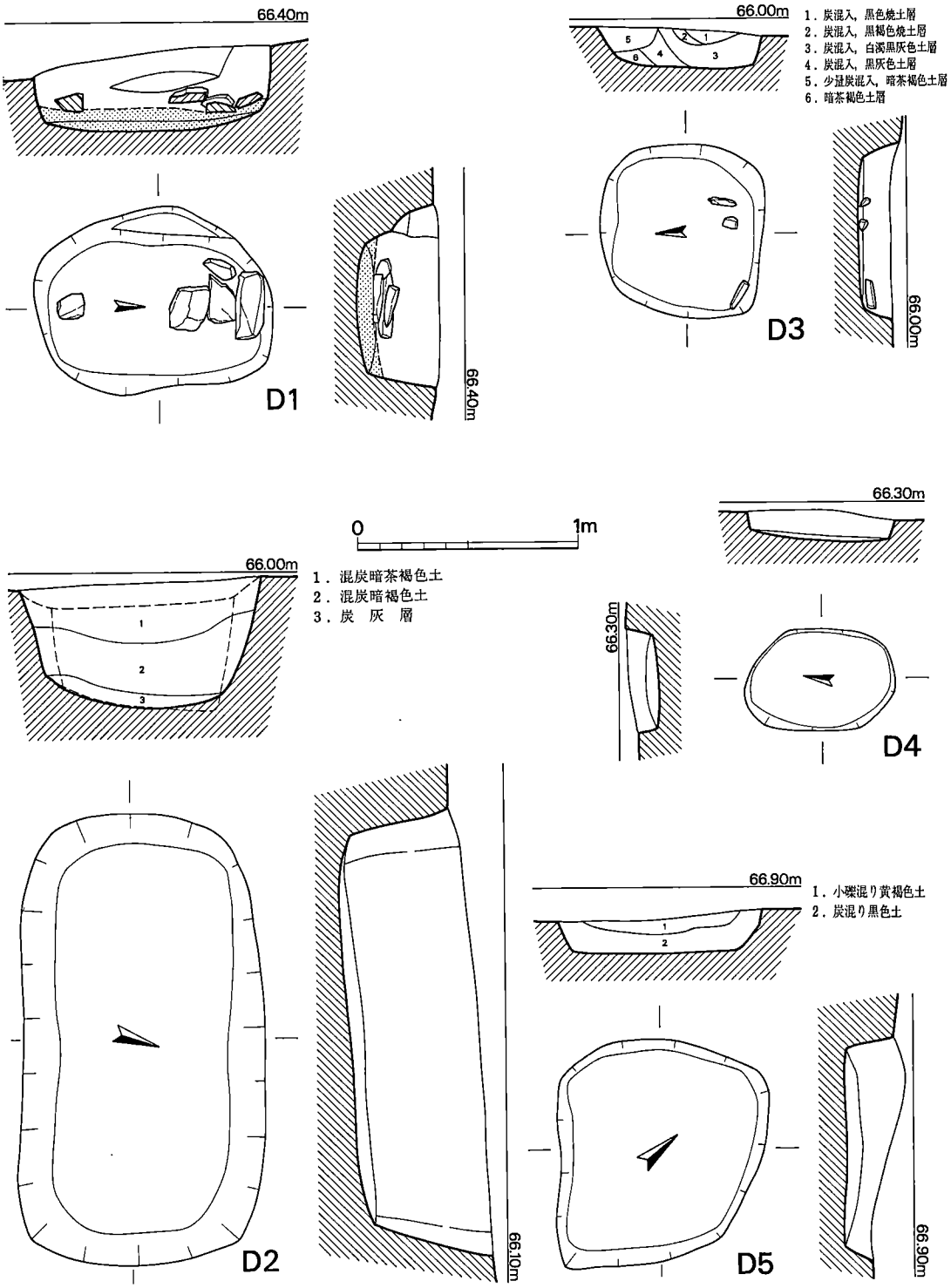
D－1の西隣に位置する。ほぼ東西に長い大きめの隅丸長方形土坑である。長軸上で，上端の長さ2.04m，幅1.1m，下端で長さ1.77m，幅は0.76mとなる。深さは南端で0.55m，北端で0.45mとなる。

最下層には，薄く炭・灰層があり，その上に厚く，炭の混じった暗褐色土，最上部には炭の混じった暗茶褐色土がみられる。周壁は殆ど全面焼けて赤変している。

中からは遺物皆無で，骨片の出土も無い。火を焚いたことは確実であるが，何の目的によるのか，また，どの時代のものなのか全く知り得ない。（中間）

3．D－3（第255図）

I区谷部の緩斜面にて検出され，D－1の西に位置する歪方形の土坑である。規模は75×80cmで，深さ13～18cmである。覆土は炭粒が多く混入した黒褐色土である。また，上層に炭が多量に混入した焼土層が存する。遺物の出土を見ず，時期・用途は不明である。しかし，本遺構がC－11のすぐ脇に位置し何らかの関係が窺われる。（平嶋）



第 255 図　D－1～5実測図（1/30）

4．D－4（第255図）

C－11の墓坑東側に接し，棺の頭部側に位置する土坑である。平面は楕円形を呈し，長径0.69m，短径0.47m，深さ0.14mの浅い土坑である。坑内は底面まで炭灰層の堆積であるが周壁は焼けていない。出土遺物はない。（新原）

5．D－5（図版129，第255図）

D－4の東2.5mの所にあり，C－10とC－15の中間に位置している。平面は不整方形で長辺1m，短辺0.93m，深さ0.27mを測る。坑内の状況はD－4と同様である。出土遺物はない。（新原）

6．D－6（図版130，第257図）

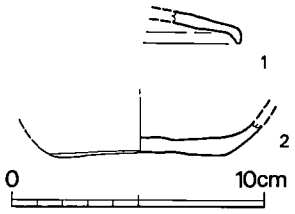
D－6からD－13はI地区丘陵尾根上に位置するものである。D－6は17号墳の前面5mほど南にあり，当初表土直下より須恵器や土師器などの遺物が多数出土していたので17号墳石室内のカキ出しによるものと思われたが，調査の結果長辺5.64m，短辺1.6m，深さ0.45mの主軸を斜面に平行にとる不整長方形の土坑であることが判明した。土坑内は上半部は暗褐色土下半部は炭灰層で埋まり，底面と北側コーナー壁付近は焼けて赤変していた。

出土遺物は土坑上面からのものと，坑内堆積の炭灰層からのものがあり，上面出土のものは17号墳出土土器実測図（第106図）の3（須恵器杯蓋），7（土師器杯），8（土師器小皿）が，炭灰層出土のものは第256図1の須恵器杯蓋と2の土師器杯がある。（新原）

出土遺物（第256図）

須恵器杯蓋（1）口径不明の小片で，口縁端部が丸っこくなるタイプである。内外面ともに回転ナデ，胎土に細砂幾らか含み，焼成堅緻で青灰色を呈する。

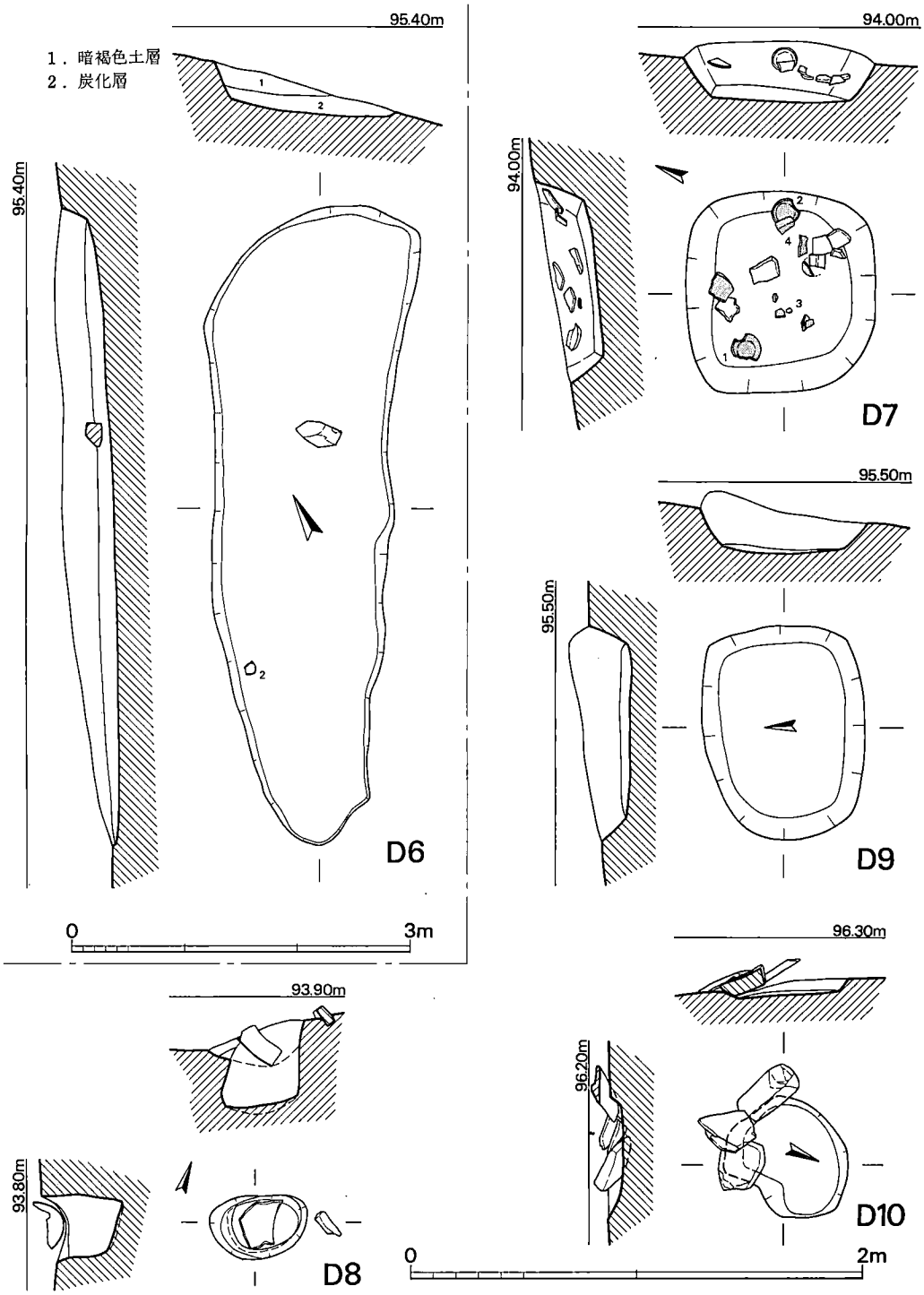
土師器杯（2）底径7.0cmの破片で，底部ヘラ切離しの類である。体部が内湾気味に丸っこく開くものとなろう。胎土精良で焼成不良，黒褐色～暗茶色を呈する。内外面は磨滅して調整不明である。



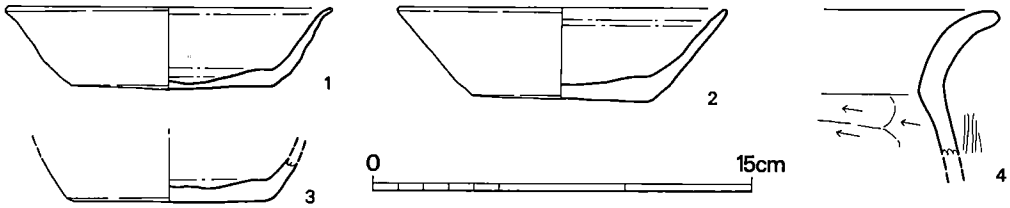
第256図 D－6出土土器実測図（1/3）

以上の土器は，いずれも8C末～9C初頭の特徴を示している。（中間）

7．D－7（図版130，第257図）



第 257 図　D－6～10実測図（1/60・1/30）



第 258 図　D－7出土土師器実測図（1/3）

D－7からD－12は丘陵尾根線より西側斜面にかけて群集している。D－7は平面隅丸方形を呈し，規模は長辺0.89m，短辺0.83m，深さ0.21mを測る。坑内からは炭灰とともに土師器杯などが出土している。（新原）

出土遺物（第258図）

土師器杯（1～3）1は口径13.0cm，器高3.2cm，底径8.0cmの底部ヘラ切り類である。体部下半から内湾気味に開き，口縁部で小さく外反する。内底面にはナデツケがみられ，底外面にもヘラ切り後にナデツケが行われる。体部は横ナデである。焼成良く，暗茶褐色を呈する。2は口径13.1cm，器高3.6cm，底径7.1cmの底部ヘラ切り類である。体部は口縁部まで直線気味に開き，内底面には一方向のナデツケがみられる。胎土・焼成とも良好で，淡茶色を呈する。内面の⅓程に煤が付着する。3は，底径7.9cmのヘラ切り離し類である。内底面にナデツケはみられない。内面には煤が付着する。

土師器甕（4）口縁が厚くなく，やや長めに開く類で，頸内面に稜をなす。胴部内面は横位ヘラ削り，外面は目の粗い縦ハケを施す。焼成良く，淡褐色を呈する。

以上のD－7出土土器は，杯の器形・法量，甕口縁の形態等から8C末～9C初頭の所産とされよう。（中間）

8．D－8（図版131，第257図）

D－7より北へ6mほど上の標高93.8mの高さで出土した土坑である。

土坑は長径0.42m，短径0.28mの平面楕円形を呈し，深さは0.35mを測る。土坑は西側は二段掘りで，下段の断面はフラスコ状となる。坑内上半部からは夜臼式土器甕の下半部が出土した。縄文時代晩期の埋め甕であろう。なお，縄文晩期の住居跡が4軒ほど丘陵下のI地区谷部で検出されている。

遺物は都合により次回縄文時代編の報告書にて述べる。（新原）

9．D－9（図版131，第257図）

D－8より北上方11mのところにあり，標高95.4mの高さに位置する土坑である。土坑は片岩の岩盤に掘り込まれ，長辺0.95m，短辺0.72m，深さ0.27mを測る隅丸長方形の平面プランを呈している。坑内は炭混りの土が堆積し，周壁及び底面は焼けている。出土遺物はない。

（新原）

10．D－10（図版132，第257図）

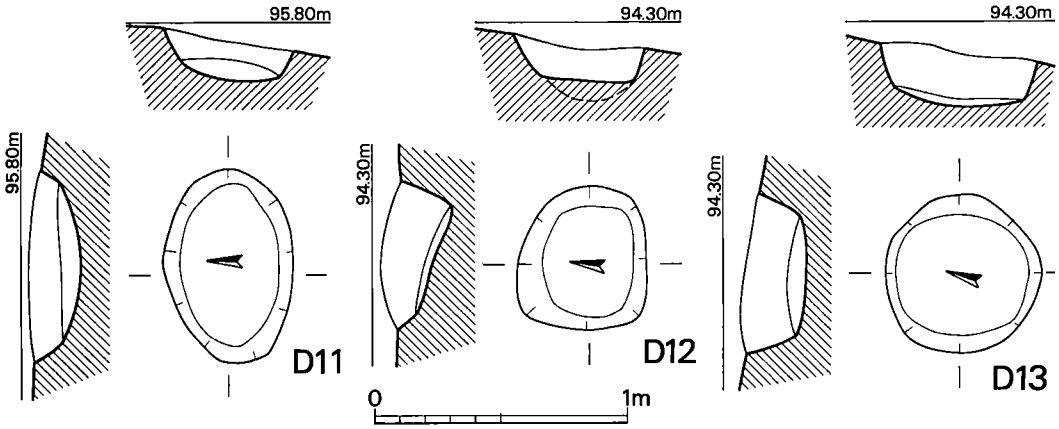
D－9より北上方5mのところにあり，標高96.2mに位置している。土坑は長径0.55m，短径0.42m，深さ0.07mと不整形で浅いものであるが，南側の壁肩には4枚の割石が蓋石もしくは側壁のように並べられている。坑内は炭混黒褐色土の堆積で，東壁は焼けていた。出土遺物はない。（新原）

11．D－11（図版132，第259図）

D－10の南東下4.5mの所にあり，標高95.8mに位置している。平面は楕円形で長径0.77m，短径0.56m，深さ0.2mを測り岩盤に掘り込まれている。坑内には炭混茶褐色土が堆積しているが周壁は焼けていない。出土遺物はない。（新原）

12．D－12（第259図）

D－8の西8.5mの地点，丘陵尾根線上にあり，標高94.2mの高さに位置している。平面は隅



第 259 図　D－11～13実測図（1/30）

丸長方形を呈し，長径0.57m，短径0.51m，深さ0.25mを測り，底面は東側が深くなる。坑内には炭混暗褐色土が堆積しているが，底面，周壁とも焼けてはいない。出土遺物はない。

（新原）

13．D－13（図版132，第259図）

この土坑だけは丘陵尾根線より東斜面につくられ，標高94.2mに位置している。土坑は径0.62mの円形を呈し，深さは0.24mを測る。坑内には炭混暗褐色土が堆積し，底面，周壁ともに焼けている。出土遺物はない。（新原）

土坑の性格

以上，Ⅰ地区において谷間部と丘陵部から計13基の土坑が発見された。内訳は，谷間部でD－1からD－5の5基が，丘陵部でD－6からD－13の8基である。

谷間部には竪穴式石室を中心とした墳墓群が営まれているが，土坑はそれらの中央部にあたる広場的な位置に集中している。5基の土坑のうち大形のD－2以外は小形方形に近い形状をなすが，5基全て周壁が焼けたり，坑内に炭化層の堆積をみ，火を受けた形跡が認められる。しかし坑内からの遺物の出土は皆無であるが，逆に言えば火を焚くための土坑と言うことができよう。また，これら土坑群の時期は決め手に欠くが，周囲に営まれた墳墓群と同時期の5世紀前半代を中心とする頃のもので，土坑の性格については，しいて言えばこれら墳墓群の葬送儀礼に伴なう送り火を焚いた跡とは考えられないだろうか。

一方，丘陵上に所在する8基の土坑のうち，D－8は縄文晩期の埋甕で，D－6・7は8C末～9C初にかけてのものであることが判明している。これら以外の土坑は出土遺物はないが，位置的関係からD－6・7土坑の時期とほぼ同一と考えられる。また，D－8以外の土坑は全て周壁や底面が焼けたり，あるいは坑内に炭灰層の堆積を見，とくにD－7では坑内上部より副葬品とみられる土師器杯が出土している。

当遺跡から西方約2㎞離れた池の上墳墓群では8C中頃から9C前半にかけての時期の火葬墓が40基ほど確認され，なかには蔵骨器を埋めているものもみられる。これらは時期的にもほぼ同時期で，また土坑の遺存状況も当土坑群と相似している。以上のことなどから当土坑群からは火葬骨などは検出されなかったが，D－8を除く丘陵上の土坑群は火葬墓と考えられよう。

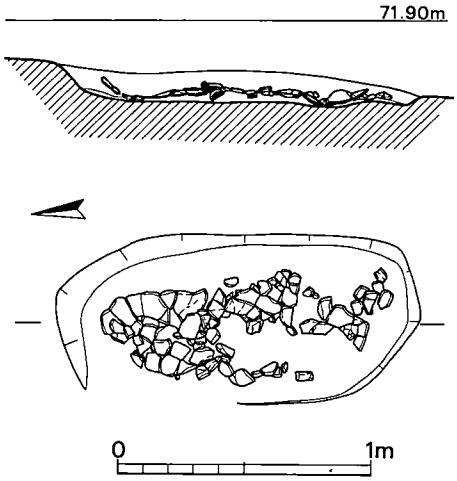
（新原）

F　甕棺墓の調査

1．1号甕棺墓（図版133，第260・261図）

C－42と並び，C－47とC－38の間に位置する。残存状態が悪く明確ではないが，接口式の土師器甕による甕棺墓である。墓坑形態は1.45×0.67mの長円形を呈し，深さ5～15cmが現状である。傾きは，若干北側が高いがほぼ水平で，主軸方位はN5°30′Eにおく。また，下甕部で，下甕以外に混在して小形の甕が検出され，下甕底部に使用されたものであろう。甕棺は非常に小型であり，小児用であろう。

また，副葬品として土師器椀が甕棺南側の墓坑内より出土する。



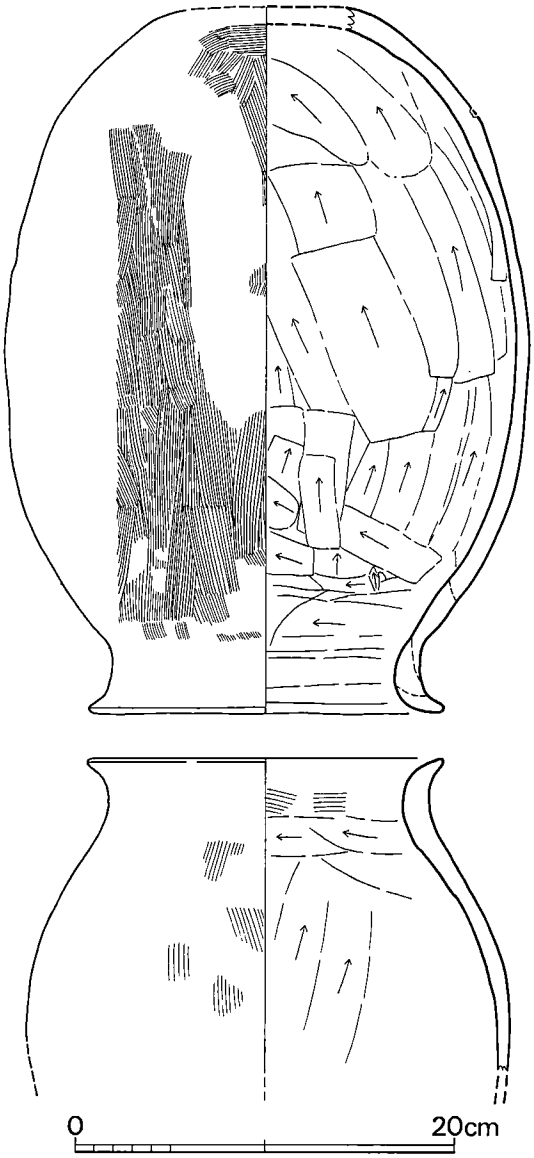
第 260 図　K－1出土状態実測図（1/30）

上甕　全体の⅔を欠損し，また部分的に欠損している。復原口径18cm，器高37.5cmである。内面頸部～胴上位横方向ヘラ削り，それより下位は縦方向ヘラ削り，外面は口縁下位～胴下位縦方向ハケ目，底部横方向ハケ目，口縁は外面一部重複して横ナデである。底部平底気味である。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良。内面暗黄色，外面薄茶～黒色を呈す。

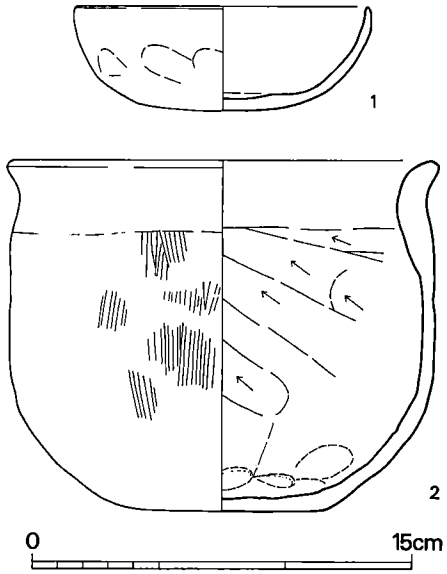
下甕　口縁から胴部までの½が復原できた。復原口径18.2cmである。器表はかなり磨滅するが，口縁横ナデ，内面頸部にハケ目が残る。胴部は外面やや粗い縦方向ハケ目，内面ヘラ削りである。胎土に粗い石英粒や細かい雲母，長石粒を多量に含む。焼成割合に良く，外面二次火熱を受けて赤茶～明茶色で，内面は暗黄褐色を呈する。

共伴遺物（図版133，第262図）

土師器椀（1）口縁を一部欠損するが，ほぼ完形である。器表面磨滅著しく，調整は確認できないが，外面に手持ちヘラ削り風の凹凸があり，砂粒の動きも認められる。口径11.4cm，器高4.1cmを測る。胎土精良にして，焼成良である。内外面ともに淡黄褐色を呈する。



第 261 図　K－1実測図（1/4）



第 262 図　K－1出土土師器実測図（1/3）

土師器甕（2）全体の⅓が復原できた。復原口径16.4cm，器高13.9cmである。全体に器表面が磨滅している。口縁横ナデ，胴部外面割合に細かいハケ目で雑にし，内面ヘラ削り，底部外面磨滅により不明，内面指押えの凹凸が顕著である。胴中位外面に煤が付着する。胎土に粗い石英粒を多く含み，焼成やや軟質であるが良。外面茶褐色～黄褐色，内面茶褐色を呈す。下甕と共に出土し，棺材として使用したものであろう。

本棺は，土師器の甕を棺材として用いる。この様な例は，畿内に於いて7C～9C後半代にみられ，土師式合口甕棺墓と名付けられている。これらは，小型で水平に埋置している。

本棺も水平に埋置され，時期も6C末～7C初のものと考えられる。時期的に若干のぼるが，本棺も上述のものと同様のものであろう。（平嶋）

G　表土出土の遺物

柿原古墳群Ⅰ地区では，既述の如く，各種の古墳が既に盗掘を受け，或いは，墳丘さえ削除されたものが多かった。その為か，当初の地表踏査時，地形測量時，表土剝ぎの時，等にどの古墳に伴うものか判別出来ない遺物がかなりの量採取された。

ここでは，それらのうち縄文・弥生各期の遺物を除いた分を掲載しておく。

このうち，幾らかまとまりをみせて出土した分がある。C－49の項で説明したが，C－50の西上方に径3.5m程の範囲に黒色包含層がみられ，C－49の周溝北端上にかぶっていた。この範囲は精査したが，単なる炭を混入する包含層で，遺構は確認出来なかった。土器は7C後葉から8Cにかかる時期のもので，丁度，より斜面高位の13～18号墳にみられる土器と同時期であり，古墳築造に際して，この尾根裾で焚火をして休憩所とした場所かとも想像される。

また，16号墳西側の尾根先端にあたる，測量杭P．38付近においては，7C後葉～8Cの遺物が散布している。これは，8C末～9C初期のD－7とも近く，この近辺に他の土坑も集中することから，この見晴らしの良い尾根先端の平坦地を，この時期に何らかの目的で使用したことが考えられる。

また，1号竪穴住居跡，C－34・35に挟まれた，測量杭P．59付近からは7C初・7C末・8C後葉各時期の土器が出土している。7C初頭期のものは，1号竪穴住居跡に関連するものであろう。より後代のものは，K－1・C－42・C－36・23号墳への墓道に関する遺物となろうか。

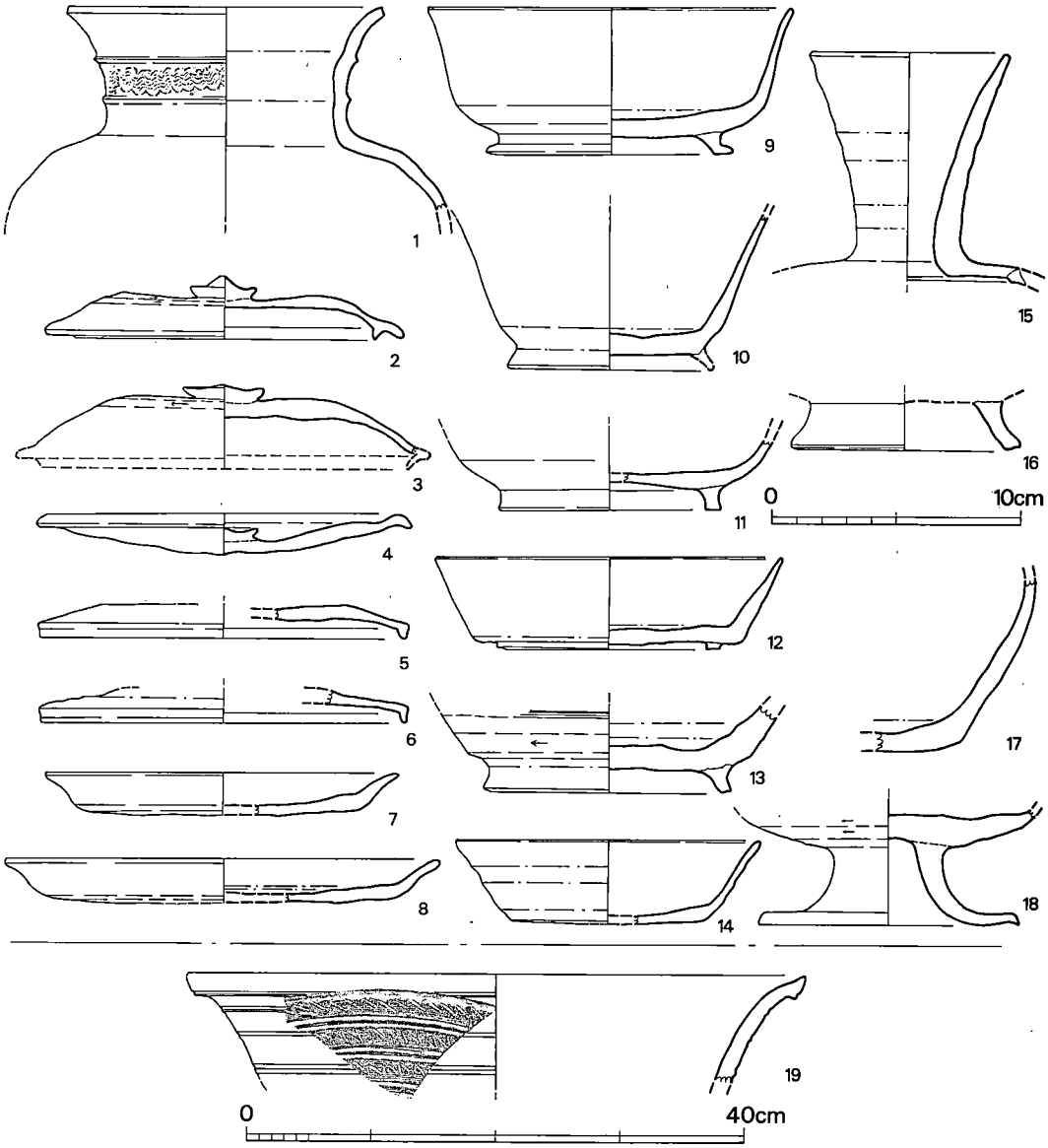
以下，表土採集遺物を列挙してゆきたい。

陶質土器（第263図）

壺（1）表土出土品で，残念乍ら正確な出土地点が明らかでない。口径12.8cmを測り，口唇外面はほぼ平坦面をなし，僅かにへこむ部分もある。頸部外面にはシャープな2条の凸帯間に，波長の短い櫛描波状文（6本歯）を施す。胴部は肩が張り，やや凹凸がみられる。内外面ともに回転ナデを施す。胎土に細砂粒を僅かに含み，焼成堅緻で，口頸部外面は灰黒色を呈し，その内面と胴部外面は灰かぶりして灰色を呈する。この土器は池の上Ⅰ式であり，4C後葉期の所産である。

須恵器（図版134，第263・264図）

杯蓋（2～6）2はC－50の西上方の黒色包含層出土品で，口径12.0cm，器高2.5cmを測る。天



第 263 図　表土出土土器実測図①（1/3・1/6）

井外面は左廻り回転ヘラ削り，内面にはナデツケを施す。3は，16号墳西方のP．38杭付近表土下出土品で，低い擬宝珠形撮を付ける。天井外面は回転ヘラ削りを施す。大口径で器高の高い類である。4は，16・17号墳の間での表採品で，口径14.8cmとなる。著しく焼き歪んでおり，鳥嘴状口縁は丸味を帯びている。天井内面にはナデツケがみられる。5は，C－6西側表土下出土品で，復原口径14.7cmを測る。天井外面には回転ヘラ削り，内面は広い範囲がナデツケに

よる。口縁外面から口縁内面側5㎜の範囲までのみに自然釉が付着しており，蓋として被せたまま焼成されたものと考えられる。6は出土地点不明の表採品で，復原口径14.7cmを測る。以上の2～6は孰れも焼成堅緻である。

高台付杯（9～12）9は，1号竪穴住居跡の南西側のP.59杭南側表土下出土品である。口径14.7cm，器高5.9cm，高台径10.0cmを測る。高台が強く外方へ踏ん張り，体部は僅かに外傾して立ち上がり，深い器形となる。体部外面下位はヘラ削りの上をナデており，底外面中央は左廻りの回転ヘラ削りのままである。焼成やや堅緻で内面小豆色，外面は灰小豆色を呈する。10は西斜面裾部出土品で，底径8.4cmを測る。底部外面は左廻り回転ヘラ削り，底内面には一方向へのナデツケがみられる。体部が直線的に開く深い器形となる。11はC－50西上方の黒色包含層出土品で，底径9.0cmを測る。やや高めの高台は垂直に近く付けられ，体部下位で稜をつくる類となる。底内面にはナデツケがみられる。12は，1号竪穴住居跡西南方のP．59杭南側表土下出土品で，口径13.9cm，器高3.7cm，高台径9.0cmを測る。低い高台で開きの強い体部となる。9～12は孰れも焼成堅緻である。以上のうち，10は古い様相がみられ7C後葉，9・11は7C末～8C初頭頃，12は8C後葉～末期にそれぞれ位置付けられよう。

皿（7・8）7は，16号墳西側のP．38杭付近表土下出土品で，復原口径14.2cm，器高1.7cmを測る。口縁部が外反する小型品で，底外面はヘラ削りの上をナデており，底内面にはナデツケがみられる。焼成やや軟質である。8はC－57付近西側斜面表土下出土品で，復原口径17.5cm，器高1.8cmとなる。底外面は回転ヘラ削り，内面にはナデツケがみられる。焼成良く，口縁外面のみ黒色をなす。

杯（14）出土地点不明の表採品で，復原口径12.2cm，器高3.4cm，底径7.8cmを測る。底部はヘラ切り離しであるが，他内外面は磨滅する。胎土に黒色微細粒子が目立ち，焼成やや軟質で，灰色をなす。

壺（13・16・17）13はC－50西上方の黒色包含層出土品で，外方へ踏ん張る高台を付ける。外面上位にはカキ目がみられ，その下は回転ヘラ削りを施す。内面中央はオサエナデで未調整的である。他は回転ナデによる。焼成やや軟質で，内面淡青灰色，外面は暗灰小豆色を呈する。16は，16・17号墳西側の尾根上トレンチ西区表土下出土品で，長く外方へ踏ん張る高台部分である。端部は13と同様凹状となり，焼成軟質で灰色を呈する。17は16・17号墳の間で表採されたものである。底部は内外面ともにナデツケ，胴部内外面には回転ナデを施す。焼成堅緻で，内面淡灰色，外面は黒灰色を呈する。

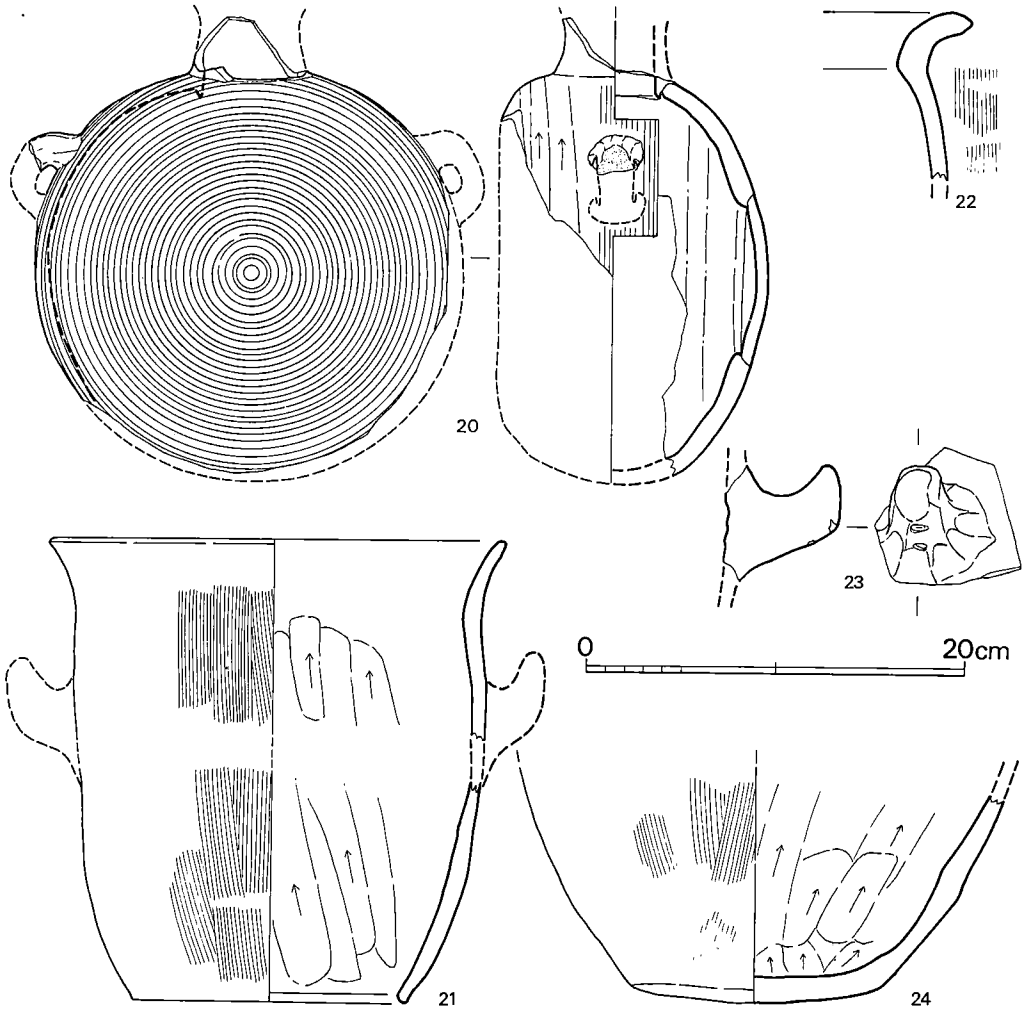
長頸壺（15）当初の表面踏査時に採集されたもので，採集地点は明らかでない。口径8.1cmを測り，口頸部内外面は回転ナデを施す。頸部接合のための胴上端抉り孔の段も明瞭である。焼成堅緻で黒色をなす。

高杯（18）C－4付近表採品で，脚端径10.5cmを測る。脚端が鋭角に接地するもので，脚部内

外面は回転ナデ，杯部外面は回転ヘラ削り，内面中央はナデツケを施す。焼成堅緻で脚内面のみ暗紫灰色，他面は灰黒色を呈する。

甕（19）Ⅰ地区の谷の前面に新池と称する堤池が在り，その周辺で採集されたものである。口径50.0cmの大形品である。頸部外面に2条づつの太い沈線を3箇所巡らし，その間3箇所に，カキ目の上に雑な櫛描波状文を施している。口縁肥厚部外面から頸部内面中位までは回転ナデ，その下位はやや雑な横ナデを施す。焼成やや堅緻で，内外面ともに小豆色を呈する。

提瓶（20）C－50の西上方黒色包含層出土品で，胴部最大径22.7cm，推定厚さ14.3cmを測る。肩部に半円環状の耳を付け，胴部の表の面は，3㎜間隔の粗い同心円カキ目を施し，裏面側は



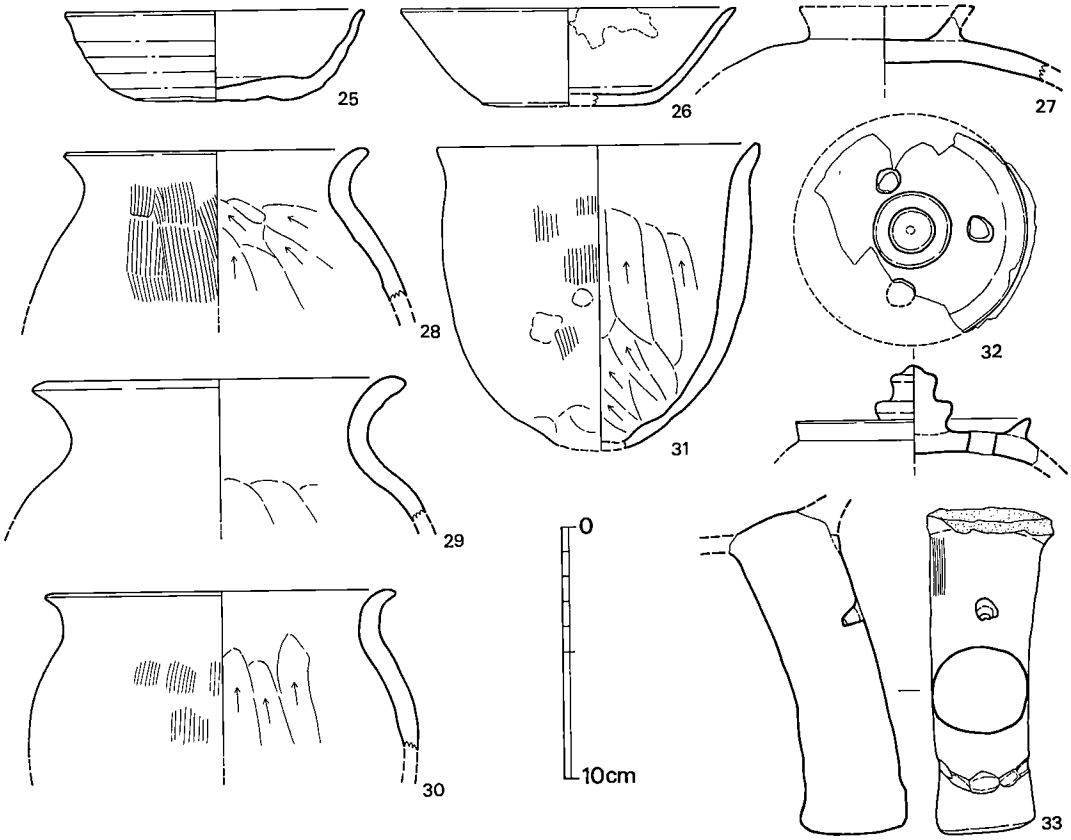
第 264 図　表土出土土器実測図②（1/4）

回転ヘラ削りを行う。胴部表面側中央部は直径8cmの円形に外面から貼り付けている。内面はこの部分のみナデツケ状で，他は回転ナデを施す。焼成堅緻で，外面はかなり灰かぶりして，灰黒色をなし，内面は淡青灰色を呈する。

土師器（図版134，第264・265図）

杯（25・26）25はP．38付近表土下出土品で，口径11.9cm，器高3.5cm，底径6.6cmを測る。底部はヘラ切り離し後未調整で，他は横ナデが施される。内底面は磨滅する。体部外面にはナデの稜が目立つ。26は，16・17号墳の間で採集されたもので，底部ヘラ切り離しで，復原口径13.2cm，器高3.7cm，底径6.9cmを測る。内面口縁下に油煙によるこびりつき部がみられる。

蓋（27）16・17号墳西側の尾根上トレンチ西区表土下出土品で，輪状撮を付ける大型の蓋である。撮は高台が外方へ踏ん張るような形態をなす。天井部の器壁厚く，器表磨滅して調整不明である。胎土精良，焼成良好で淡褐色を呈する。



第 265 図　表土出土土器実測図③（1/3）

表土出土

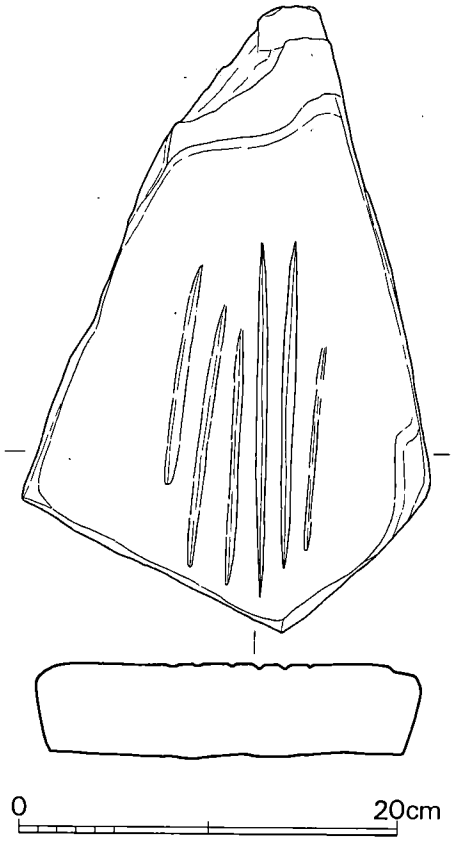
香炉蓋（32）出土地点不明の表採品で，中心に2重の宝珠撮をつけ，その周囲に3孔を穿つ。天井部と体部の境目外面には凸帯を付け，輪状に巡らせる。内面中央部はナデツケ，他面は全て回転ナデによる。胎土精良，焼成土師質であり淡茶褐色を呈する。平安期の所産であろう。

土鼎脚部（33）出土地点不明の表採品で，同一個体の他の脚と思われるものがもう1本あり，刺突孔・凹線もあり殆ど同工である。現存全長13cm弱，直径4.5～3.7cmのほぼ円柱形をなし，下端面は象の足の如く平坦面をなす。上端面の器壁内面はオサエナデであり，ヘラ削り等ではない。中位よりやや上に深い刺突孔がみられ，下端近くには太い凹線が半周巡る。部分的に細かい縦ハケがみられる。胎土に粗砂粒幾らか含み，焼成良く黄褐色をなす。明瞭な二次火熱を受けておらず，刺突痕や凹線など土鼎の足としては異様な感じを受け，或いは把手となるものかとも考えるが，明確でない。

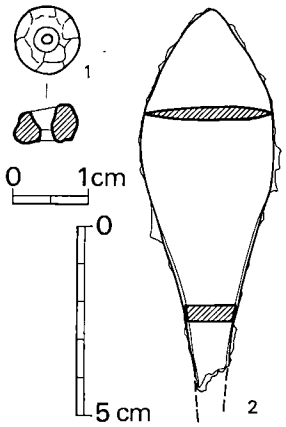
甑（21）C－7付近表土下出土品で，上半と下半破片を図上復原したものである。復原口径24.0cm，器高24.5cm，底孔部径14.4cmを測る。口縁は肥厚せずゆるやかに外傾する。胴部外面は，わりと目の細かい縦ハケ，内面はヘラ削り上げ，底孔部内外面は横ナデを施す。焼成良く，明茶褐色をなす。

甕（22～24，28～31）22はC－25周溝内東側出土品で，明らかに混入品である。口縁部は肥厚して外反し，張らない胴部で，外面は縦ハケを施す。内面は頸部に稜をつくり，胴内面はナデている。奈良期の所産である。23は，C－8付近表土下出土品で，把手部外下面に2個の刺突孔を有する。外面は指頭による整形痕著しい。器壁内面は接合の為に粘土を押し込めた凹凸が著しい。24は，1号竪穴住居跡西南側のP－59杭の南側表土下茶褐色土出土品である。厚手で平底風となるタイプで，外面には粗い縦ハケが幾らか残る。内面はヘラ削り上げを施す。外面上位は二次火熱を受けて赤変する。28はC－7付近表土下出土品で，復原口径12.0cmを測る。胴の張る小型甕で，胴部外面はやや細かい雑なハケ，内面はヘラ削りを施す。胴部外面と頸部内面に煤が付着する。29は，C－8付近表土下出土品で，復原口径14.7cmを測る。張る胴部から丸く反転して開く口縁となる。全面磨滅して調整不明である。30は，C－4付近表採品で，口径13.9cmの小型甕である。胴部外面は縦ハケ，内面はヘラ削り上げを行う。胴部外面には煤がこびりつき，口縁内外面は二次火熱を受けて赤変している。31もC－4付近表採品で，胴部外面は雑な縦ハケ，内面はヘラ削りを施す。復原口径12.7cmの小型甕であるが，全体に凹凸が目立ち手捏ね的である。口縁内外面には煤が付着して胴部外面は二次火熱を受けて赤変している。

砥石（第266図）4号墳付近の表採品で，緑色片岩板石の上面に6本の条線溝が付いたものである。上面は特に磨いてはいないがやや凹面状をなす。他側面・裏面は全く加工していない。条線溝はV字状で，金属器端の尖磨等に使用されたものであろう。長さ33.2cm，幅21.5cm，厚さ



第 266 図　表土出土砥石実測図（1/4）



第 267 図　表採玉・鉄器実測図
（実大・1/2）

0cmの大形のものである。

丸玉（第267図１）Ｃ－２の東側付近で採集されたもので，淡緑色の緑泥片岩製である。径８㎜，厚さ4.5㎜，孔径は上端で３㎜，中央で２㎜を測る。表面の研磨は半調整のままで，面取り状態を残している。重量0.5ｇとなる。

鉄鏃（第267図２）Ｃ－51～54の占地する小舌状低尾根の南端のＰ．21杭付近採集品である。広根椿葉式で，現存長10.1cm，最大幅3.5cmを測る。孰れかの石室が破壊されて散乱したものと考えられる。（中間）

H　甘木市柿原古墳群人骨鑑定結果

九州大学医学部解剖学教室
教 授　永井　昌文

1．I　地　区

1)　C－4号石棺人骨

保存状態　ほぼ左半の頭蓋冠で底部，顔面骨および下顎を欠く。他に少量の頭蓋細片があるが，軀幹・四肢骨は亡失している。赤色顔料の付着は認められない。

推定年齢　熟年

内外の冠状縫合はともに完全に癒合している。

推定性別　男性

眉弓，乳様突起は発達している。

2)　C－32号石棺人骨

保存状態　後頭部を欠く頭蓋冠である。他に左頬骨，右恥骨上・下枝片，両側大腿骨小片（左側は上半部）が残る。赤色顔料の付着は無い。

推定年齢　成年

頭蓋縫合の癒合部はわずかである。

推定性別　女性

前頭膨隆は強く，眉弓の発達は弱い。頭蓋壁および眼窩上縁はともにうすい。右恥骨の形態は女性を思わせ，左大腿骨も細い。

3)　C－47号石棺人骨

保存状態　非常にうすく内外板が離開した頭骨片が数個あるのみである。赤色顔料はみとめられない。

推定年齢　乳児

推定性別　不明

4)　C－51号石棺人骨

保存状態　殆んど頭骨のみが残っていた。軀幹および四肢の骨は孰れも少量・小片で，遺体の仰臥伸葬を思わせる位置で出土した。頭骨は下顎を伴い，右半側から底部にかけて腐食が甚だしく，その大半を欠失している。赤色顔料の付着は認められない。

推定年齢　成年（20代）

歯の咬耗はブロカの１度であり，矢状・冠状両縫合ともに癒合は認められない。

推定性別　女性

眉弓の発達弱く，眼窩上縁はうすく，前頭膨隆はやや強い。

抜歯風習の痕跡　無し

4|と|1・2が歯槽は解放したまま亡失しており，他は全て良く遺存している。従って明確にこの風習の痕跡はない。

5)　C－52号石棺人骨

保存状態　頭蓋冠片の僅少と左側の上下臼歯５本が残っている。ただ，他の人骨と違い，黒褐色に汚染し骨質は堅く，後世に火気を受けたかと疑われる。赤色顔料の付着なし。

推定年齢　熟年

臼歯の象牙質は広汎に露われ，ブロカの３度の咬耗を示す。

推定性別　男性（？）

骨からは推定出来ぬが，伴出遺物から見ると，或いは男性かと思われる。

2．G　地　区

1)　C－１号石棺人骨

保存状態　左の側頭部から底にかけて欠失した頭蓋と，下縁を欠く下顎骨の右半が残っている。四肢および軀幹の骨は消失している。なお顔面に赤色顔料の付着を認める。

推定年齢　成年

矢状・冠状両縫合ともに未だ癒合は現れていない。智歯は上下顎とも未萌出であって，咬耗はブロカの２度である。

推定性別　男性

性的特徴の発現がやや弱いが，年齢が若いためであろうかと考える。

抜歯風習の痕跡　無し

残存歯式は次の通りであって，明確にこの風習の痕跡は無い。

(8)	×	×	○	△	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	／
(8)	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	×	×	×	／

○：歯槽解放，　×：歯槽閉鎖，　／：欠損，△：歯根のみ，（　）：未萌出

2)　C－2号石棺人骨

保存状態　ブレグマ部を中心とする15×10cmほどの頭蓋冠片と，他に両側の大腿骨小片がある。赤色顔料の付着は認められない。

推定年齢　　成年

冠状・矢状両縫合ともに未だ癒合は少ない。

推定性別　　男性（？）

前頭部の膨隆度，骨壁の厚さなどから見て男性である可能性の方が高い。棺の大きさもこれを裏付けているようである。

3．あとがき

全般に人骨の保存状態は不良であって，軀幹・四肢の骨は言うまでもなく，頭骨も辛うじて半側を残すだけの状態である。従って多くを言えないのであるが，半側の計測から全貌を推した結果を以下に略記する。

やや残りの良いI・C－51号人骨（女性，成年）およびG・C－1号人骨（男性，成年）の所見を基に記す。

両者ともに，頭形は前後に長い長頭型であるが，顔貌は高顔に傾き，北部九州・山口地方の弥生人の流れを汲み，低顔の西北九州弥生人とは相違する。ただ，G・C－1号は，高顔に傾きながらも低眼窩で，九州の縄文以来の在来的な特徴を，この部分になお温存するかに見えて興味深い。

身長も知りたいところであるが，残念ながら保存不良な四肢骨のために推定は全て不能に終った。

Ⅳ　各　　論

A　横穴式石室の類別と変遷

柿原古墳群に於いて，横穴式石室は多様な形態を示す。それらを平面形で大きく分けると，方形のもの，歪円形を示す胴張りのものがある。前回報告のG・H・S地区も含めてそれらを時期的に，或は石室構造上で類別すると大きく７類に分かれ，更に12類に細別される。以下それらについて述べる。

Ⅰ類　玄室平面形は羽子板状を呈す単室の石室である。基底部は三壁ともに板状石を横長に立てて用い，その上段に小口積みを行う。袖石は両袖とも有さず，玄室基底部石と羨道部とは直に並び，その境に細長い小形の石を据えて框石としている。石室の規模は玄室長約185cm，最大幅約100cmである。石室構造上，19号墳は竪穴系横口式石室である。また，19号墳に類似している９号墳は，その撰地の面から19号墳とは全く同一のものとは言えないが，石室構造上近似しているものとしてⅠ類の内におく。５Ｃ前半代の年代が与えられる。

Ⅱ類　Ⅰ類同様に，玄室平面形は羽子板状を呈するがやや幅広となる。基底部は三壁とも板石を用い横長に立て，その上段に平積みを行う。袖は片袖で，７号墳の場合は，小形の石を石室内側に張り出して縦長に立て，その周囲に石積みを行い袖部を形成している。また框石は，袖部の内側に細長い板石を横長に立てて据えている。石室の規模は長さ240cm，最大幅180cmである。Ⅱ類は７号墳のみである。７号墳の規模からみて，Ⅱ類はⅠ類の直系のものではなく，近接した流れを酌むものと考える。本墳は５Ｃ中頃に近い前半代の年代が与えられる。また，７号墳では奥壁から80cmほどの所まで屍床と思われる石敷きが施される点に注目したい。

ⅢＡ類　本古墳群では５・８号墳がこれにあたる。玄室平面形は側壁に若干の丸味をもち，歪んだ羽子板状を呈する。石室構造は，奥壁に割合大形の板石を立て，側壁は８号墳両壁とも板石を横長に立て，５号墳では右側壁のみの残存ではあるが，玄室奥半部は板石を立て，前半部は平に据え，上段の積みに連続する。両古墳三壁ともに上段は平積みである。袖石は５号墳の右袖しか残存せず，小形の石塊をやや内側に張り出して立て，袖としている。左側もほぼ同様であると，掘方により推定する。８号墳は両袖ともに残存せず，その掘方と見做せる穴が存しその形状が推察され，袖石は側壁の並びから内側へ入り込み，５号墳同様に小形の石を立てていたであろう。框石は，８号墳は袖石の掘方間に板石が据えられるが，５号墳にはみられない。石室の規模は玄室長200～225cm，最大幅115～165cmである。５Ｃ後葉～６Ｃ初葉のものである。

ⅢB類　10号墳・11号墳が本類である。玄室平面形はやはり羽子板状を呈し，石室構造はⅢA類の８号墳と同様であるが，上段の積みは小口積みが行われる。袖は11号墳の右袖のみ残存し，左袖及び10号墳両袖は欠損している。しかし袖石の掘方と見做される穴が残り，その形状が窺える。右袖が残る11号墳に於いては，やや大形で細長い板石を内側に張り出し縦長に立てる。左袖も同様であろう。また，11号墳も同形状を呈するものであろう。羨道は10号墳では明確ではないが，右側壁は玄室右側壁から袖石を挟み，連続して羨道となり，11号墳は袖石の内側に面を合わせて羨道となる。框石は11号墳で，細長い板石を床に据え，そのすぐ脇に板石で閉塞を行う。10号墳では双方ともに残存していない。敷石は板状の礫を用いて玄室全面に行う。規模は玄室長215～225cm，最大幅約150cmである。６Ｃ初頭～中葉のものである。また，12号墳は残存状態が悪く，石室の形状は明確に知り得ないが，床面の状態および規模から本類に含まれるものである。

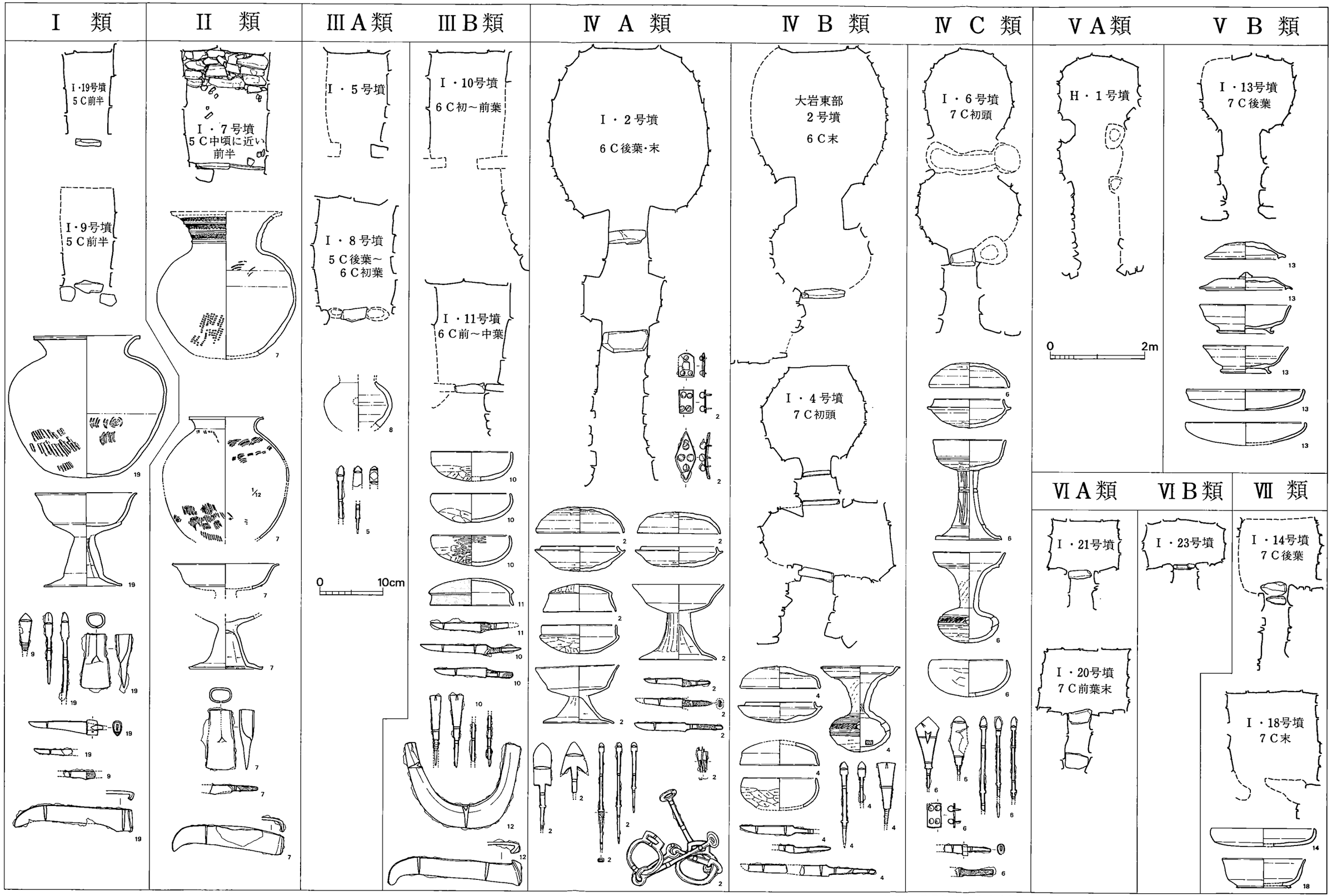
ⅣA類　玄室平面形が三味線胴張りを呈し，前室は略方形を呈する。しかし，前室は左右対称にならず，玄室の主軸からずれて前室・羨道が築かれる。石室の構築は，奥壁に極めて大形の板状石を鏡石として据える。これに対して袖石は非常に低く，床面から40cmほどの高さに据えられる。他の部位はすべて平積みである。石室全長約８ｍ，玄室長3.5m，幅2.5～3.3m，前室長１ｍ前後，幅２ｍ前後である。本古墳群のＩ・２号墳，Ｇ・１号墳，Ｈ・３号墳，Ｓ・１号墳[註1]等がこの類に当たる。また，これらは各々若干異なる点を有してはいるが，石室の形状，規模等から同類であると考える。６Ｃ末頃の年代が与えられる。また，Ｉ・３号墳は残存状態が非常に悪く類別は不可能に近いが，墳の形状や石室の規模から同類と考える。

ⅣB類　玄室平面形は円形に近く，奥壁鏡石の部位と玄門部位が直線的であり，辺を形どるが，やはり円形に近似している。前室は主軸方向に寸詰まりとなり幅が広大する。玄室と同じく丸味を帯びるが，横長であり。楕円形の平面形を呈する。また，本類でも玄室軸と前室～羨道の軸が屈折している。玄室は鏡石に，面は広いがやや薄手の板状石を用い，作業の簡略化を想わせる。他壁は前室も含め基底部より平積みである。ⅣB類は本古墳群のＩ・４号墳である。４号墳の時期は７Ｃ初頭が与えられている。また，本類の内に含まれるものとして大岩東部２号墳[註2]が掲げられる。

ⅣC類　鏡石が小形化し，平面形は玄室のどこにも角・辺が見られず円形を呈する。また，前室も丸味を帯び幅広となり，玄室と前室の床面積がほぼ等しくなる。石積みは袖部を除いて平積みである。本古墳群内においてはＩ・６号墳がこの類にあたる。また，その形状は朝倉町狐塚古墳[註3]に酷似している。

ⅤA類　玄室平面形は円形を呈する。しかし，前室は若干の膨らみをもつが，Ⅳ類ほど張り出さず，玄門袖石から前方へ細って行く。鏡石，袖石が小形化する。また，石積みは基底部から平積みである。Ｈ・１号墳がこれである。

第 268 図 横穴式石室分類表 （石室：1/80，遺物：1/6）



※遺物の番号は，各出土古墳No.を示す。

ＶＢ類　胴張りの単室横穴式石室である。玄室平面形は奥壁部に辺をもつ歪円形を呈し，奥壁中央に割に小形の板石を立て，鏡石としている。また，袖石も板石を立ててつくる。石積みは基底部より平積みである。石室規模は全長で3.5～５mほどである。本古墳群においては，Ｉ・13号墳，Ｈ・２号墳がこれである。７Ｃ中葉～後葉の時期が与えられる。そして残存状態が非常に悪いが15号墳も同類のものと考える。

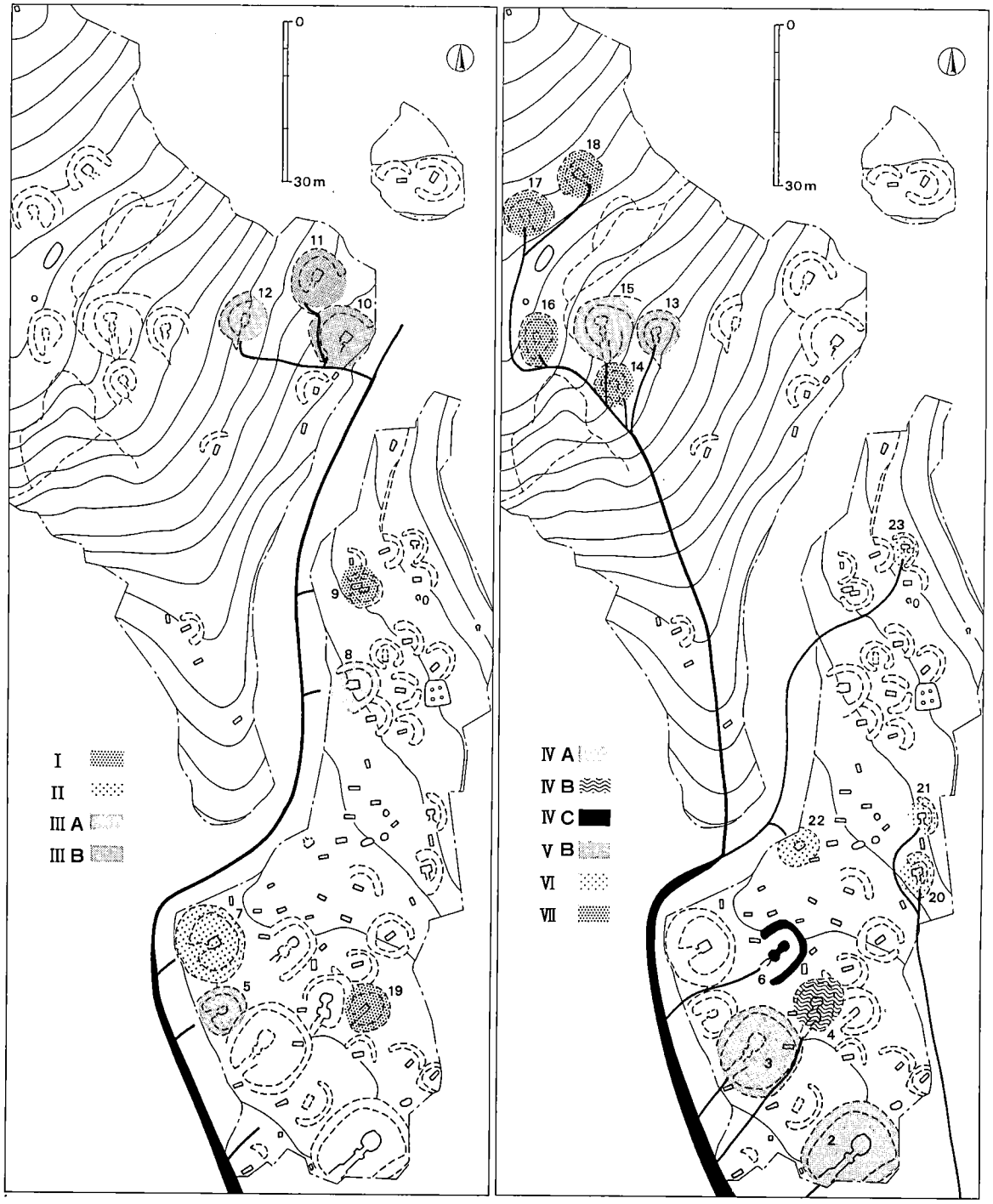
ⅥＡ類　玄室平面形が横長方形を呈し，四隅が角張る。基底部石は板石が立ち，その上段に同じく板石を平積みにし上部構造へつづく。また，袖も別段大形の石を据えることなく同形の板石を立て，羨道へ連続して築く。規模としては石室全長で2.2～2.6mの小形のものである。Ｉ地区の20号墳，21号墳がそれである。また，残存状態が非常に悪いが，基底部石，袖石の痕跡から22号墳も同類と思われる。22号墳は鏡石が大きく，敷石から，玄室も大形であることが推察され，この類の中では最も古式のものである可能性が高い。これらは，遺物の出土は殆どなく，20号墳閉塞その他より出土した須恵器杯によって，７Ｃ前葉頃の年代が与えられる。他も20号墳と大差なく，前後する程度の時期と考える。

ⅥＢ類　ⅥＡ類の形状がだらけて，全体に丸味を帯び，また，横に細長くなり竪穴式石室の長側壁に横口を付けた様な形態である。石室構造もⅥＡ類とほぼ同じである。23号墳がこの類にあたる。

Ⅶ類　玄室平面形が正方形に近く，ⅥＡ類同様四隅が角張る。また，四壁の構築も同様であり，基底部は板石が立ち，その上段に平積みを行う。しかし，Ⅵ類から直接変化するものとは考え難い。Ⅶ類は，Ⅵ類とは別系統のものであろう。石室規模は大小様々であるが，その形態から14・18号墳がこの類であり，16・17号墳も同類であろう。

以上のように類別した。これはほぼ時期的な変遷を含めて類別したものである。しかし，形態上ＶＢ類とした13号墳は，出土遺物より７Ｃ後葉の年代が与えられ，Ⅵ類の20号墳と年代的に逆転し，Ⅶ類とほぼ同時期の築造となる。またⅥ類の21・23墳も出土遺物が皆無であり，その年代も明確になし得ない難点がある。しかし，ＶＢ・Ⅵ・Ⅶ類は形態的に異なるが，現状ではおおよそ同時期に併存していたと考えたい。

群の構造　まずＩ～ⅢＡ類では古墳が散在している。これは，ⅢＡ類期までの古墳の占地は，前代の竪穴式石室を内部主体とする古墳群の慣習にならい，それぞれのグループの中に築造されている。詳細は次項で述べられるがそれらの大略としては，19号墳は，発掘区南端のＣ－16・21・23等のグループに属し，５・７号墳はＣ－21等のすぐ北のグループであるＣ－５・12・25等のグループであり，８号墳はＣ－14・38等で，９号墳はＣ－44・45等で構成するグループに属している。それぞれ，当代の盟主の墓と考えられる。更にこれらは，無袖のものや片袖，もしくは両袖は有していても粗略な構築がなされ，追葬は不可能で，初葬時の単体埋葬のみでその



第 269 図　横穴式石室墓道復原図（1/1,200）

役目を終える竪穴式的である。

ところが，形態上Ⅰ～ⅢA類に類似しているⅢB類は，両袖も確立し羨道も同様である。明らかに追葬を前提とした家族墓的石室として構築されている。また，本ⅢB類は谷の奥旧斜面に群集して築造される。その中でも10号墳が先行して築造され，ついで11号墳，12号墳の順に築造されたものであろう。また，11号墳は10号墳の周溝内に墓道を設定したと考えられ，10号墳の墓道と合流して谷筋を通る幹道へとつながるであろう。即ち，10・11号墳は親密な関係であることが推察される。11号墳は，10号墳被葬者の直系家族か，もしくは共同体内で10号墳被葬者と深い関係である人々が11号墳の被葬者として考えられる。(註4) 本例の場合は，11号墳は10号墳よりも若干小形となるが大差ではない。

胴張り石室について　本古墳群の横穴式石室に於いてⅢ類とⅣ類は大きな画期であり，Ⅲ類以前は縦長方形の羽子板状平面形を呈していたものが，Ⅳ類期より胴張りの平面形を呈し，石室規模も大形化してくる。本古墳群内では直接的変遷を見いだせない。ところが，朝倉町妙見古墳群に於いて，その変化の過程が追える。(註2) 妙見8号墳は妙見古墳群の中では古い段階のものであり，石室は縦長で，胴部やや奥壁寄りで最大幅をもち，前方袖石に向かってすぼみ，左右に大きく開く羨道がつく。平面形は三味線胴張りを呈する「只」字形の石室であり，柿原古墳群のⅢB類から1段階Ⅳ類へ発展したものである。次の段階としては，妙見5号墳であろう。石室は奥壁に大形の石を用い鏡石とし，胴部中央で最大幅をもち，前方へすぼまり袖石につく。羨道は細長くつき4.4mほどを測る。これらは共に，単室横穴式石室であるが，羽子板状横穴式石室から胴張り石室へ展開する過程を追えるものであろう。ⅢB類形態の段階から妙見8号墳⇨5号墳を経てⅣ類へと続くものであろう。

また，次の画期は，Ⅴ類の円形に近い胴張りの石室から，再び方形へと移行し，Ⅵ・Ⅶ類へと移る間である。ⅤA類としたH・1号墳は複室横穴式石室を呈するが，それは前室と羨道を画する袖石の存在により知ることができ，前室は外へ張り出さず，玄室から羨門にかけてほぼ直にすぼまる。玄室・前室の平面形は曲線的ではなく角ばりがみられる。更にⅤB類の13号墳は，奥壁際が直線をなし，左右両側壁側で角ばって胴部中央部まで真っすぐに進み，そこより袖石部へ急激なカーブを描き袖石につく。これらの様に石室平面形に角ばりが見られ，終局的に四隅が角ばる方形を呈する石室となるものであろう。

朝倉地方の終末期石室について　14・18号墳はⅦ類であり石室平面形はほぼ正方形を呈し，羨道幅はⅥ類同様に狭いが，しかし，上段に石積みが行われ，若干長くⅥ類のように板石を立てたのみで，短く形成するものではない。Ⅶ類は明らかに，羨道部を通って石室内に出入りすることを意識して構築されているもので追葬を意図している。また，墳丘規模もⅥ類に比して広大であり，Ⅵ類のように丘陵裾に構築せず。急斜面の中位から尾根に構築されている。これは単に，前代の墳墓を避けて構築されたのみならず，急斜面に構築することにより，古墳の見か

けの大きさを広大に感じさせる働きの存在が推察される。即ち，Ⅶ類は墳丘をモニュメントとしており，視覚に訴える面が勘案されており，追葬を前提とした石室の構築がなされている。一方Ⅵ類は，前述した如く丘陵裾に散在し，羨道部は板石を立てたのみで型式化した羨道であり，狭く，羨道部からの追葬は不可能である。また占地についても，石室構築の場所が既に前代の墳墓に占められ，丘陵裾にその場を求めたものであろう。Ⅵ類の石室は，上部構造を除去しなければ追葬が不可能であり，ほぼ初葬のみでその役目を終えるものであろう。最終末の石室形態である。

これら方形を呈する終末期古墳は，当朝倉地方では時おり散見され，大岩西部1号墳(註5)や赤林4号墳・6号墳(註6)，池の上9号墳(註7)等がある。また，鳥栖市東十郎古墳群(註8)に於いても数多く見られている。

これらの古墳の多くは，大化の薄葬令以後に築造されたと考えられる。中央集権による律令国家の形成が確立しておらず，朝倉地方の様に大宰府からも遠隔の地である所まで令制が行き渡らず，前代の慣習により古墳の造営が成されたものであるのか，それともまた，令を拒絶して造営を強行していたものであろうか。甚だ疑問ではあるが，それらからの出土遺物は極僅かであり，被葬者について，または，その被葬者の背景は不明な点が多い。　(平嶋)

B．竪穴式石室・石棺系竪穴式石室

本書で報告した柿原古墳群Ｉ地区においては，これまで甘木・朝倉地方で散見的に発掘されて知られていた，小口部或いは長側壁基底部に板状石を立てた竪穴式石室が，55基と数多く調査された。

この類は，従来「小型竪穴式石室」或いは単に「石棺」と称せられるのみで，その構造・由来については，詳細な検討が加えられることは少なかった。本柿原Ｉ地区においては，幸いにも，構造が異なる各型式の石室が多量に，群集して発見された為，より詳細な分析が可能と考えられる。よって，本論では構造を主眼に置いた分類とその変遷の様相，更にそれの示す歴史的意義について考察を進めたいと思う。

1．石室と石棺

基本的な用語概念の認識を明らかにしておきたいと思う。

墓制の多様な主体部構造の中で，「石棺」「石室」は先史・古代社会においてかなりの比重を占めている。「石棺」とは石材を用いた構造物・容器で，基本的には遺体を直接入れるものを指す。また，墓制における「石室」とは，そのものが柩となる構造物ではなく，柩を納める構造物であるとして，「石棺」と区別すべきであると考える。しかし乍ら，実際の用語法としては柩の有無を無視して，大旨その内法容積の大小や，遺体搬入方法による区別，または構造上類似系統による区別が両用語使用法の差異とされることが通常である。例えば，明らかに割竹型木棺を埋納したことの判る竪穴式石室に構造上似ているが為に，柩の痕跡の確認すら出来ない狭長な部類までも竪穴式「石室」と称するが如きである。

この両者の使い分けの曖昧さは，筆者自身も含めて，今や学会内部においても日常的でさえあると言っても過言ではない。この現象の大きな理由の一つとして，構造系譜から考えるイメージの強さが掲げられよう。勿論，構造系譜論は重大な認識分野であることは間違いない。しかし柩の使用の有無に伴なう構造の分析に関しても，階層的・習俗的な社会背景を示す重要な認識要因なのである。

以上のような意味合いにおいて，筆者は本柿原古墳群Ｉ地区における小規模な石材構築による墓制のうち，幅広タイプを除いた他の総てを「石棺」墓と認識するものである。これは，調査の結果，内部に木棺等の柩の痕跡が全く認められない事，内部内法が柩を必要としない程狭長である事等に基づくものである。その意味で，本遺跡のこの種墓制にＣ番号（Cistの略号）を

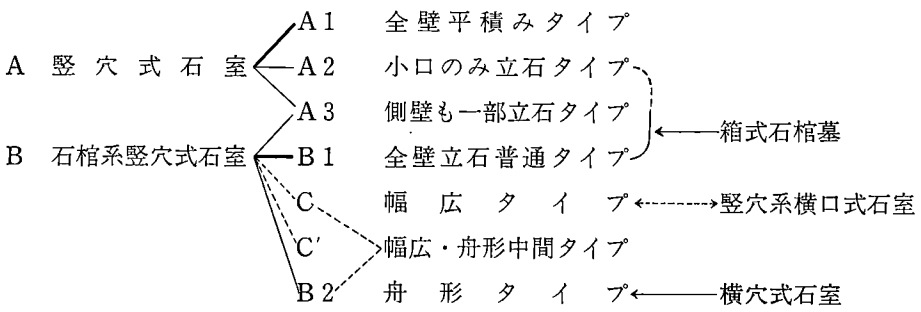
付したものである。

以下，型式分類の中において「竪穴式石室」「石棺系竪穴式石室」と称したのは，用語法の実状に照らし合わせて，大方に内容の理解を深めて頂くための，便宜的な仮称と理解されたい。また，そこには自ずから，構造系譜論へ進めたい意図も含めたと言って良い。

2．型式分類（第270図）

構造が或る程度明確なもの55基を，A・B・Cの三種に分類し，更にその中を細かく分けて，都合7類とした。分類の基準は，側壁積み石の方法を主とする構造面からと，床面の規模・形態・石材の選択，副葬品からの年代等である。なお，本遺跡には箱式石棺墓は存在せず，石蓋土坑墓・岩盤刳り貫きの石蓋土坑墓は，尾根上・尾根むこうのG・H地区で発見されているのみである。(註9)

以下，分類を一覧に供する。なお，右端は各タイプとの関連を示す。



A 1 類 全壁平積みタイプ 明らかなものは4基で，それらしきものが他に1基ある。四壁ともに最基底部から板石の平積みが施されるタイプで，内法長さ1.82～1.45m，頭位幅0.55～0.36m，足位幅0.4～0.29mと，足位幅のやや狭い，長方形プランをなす。石室深さは0.45～0.3mと浅めである。A 2類と共に，控え積み，裏込めが丁寧に施されるものが多い。側壁の内側へのせり出しは弱いものが多い。枕石を据えるものが1例あるが，朱の使用は無い。敷石も無い。周溝は斜面に築造された2基にみられ，平坦地のもの2基には認められない。頭位は急斜面のもの1基が地形に左右されて斜面平行となりほぼ北となる他は東方向である。この類では年代を示す副葬品は出土していないが，もしC－39がこのA 1類であるとすれば，4C末～5C初頭頃となろう。

A 2 類 小口のみ立石タイプ 9基がこの類で，両小口部の基底石が板石を立てたもので，この上には平積みを数段施し，両長側壁は最基底から板石を平積みしたタイプである。内法は長さ

1.93～1.28m，頭位幅0.59～0.28m，足位幅0.45～0.27mと足位側の狭い長方形プランとなる。深さは0.75～0.45mと深いものもみられるが，多くは0.5m前後である。控え積み・裏込めが丁寧に施されるものが多い。側壁の内側へのせり出しは弱く，殆ど垂直に近いものもある。枕石を置くものが2例，敷石を施すものが1例，朱の塗布が2例みられる。周溝は祭祀土坑を除いて5例にみられる。頭位は北東のもの2例の他はすべて東である。また，この類で年代の判るものは，C－16が4C後半～末，C－23が5C初頭前後，C－44が5C前半代の前半となり，全体として，ほぼ4C末～5C前半代の前半におさまると考えられる。なおこの類は，北部九州においてかなり散見出来るタイプである。ただ当甘木・朝倉地方と異なり，群集するものではなく，単独に占地することが多く，幅も広い厚葬のタイプにみられる。なお福岡県南部の八女地方にこの種が多いことも特筆される。

A 3 類 側壁も一部立石タイプ 全部で4基みられる。各々若干異なり，うち2基はA 2類のうち長側壁の一部が立つだけのもの，他の1基はA 2類のうち片側の長側壁だけが全部立つものである。更に他1墓は，片方の小口部だけ立ち，長側壁の一部も立っており，A 1類にも近い感じを与える。床面の長さは1.73～1.23m，頭位幅0.46～0.32m，足位幅0.35～0.2m，深さは0.6～0.3mと，大小各種ある。枕石を置くもの1例，朱を使用するもの1例がみられる。頭位は東が4例，南が1例となる。側壁の内側へのせり出しは弱い。控え積みがわりと丁寧なものがみられる。周溝は1例のみに確認された。この類で年代の判るものは，C－45の，5C前半代の中頃というのがあるが，全てが当てはまるかどうかは明確でない。また，敢えてこの一見折衷タイプを類別したのは，今後年代の判るこの種石室が発見された時，単にA 2類からB 1類への中間段階なのか，或いは，既にB 1類が存在していてそれから派生した新期のものなのか，明確にしたいという注意喚起の意味を含ませているからである。

B 1 類 全壁立石普通タイプ 総数23基で全体の約半数近くを占める。両小口部及び両長側壁の基底部分が板石の立石となるものである。これらは年代幅をみても，もっと細分できると思うが，構造形式上大きな差異を見出すのは困難である。例えばC－34は基底部立石が縦長に据えられており，その上端ラインも揃っており，他と全く異なる。あたかも弥生的在来型の箱式石棺を見るが如きである。またC－43・48等もやや幅広で，Cタイプに近づいているようにみえる。C－34はその出土遺物から，5C中頃前後と考えられ，他が5C前半代のものが多い事から，やや新しい時期を示す構造と考えられる。このように，B 1類は年代的に幅を持つタイプである。その床面規模は，長さ2.13～1.24m，頭位幅0.7～0.37m，足位幅0.59～0.27mと各種あり，別に小児用のC－17・20などは，更に小型となる。控え積みは，顕著なもの少なく，裏込め等も丁寧に施されているものは稀である。側壁の内側へのせり出しは，その殆どが上半でかなりみられ，基底の立った板石の段階から内傾するものも多い。周溝は23基中，5基にみられるが，割合としては多くない。敷石は上述の石棺的C－34に1例在るのみで，枕石の設置は

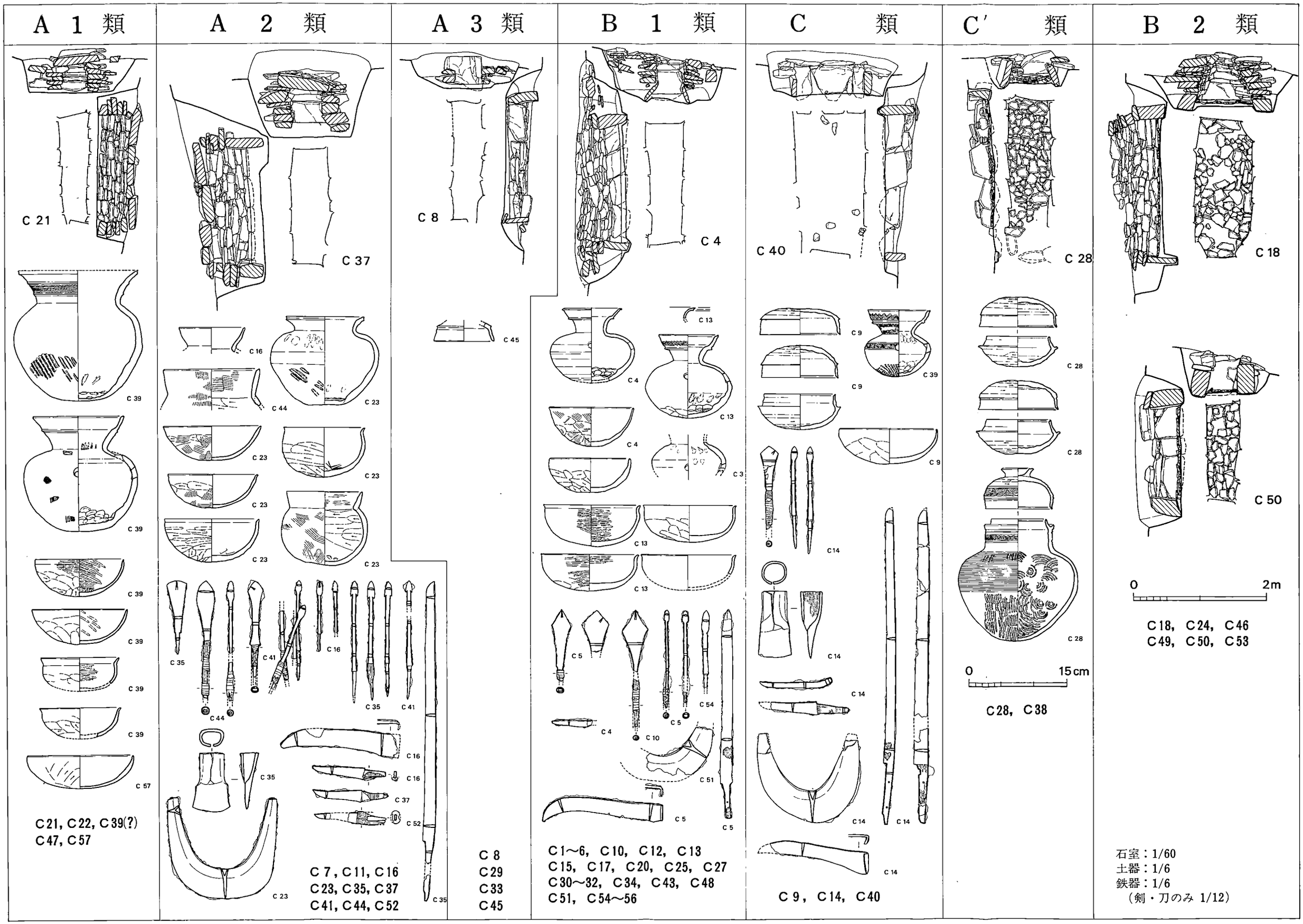
2例，朱の使用は3例みられる。いずれも，僅少で，しかも例外的なものが多い。頭位は東が13例，北が7例，西が2例，南が1例となり，東を基本とし乍らも，かなりばらばらな様相を呈してくる。年代は5C前半代の後半のものを中心に，5C中頃前後まで時期幅がみられる。このタイプは狭義の「石棺系竪穴式石室」と呼称し得る代表的な類である。

C類 幅広タイプ 確実なものは3基である。規模，床面プラン形態で，B1類と明確に一線を画する大きさの類である。長さ2.05～1.93m，頭位幅1.09～0.89m，足位幅0.9～0.78mの羽子板状プランに近いものである。これらは孰れも，本文中で既述の如く，竪穴系横口式石室の可能性も否定しきれず，また例えそうでなくとも，両者の関係はかなり密接なものであると考えている。周溝は3基中2基にみられ，敷石・朱もこの2基に認められ，その割合は大きい。頭位は，東が2例，北が1例である。年代の判るものは，C－9が5C中頃で，他も系統論上これに矛盾するものではない。これは，明確な初期竪穴系横口式石室である19号墳が，5C前半代のうち中頃に近い時期を与えられていることからも，その系譜を示しているようである。つまり，初期の竪穴系横口式石室の成立直後に，B1類石棺系竪穴式石室のやや幅広いものが影響を受けて，このC類が出現したと考えられるのである。但し，このC類は前代の如く数多く群集するものではないことから，或る特定の個人墓としてのみ採用されたものと考えられる。ここにB1類期との間に明確な差異が認められ，共同体内での階層分化の様相を知ることができる。

C′類 幅広・舟形中間タイプ 明らかなものは2基のみで，しかも確実に構造を分類できるものではない。基本的にはB1類と同様，壁基底部に板石を立てその上に平積みを施すものである。ただ立石上面は著しく揃わず，全体に粗雑さが目立つ。床面規模において，長さ2.28～1.9m，頭位幅0.78～0.63m，足位幅0.56～0.52mとB1類より大きく，C類より小さい。その築造法や床面プラン等から，C類幅広タイプから，B2類舟形タイプへの移行段階と考えるものである。年代的には，C－28が5C後半代の中頃，C－38が5C後半代を下限と考え得るもので，C類の後に続くものと考えられる類である。1例に敷石がみられ，またこれには葺石が施されている。頭位は北及び東である。

B2類 舟形タイプ 6基みられ，床面が舟形プランを呈し，側壁基底石が厚手で腰石的様相をみせる類である。また，壁内側へのせり出しも強く，特に上半では顕著である。規模は大小あり，床面がしっかりした長方形プランをなしても，側壁構造が上記の特徴を示すものはこの類と認識し得る。周溝が2例みられ，敷石は6基すべてに施されており，このタイプの特徴と言えよう。頭位は，東1例，北東2例，北3例となり，北が多くなる。この類には，既報告のS地区C－1も含まれよう。ただ残念乍ら，このタイプは年代の明確なものが無い。C－18が2号墳（6C末）と同時期か古く，C－49では7C後葉より古いという事しか判らない。C－18の項で記した如く，横穴式石室成立後であろう，という構築法からの年代観からして，C′類期に続くものとすれば，5C後半以降6C後葉までの年代幅が考えられよう。また，北部九州各

第270図 竪穴式石室・石棺系竪穴式石室分類表

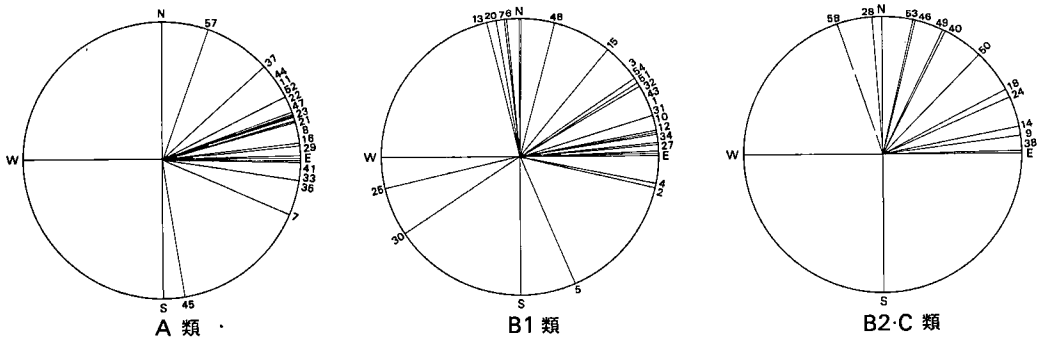


地の後期～終末期群集墳中に時偶みられる小石室の類も広義のこの類に含まれるであろう。

頭位方向（第271図）A類期においては東が15例，北が１例あり，東位がほぼ定まっている。これらのうちC－57の北々東頭位は明らかに急斜面中途という地形に左右されたものである。南頭位のC－45は純粋な竪穴式石室ではなく，A３類であり，やや新しい時期の例外と言える。とすると，A類期は殆ど東に頭位を置くという規制観念が存在したことが窺われる。次のB１類期になると，東が13例，北が７例，西が２例，東が１例となる。東が約半数強を占めるが，北も30％と多くなり，全体にばらばらの状況が強くなる。次にB２・C類期となると北と東の約半々に分かれ，北の方がやや多くなる程である。

以上のような時期による明確な変化は注目に値する。東位が基本的に多いが，この谷に立つと東西両側を尾根でさえ切られ，眺望は南にしか開かない。まして太陽の昇る位置など皆目判らない。太陽崇拝信仰によるものであると，しばしば理解される東頭位は，ここではあてはまりそうにない。次に地形に左右される点を検討するに，この地の頭位は大旨斜面高位側に置かれる事が多く，東側に急な尾根を控えて，視覚的に東側を斜面高位と見做した事も考えられる。また，急斜面中途・直下辺りに築造されたものは，斜面に平行に営まれる様相を呈する。第５グループの谷に沿った類はこの種の方向を示し，北頭位が多くなっている。このように地形に大いに左右されるものも多いが，同じ占地で全く頭位の異なるものもみられ，一概には断定できない。

以上のことから，基本的に東位選択の観念が存在しており，時代とともに観念の変化が進行したものと解釈して，その中には，占地した地形に強く左右されたものも在ると結論付けておきたい。



第 271 図　竪穴式石室・石棺系竪穴式石室頭位方向

3．グループとその変遷

グルーピング（第272図）

本地区の竪穴式石室及び石棺系竪穴式石室は，その殆どが各尾根に挟まれた谷の緩斜面に営まれている。ただつぶさに観察すると，各々の占地により，特色がみられ，グルーピングが可能である。これは，不明確なＢ２類を除けば，年代が５Ｃ初頭前後から５Ｃ後葉代という100年以内の幅の中に収まるものであり，連続した墓地であるという観点からも，この作業は，可能であるのみならず，不可欠な問題と言うべきであろう。具体的には，各主体部に周溝を巡らすものが多く，微高墳丘の円墳群を形成していたと考えられるので，墳裾を接し合うような状況もみられる。それが意識的に集中をみせる群があり，更に各群が，３世代以上の連続を有する状況である。このような理由によって，グルーピングを試みた次第である。

第１グループ（Ｃ－１・16～18・20～24・26・27）発掘調査を行った範囲の最南端の一群である。後述する第２グループが平坦面に占地するのに対し，こちらは，少し緩やかな斜面が谷本筋へと下がってゆく部分に築造されている。発掘範囲外の，より南側にも若干の数が存在すると思われる。初期のＡ類（竪穴式石室）期に西寄りの谷筋側に４基みられ，Ｂ１期にはやや北東寄りの緩斜面へと移動している。Ｂ２期には更に東端の尾根裾寄りに営まれ，各期毎に墓域をずらしている。第１グループの構成員数は，第２グループに次ぐ規模の集団である。また，竪穴系横口式石室のＣ－19もこのグループの一員であろう。

第２グループ（Ｃ－２～13・15・25・28～33・55・56）後期横穴式石室群の占地する位置より北側のほぼ平坦地に占地する一群である。Ａ類期に５基が西寄りの谷筋側に営まれ，Ｂ１類期に構成員数が増加して，この範囲全体に，やや無秩序的に拡がる。Ｃ・Ｂ２類期には僅かとなり，集団墓地的様相を失う。この第２グループは数多い割には，周溝を持つものが少なく，頭位もばらばらで，統一性を欠く。Ｂ１類期に最大勢力を保って，急激に衰退した特異な集団である。

第３グループ（Ｃ－14・34・35・37～39・51～54）Ｃ－51～54は小舌状低尾根に占地するもので，本来的には別グループに細分した方が良いかもしれないが，小支谷の左右側にあり，副葬品も特異性という点が類似する為に，敢えて第３グループに含めた。このグループは全て緩斜面に周溝を巡らせており，相接する墳丘を塁々と連ねていたと想定される。構成員数は少ないが，逆にそれ故にこそ，副葬品の卓越性にもみられる如く，このＩ地区全体の族長一族墓地と考えられる。また，第２グループで顕著であった，Ｂ１類期の人口増大現象もここではみられない。却って，Ｂ１類期には左側小尾根上の岩盤地帯にひっそりと営まれた感が強く，Ｂ１類の石棺的Ｃ－34の時期になって再び盛り返してきて，更にＣ類期にその権力は最大となる。

第４グループ（Ｃ－43～45・47）第３グループの北側の斜面に占地する少数グループである。

或いは第３グループと深い関係にあるかと思われるが，両者間に空間的間隙が明確に認められ，一応別グループとしておく。竪穴系横口式石室に近い形態をなす９号墳もこの一族の末裔であろう。とすると，細々と格式を保ち続けた，第３グループの族長一族の傍系の一家であったと想定されようか。

第５グループ（Ｃ－40・41・46・48～50）東側小支谷の最奥の幽深部に占地する一群で，有力な平地・緩斜面に営み得ず，どちらかというと疎外された感じのグループである。各類期にみられるが，主にＣ・Ｂ２類期のものが多く，新しい傾向をみせる。

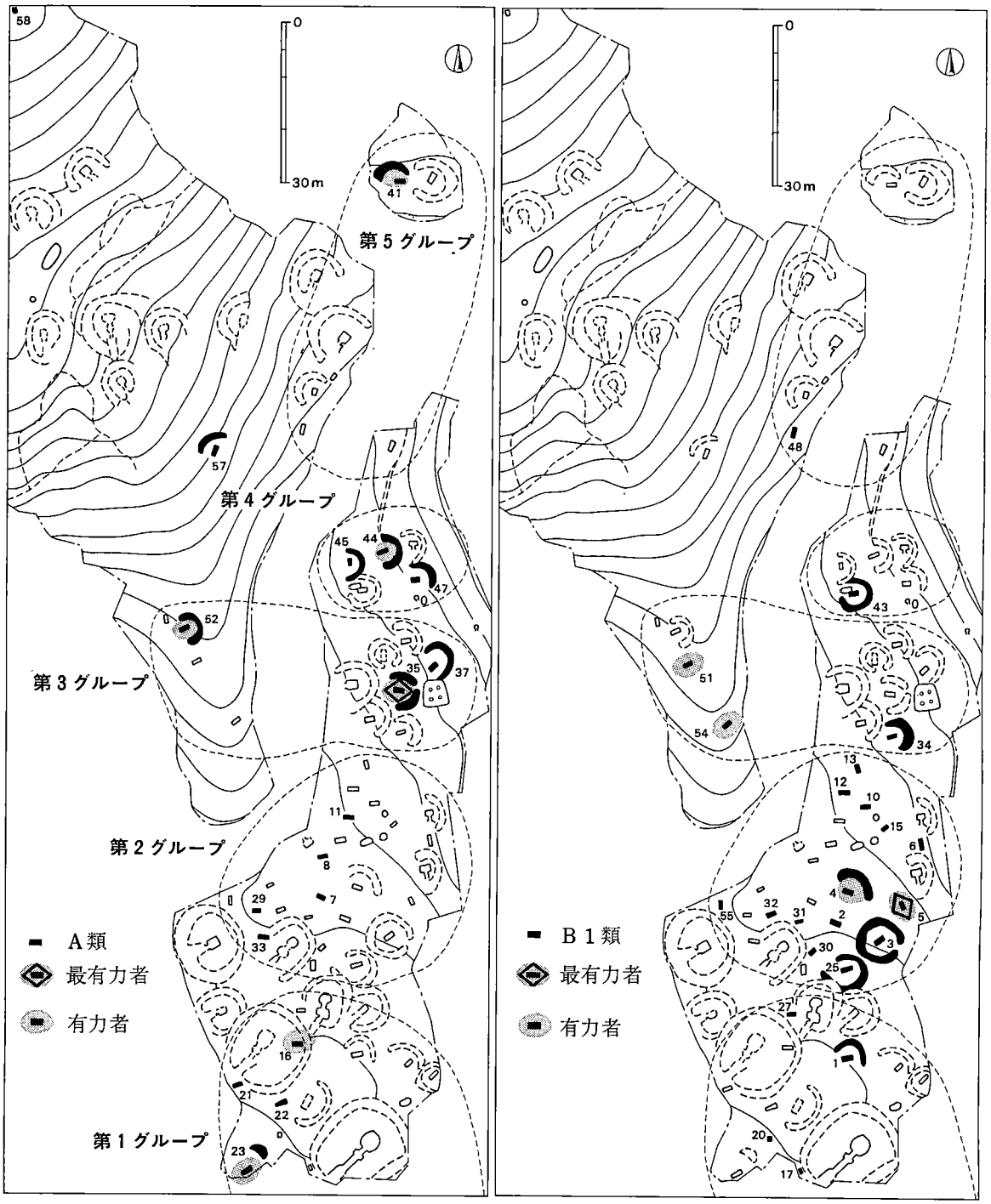
副葬品と有力者（第272・273図）

本柿原Ｉ地区においては，全体として，副葬品に華麗さを感じさせない。それは，土器と鉄製武器・農工具がその主体をなすからで，装飾品はＣ－51出土のガラス小玉首飾り１例にすぎない。これらの状況は調査担当者の平素の生活状況を如実に示すものだという迷論もあるが，果たしてそうか。それはさておき，各類期の副葬品の状況をみてゆこう。

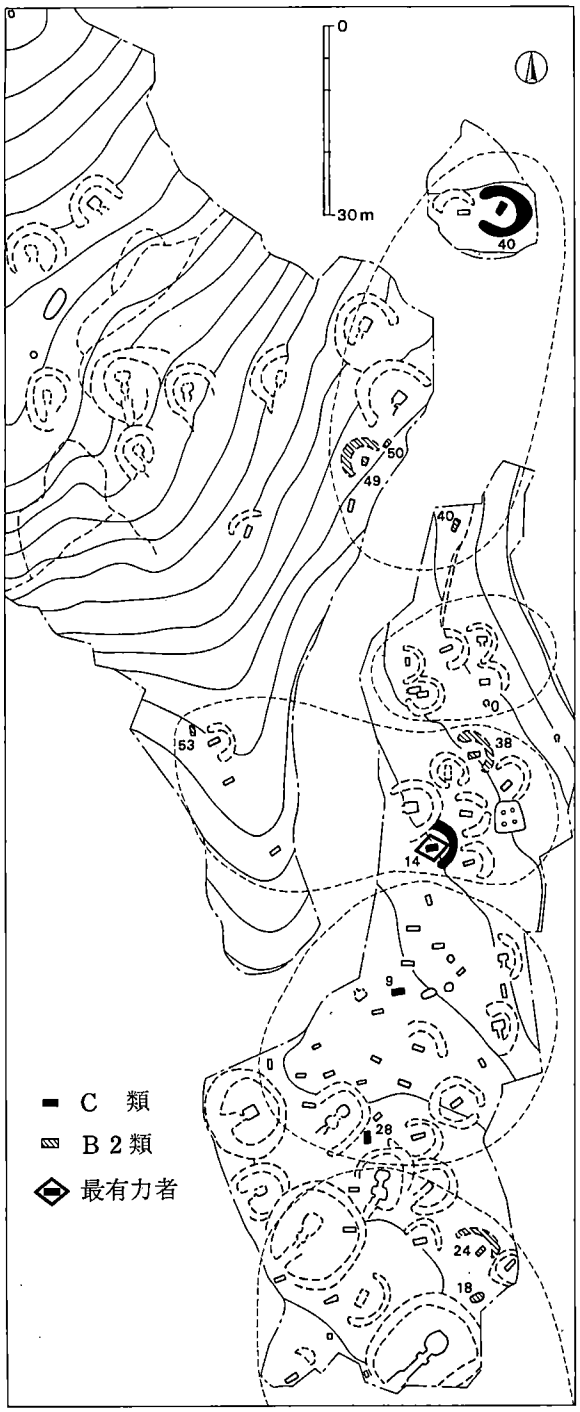
Ａ類期では，Ｃ－35が太刀・鏃・鉄斧などを持ち，この期では卓越している。Ｃ－41・44・37・16・23・52なども鉄鏃・鎌・鋤先・刀子を持っており，やや有力な墓とされよう。これらの状況をみると，第３グループのＣ－35が最有力者で，他に第１・３・４・５の各グループに鉄器を複数以上保有する有力者が存在していたことが考えられる。次にＢ１類期にはＣ－５が剣等多くを保有し，他はＣ－54に鉄鏃，Ｃ－51にガラス小玉・鋤先を有する程度である。このＢ１類期は全体の半数近くを数える割には，有力者が少ないことがわかる。それも第２グループのＣ－５に集中して他は第３グループに次の有力者クラスが存在する程度である。この第２グループに最有力者がＢ１類期に出現することは，このグループがこの期に飛躍的に増大するということと深く関係しよう。Ｃ類期になると，全体として数も少なくなるが，Ｃ－14に集中した如き感を呈する。なお，Ｃ－19がこの期であるとすれば，太刀を伴っており，権力集中下での有力者の一人として把えられよう。孰れにしても，短甲・太刀２振・鎌・斧・鋤先・鏃・刀子等多量を保有したＣ－14の卓越性は，他を寄せ付けず，特定個人墓化した権力集中化の中でも圧倒的存在である。

グループの変遷

以上のグルーピングから得た各集団の状況と時間的消長とをまとめてみよう。まず，**Ａ類期**（５Ｃ初～前半代）では各グループとも少なくほぼ平均的であり，構成員数に差は無い。しかし，この期から第３グループの１個人が最有力者であった。ただ，他に有力者と考えられる者が，第２グループを除いて，各グループに存在しており，各世帯毎の長老達が未だ有力者として族長権力を支えていた時代と考えられる。次の**Ｂ１類期**（５Ｃ前半の後半代）ではその様相



第 272 図　A類期竪穴式石室(左)・B1類期石棺系竪穴式石室(右)分布図 (1/1,200)



第 273 図　C・B2類期石棺系竪穴式石室分布図（1/1,200）

が一転して，第2グループの構成員が増大し，このグループのC－5が最有力者として権力を握ったと考えられる。ただ，第3グループが全く廃絶したのではなく，一応なりをひそめ乍らも存続している。この間に一種の革命的状況を看取しようとするのも，あながち難論でもなかろう。これは，畿内政権の国土掌握に伴う中央集権的動勢の波及と考えておこう。**C類期**（5C中頃）になると，竪穴系横口式という新たな横穴式石室としての墓制が導入され，この石棺系竪穴式石室もその影響を強く受けるようになる。そして，もともと族長一家であった第3グループのC－14に権力が全く集中して，第2グループの一時的優越の時代は過去の事となってしまったのである。C－14の主は，中央政権下の戦士の一員として各地を転戦し，無事に凱旋した，村の英雄であり，その余勢により一手に権力を掌握したという人物像を想像させてくれる。その後の時代はどうなったのか。おそらく，族長一族とその傍系の第4グループ，それに第1グループとが残存して，初期横穴式石室を構築していったものと考えられる。

4．石棺系竪穴式石室構造の成立とその背景

地質的環境　本柿原古墳群の立地する地帯は，黒色・緑色片岩の露頭する地域であり，その風化土壌の赤褐色粘質土で一部覆われている。このような地で，薄く剝げる板状の石材を入手するのは容易な事で，終末期横穴式石室に至るまで各時代にわたって使用されている。このような条件に恵まれて，当地域での竪穴式石室の如き小口積みの技法は，かなり容易に受容されたものと考えられる。しかもそれは，他地域でみられるような一部有力者の権威的象徴としてのそれではなく，群集する一般村落構成員の墓としても容易に受け入れられていったのである。このような５Ｃ代の墓地の様相は，他地域に類例を見ず，強いて言えば，南九州の地下式板石積石室が安山岩の板石を用いて群集墓地を形成する程度である。北部九州において片岩板石を古墳石材に多用する地域は，福岡県南部の八女・瀬高地方が在るが，当柿原例程群集して調査された例は今のところみられない。八女市立山山古墳群中(註10)においては，箱式石棺から，石棺系竪穴式石室Ｂ１類等を経て，横穴式石室へと続く多くの古墳が調査されたが，在地有力者一族の墓地であり，群集墓地とは呼べない類である。また，初期横穴式石室の発見が相つぐ福岡市～唐津地方における沿岸地帯では，安山岩系板石が多用され，小口積みの技法が受容され，その発展過程も知られつつある。ただこれも，群集する墓地に対してのものではない。

以上のように地質的条件に恵まれて，当甘木・朝倉地方においては，石棺系竪穴式石室が多く発見されており，他地域と趣を異にする「群集墓地」を形成する。

分布　石棺系竪穴式石室とは既述した如く，広義には，竪穴式石室の壁の一部もしくは全壁の基底石が立てられているものである。かつて山中英彦氏が提称した，「石棺系石室」(註11)とその対象は重複する部分が多い。但し，氏の視点はあくまでも在地的箱式石棺を母胎にした，畿内型古墳受容過程の問題にあり，筆者の本柿原遺跡におけるこの種墓制の分析の視点とは，若干異なる。筆者は，既に縷々述べてきた通り，有力古墳群中の例外的変型ではなく，群集する墓地における在り方であり，Ａ２・Ａ３類を含めた竪穴式石室からの連続を見すえてきたのである。そして，甘木・朝倉地方において純然たる古墳時代箱式石棺墓は数多く見受けられ，その存在を無視する立場では全くない。しかし，当柿原Ｉ地区においては，箱式石棺墓は１基も発見されていない。こういう状況の中では，単純に箱式石棺を母胎とする視点を持つ山中氏の「石棺系石室」とは呼称し得ない類が多いことが理解されよう。筆者が敢えて「石棺系竪穴式石室」と新たに呼称したのは以上のような事由による。

分布は甘木･朝倉地方に集中する。即ち，柿原野田東部７号墳(註12)はＡ３類に，甘木市福城中学敷地内石棺はＢ１類に，朝倉町妙見２・26号墳は各々Ａ１・Ａ２類に，朝倉町虚空蔵11号墳はＡ

2類に，朝倉町上ノ宿1・2・6号墳は各々B1・B1（B2か？）・B1類となる。また，朝倉町堤古墳[註13]もB1類にあたる。また，鳥栖市山浦6号墳[註14]はB1（A3か？）類に，同7号墳はA3類に，同9号墳はB1類に近い。また瀬高町名木野古墳群[註15]中の「竪穴系横口式石室」はA2類の幅広いタイプに墓道を付けた原初的竪穴系横口式石室であり，「石棺系石室を母胎とする」ものではなく，明らかに石棺系竪穴式石室を母胎とするものである。また，八女市立山山古墳群[註16]においては，箱式石棺群が既に在り，その後に28号墳のA1類(全壁小口積み竪穴式石室)，29・30・12号墳のA2類が出現する。箱式石棺から連続する要素は，小口部の立石でしか無く，この時点で明らかに竪穴式石室を母胎として成立した形態を出現させるのである。

以上のような分布の他に，山中氏の箱式石棺を母胎とする「石棺系石室」は県内の主要古墳群の中に点在するが，明らかな石棺系竪穴式石室とは認められず，ここでは除外する。そうしてみると，筑後平野北東縁の甘木・朝倉地方，そして平野西端丘陵上の鳥栖地域，平野南端の八女・瀬高地域でみられることとなる。これらは孰れも竪穴式石室（A類）を含んだ構成をみせており，九州における4C末～5C段階の小規模竪穴式石室成立後の類である。

竪穴式石室との関係　長大な畿内型竪穴式石室を受容した石塚山古墳は九州における竪穴式石室の初現であり，その直後の初期有力古墳では，次々とその型式を似せたものが出現した。その中には畿内と相呼応するように，短い寸詰りの竪穴式石室も含まれ，これらの影響下に小規模な竪穴式石室が各地に営まれるようになる。これらの被葬者は既に県主階層的な有力者ではなく，在地小有力者層程度まで侵透していた節もある。

以上の状況を踏まえて，本柿原I地区で調査された小規模な石棺系竪穴式石室をみてみると，A類の竪穴式石室は4C後半～5C前半の幅があるとはいえ，所謂在地有力者の墓制とは見做し難い。前節で指摘した各グループの比較における「最有力者」でさえも，現甘木市東北辺の山沿い部分だけを支配し得た，農業生産に基盤を置く最小単位の首長と考えられる。それ故に，初期の大型の竪穴式石室との関係は直接的なものではなかったと思われる。やはり，竪穴式石室第2段階の寸詰り化したタイプとの接触がより直接的なものであろう。それは，柿原I地区に残されたA1～3類の石室規模・形態が良く物語っている。A1類の全壁小口積みの竪穴式石室は言うに及ばず，A2類の両小口部のみを立てるタイプは，この竪穴式石室第2段階からその萌が見え始めており，この辺りにその祖源が求められよう。

では，具体的にどの竪穴式石室に祖形を求め得るのか。これは当地域周辺ではかなり困難な事である。最も近い竪穴式石室としては，三角縁神獣鏡を出した甘木市神蔵古墳[註18]がある。この石室は中央部が大きく破壊されていたが，板石小口積みで両短壁が丸く胴張り的プランとなる異類である。柩は組合わせの木棺である。使用石材は柿原例と同じで，柿原周辺から運んだものであろう。この神蔵石室形態は柿原A類と直接的に繋がるものではない。また浮羽郡吉井町月の岡古墳では長持形石棺を納めた竪穴式石室がみられるが，5C中葉の代表的装飾古墳とさ

れ，柿原例の年代と合わず，比較の対象となし得ない。一方，筑後川上流の日田盆地に目を向けてみると，姫塚古墳[註19]という竪穴式石室が認められる。幅が75cmのやや幅広で，Ａ１類にあたる竪穴式石室である。鉄器・土器類が出土したらしいが，残念乍ら詳細は明らかでない。以上のように甘木・朝倉地方近辺で，既発見の竪穴式石室例を探す事は容易ではない。孰れにしろ，柿原Ｉ地区Ａ類竪穴式石室は，日田市姫塚古墳例のような幅広い短かめの床面プランをなす竪穴式石室から，より小規模化したタイプと考えられる。今後調査例の増加に従って，この点を追跡してゆく所存である。

箱式石棺との接触　先に掲げた山中氏の「石棺系石室」の存在を筆者は否定する立場ではない。むしろ，これら箱式石棺を母胎とした一群の他に，竪穴式石室を母胎として成立した一群が存在することを提示するものである。石棺墓を主体とする在地的初期古墳群中に例外的に存在する１～数基の石棺系石室は，全く箱式石棺墓を母胎とするにふさわしい構造・占地をみせている。しかし，本柿原Ｉ地区における小規模竪穴式石室から連続してグループをなす石棺系竪穴式石室は，箱式石棺を母胎とするものでない事は明らかである。その母胎は九州の竪穴式石室受容の第２段階以降（４Ｃ後半以降の）寸詰まり型竪穴式石室に求められるのである。但し，この段階でも箱式石棺墓の影響を全く無視することは出来ない。次のＢ１類の狭義石棺系竪穴式石室の段階に至る変化の中では，箱式石棺墓の構造の影響が強く働いていると考えられる。これは具体的に，甘木・朝倉地方においてこの種石室と同遺跡内において時折，箱式石棺と共に発見される例があることから，首肯し得る。しかし，これらにおいても，明確に箱式石棺とは構造を異にして一線を画し得るのであり，箱式石棺を母胎とし得るような構造のものは存在しない。それは柿原Ｂ１類の殆どが基底部立石上端ラインが不揃いで，箱式石棺の側壁上面の揃い方とは全く趣を異にすることからも首肯できる。なお，Ｂ１類のうちでもＣ類の幅広タイプに近い時期と考えられるＣ－34は，在来的箱式石棺の構造を強く残している。この５Ｃ中頃に近い段階で，新たに箱式石棺の影響を受けた事があった事実も見逃せないだろう。

竪穴系横口式石室との関係　柿原Ｉ・19号墳は，全壁基底部を立てた初期竪穴系横口式石室の典型例であり，未だ玄門袖の成立以前の古相を有している。年代的には５Ｃ中頃に近い前半代とされ，Ｂ１類石棺系竪穴式石室群の一部と重複する時期の築造である。この19号墳石室がこの地のＢ１類石棺系竪穴式石室の直接変化したものである事は明白である。この事は老司[註20]・鋤崎古墳[註21]等の半島的な初期横穴式石室の成立に影響されて，北部九州各地で既に成立していた小規模竪穴式石室が竪穴系横口式石室化してゆく過程と軌を一にする現象である。柿原例の場合は，その前段階がＢ１類として一般化していた為に，極めてスムースにその受容がなされたと考える。これは７号墳に横田下タイプの形態を一早く取り入れており，先進地域の情勢に意外と敏感に対応・受容していた事を示すところである。

また，19号墳・Ｃ－40・９号墳・Ｃ－14の４例は，石室企画の項で示したとうり（本書Ｐ.289

参照)，石室床面プランが同規模・同形態であり，極めて近い年代を示すものと考える。この特筆すべき事実は，9号墳・C－14・40がたとえ竪穴系横口式石室そのものでなかったとしても，極めて強い関係を否定することは困難であろう。本石棺系竪穴式石室群が，その後半期の或時期に，竪穴系横口式石室の影響を受けた証左を示すところである。

また，栗崎山7号墳（飯塚市大字下三緒所在）(註22)は竪穴系横口式石室で，床面長さ2.37m，幅が奥壁で0.83m，中央部で0.9m，羨門部で0.51mの舟形プラン状をなす。壁は腰石状の塊石を立て，その上に厚手石を平積みし，内側へのせり出しも著しい。敷石も施される。全体に規模・構築形態等，柿原におけるB2類と共通するタイプである。まさに，このB2類に羨門立石を行い，横口部を付けた形態となっている。このように，B2類においても竪穴系横口式石室となる可能性をも有している訳である。栗崎山7号墳例は報告者によれば5C後半代に位置付けるとしており，逆に柿原B2類もそれに近似した年代かと考えられる訳である。なお，栗崎山6号墳は三味胴張玄室の単室横穴式石室であり，報告者指摘の如く，朝倉地方との交流の結果を考えざるを得ない類である。このように，柿原B2類と相通ずる栗崎山7号墳は，同古墳群中において突飛に出現したものではなく，この古墳群全体が甘木・朝倉地方との関連を見逃し得ないものなのである。

B2類以降の小石室について　柿原B2類は既述の如く，一応石棺系竪穴式石室と連続するものと考え，下限を6C後半までとしたが，その構造は次第に前代のものと異質さを増大させるものである。山中氏は更に後代のものまでを含めて「石棺系石室」の範囲で把えるが，その連続性については審らかにされていない。筆者は以前，古墳終末期以降～歴史時代の小石室をとり挙げて，横穴式石室追葬・再利用と並ぶ該期の葬制と論じたが，系譜的にたどりにくい難点を指摘したに過ぎなかった(註23)。そして，それらの大部分は時期を明確にし難い例が多く，当柿原B2類と同じ様相を呈している。これらに共通する点は，敷石を有する事，伸展葬的長方形のタイプは稀れで，殆どが更に小規模化した竪穴式石室様構造を有すること，終末期群集墳と占地を同じくすることが多いことなどが掲げられる。これらを全般的に論ずるには資料不足をまぬがれないが，少なくとも柿原B2類は，石棺系竪穴式石室B1類から系譜を追って連続し得るタイプと考える。更に古墳終末期～歴史時代の小石室は，系譜をたどれる類ではなく，現状では筆者の言う石棺系竪穴式石室とは，全く別系統であると理解しておく。

5．柿原遺跡周辺の情勢

最後になったが，近年調査されて多大な成果を得た池の上・古寺遺跡との比較検討を踏まえて，甘木・朝倉地域における本遺跡の位置付けを行っておこう。

異なる墓制　池の上・古寺墳墓群(註24)においては，その丘陵先端から始まり，上方へと連続する多様な墓制の変化が，年代の差として把えられた。その中でも，軟質岩盤を刳り貫いて棺部をつくり蓋をするといった特異な墓制が目についた。それらは陶質土器・初期須恵器・土師器・鉄製武器・農工具・陶製紡錘車等を副葬しており，この棺内土器副葬の在り方も特異なものであった。年代的に４Ｃ後葉～５Ｃ前半代にかかるもので，本柿原の竪穴式石室・石棺系竪穴式石室とほぼ同時期の所産である。

目を柿原例へと転ずると，上記池の上・古寺のような墓制は，既報告のＨ地区尾根上でＤ－１・２の２例みられるのみである。Ｈ尾根の西裾にあたるＩ地区においては皆無である。かえってＩ地区においては，この岩盤の所在する部位を避けるようにして営まれる。やむなく岩盤部分に築造する場合でも，必要最低限に浅く刳り貫いて，板石を積んで石室壁を構築している。最も岩盤刳り貫きの著しいＣ－54でさえも，全く立てる必要もない板石を東半側壁に立てて，石棺系竪穴式石室の体裁を保とうとしている。このように，柿原Ｉ地区では，頑固にまでも石棺系竪穴式石室の構造法を死守しようとするのである。更に，両者は占地の違いによってより明瞭に差別される。つまり池の上・古寺例は尾根線上に営まれ，柿原Ｉ地区では谷奥の狭少な緩斜面に占地している。この差は柿原Ｈ地区では尾根線上の最も眺望良き所に池の上・古寺型の墓制が営まれていることで，更に明瞭となる。この歴然とした違いは何によるものであるか。何と，柿原と池の上・古寺は1.8kmしか離れていないのに！，である。

異なる副葬品　本柿原Ｉ地区石室群からは，陶質土器・初期須恵器類が出土している。これらは両者の何らかの接触を物語るところである。ただ，池の上・古寺の最古のタイプが少ないようである。そして，器種構成において著しい差が認められる。即ち柿原Ｉ地区では，池の上・古寺出土の杯・高杯・ジョッキ形土器・大形器台の類が欠けている。柿原Ｉ地区出土品は，Ｇ地区例も含めて，瓿・壺・短頸壺・大甕に限られている。これでは，日常的生活にも事欠くと思われる。本来的に柿原Ｉ地区の住民達は全器種を有してなかったのではないかとさえ疑いたくなる程である。鉄器については，雛形鉄斧・馬具類を除いて，他は共通する武器・工具がほぼ揃っている。更に池の上・古寺で女性副葬品としてみられた陶製紡錘車が，柿原Ｉ地区では全くみられない。以上の副葬品の状況を勘案するに，土器類における差が著しく，経済基盤において池の上・古寺集団の方がより陶質土器・初期須恵器製作集団との密接な関係を占めていたと推定される。或いは経済基盤そのものが窯業占有であった可能性も想像される。それに対して柿原Ｉ地区集団は，鉄器類においては遜色無いのに，土器類において完全に従的な立場と見做し得る。柿原Ｉ地区集団は，経済基盤に農業生産を持ち乍ら，池の上・古寺集団との接触を通じて当時最新型の土器類を入手したのではなかろうか。しかも器種構成の明らかな違いから，それは対等な交易ではなく，従的な関係による入手法ではなかったかと想像する。

異質な両集団　以上のような墓制と副葬品の違いから，両者は地区的に隣接した集団であり乍

ら，全く異った性格を保持していたと考える。これは上述した経済基盤の違いに求められるべきであり，ひいては，朝鮮半島南端出身の窯業技術者と強い関係を有した集団と，在地の保守的農業集団との違いと想定できよう。なお余談乍ら，これは現在の柿原地区と，堤・菩提寺地区の気質の違いとして連綿と引き継がれてきているようでもある。ただ巨視的にみれば，これまで指摘したような異質性のみを強調するのも，実は片手落ちであるといえる。即ち，陶質土器・初期須恵器の副葬，小規模主体部の群集性等，共通点も認めねばならない。これらは，他地方からみると，それこそ異質性と映るわけである。そして前述した如く両集団の交流も十分認められるのである。

有力古墳群との関係　甘木の市街地から南方に拡がる洪積台地南縁近くに，有力な前方後円墳が一群をなしている。神蔵古墳(註25)・小田茶臼塚古墳(註26)を始めとする一群である。この大字小田の台地上は，弥生期より栗山甕棺墓(註27)を始めとする墓地集落が営まれ，広大な沖積平野の農業生産を経済基盤とする富の蓄積が行われてきた。この基盤を背景にした有力古墳が上記二者で，北縁山麓の古墳群とはその勢力範囲を異にする。これらの有力古墳に相当するものは，柿原周辺には今のところ発見されていない。これらは甘木地区における最有力者と考えて良かろう。両古墳は，時期こそ異なるが，孰れも石材に緑色・黒色片岩板石を使用している。これらの多量の石材は柿原地区を含めた北縁山麓より運搬したものであろう。石材採出・運搬に際しては柿原地区集団も小田の勢力の下に何らかの関係を有したものと考えられる。恐らく運搬労働の合間に大規模な石室構築を垣間見たであろう。そして構築技術を得て手近に在る石材を用いて自分達の墓地群を形成するに至ったのかもしれない。

以上の如く，柿原集団にとって小田の有力者集団と，池の上・古寺の集団との各々の関係は異なった性格のものであったと考えられる。

以上，柿原I地区調査の竪穴式石室・石棺系竪穴式石室の分析・検討を進めてきたが，残された問題も多い。紙面の関係上触れ得なかった，陶質土器・初期須恵器の系譜・年代論は，池の上以来常に念頭を離れなかったものであるが，機を改めて触れてゆく所存である。また，鉄器が各器種に恵まれ，その分類・変化等の検討は不可欠の筈であったが，詳細に至らなかった。以上，今後の課題と肝に命じておきたい。　（中間）

C　石室の企画について

柿原古墳群では，G・H・S・I地区の，3つの丘陵とその谷間の調査を終えた段階で，竪穴式石室66基，横穴式石室22基となった。そして，現状ではその殆どがI地区に集中して築造される。その内でも横穴式石室は雑多であり，その形状により変遷を辿ることができる。また，それらは，ある種の企画により築造されるものであり，企画性を欠くと，石室壁体の持ち送り，天井石の架構等に大きな歪みが生じるであろう。我々は従来から，物の大・小，長・短を感じとり，大きい物・小さい物或は，長い・短いと表現し話題の中心となる品物の形状を表現している。これは，自然発生的に我々が感じとり，習慣付けられたものである。そこには個人個人の尺度の存在を窺わせるものである。この様に我々の間隔の中にも尺度を有しており，若干の尺度に対する規則性も踏まえているものである。では，古墳築造の様な大土木工事に際して，全くの企画性，もしくは規則性が介在しないで行えるものであろうか。それは不可能といえるであろう。まして，1400～1500年もの間，その形状を留めているのであり，綿密な計画の基に構築されたものである。

では，石室の企画性は如何なる点に見いだせるであろうか。それは，現状の石室の計測から，その企画性の有無を確かめ，石室構築の規則性を導く以外に求める手立てを認められない。そこで問題となる点は計測の基準であろう。

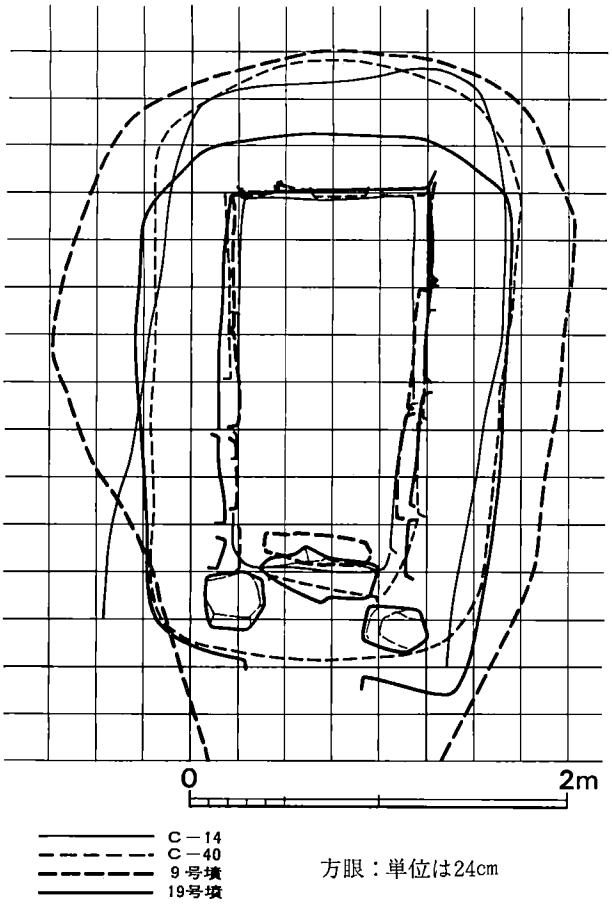
石室は構造物であると言っても，当時の構築技術のレヴェルや使用石材の変化により，表出した面の凹凸などが生じ，また，計測点の位置により若干の変化が現れるであろう。一方，石室の企画性を割り出す上でもずれが生じ，求める事が困難となる。そういう訳で，測点を確定する上から，本古墳群の横穴式石室を平面の形状から①羽子板状の平面形を呈するもの，②胴の張るもの，また，③方形もしくは横長方形を呈するものに3区分し，それぞれの企画性，規則性について述べ，それらの共通性について問いたい。

①　羽子板状の平面形を呈する石室

本古墳群内では7基の横穴式石室と，これらに酷似するC－14・40の竪穴式石室がある。石室構造は，基底部に板石を立て，その上段に平積みする類である。形状は前方幅に比して奥壁幅が若干広くなり，縦長方形を呈する。所謂羽子板形の石室である。

まず当石室に於ける測点の規定を行う。全体に主軸にこだわらず，玄室奥壁側の最大幅を計測し，玄室前方幅は，框石がある場合はそのすぐ内側で測り，框石が存在していない場合は，両側壁の前方端で計測を行った。また，玄室長は中央部より框石上面のほぼ中央までの長さを測った。これらの規定をして計測した結果は第5表である。

この中で比較的小形である9号墳と19号墳は石室平面形が近似しており，一方，C－14・40も9号墳等に類似している。石室全長は199～240cmで，玄室奥壁幅は92～109cmを測る。玄室奥壁幅と玄室長の比率は1：2であり，石室全長と玄室奥壁幅は9：4である。これらは石室平面図形の構成にあたって，尺度の使用を示唆するものであろう。そこで，推定尺度の方眼による石室各部の適合関係により，使用尺の1単位（尺）が約25cmの尺であることが推定される。(註28) しかし，惜しむらくは，9号墳とC－14は大半基底部石まで欠損しており，方眼の操作による有効性は疑わしい。しかし，これらの石室形態が近似するのは眼前の通りである。上述の方眼による操作により，他の古墳も適合関係を試みた。1単位約25cmの古墳は，他に7・8・10号墳等がある。5号墳は1単位約23cmと推定され，石室全長13コマ，玄室奥壁幅5コマである。一方，11号墳は1単位約26cmと推定され，奥壁幅6コマが数えられる。大半が約25cmを1単位とするが，このように，一定範囲内に営まれる古墳群の中に於いても，少数の使用尺度の違いが見られる。しかし，1単位の割合いは他の古墳とも近似しており，石室各所の比率の面からは同形の石室である。また，柿原周辺の古墳についての計測及び石室各部の比率を第6表に出した。神蔵古墳は竪穴式石室であるが参考例としてあげた。(註29) また，これらの中で小田茶臼塚古墳・神蔵古墳・持丸2号墳(註30)については方眼による操作を行ってみた。(註31) 小田茶臼塚古墳・神蔵古墳は，1単位約23cmで，小田茶臼塚古墳で玄室奥壁13コマ，全長27.5コマである。一方，神蔵古墳は残存状態が著しく悪く，図上推定で東幅9コマ，西幅7コマ，石室内長23コマである。持丸2号墳は1単位約26cmであり，やや胴張りの形状を呈す。胴中央部12コマ，石室全長23コマである。



第 274 図　C－14・40，9・19号墳平面プラン比較図とそれらの方眼による操作結果（1/40）

第5表　横穴式石室Ⅰ～Ⅲ類の石室各部計測値と各所の比率・企画推定尺度

古墳名	石室全長(cm)	玄室幅(cm)		玄室長(cm)	羨門幅(cm)	各所の比率				推定尺				
		奥	前			玄室奥幅:玄室長	玄室前幅:玄室長	玄室奥幅:玄室前幅	全長:玄室奥幅	1コマの長さ(cm)	玄室内 奥	玄室内 前	玄室内 長	全長
柿原Ⅰ・C－14	－	(92)	(84)	(205)	－	4 : 9	2 : 5	10 : 9	－	25	3.5	3.25	8	－
〃　C－40	－	109	(80)	210	－	1 : 2	3 : 8	4 : 3	－	25	4.25	3.25	8	－
〃　9号墳	(240)	(105)	98	(215)	60	1 :	4 : 9	1 : 1	9 : 4	25	4.5	3.75	8	10
〃　19号墳	199	105	85	190	－	5 : 9	4 : 9	5 : 4	2 : 1	25	4.2	3.5	7.5	8
〃　7号墳	300	180	155	245	－	3 : 4	5 : 8	6 : 5	5 : 3	25	7	6.5	9.5	12
〃　5号墳	270	120	110	204	－	3 : 5	5 : 9	10 : 9	9 : 4	23	5	4.5	9	13
〃　8号墳	260	152	150	232	－	2 :	2 : 3	1 : 1	7 : 4	25	6	6	9	$10\frac{1}{3}$
〃　10号墳	250	160	145	225	－	5 : 7	5 : 8	10 : 9	8 : 5	25	6	5.5	9	10
〃　11号墳	325	155	120	230	－	2 : 3	1 : 2	9 : 7	2 : 1	26	6	4.5	8.5	12.5
〃　C－9	－	90	78	194	－	4 : 9	2 : 5	7 : 6	－	24	3.75	6.75	8	－
〃　C－18	－	60	40	208	－	2 : 7	1 : 5	3 : 2	－	24	2.5	1.75	8.5	－
〃　C－28	－	63	57	(228)	－	2 : 7	1 : 4	10 : 9	－	25	2.5	2.25	8	－

第6表　柿原周辺のⅠ～Ⅲ類古墳の石室各部計測値と各所の比率

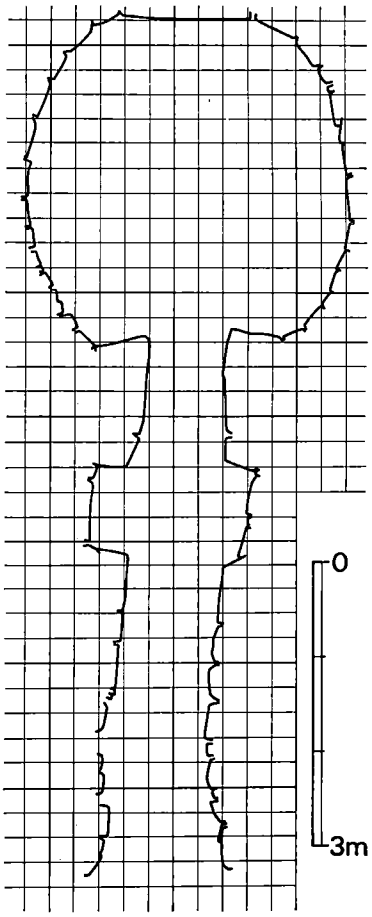
古墳名	所在地	石室全長(cm)	玄室幅(cm)		玄室長(cm)	羨門幅(cm)	各所の比率				文献
			奥	前			玄室奥幅:玄室長	玄室前幅:玄室長	玄室奥幅:玄室前幅	全長:玄室奥幅	
小田茶臼塚古墳	甘木市大字小田	450	223	－	360	－	3 : 5	－	－	2 : 1	26
神蔵古墳	甘木市大字小隈	－	200	160	535	－	3 : 8	3 : 10	5 : 4	－	18
持丸2号墳	甘木市大字持丸字山田山	460	250		300	?	5 : 6	－	－	9 : 5	33
虚空蔵1号墳	朝倉町大字須川	280	160		250	－	5 : 8	－	－	7 : 4	46
甘水古墳(複室)	甘木市大字甘水	700	270		230	110	7 : 6	－	－	8 : 3	2
金場1号墳	朝倉町大字山田字金場	537	174	126	305	96	4 : 9	2 : 5	7 : 5	3 : 1	2
小田小塚古墳	甘木市大字小田字塚本	350	165	－	265	－	5 : 8	－	－	9 : 4	2

以上のことより，これらの石室は1尺約25cmの尺度を使用して構築され，5C前半代に使用されたと考えられる六朝系の尺度を用いている。当古墳群の年代とも一致するものである。他に約23cm，26cmを1尺とする尺度も使用し，柿原以外の3例の方眼による操作の結果でもこの1尺約23・26cmとする石室が見られた点を勘案すると，当地方においては，5C代～6C中葉にかけて尺度がやや併存使用されていたことが窺える。(註32)

② 強い胴張りの石室

石室の形態は，玄室の奥壁と玄門間ほぼ中央部に最大幅を持ち，強く外へ張りだし，胴部平面形は整った曲線を描くものである。一方，複室の場合は，前室も外へ張り出し弧を描く場合もある。このような石室は，北部九州に於いては主に，朝倉及び八女地方という極く限られた地域に分布している。

この様な平面形に弧を有する石室の構築法は，前項の，直線的辺のみにより構成される羽子板状の石室の構築法とは異なるものであろう。胴張り石室の構成法を探る手懸りとなる石室の計測点を定める。石室全長の計測は，奥壁内面と羨門を結ぶ線で，ほぼ中央部で計測し，奥壁は内面を測点とし，羨道は石が床に据えられる部位までで床から浮く状態のものは除外して考えた。また，羨道は左右の長さが著しく異なるものがあり，羨道として構築されたものは通常長大な方であると考え，長大な方を測点とする。玄室は，幅・長さを計測項目とする。玄室長は，奥壁で平らな辺を示すほぼ中央と玄門間の中央を結ぶ線で，両袖石内面で結ぶ線と交叉する点を測点とする。一方，玄室幅は，玄室中軸直交する線にこだわらず，ほぼ直交する線で，左右壁の弧が最も強く外へ張り出す部位を測点とする。前室では，長さを測る規定は行いにくく，玄室と前室の軸が異なるものや，左右壁が対称とならないものなどがあり，前室長は割愛した。前室幅は，玄室同様の方法で主軸直交に食い違っても最大幅を測る。羨門部は，長さは前室同様に定めにくく，幅のみを計測し，左右の羨道先端を結ぶ線を羨道幅とした。以上が胴張り石室の企画性を考察する上での測点とした。これにより，柿原古墳群内の石室を計測し，それら各所の比率を出し，柿原古墳群内の石室の企画性の有無を確かめてみる。比率を算出する項目としては，玄室幅と玄室長，前室幅と玄室幅，羨道幅と玄室幅，全長と玄室長，玄室長と前室幅の各項目について行う。



第 275 図 2号墳方眼による操作結果 (1/80)
(方眼1単位は26cm)

まず，玄室幅と玄室長の比率を見るとG・1号墳，H・2号墳，I・2，4，6号墳はほぼ1：1であり，他のH・3号墳は7：10，H・1号墳，I・13号墳は5：4を示す。ここでG・1号，H・2号等が同一となっているので，他の個所の比率も考慮すると，これらの中で羨門幅と玄室幅，石室全長と玄室長の比率が一致するものとしてI・2号墳とI・6号墳がある。

第7表　横穴式石室Ⅳ・Ⅴ類の石室各部計測値と各所の比率・企画推定尺度

古墳名	石室全長(cm)	玄室(cm) 幅	玄室(cm) 長	前室幅(cm)	羨門幅(cm)	各所の比率 羨門幅:玄室幅	前室幅:玄室幅	玄室幅:玄室長	玄室長:前室幅	全長:玄室長	推定尺 1コマの長さ(cm)	玄室 幅	玄室 長	前室幅	羨門幅	全長
柿原Ⅰ・2号墳	900	335	330	165	142	3：7	1：2	1：1	2：1	8：3	26	13	13	6.5	5.5	34
〃 G・1号墳	795	325	330	230	125	3：8	7：10	1：1	7：5	7：3	23	14	14.5	10	5強	35
〃 H・3号墳	726	255	324	198	102	2：5	8：9	7：10	5：3	9：4	23	11	14	8.5	4.5	31.5
〃 I・4号墳	587	215	192	290	95	4：9	4：3	10：9	2：3	3：1	30	7	6.5	9	3	19.5
〃 I・6号墳	587	188	216	215	80	3：7	9：8	6：7	1：1	8：3	27	7	8	8	3	22
〃 H・1号墳	450	166	138	—	—	—	—	6：5	—	10：3	23	7	6	—	—	20
〃 I・13号墳	344	196	154	—	62	3：10	—	9：7	—	9：4	30	6.5	5.25	—	2	11.5
〃 H・2号墳	289	184	188	—	65	3：8	—	1：1	—	3：2	30	6	6	—	2	9 $\frac{1}{3}$

第8表　柿原周辺のⅣ・Ⅴ類古墳の石室各部計測値と各所の比率

古墳名	所在地	石室全長(cm)	玄室(cm) 幅	玄室(cm) 長	前室幅(cm)	羨門幅(cm)	各所の比率 羨門幅:玄室幅	前室幅:玄室幅	玄室幅:玄室長	玄室長:前室幅	全長:玄室長	文献
千代田古墳	朝倉町大字須川	670	300	330	310	120	2：5	1：1	9：10	10：9	2：1	46
狐塚古墳	朝倉町大字入地	?	428	414	535	150	1：3	4：5	1：1	7：9	—	3
栗田谷2号墳	三輪町大字栗田字谷	800	230	300	150	80	1：3	2：3	7：9	2：1	8：3	2
妙見5号墳	朝倉町大字菱野	775	290	340	—	140	1：2	—	6：7	—	9：4	2
〃 6号墳	〃 〃	—	230	260	—	70	3：10	—	8：9	—	—	2
〃 8号墳	〃 〃	405	185	280	—	155	5：6	—	2：3	—	10：7	2
〃 27号墳	〃 〃	—	230	235	—	—	—	—	1：1	—	—	2
宮野5号墳	朝倉町大字宮野	400	230	220	—	80	1：3	—	1：1	—	9：5	35
〃 6号墳	〃 〃	500	240	270	—	80	1：3	—	8：9	—	9：5	35
天皇山1号墳	朝倉町大字須川	?	185	200	—	—	—	—	9：10	—	—	46
虚空蔵2号墳	〃 〃	642	280	340	—	100	3：8	—	5：6	—	9：5	46
上須川1号墳	〃 〃	560	335	330	—	165	1：2	—	1：1	—	9：4	2
山後山8号墳	朝倉町大字須川字一の宮	315	200	150	—	73	3：8	—	4：3	—	2：1	6
〃 9号墳	〃 〃	235	153	115	—	75	1：2	—	4：3	—	2：1	6
〃 12号墳	〃 〃	310	210	120	—	76	3：8	—	7：4	—	8：3	6

6号墳の前室は左右に広大し幅広くなるものであり，2号墳前室の構造とは異なっている点が疑問ではある。だが，ここでは前室を無視すれば，他の各所の比率は全て一致し，同一企画に

よるものであろうことが窺われる。一方，複室と単室の違いはあるが，羨門幅と玄室幅の比率が同一となるものにG・1号墳とH・2号墳がある。これも企画の存在を証明するものであろう。しかし，柿原古墳群内の他の石室では比率が一致する項目を見い出せず，この2例のみである。そこで柿原古墳群周辺の石室の比率も含めて考察する。朝倉地方の胴張り石室の幅と長さの比率はほぼ1：1であり，玄室幅と羨道幅の関係も1：2～3：8で，全長と玄室長の比率は9：5～2：1ほどである。その内同一比率により構築されるものは，宮野5・6号墳(註33)が一致し，一方，上須川1号墳(註34)と妙見5号墳(註35)が一致する。また，前者の宮野5・6号墳の羨門幅と玄室幅の比率と，玄室幅と玄室長の比率が，孤塚古墳のそれと一致している。他に，羨門幅と玄室幅の比率が異なり，他の項目が一致するものに山後山8・9号墳(註36)がある。これらのことからも，石室各所の比率による企画が存在することが窺われる。

一方，尺度推定による企画性を求めることを試み，方眼による石室各部の適合関係を調べた。しかし，これには石室平面形の図面が必要であり，また縮尺が不統一である図面では作業が行えず，柿原古墳群以外では，山後山古墳のみ行った。方眼による作業により，1尺単位が約23・26・27・30cmが換算され，1コマ約23cmのものとしてはG・1号墳，H・1・3号墳がある。全て同じ谷筋に面する古墳であり，3基の相互関係も予測されている。また，1コマ約30cmのものとして，H・2号墳，I・4・13号墳がある。石室の形状からH・2号墳とI・13号墳は酷似して，それらの関係も窺えるが，それらとI・4号墳の関係については見出せない。また，柿原以外で1コマ約30cmのものとしては，山後山8・9・12号墳全て(註37)が一致する。山後山古墳群に於いて，同一尺による石室の構築が行われたことを窺い知る。山後山古墳のそれぞれの規模は，8号墳で玄室長7尺，幅5尺であり，全長11.5尺である。9号墳は，玄室長5尺，幅4尺で，全長8尺である。12号墳は，玄室長7尺，幅7尺，全長11尺である。この古墳群も全て単室であり，柿原I・13号墳と同型のものである。他は，1コマ約26cmのI・2号墳と1コマ約27cmのI・6号墳がある。

これらを年代的に観みると，6C末にI・2号墳とG・1号墳，H・3号墳の各古墳が比定されており，当時，1尺約26cmとするものと，約23cmとするものにより構築されていたことがしれる。また，1尺約23cmを使用したH・1号墳は，前代のG・1号墳構築時の尺を用いて構築したものであろう。次に，1尺30cmを使用するI・4号墳があり，以後1尺30cmによる尺度により，石室が構築されるものであろう。ところで，I・6号墳であるが，1尺約27cmを用い，1基だけ異質な感じを受けるが，やはりI・6号墳の築造当時に約27cmの尺も，この地に存していたものであろう。また，石室各部の比率について見ると，宮野古墳群や山後山古墳群に於いて，その比率による企画性が窺える。柿原古墳群に於ける比率の企画性は，G・1号墳（6C末），H・2号墳（7C中葉）の例と，I・2号墳，I・6号墳に見出せる。それぞれ若干時間的差が見られ，使用推定尺も異なっている。このことにより，比率による石室の企画が継承

されることが窺える。しかし，当古墳群に於いてはこの２組の例のみであり，不確実性は拭えない。

③ 横長方形・方形を呈する石室

横長方形プランの石室 石室形態は長方形を呈し，長辺のほぼ中央部に羨道が付くものである。計測にあたっては，前述の石室同様に測点を規定して行う。玄室長は奥壁から框石の中央までとし，幅は奥壁側，玄門側の双方で行い，主軸直交ではなく，それぞれの辺に沿って計測する。石室全長は奥壁内側より，羨道が最も突出している所までとした。羨門幅は，左右の羨門を結ぶ線で計測した。

それにより，各部間が比率により構築されることを想定して比率を算出した。項目としては玄室奥幅と玄室長，羨門幅と玄室奥幅，全長と玄室奥幅，全長と玄室長の各比率をその項目とする。それにより，20号墳と21号墳は石室各部が同一の比率により構築される。しかし，同一形態をとる23号墳の各部比率は，これらとは異なる。

そこで，推定尺度による方眼で，石室各部の適合関係により使用尺を推定すると，１尺が約24・25・30cmに換算される。１尺約24cmのものは21号墳であり，また，１尺約25cmに換算されるものは20号墳である。約30cmでは23号墳が適合した。また，赤林４号墳もこれらと同型のものであり，形態上20号墳に酷似しているが，推定尺は，１尺約25cmを示し全長16コマ，玄室長(註38)

第９表 横穴式石室Ⅵ・Ⅶ類の石室各部計測値と各所の比率・企画推定尺度

古墳名	石室全長(cm)	玄室幅(cm) 奥	玄室幅(cm) 前	玄室長(cm)	羨門幅(cm)	各所の比率 玄室奥幅:玄室長	羨門幅:玄室奥幅	全長:玄室奥幅	全長:玄室長	推定尺 1コマの長さ(cm)	玄室 幅	玄室 長	羨門幅	全長
柿原Ⅰ・20号墳	265	175	190	145	50	6 : 5	2 : 7	**3 : 2**	**9 : 5**	25	7	5	2	11
〃 21号墳	207	135	144	115	48	7 : 6	3 : 8	**3 : 2**	**9 : 5**	24	6	4.5	2	8
〃 23号墳	171	160	150	100	40	8 : 5	1 : 4	10 : 9	9 : 4	30	5.5	3強	3	5.75
〃 18号墳	—	185	160	190	—	1 : 1	—	—	—	30	6	6	—	—

第10表 柿原周辺のⅥ・Ⅶ類古墳の石室各部計測値と各所の比率

古墳名	所在地	石室全長(cm)	玄室(cm) 幅	玄室(cm) 長	羨門幅(cm)	各所の比率 玄室幅：玄室長	羨門幅：玄室幅	全長：玄室幅	全長：玄室長	文献
赤林４号墳	朝倉町大字須川	390	220	150	80	3 : 2	3 : 8	7 : 4	8 : 3	6
〃 ６号墳	〃 〃	—	280	270	80	1 : 1	2 : 7	—	—	6
池の上９号墳	甘木市大字堤	285	186	190	94	1 : 1	1 : 2	3 : 2	3 : 2	7
宮野北八坂 B区６号墳	朝倉町大字宮野	250	170	140	90	6 : 5	5 : 9	3 : 2	8 : 5	43
大岩西部１号墳	甘木市大字堤	280	230	230	—	1 : 1	—	6 : 5	6 : 5	2

9コマ，玄室幅6コマである。石室の企画は比率によるものではなく，それぞれの尺により行われたものであろう。

方形プランの石室　本古墳群では14～18号墳がこれになるものであろうが，その殆どが残存状態が悪く，計測に耐えるものは18号墳のみである。そこで柿原周辺の同型と考えられる石室と比較して，石室各部の比率による企画，もしくは尺を使用して行う企画について述べる。同型の石室としては，赤林6号墳(註39)，池の上9号墳(註40)，宮野北八坂B区6号墳(註41)，大岩西部1号墳(註42)がある。しかし，石室の比率も，18号墳は，玄室長と玄室幅のみしか計測が行えず，これのみでは，宮野北八坂B区6号墳を除けば全て同一比率となる。しかし他の比率を見ると画々であり，比率による企画性は認められない。

次に，方眼の操作による使用尺の推定を行うと，全て1尺約30cmであり，18号墳は玄室幅，長さとも6コマで，赤林6号墳は玄室幅7コマ，玄室長8コマ，石室全長10コマであり，池の上9号墳は玄室幅6コマ，長さ7コマ，石室全長10.6コマである。この資料からは，方形プランを呈する石室は，唐尺を用いて石室を構築したことが窺える。

以上のように，柿原古墳群の石室を平面形の違いから3区分してその企画性をみてきた。それによると，まず，①羽子板状を呈する石室や，③方形・横長方形を呈する石室の石室各部の比率による企画には，ほぼ共通性が認められる。ただ，②の胴張り石室ではいくらかみられる程度である。次に，使用尺の推定作業からは，①の石室に一定の尺を主に用いて構築されたことが判明した。一方，③の石室は類例が少ない点が問題ではあるが，各個に使用尺の食い違いが認められる。

特に横長の石室である20・21号墳については，石室各部の比率が一致する点から，使用尺度の違いは余りにも不可思議である。両古墳の出土遺物も殆ど無く，その年代を明白にすることも出来ず，その型態的変遷により求めることしか出来なかった。そして，20・21・23号墳とも余りにも型態的に近接した時期の造営であり，使用尺の変化を年代の違いに求めることは不自然であろう。そこで考えられる点としては，石室築造の指揮者が各種尺度を所有し，その都度，使用尺を変えていたものか，或いは築造者の違いにより生じたものであろう。これについては今後類例の集収を行い明らかにしてゆく所存である。

なお，本柿原古墳群においては8基の胴張り石室があり，異形する2基を除けば他の石室平面形は整った曲線を呈し，胴張りに秩序が窺われる。

胴張りプランの設計法については，松本浩一氏の考察があり，氏によると，胴張りの曲率の決定法としては，墳丘の半径，または石室全長を半径とすることが考えられている。(註43)しかし，柿原のように円形に近い胴張り石室では，それらの値ではまったくあてはまらない。そこで，側壁の弧の中点を求める作業を行ない，その規則性の有無を試みた。しかし，側壁の弧の半径

は左右画々であり，その半径値も石室各部との関係は認めづらい。その上，半径の中点も不規則であり，その中点の一決定に介在したであろう事由も予測がつかない。これらのことにより，胴張りの弧における企画性は認められないと考える。 (平嶋)

註 1．新原・中間・池辺元明・平嶋『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―4―』福岡県教育委員会 1984

2．朝倉高等学校史学部（高山明編）『埋もれていた朝倉文化』 1969

3．渡辺正気，古賀精里『福岡県文化財調査報告第17輯』 1957

4．佐田茂「群集墳の形成とその被葬者について」『考古学雑誌』第58巻第2号 1972

5．註2に同じ

6．松本憲明・波多野晥三他『朝倉町文化財調査報告書第4集』朝倉町教育委員会 1973

7．橋口達也・川村博『池の上墳墓群』甘木市教育委員会 1979

8．木下之治『東十郎古墳群』佐賀県教育委員会 1966

9．註1に同じ

10．伊崎俊秋・佐田茂『立山山古墳群』八女市教育委員会 1983

11．山中英彦『東宮ノ尾古墳群』北九州市教育委員会 1974

12．馬田弘稔・立石雅文・川村博『柿原野田遺跡』柿原野田遺跡調査団 1976

13．註2に同じ

14．九州横断自動車道建設関係分として福岡県教育委員会が1985年調査を行った。担当者の小池史哲・小田和利氏から教示を得た。記して感謝したい。

15．木下之治『鳥栖市山浦古墳群』佐賀県教育委員会 1973

16．新原・井上裕弘・中間・佐土原逸男『名木野古墳群』瀬高町教育委員会 1977

17．註10に同じ

18．木下修・他『神蔵古墳』甘木市教育委員会 1978

19．賀川光夫「大分県に於ける三つの竪穴式石槨を有する古墳」『西日本史学』 15 1953

20．九州大学考古学研究室編『福岡市老司古墳調査概報』 1969

21．柳沢一男『鋤崎古墳 1981～83年調査概報』福岡市教育委員会 1984

22．児島隆人・宮小路賀宏・佐田茂他『栗崎山古墳群』栗崎山古墳群学術調査団 1973

23．中間「大宰府の奥津城」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館 1983

24．註7に同じ

橋口達也・内田俊和『古寺墳墓群』甘木市教育委員会 1982

橋口達也・内田俊和『古寺墳墓群 II』甘木市教育委員会 1983

25．註18に同じ

26．柳田康雄『小田茶臼塚古墳』甘木市教育委員会 1979

27．佐々木隆彦『栗山遺跡』甘木市教育委員会 1982

28. 石川正之助「総社二子山古墳前方部石室の平面構成について」『考古学雑誌』第54巻第4号
29. 註18に同じ
30. 註26に同じ
31. 馬田弘稔・高山明『持丸古墳群』甘木市教育委員会　1974
32. 甘粕健「墳丘の形態」『我孫子古墳群』　1969
33. 松本憲明・波多野晥三他『朝倉町文化財調査報告書　第2集』朝倉町教育委員会　1971
34. 註2に同じ
35. 註2に同じ
36. 註6に同じ
37. 註6に同じ
38. 註6に同じ
39. 註6に同じ
40. 註7に同じ
41. 松本憲明・波多野晥三他『朝倉町文化財調査報告書　第3集』朝倉町教育委員会　1972
42. 註2に同じ
43. 松本浩一「横穴式石室に於ける胴張りに関する一考察」『古代学研究』　第53号　1968
しかし，松本氏が考察されたのは，北関東に於ける胴張り石室であり，九州に於いてそのままあてはまると考えるのも，論の飛躍のしすぎでもあろうが。
44. 高山明『須川遺跡群』朝倉町教育委員会　1968

後　　記

柿原は豊かな柿の里である。そして，一歩山中を踏み分けると，深幽たる静寂に包まれる。

おだやかな人々と，たおやかな大自然に恵まれて，ふと気が付くと，調査は6年もの時を過ごしてしまっていた。

成果もそれにふさわしく，夥しい古墳群・墓地・住居跡等が調査されて，4つの尾根にまたがる遺跡の全容が明らかにされたのであった。これらは北部九州における古墳群研究の重要な基礎資料となろう。

本書で報告した分について，執筆者の薄学の故に述べ足りない部分もあるが，よろしく諸学の叱正を望むものである。

成果を以下にまとめてみよう。

1．横穴式石室は，初期竪穴系横口式石室から，「只の字型」タイプを経て，当地方特有の強い胴張り複室構造へ，更に小規模終末期石室へとその変化が明瞭にたどれた。胴張り複室古墳にみられる内護列石は特異なものである。

2．各時期に問題点が残るが，特に胴張り複室古墳の出自の異様さ，また7C後半代までもの石室築造の様相は重要な課題となろう。

3．竪穴式石室・石棺系竪穴式石室は，連続して各類型に変化することが判かり，その出自を竪穴式石室に求めることができた。更に，その群集性故に，グループを把えることができた。

4．またこれら古式石室群は，池の上・古寺墳墓群と比べて，明らかな特異性を看取することが出来，両者の生産基盤の違いにまで及ぶことが推定された。

今後，続けてD・E・F・L各地区及びI地区の縄文・弥生編の調査成果を公にしてゆく中で，以上の諸点が少しでも深化・解決が計られればと願う次第である。

酷暑の中，或いは厳冬の調査を幾度となく重ねた長期間，喜んで作業に協力して下さった柿原地区を始め，相窪・堤地区の皆様方に，改めて心から感謝の意を表します。　　（中間記）

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —6—

中　　巻

昭和61年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8－34